

神主城跡・室崎商店裏遺跡 古八幡付近遺跡・横路古墓

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2000年3月

浜田工事事務所
島根県教育委員会

正誤表

ページ	行	誤	正
例言	1 31行目		平木伴佳(知夫村教育委員会係長)
	2 9行目	柳井敏江	矢内敏江
本文	4 33行目	島根県教育委員会 1973	江津市 1973
	63 36行目	(第39図下の所)。	(第39図 Y=750 横の攢乱部分)
	67 34行目	宮川慎一 1988 「文様からみた新羅印花文陶器の変遷『歴史と考古学』高井梯三郎先生喜寿記念論集	宮川慎一 1989 「新羅連結把手付骨壺の変遷」『古文化談叢』第20集 発刊記念論集(中)
	77 22行目	備前焼	備前焼
	78 12行目	「石見焼窯跡」	石見焼窯跡
	80 32行目	位關係	位置關係
	82 25行目	比熱面	被熱面
	86 6行目	以降の範囲	連構の範囲
	89 24行目	胴部最大形	胴部最大径
	90 19行目	『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告	『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』
	23行目	時期窯	時期の窯
	30行目	V—1葉式	V—1様式
	93 9行目	金崎式	鐘崎式
	103 34行目	落ち込んでもの	落ち込んだもの
	106 37行目	「高地性集落」	「高地性聚落」
	108 24行目	南段丘状	南段丘上
	123 1行目	基底部のみ検できた。	基底部のみ検出できた。

神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓 参考文献一覧

主要参考文献

- 島根県教育委員会 1985『日脚遺跡』
1992『島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』
1995『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
1997『坂田C遺跡・古八幡付近遺跡・喜久志遺跡』
1997『波山池遺跡・原の前遺跡』
1997『福富I遺跡・屋形1号墳』
1998『板屋III遺跡』
江津市 1982『江津市誌』
江津市教育委員会 1992『古八幡付近遺跡』
1993『宮倉遺跡』
島根県教育文化財団 1998『米子城跡21遺跡』

縄文時代

- 宍道正年 1974『島根県の縄文式土器集成Ⅰ』
玉田芳英 1989『中津・福田KⅡ式土器様式』『縄文土器大観4』小学館
松永幸男 1989『九州磨削縄文系土器様式』『縄文土器大観4』小学館

弥生時代

- 正岡龍夫・松本岩雄 編 1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰』木耳社
島根県教育委員会 1988『西川津遺跡発掘調査報告書IV(海崎地区2)』
1989『前立山遺跡』『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
1998『門生黒谷Ⅳ遺跡』『門生黒谷Ⅰ遺跡』『門生黒谷Ⅱ遺跡』
江津市 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』
仁摩町教育委員会 1993『川向遺跡』『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』
1999『孫田四田遺跡』
米子市 1999『新修米子市史』第七巻 資料編考古 原始・古代・中世
大山町教育委員会・大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団 1997『秦木・晚田遺跡群現地説明会資料』
広島市教育委員会 1984『芳ヶ谷遺跡』『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』

古墳時代

- 今岡 勲・吉川 正・横山純夫 1974『瑞穂・江迫横穴群』『島根県埋蔵文化財報告書』第V集
柳浦俊一 1984『石見における群集墳の一例—江津市千田町高野山古墳群の分布調査—』『島根考古学会誌』第1集
山陰考古学研究集会 1996『第24回山陰考古学研究集会資料集 山陰の横穴式石室—地域性と編年の再検討』
島根県教育委員会 1992『小才遺跡』『中国縦貫自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』
浜田市教育委員会 1986『周布小塙設置予定地内遺跡埋蔵文化財(森ヶ曾根古墳)発掘調査報告書』
旭町教育委員会 1991『山ノ内2号墳発掘調査報告書』
八雲立つ風土記の丘資料館 1978『北長廻横穴群』『古代の石見』展示図録

古代

- 宮川禎一 1988『文様からみた新羅印花文陶器の変遷』『歴史と考古学』高井禪三郎先生喜寿記念論集
1989『新羅連結把手青瓷の変遷』『古文化談叢』第20集 発刊記念論集(中)
江浦一洋 1988『日本出土の統一新羅系土器とその背景』『考古学雑誌』第74卷第2号
1992『古代日羅関係の考古学的検討I—何故、新羅の土器は海を渡ったのか—』『考古学論集』第4集
1994『海をわたった新羅の土器—土器からみた古代日羅交流の考古学的研究—』『ヤマト王権と交流の諸相 古代王権と交流5』名著出版

- 島根県教育委員会 1992「重富遺跡」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』
1992「大淀遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
1993「松江市才ノ町遺跡」『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財報告書XII』
1996「徳見津遺跡・月曜遺跡・福寺寺遺跡」
1999「中原遺跡」
浜田市教育委員会 1998「横路遺跡(原井ヶ市地区)」
金城町教育委員会 1994「波佐」
大田市教育委員会 1989「白井遺跡発掘調査概報」
出雲市教育委員会 1996「上長浜貝塚」
福岡県教育委員会 1990「宮原遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書17』
奈良国立文化財研究所 1989「平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書」

中世

- 櫻田賛次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入陶器について一形式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4
井上寛司 1987「中世の江添と添野氏」『山陰地域研究第三号』島根大学山陰地域研究総合センター
寺井 毅 1991「福屋氏の城郭」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』
間壁忠彦 1991「唐前焼」『考古学ライブラリー60』ニューサイエンス社
前川 要 1996「中世の家族と住居」『考古学による日本歴史 15家族と住まい』雄山閣
八峰 真 1998「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中世土器の基礎研究XIII』日本中世土器研究会
山本信夫 1998「中世前期の貿易陶磁器—その分析視点と近年の研究動向…」『第26回山陰考古学研究集会資料集 山陰における中世前期の貿易陶磁器』
柳原博英 1998「中世前期の貿易陶磁器・石見の様相」『第26回山陰考古学研究集会資料集 山陰における中世前期の貿易陶磁器』
島根県教育委員会 1994「上久々茂土居跡・大坪遺跡」
1997『島根県中近世跡分布調査報告書<第1集>石見の城館跡』
1999『藏小路西遺跡』
浜田市教育委員会 1995「伊甘土地区画整理に伴う 古市遺跡発掘調査概報」
1998「横路遺跡(土器土地区)」
1998「横路遺跡(原井ヶ市地区)」
仁摩町教育委員会 1989「白石遺跡」仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
1998「清石遺跡外発掘調査報告書」
1999「五丁地区遺跡群発掘調査報告書」
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1993「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ」
1995「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ」

近世・近代

- 島根県教育委員会 1983「當田川河床遺跡発掘調査報告書一Ⅲ-」
1991「後河内古墓群」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』
1992「柏生遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
安来市教育委員会 1998「清水天日堂裏古墓発掘調査報告書」
川本町教育委員会 1987「谷戸経冢・木谷石塔発掘調査報告書」
岡山県文化財保護協会 1996「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113』
新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991「四谷三丁目遺跡」

神主城跡・室崎商店裏遺跡 古八幡付近遺跡・横路古墓

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2000年3月

建設省浜田工事事務所
島根県教育委員会



古八幡付近遺跡出土統一新羅土器（撮影：牛島 茂氏）

卷頭写真図版 2



古八幡付近遺跡 9 区出土弥生土器



古八幡付近遺跡出土陶磁器



石見地方出土近世擂鉢（左から横路古墓、室崎商店裏遺跡、長東坊師窯跡、北ヶ迫遺跡出土）

序

建設省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地域を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能を併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流失に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会のご協力のもとに平成3年度から発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成9年度に実施した「神主城跡」、「横路古墳」、平成9・10年度に実施した「古八幡付近遺跡」、平成10年度に実施した「室崎商店裏遺跡」の調査結果をまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められることへのご理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成12年3月

建設省中国地方建設局浜田工事事務所

所長 藤井輝夫

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成4年度から一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このたび報告書を刊行する運びとなりました。本報告書は平成9・10年度に調査を実施した江津市二宮町、敬川町に所在する神主城跡、室崎商店裏遺跡、古八幡付近遺跡、横路古墓の調査結果をとりまとめたものです。

江津市は、中国地方最大の江川が日本海に入る河口左岸の江津を中心に東西に開けています。江津は江川水運の終点で、山陰沿岸の水運の寄港地でもありました。中世における江川は一般的な物資の流通路であるにとどまらず、鉄や銅等の鉱石やその製品の搬出路としても機能していました。

今回調査した古八幡付近遺跡では、石見地方で初の分銅形土製品や本州日本海側で初の統一新羅土器が出上しており、古くから他地域との盛んな交流があったことがうかがわれます。また、弥生時代中期の環壕集落や石見では大形の横穴式石室をもつ古墳などが検出され、今まであまり知られていなかった古代石見の人々の生活を知るうえで貴重な資料になると考えられます。

本書が、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力を頂きました地元の皆様や建設省浜田工事事務所、江津市教育委員会、浜田市教育委員会、桜江町教育委員会、日原町教育委員会をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例 言

1. 本書は、建設者中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成9・10年度に実施した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 平成9・10年度に実施した発掘調査地は下記のとおりである。

平成9年度

神主城跡	島根県江津市二宮町神主1867外
飯田A遺跡	島根県江津市二宮町神主2053外
古八幡付近遺跡6・7区	島根県江津市敬川町373-1外
横路古墓	島根県江津市敬川町541外

平成10年度

室崎商店裏遺跡	島根県江津市敬川町2047-1外
古八幡付近遺跡8・9区	島根県江津市敬川町242外
長東坊跡	島根県浜田市上府町口262-9外

3. 調査組織は下記のとおりである。

[平成9年度]

[事務局]	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 宮道正年（センター長）、古崎藏治（課長補佐） 渋谷昌宏（同企画調整係主事）
-------	----------------------------------------------------------------------------------------

[調査員]	東森 晋（埋蔵文化財調査センター主事）、池田哲也（同教諭兼主事） 舟木 晃（同臨時職員）、中西一郎（桜江町教育委員会課長補佐） 中井将胤（日原町教育委員会主事）
-------	----------------------------------------------------------------------------------------

[調査協力]	宮本徳昭（江津市教育委員会）、原 裕司（浜田市教育委員会）、柳原博英（同）
--------	---------------------------------------

[調査指導]	山中敏史（奈良国立文化財研究所）、山根正明（島根県立松江南高校）
--------	----------------------------------

今平利幸（宇都宮市教育委員会）、鈴木徳雄（児玉町教育委員会）、大熊季広（同）

[整理作業員]	上手文子、鹿森三鈴
---------	-----------

[平成10年度]

[事務局]	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 宮道正年（センター長）、秋山 実（課長補佐） 松本岩雄（課長補佐）、川崎 崇（同企画調整係主事）
-------	---------------------------------------------------------------------------------------------------

[調査員]	岩崎孝典（埋蔵文化財調査センター主事）、東森 晋（同主事） 佐野木信義（同講師兼主事）、寺尾 令（同臨時職員）、舟木 晃（同臨時職員） 梅木茂雄（同臨時職員）、岩出和郷（同臨時職員）、内藤大司郎（同臨時職員）
-------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

[調査協力]	原 裕司（浜田市教育委員会）、柳原博英（同）
--------	------------------------

[調査指導]	山中敏史（奈良国立文化財研究所）、田中義昭（島根大学）、嶋田春男（鳩田窯業所）
--------	-----------------------------------------

[整理作業員]	上手文子、鹿森三鈴
---------	-----------

[平成11年度]

〔事務局〕 島根県教育庁文化財課 勝部 昭（文化財課長）、小田時通（課長補佐）

埋蔵文化財調査センター 穴道正年（所長）、秋山 実（総務課長）

松本岩雄（調査課長）、今岡 宏（総務係長）、渡邊紀子（同主任主事）

川崎 崇（同主事）

〔調査員〕 東森 晋（埋蔵文化財調査センター主事）、池田哲也（同教諭兼主事）

勝部悠美（同臨時職員）、大西憲和（同臨時職員）

〔整理作業員〕 若佐裕子、川上登志江、安井淳子、荒川あかね、杉原みゆき、小松原茂雄

門脇由己子、吉田典子、柳井敏江、金津まり子、堀江五十鈴

4. 平成9年度、10年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の3者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

布村幹人（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、神山二美子（事務員）

5. 現地調査、及び資料整理については、上記調査指導の先生方の他、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただく。（敬称略）

渡邊貞幸（島根大学）、吉川 正（田所郵便局）、遠藤浩巳（大田市教育委員会）、中田健一（同）、渡辺友千代（匹見町教育委員会）、山本浩之（同）、宮川頼一（京都国立博物館）、

江浦 洋（大阪府文化財調査研究センター）、山本信夫（太宰府市教育委員会）、

伊藤 実（広島県立歴史民俗資料館）、穴沢義功（たたら研究会）、石田爲成（島根大学学生）、

山藤朝之（二宮探宝会）、三宅博士（安来市教育委員会）

6. 掘図で使用した方位は、測量法による第III座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。

7. 本書で使用した図の内、第1図は国土地理院発行のものを、第2図は江津市都市計画地図を第28、38、152、153図は、建設省浜田工事事務所作成のものを、第3、23、30、31、39、70、89、

108、112、113、154、157、163図は（株）アジア航測が作成したものをそれぞれ一部改変して使用している。また、写真図版4、27、35下、36、37、39、42上、44、151の写真は（株）アジア航測が、写真図版43は山陰中央新報江津支社が撮影した。

8. 本書に掲載した遺物の実測及び掘図の浮寫は、以下の者が行った。

（実測）東森、橘 弘章、池田、佐野木、寺尾、舟木、梅木、岩田、内藤、勝部、中西、中井、古田、矢内、門脇

（浮寫）吉田、矢内、門脇、金津、堀江

9. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、広江耕史、東森が行った。

10. 本書の執筆は松本、柳浦俊一（企画調整係）の指導を受けて、東森、池田が行い、文責は日次に明示した。

11. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

本文目次

1. 調査に至る経緯	(池田)	1
2. 神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓の位置と歴史的環境	(池田)	3
3. 神主城跡	(東森)	
第1章 調査の経過と概要		5
第1節 調査前の状況		5
第2節 調査の経過と概要		5
第2章 調査の結果		6
第1節 I区の調査		6
第2節 II区の調査		11
第3節 III区の調査		12
第4節 小結		14
4. 室崎商店裏遺跡	(東森)	
第1章 調査の経過と概要		15
第1節 調査前の状況		15
第2節 調査の経過と概要		15
第2章 調査の結果		16
第1節 遺構・遺物		16
第2節 小結		19
5. 古八幡付近遺跡	(東森)	
第1章 調査の経過と概要		21
第1節 調査前の状況		21
第2節 調査の概要		22
第2章 調査の結果		24
第1節 6・7区の調査		24
第2節 8区の調査		48
第3節 9区の調査		81
第3章 まとめ		106
6. 横路古墓	(池田・東森)	
第1章 調査の経過と概要		113
第1節 調査前の状況		113
第2節 調査の経過と概要		113
第2章 調査の結果		114
第1節 近世以前の遺構・遺物		114
第2節 近世の遺構・遺物		120
第3節 小結		127

図版目次

第1図 神主城跡・宝崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・ 横路古墓の位置と周辺の遺跡	130
第2図 神主城跡 周辺地形図	134
第3図 神主城跡 洞査区配図	135~136
第4図 神主城跡 第7トレンチ実測図、 I区上塙墓群全体図	137
第5図 神主城跡 土塙墓1~10実測図	138
第6図 神主城跡 上塙墓1・2実測図	139
第7図 神主城跡 土塙墓3・4実測図	140
第8図 神主城跡 上塙墓4・5実測図、 上塙墓5人骨・遺物出土状況	141
第9図 神主城跡 土塙墓2・5出土遺物実測図	142
第10図 神主城跡 上塙墓6~8実測図	143
第11図 神主城跡 土塙墓9・10実測図	144
第12図 神主城跡 七塙墓6・10出土遺物実測図	145
第13図 神主城跡 土塙墓11・12実測図	146
第14図 神主城跡 土塙墓13実測図	147
第15図 神主城跡 上塙墓13出土遺物実測図	148
第16図 神主城跡 土塙墓14~18実測図、土塙墓14 実測図	149
第17図 神主城跡 上塙墓15人骨・遺物出土状況 および出土遺物実測図、上塙墓15実測図	150
第18図 神主城跡 上塙墓14・15出土遺物実測図	151
第19図 神主城跡 土塙墓16~18実測図	152
第20図 神主城跡 上塙墓群	153
第21図 神主城跡 段状遺構1・2実測図、小戻窓 実測図	154
第22図 神主城跡 段状遺構1・2土層断面図	155
第23図 神主城跡 Ⅲ区全体図	156
第24図 神主城跡 溝状遺構1土層図	156
第25図 神主城跡 Ⅲ区土層図	157
第26図 神主城跡 Ⅲ区集石実測図	157
第27図 神主城跡 I区・II区・III区出土遺物実測図	158
第28図 宝崎商店裏遺跡 調査区配図	160
第29図 宝崎商店裏遺跡 段状遺構上層断面図	160
第30図 宝崎商店裏遺跡 遺構全体図、土塙1実測図	161
第31図 宝崎商店裏遺跡 遺物出土状況	162
第32図 宝崎商店裏遺跡 出土遺物実測図①	163
第33図 宝崎商店裏遺跡 出土遺物実測図②	164
第34図 宝崎商店裏遺跡 出土遺物実測図③	165
第35図 宝崎商店裏遺跡 出土遺物実測図④	166
第36図 宝崎商店裏遺跡 出土金属製品実測図	167
第37図 宝崎商店裏遺跡 段状遺構出土陶器実測図	167
第38図 古八幡付近遺跡 調査区配図	170
第39図 古八幡付近遺跡 6・7区遺構配置図	171
第40図 古八幡付近遺跡 建物1~3実測図	172
第41図 古八幡付近遺跡 建物4~6実測図	173
第42図 古八幡付近遺跡 建物7実測図	174
第43図 古八幡付近遺跡 建物1~7出土遺物実測図	175
第44図 古八幡付近遺跡 片列1・建物10実測図	176
第45図 古八幡付近遺跡 建物8・9・溝状遺構3 実測図	177
第46図 古八幡付近遺跡 建物11・溝状遺構5実測図	178
第47図 古八幡付近遺跡 建物11・溝状遺構5 出土遺物実測図	179
第48図 古八幡付近遺跡 段状遺構2実測図	180
第49図 古八幡付近遺跡 段状遺構2出土遺物実測図	181
第50図 古八幡付近遺跡 土塙1・段状追構4遺物 出土状況	182
第51図 古八幡付近遺跡 土塙1・段状遺構3・4周辺 出土遺物実測図	183
第52図 古八幡付近遺跡 段状遺構4出土上鍾実測図	184
第53図 古八幡付近遺跡 段状遺構5実測図	185
第54図 古八幡付近遺跡 建物12実測図	186
第55図 古八幡付近遺跡 建物13実測図	187
第56図 古八幡付近遺跡 建物14・15・段状遺構6 実測図	188
第57図 古八幡付近遺跡 段状遺構5・建物15 出土遺物実測図	189
第58図 古八幡付近遺跡 6・7区出土 绳文土器・弥生土器実測図	190
第59図 古八幡付近遺跡 6・7区出土石器実測図	191
第60図 古八幡付近遺跡 6・7区出土石器実測図	191

第61图 古八幡付近道路	6区出土遗物实测图①	192	第92图 古八幡付近道路	段状遗構13、植物29実測図	224
第62图 古八幡付近道路	6区出土遗物实测图②	193	第93图 古八幡付近道路	段状遗構13、溝状遗構10 周辺遺物出土状況	225
第63图 古八幡付近道路	6区出土遗物实测图③	194	第94图 古八幡付近道路	段状遗構13、溝状遗構10 出土遗物实测图	226
第64图 古八幡付近道路	6区土石流出上遺物、 7区出土遺物实测图①	195	第95图 古八幡付近道路	段状遗構14・15、土壤3 尖測圖	227
第65图 古八幡付近道路	7区出土遺物实测图②	196	第96图 古八幡付近道路	段状遗構16・17実測図	228
第66图 古八幡付近道路	7区出土遺物实测图③	197	第97图 古八幡付近道路	段状遗構16	229
第67图 古八幡付近道路	7区出土遺物实测图④	198	第98图 古八幡付近道路	建物30・33実測図	230
第68图 古八幡付近道路	7区出土遺物实测图⑤	199	第99图 古八幡付近道路	建物31実測図	231
第69图 古八幡付近道路	7区出土遺物实测图⑥	200	第100图 古八幡付近道路	建物32実測図	232
第70图 古八幡付近道路	8区遺構配置図	201～202	第101图 古八幡付近道路	段状遗構16出土上遺物実测图	233
第71图 古八幡付近道路	8～2区南側遺物 出土状況（下層）	203	第102图 古八幡付近道路	段状遗構17周辺出土遺物 実測図①	234
第72图 古八幡付近道路	段状遗構8・9、8～1・ 2区遺構外出上遺物（下層）実測図	204	第103图 古八幡付近道路	段状遗構17周辺出土遺物 実測図②	235
第73图 古八幡付近道路	建物16実測図	205	第104图 古八幡付近道路	段状遗構18・19実測図	236
第74图 古八幡付近道路	建物17実測図	206	第105图 古八幡付近道路	建物34・35、柱列9実測図	237
第75图 古八幡付近道路	建物18・19、炉2実測図	207	第106图 古八幡付近道路	段状遗構18出土遺物実測図	238
第76图 古八幡付近道路	建物20・22実測図	208	第107图 古八幡付近道路	段状遗構18・19出土遺物 尖測図	239
第77图 古八幡付近道路	建物21・24実測図	209	第108图 古八幡付近道路	段状遗構20、土壤9実測図	240
第78图 古八幡付近道路	建物23実測図	210	第109图 古八幡付近道路	8～3区出土遺物①	241
第79图 古八幡付近道路	柱列4～7実測図	211	第110图 古八幡付近道路	8～3区出土遺物②	242
第80图 古八幡付近道路	建物16～24周辺出土遺物 実測図①	212	第111图 古八幡付近道路	8～3区出土遺物③	243
第81图 古八幡付近道路	建物16～24周辺出土遺物 実測図②	213	第112图 古八幡付近道路	9区調査前地形測量図	244
第82图 古八幡付近道路	建物16～24周辺出土遺物 実測図③	214	第113图 古八幡付近道路	9区遺構配置図	245
第83图 古八幡付近道路	建物25実測図	215	第114图 古八幡付近道路	豎穴住居1実測図	246
第84图 古八幡付近道路	建物26実測図	216	第115图 古八幡付近道路	豎穴住居2、建物36実測図	247
第85图 古八幡付近道路	建物27・28実測図	217	第116图 古八幡付近道路	豎穴住居3・4実測図	248
第86图 古八幡付近道路	建物25～28周辺出土遺物 実測図①	218	第117图 古八幡付近道路	豎穴住居1・2出土遺物 実測図	249
第87图 古八幡付近道路	建物25～28周辺出土遺物 実測図②	219			
第88图 古八幡付近道路	建物25～28周辺出土遺物 実測図③	220			
第89图 古八幡付近道路	段状遗構12、集石3尖測圖	221			
第90图 古八幡付近道路	段状遗構12土壤断面図、 遺物出土状況	222			
第91图 古八幡付近道路	段状遗構12、集石3 出土遺物実測図	223			

第118図	古八幡付近遺跡 穴穴住居 2 出土遺物 実測図	250
第119図	古八幡付近遺跡 穴穴住居 2、建物36、 穴穴住居 3・4 出土遺物実測図	251
第120図	古八幡付近遺跡 環壕出土状況	252
第121図	古八幡付近遺跡 環壕上層断面図①	253
第122図	古八幡付近遺跡 環壕土層断面図②	254
第123図	古八幡付近遺跡 環壕出土状況	255
第124図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図①	256
第125図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図②	257
第126図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図③	258
第127図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図④	259
第128図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図⑤	260
第129図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図⑥	261
第130図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図⑦	262
第131図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図⑧	263
第132図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図⑨	264
第133図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図	265
第134図	古八幡付近遺跡 環壕出土遺物実測図⑩	266
第135図	古八幡付近遺跡 環壕および9区出土石器 実測図	267
第136図	古八幡付近遺跡 古墳群埴丘測量図	268
第137図	古八幡付近遺跡 1号埴堀丘断面図	269~270
第138図	古八幡付近遺跡 1号埴堀丘実測図	271~272
第139図	古八幡付近遺跡 1号埴天井石、石室根石、 振り方実測図	273
第140図	古八幡付近遺跡 1号埴石室内遺物出土状況	274
第141図	古八幡付近遺跡 1号埴周溝内遺物出土状況	275
第142図	古八幡付近遺跡 1号埴出七遺物実測図①	276
第143図	古八幡付近遺跡 1号埴出土遺物実測図②	277
第144図	古八幡付近遺跡 1号埴北側遺物出土状況	278
第145図	古八幡付近遺跡 1号埴北側出土遺物実測図	279
第146図	古八幡付近遺跡 2号埴埴丘上の割石実測図	280
第147図	古八幡付近遺跡 2号埴埴丘断面図	281~282
第148図	古八幡付近遺跡 2号埴石室実測図	283~284
第149図	古八幡付近遺跡 2号埴石室根石、振り方 実測図	285
第150図	古八幡付近遺跡 2号埴出土遺物実測図	286
第151図	古八幡付近遺跡 建物37、上埴10実測図	287
第152図	古八幡付近遺跡 通構配置図	288
第153図	横路古墓 調査区位置図	290
第154図	横路古墓 全体図	291
第155図	横路古墓 段状造構 1 実測図	292
第156図	横路古墓 段状造構 2 実測図	293
第157図	横路古墓 段状造構 1、建物 1 遺物出土状況	294
第158図	横路古墓 段状造構3実測図	295
第159図	横路古墓 建物 1、段状造構 1・3 出土遺物 実測図	296
第160図	横路古墓 I区出土遺物実測図	297
第161図	横路古墓 建物 2 実測図	298
第162図	横路古墓 柱列 1~4 実測図	299
第163図	横路古墓 II区遺物出土状況、遺物実測図	300
第164図	横路古墓 建物 2 周辺出土遺物実測図	301
第165図	横路古墓 土器溜まり出土遺物実測図	302
第166図	横路古墓 土器溜まり、II区出土遺物実測図	303
第167図	横路古墓 調査前地形測量図	304
第168図	横路古墓 近世加工段造構配置図	305
第169図	横路古墓 建物 3 実測図	306
第170図	横路古墓 建物 4 実測図	307

第171図 横路古墓 建物 5尖端圓、建物 5柱穴付近 祭和底実測圖	308	第177図 横路古墓 近世加工段造成上出土遺物①	314
第172図 横路山墓 近世加工段出土遺物実測圖	309	第178図 横路古墓 近世加工段造成土出土遺物②	315
第173図 横路古墓 土墳墓群上層集石尖端圓	310	第179図 横路山墓 近世加工段造成土山上遺物③	316
第174図 横路古墓 土墳墓群上層集石七層斷面圖、 上塙墓 1、焼上塙実測圖	311	第180図 横路古墓 近世加工段造成上出土遺物④	317
第175図 横路古墓 土墳墓 2~4 実測圖	312	第181図 横路古墓 近世加工段造成土出土遺物⑤	318
第176図 横路古墓 上塙墓 5 実測圖、近世加工段 造成土七層斷面圖	313		

卷頭写真図版目次

卷頭写真 1：古八幡付近遺跡出土統一新疆土器

卷頭写真 2：古八幡付近遺跡 9区出土弥生上器

卷頭写真 3

上：古八幡付近遺跡出土陶磁器

下：石見地方出土近世搖鉢

写真図版目次

写真図版 1 高角山より都野津平野を望む（東から）

写真図版 2 石見二宮多拝神社

写真図版 3

上：神主城跡 上塙墓 1~10 調査風景（西から）

下：神主城跡 III区調査風景（南から）

写真図版 4

上：神主城跡 調査後全景（南西から）

下：神主城跡 調査後全景（南から）

写真図版 5

上：神主城跡 第7トレンチ（西から）

下：神主城跡 I区土塙墓群（南から）

写真図版 6

上：神主城跡 土塙墓 1~10 標石検出時（西から）

下：神主城跡 上塙墓 1~10 蔊壇プラン検出時
(西から)

写真図版 7

上：神主城跡 土塙墓 1~10 蔊壇光掘時（西から）

下：神主城跡 土塙墓 1~10 蔊壇検出調査風景
(北から)

写真図版 8

上：神主城跡 上塙墓 3 標石（西から）

下：神主城跡 土塙墓 3 標石内の様（西から）

写真図版 9

上：神主城跡 上塙墓 3 蔊壇検出時（西から）

下：神主城跡 土塙墓 3（西から）

写真図版 10

上：神主城跡 土塙墓 5 標石（西から）

下：神主城跡 土塙墓 5 蔊壇検出時（西から）

写真図版 11

上：神主城跡 土塙墓 5 上層断面（西から）

下：神主城跡 上塙墓 5 人骨検出状況（西から）

写真図版 12

上：神主城跡 土塙墓 2 標石（北西から）

下：神主城跡 土塙墓 2（西から）

写真図版 13

上：神主城跡 土塙墓 8 標石（西から）

下：神主城跡 土塙墓 8（北西から）

写真図版 14

上：神主城跡 土塙墓 4（東から）

下：神主城跡 土塙墓 9・10（北西から）

写真図版 15

上：神主城跡 七塙墓 11・12 標石（南から）

- 下：神主城跡 土壙墓11・12（南西から）
写真図版16
上：神主城跡 土壙墓13（北から）
下：神主城跡 土壙墓14～18標石検出時（東から）

- 写真図版17
上：神主城跡 土壙墓15標石（西から）
下：神主城跡 土壙墓15人骨検出状況（西から）

- 写真図版18
上：神主城跡 土壙墓14出土物出上状況（北から）
下：神主城跡 土壙墓17（北から）
写真図版19
上：神主城跡 段状造構1・2上層断面（南東から）
下：神主城跡 段状造構1・2（南東から）

- 写真図版20
上：神主城跡 Ⅲ区より望む日本海と都野津の町並み（南から）
下：神主城跡 Ⅲ区トレンチ調査時（北西から）

- 写真図版21
上：神主城跡 Ⅲ区集石（北西から）
下：神主城跡 Ⅲ区南端堆積土層（南東から）
写真図版22
上：神主城跡 溝状造構1（南東から）
下：神主城跡 調査区に隣接する平坦地（北西から）

- 写真図版23
上：神主城跡 神主城跡（東から）
下：神主城跡 調査後遠景（西から）

- 写真図版24
上：神主城跡 上壙墓2・5出土遺物
下：神主城跡 土壙墓6・10出土遺物

- 写真図版25
上：神主城跡 土壙墓13出土遺物
下：神主城跡 土壙墓14・15出土遺物

- 写真図版26
上：神主城跡 Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区出土遺物
下：神主城跡 上壙墓5出土漆膜・土壙墓15出土数珠

- 写真図版27
上：宝崎商店裏遺跡 宝崎商店裏遺跡遠景
下：宝崎商店裏遺跡 宝崎商店裏遺跡（手前）と古八幡付近遺跡（中央奥の伐採部分）

- 写真図版28
上：宝崎商店裏遺跡 調査前（南から）
下：宝崎商店裏遺跡 調査区北側砂堆積状況（南から）

- 写真図版29
上：宝崎商店裏遺跡 古墳全景（北東から）
下：宝崎商店裏遺跡 段状遺構西側の石材（北西から）

- 写真図版30
上：宝崎商店裏遺跡 段状遺構土層断面（西から）
下：宝崎商店裏遺跡 鉄斧出土状況（南から）

- 写真図版31
上：宝崎商店裏遺跡 尾根上遺物出土状況（西から）
下：宝崎商店裏遺跡 土壙1（西から）
写真図版32 宝崎商店裏遺跡 出土遺物
写真図版33 宝崎商店裏遺跡 出土遺物
写真図版34 宝崎商店裏遺跡 出土遺物、段状遺構出土陶器
写真図版35

- 上：古八幡付近遺跡 遺跡遠景（北西から）
下：古八幡付近遺跡 6・7区全景（北西から）

- 写真図版36
上：古八幡付近遺跡 6・7区調査後、8区調査前遠景（南から）
下：古八幡付近遺跡 8区調査前（北西から）

- 写真図版37 古八幡付近遺跡 8区全景（南から）
写真図版38
上：古八幡付近遺跡 8-2区掘立柱建物群調査風景（南から）
下：古八幡付近遺跡 8-2（北から）

- 写真図版39
上：古八幡付近遺跡 9区全景（真上から）
下：古八幡付近遺跡 9区全景（北西から）

- 写真図版40
上：古八幡付近遺跡 積六住居3・4調査風景（南東から）
下：古八幡付近遺跡 環壕検出状況（北から）

- 写真図版41
上：古八幡付近遺跡 環壕調査風景（北から）
下：古八幡付近遺跡 環壕西側土層断面（北から）

- 写真図版42
上：古八幡付近遺跡 9区占墳群（北から）
下：古八幡付近遺跡 1号埴石室（北西から）

- 写真図版43 古八幡付近遺跡 1号埴石室調査風景（北西から）
写真図版44
上：古八幡付近遺跡 9区と宝崎商店裏遺跡（西から）
下：古八幡付近遺跡 9区調査後（南東から）

写真図版45

- 上：古八幡付近遺跡 溝状遺構1（南から）
下：古八幡付近遺跡 6区調査前（西から）

写真図版46

- 上：古八幡付近遺跡 溝状遺構1（西から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構1（北から）

写真図版47

- 上：古八幡付近遺跡 柱列1（北西から）
下：古八幡付近遺跡 柱列1加工旗のある柱
(南東から)

写真図版48

- 上：古八幡付近遺跡 7区東側堆積上層（北西から）
下：古八幡付近遺跡 7区土石流、杭列（北から）

写真図版49

- 上：古八幡付近遺跡 7区土石流、杭列（南西から）
下：古八幡付近遺跡 杭列1断面（北から）

写真図版50

- 上：古八幡付近遺跡 建物8・9調査風景（北から）
下：古八幡付近遺跡 建物8・9上層断面（北西から）

写真図版51

- 上：古八幡付近遺跡 建物10（南から）
下：古八幡付近遺跡 建物11床面遺物出土状況
(西から)

写真図版52

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構2（北西から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構2床面遺物出土状況
(北西から)

写真図版53

- 上：古八幡付近遺跡 上層1検出状況（南東から）
下：古八幡付近遺跡 土壙1遺物出土状況（南東から）

写真図版54

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構3南東自然流路内土
製文陶出土状況（西から）
下：古八幡付近遺跡 溝状遺構7遺物出土状況
(南から)

写真図版55

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構4遺物出土状況
(南東から)
下：古八幡付近遺跡 段状遺構5（北西から）

写真図版56

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構5堆積上層（北西から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構5盛土下遺物出土状況
(南から)

写真図版57

- 上：古八幡付近遺跡 建物15、段状遺構6（南東から）
下：古八幡付近遺跡 建物15遺物出土状況（南から）

写真図版58

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構6（南東から）
下：古八幡付近遺跡 6区調査後全景（南から）

写真図版59

- 上：古八幡付近遺跡 8-3区調査前（北から）
下：古八幡付近遺跡 8-3区調査前（南から）

写真図版60

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構8（南から）
下：古八幡付近遺跡 8-2区掘立柱立物群調査風景
(北西から)

写真図版61

- 上：古八幡付近遺跡 8-2区地盤土層（北西から）
下：古八幡付近遺跡 建物16-24（南から）

写真図版62 占八幡付近遺跡 8-2区掘立柱建物群 (北西から)

写真図版63

- 上：古八幡付近遺跡 建物16・17・19・20他
(真上から)
下：古八幡付近遺跡 建物19-22（真上から）

写真図版64

- 上：古八幡付近遺跡 建物17P10柱底検出状況
(南東から)
下：古八幡付近遺跡 建物17P10土層断面（北東から）

写真図版65

- 上：古八幡付近遺跡 建物17P3土層断面（北東から）
下：古八幡付近遺跡 建物17P4七層断面（北東から）

写真図版66

- 上：古八幡付近遺跡 建物17P2土層断面（北東から）
下：古八幡付近遺跡 建物20P4内の根石

写真図版67

- 上：古八幡付近遺跡 磁物19P1柱底内の石
(北東から)
下：古八幡付近遺跡 炉2断面（南東から）

写真図版68

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構10・11（南東から）
下：古八幡付近遺跡 8区建物28P3内柱根

写真図版69

- 上：古八幡付近遺跡 集石1（北西から）
下：古八幡付近遺跡 集石1下方青磁碗出土状況
(南東から)

写真図版70

- 上：古八幡付近遺跡 8-3区洞在風景（南から）
下：古八幡付近遺跡 8-3区北側堆積土層（南から）

写真図版71

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構12、集石3（北から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構12堆積土層
(南東から)

写真図版72

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構12床面遺物出土状況
(南から)

- 下：古八幡付近遺跡 段状遺構13（北西から）

写真図版73

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構14・15（南から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構14P1（南から）

写真図版74

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構16～19（南から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構16・17（北から）

写真図版75

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構16・17堆積土層
(南から)
下：古八幡付近遺跡 段状遺構16調査風景（南西から）

写真図版76

- 上：古八幡付近遺跡 建物3IP6柱根（南東から）
下：古八幡付近遺跡 建物3IP9内青磁皿出土状況

写真図版77

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構16柱穴内遺物出土状況
下：古八幡付近遺跡 建物3IP1内の廻板

写真図版78

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構18・19（北東から）
下：古八幡付近遺跡 段状遺構19壁溝土層断面
(北から)

写真図版79

- 上：古八幡付近遺跡 柱列9東側柱穴内の石
下：古八幡付近遺跡 柱列9西側柱穴内の石

写真図版80

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構20（北東から）
下：古八幡付近遺跡 上壇8（東から）

写真図版81

- 上：古八幡付近遺跡 9区溝壺前（北西から）
下：古八幡付近遺跡 9区溝壺前（北から）

写真図版82

- 上：古八幡付近遺跡 穴住居1（南から）
下：古八幡付近遺跡 穴住居1床面検出状況
(南から)

写真図版83

- 上：古八幡付近遺跡 穴住居1堆積上層（北西から）
下：古八幡付近遺跡 穴住居1壁体溝内遺物出土状況
(南東から)

写真図版84

- 上：古八幡付近遺跡 穴住居2、建物36（南から）
下：古八幡付近遺跡 穴住居2、建物36調査風景
(北西から)

写真図版85

- 上：古八幡付近遺跡 穴住居2堆積土層（北から）
下：古八幡付近遺跡 穴住居3・4（南東から）

写真図版86

- 上：古八幡付近遺跡 環壕プラン検出時（北から）
下：古八幡付近遺跡 環壕プラン検出時（西から）

写真図版87 古八幡付近遺跡 環壕調査風景（北から）

写真図版88

- 上：古八幡付近遺跡 環壕北側遺物出土状況（北から）
下：古八幡付近遺跡 環壕西側遺物出土状況（東から）

写真図版89

- 上：古八幡付近遺跡 環壕内側壁出土状況（北から）
下：古八幡付近遺跡 環壕西側壁出土状況（南から）

写真図版90

- 上：古八幡付近遺跡 環壕AA'ライン上層断面
(西から)
下：古八幡付近遺跡 環壕BB'ライン土層断面
(北東から)

写真図版91

- 上：古八幡付近遺跡 環壕CC'ライン上層断面
(北から)
下：古八幡付近遺跡 環壕DD'ライン土層断面
(北から)

写真図版92

- 上：古八幡付近遺跡 環壕北側完掘後（南西から）
下：古八幡付近遺跡 環壕西側完掘後（北から）

写真図版93

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳発見時（北から）
下：古八幡付近遺跡 1号墳墳丘（南東から）

写真図版94 古八幡付近遺跡 1号墳石室（北西から）

写真図版95

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳石室内堆積土層（北から）
下：古八幡付近遺跡 1号墳閉塞石（西から）

写真図版96

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳石室（北西から）
下：古八幡付近遺跡 1号墳石室與壁（北西から）

写真図版97

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳石室（北から）
下：古八幡付近遺跡 1号墳石室控え積の石
(西から)

写真図版98

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳石室奥壁と左側壁
(西から)
下：古八幡付近遺跡 1号墳石室奥壁と右側壁
(北から)

写真図版99

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳石室開口部（南東から）
下：古八幡付近遺跡 1号墳石室板石及び掘り方
(東から)

写真図版100

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳石室床面遺物出土状況
(南西から)
下：古八幡付近遺跡 1号墳周溝内遺物出土状況
(北東から)

写真図版101

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳周溝内須恵器類出土状況
(南東から)
下：古八幡付近遺跡 1号墳周溝内須恵器類底部及び
蓋环出土状況（南東から）

写真図版102

- 上：古八幡付近遺跡 1号墳北側遺物出土状況
(北西から)
下：古八幡付近遺跡 天井石と思われる石材

写真図版103

- 上：古八幡付近遺跡 2号墳前（北から）
下：古八幡付近遺跡 2号墳墳丘検出時（東から）

写真図版104

- 上：古八幡付近遺跡 2号墳G室上の集石（北から）
下：古八幡付近遺跡 2号墳石室調査風景（南から）

写真図版105 古八幡付近遺跡 2号墳（南東から）

写真図版106

- 上：古八幡付近遺跡 2号墳盛土内の石組み（南から）
下：古八幡付近遺跡 2号墳盛土内の石組み（北から）

写真図版107

- 上：古八幡付近遺跡 2号墳西側盛土断面（南から）
下：古八幡付近遺跡 2号墳盛土除去後（南東から）

写真図版108

- 上：古八幡付近遺跡 2号墳石室（南から）
下：古八幡付近遺跡 2号墳左側壁（南東から）

写真図版109

- 上：古八幡付近遺跡 2号墳石室根石及び掘り方
(南から)
下：古八幡付近遺跡 2号墳石室根石及び掘り方
(北から)

写真図版110

- 上：古八幡付近遺跡 土壙10土壙断面（北東から）
下：古八幡付近遺跡 9区調査風景（南東から）

写真図版111

- 上：古八幡付近遺跡 建物1～7出土遺物
下：古八幡付近遺跡 建物11出土遺物

写真図版112

- 上：古八幡付近遺跡 消状遺構5出土遺物
下：古八幡付近遺跡 段状遺構2出土遺物

写真図版113

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構2出土遺物
下：古八幡付近遺跡 段状遺構2・3周辺、上層1出土遺物

写真図版114

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構3周辺、段状遺構4出土遺物
下：古八幡付近遺跡 段状遺構4出土土鍾

写真図版115

- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構5、建物15出土遺物
下：古八幡付近遺跡 建物15出土遺物

写真図版116 古八幡付近遺跡 6・7区出土縄文土器、
弥生土器、石器

写真図版117

- 上下：古八幡付近遺跡 6区出土遺物

写真図版118

- 上下：古八幡付近遺跡 6区出土遺物

写真図版119

- 上：古八幡付近遺跡 6区土石流出土遺物
下：古八幡付近遺跡 6区上石流出土遺物、7区出土遺物

写真図版120

- 上下：古八幡付近遺跡 7区出土遺物

写真図版121 古八幡付近遺跡 7区出土遺物

写真図版122

- 上下：古八幡付近遺跡 7区出土遺物

写真図版123

- 上下：古八幡付近遺跡 6・7区出土遺物

写真図版124

- 上：古八幡付近遺跡 6・7区出土金属器

- 下：古八幡付近遺跡 8-2区出土石器
写真図版125 古八幡付近遺跡 8-2区出土石器
写真図版126
- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構8・9、8-1・2区
遺構外出土遺物
下：古八幡付近遺跡 建物16~24柱穴及び周辺出土
遺物
写真図版127
- 上：古八幡付近遺跡 建物16~24柱穴及び周辺出土
遺物
下：古八幡付近遺跡 建物16~24周辺出土遺物
写真図版128
- 上：古八幡付近遺跡 建物16~24周辺出土遺物
下：古八幡付近遺跡 建物25~28周辺出土遺物
写真図版129
- 上下：古八幡付近遺跡 建物25~28周辺出土遺物
写真図版130
- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構10出土石刀1
中：古八幡付近遺跡 段状遺構12床面出土遺物
下：古八幡付近遺跡 段状遺構12、集石3出土遺物
写真図版131
- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構13、溝状遺構10出土
遺物
下：古八幡付近遺跡 段状遺構13及び周辺出土統一
新羅土器
写真図版132
- 上下：古八幡付近遺跡 段状遺構16出土遺物
写真図版133
- 上下：古八幡付近遺跡 段状遺構17周辺出土遺物
写真図版134
- 上：古八幡付近遺跡 段状遺構18出土遺物
下：古八幡付近遺跡 段状遺構18出土遺物
写真図版135
- 上下：古八幡付近遺跡 8-3区出土遺物
写真図版137
- 上：古八幡付近遺跡 8-3区出土遺物
中：古八幡付近遺跡 8-2区基壇複出土鉄滓
下：古八幡付近遺跡 穴住居1・2出土遺物
写真図版138
- 上：古八幡付近遺跡 穴住居2出土遺物

- 下：古八幡付近遺跡 穴住居2・3・4、建物36出
土遺物
写真図版139
- 上：古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版140
- 上：古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版141 古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版142
- 上下：古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版143
- 上下：古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版144 古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版145
- 上下：古八幡付近遺跡 環壕出土遺物
写真図版146
- 上：古八幡付近遺跡 環壕及び9区出土石器
下：古八幡付近遺跡 1号墳出土遺物
写真図版147 古八幡付近遺跡 1号墳出土遺物
写真図版148 古八幡付近遺跡 1号墳出土遺物
写真図版149 古八幡付近遺跡 1号墳北側出土遺物
写真図版150
- 上：古八幡付近遺跡 1号墳北側出土遺物
下：古八幡付近遺跡 2号墳出土遺物
写真図版151
- 上：横路古墓 横路古墓と古八幡付近遺跡（南西から）
下：横路古墓 近世加工段（真上から）
写真図版152
- 上：横路古墓 近世加工段（南東から）
下：横路古墓 近世加工段造成土断面（南東から）
写真図版153
- 上：横路古墓 調査前全景（南西から）
下：横路古墓 段状遺構1（北西から）
写真図版154
- 上：横路古墓 建物1調査風景（北西から）
下：横路古墓 建物1堆積土層（北西から）
写真図版155
- 上：横路古墓 建物2（東から）
下：横路古墓 建物2P2七層断面（東から）
写真図版156
- 上：横路古墓 段状遺構2堆積上層（東から）
下：横路古墓 段状遺構3（南東から）
写真図版157
- 上：横路古墓 近世加工段調査前（南東から）
下：横路古墓 近世加工段調査風景（北西から）

写真図版158 横路古墓 建物3～5（南東から）

写真図版159

上：横路古墓 建物5床面祭祀（南から）

下：横路古墓 建物3柱穴内の板石（北西から）

写真図版160

上：横路古墓 土壇墓群上層集石（南東から）

下：横路古墓 上塙墓群上層集石断面（東から）

写真図版161

上：横路古墓 土壇墓群調査風景（北西から）

下：横路古墓 上塙墓群完掘時（北西から）

写真図版162

上：横路古墓 土壇墓4標石（南から）

下：横路古墓 上塙墓5（南から）

写真図版163

上：横路古墓 上塙墓1（南から）

下：横路古墓 土壇墓3・4（南から）

写真図版164

上：横路古墓 建物1、段状遺構1・3出土遺物

写真図版165

上下：横路古墓 I区出土遺物

写真図版166

上下：横路古墓 建物2周辺出土遺物

写真図版167

上下：横路古墓 土器溜まり、II区出土遺物

写真図版168

上：横路古墓 土器溜まり、II区出土遺物

下：横路古墓 近世加工段出土遺物

写真図版169

上：横路古墓 近世加工段出土遺物

下：横路古墓 近世加工段造成土出土遺物

写真図版170

上下：横路古墓 近世加工段造成土出土遺物

写真図版171

上下：横路古墓 近世加工段造成土出土遺物

写真図版172

上下：横路古墓 近世加工段造成土出土遺物



神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓の位置

1. 調査に至る経緯

調査に至る経緯

一般国道9号江津道路は、建設省により自動車専用道路として4車線道路の建設が計画された。起点は江津市波津町、終点は浜田自動車道浜田インターチェンジである。この計画は江津市内の交通渋滞の緩和と、石見地域の高速交通網の整備を目的としている。

江津道路建設の計画を受け、鳥根県教育委員会文化課（以下文化課という）は、平成元年に江津市嘉久志町から敬川町までの分布調査を行い13ヶ所の遺跡の存在を確認している。

平成3年1月に4者協議（建設省浜田工事事務所、県土木部、文化課、江津市教育委員会）を行ない、発掘調査について具体的な検討がなされた。その結果、平成3年度には建設省の委託を受けた江津市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、7月に江津市二宮町の半田浜西遺跡、翌平成4年1月には同郡野津町のカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われた。これらの遺跡の調査の後、3者協議（建設省、江津市教育委員会、文化課）を行い、平成4年度から文化課が本調査に入ることになった。

平成4年度は鹿伏山遺跡、半田浜西遺跡の調査を行い、平成5年度には江津市嘉久志町の久本窯跡、同二宮町の二宮C遺跡、同敬川町の古八幡付近遺跡、カワラケ免遺跡の調査を行い、平成6年度には江津市嘉久志町の嘉久志遺跡、同二宮町の飯田C遺跡、古八幡付近遺跡1～5区の調査を行った。平成8年度には江津市二宮町の恵良遺跡、同波子町の大田屋窯跡の調査を行い、平成9年度には江津市二宮町の神主城跡、飯田A遺跡、古八幡付近遺跡6・7区、同敬川町の横路古墓の調査を行なった。また、9月には予定ルートの変更に伴う遺跡の分布調査の依頼を受け、12月から3月にかけて再度分布調査を実施した。その結果、新たに8ヶ所で遺跡の存在を確認した。平成10年度には、江津市敬川町室崎商店裏遺跡、古八幡付近遺跡8・9区、浜田市上府町の長東坊窯跡調査を行った。また、9年度に新しく確認された遺跡のうち2遺跡については、10年度に再度検討した結果、本調査を行う遺跡から除外している。

江津道路建設予定地内発掘遺跡一覧

(平成12年3月現在)

遺跡名	発掘年度	主な内容	備考
半田浜西遺跡	平成4年度	弥生～中世 集落跡 掘立柱建物2、溝10、上塙1、石積み	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
鹿伏山遺跡	平成4年度	土壤1、绳文土器	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
宮C遺跡	平成5年度	弥生時代後期 集落跡 古墳時代中期 集落跡、竪穴住居 中世 挖立柱建物2	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
久本奥窓跡	平成5年度	7世紀後半～8世紀後半 地下式竪窓跡 掘立柱建物1	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
古八幡付近遺跡	平成5年度 平成6年度 平成8年度 平成9年度 平成10年度	縄文～近世 集落跡 弥生中期 環壕集落跡 竪穴住居4、掘立柱建物46、溝15、土塁10 水田跡、占墳2（横穴式石室）	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ・Ⅲ
喜久志遺跡	平成6年度	時期不明 縦塹 土塁1	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
飯田C遺跡	平成6年度	散布地 弥生土器、須恵器、土師器	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
恵良遺跡	平成8年度	古代末～中世 集落跡 掘立柱建物6、溝6	平成8年度 埋蔵文化財調査センター年報
大田屋窓跡	平成8年度	石見焼生産遺跡 連房式登り窓1、作業場	平成8年度 埋蔵文化財調査センター年報
神主城跡	平成9年度	中世 山城跡 郭、腰郭、土塁、堀切、土塹墓18、小塚窓1、溝1	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
飯田A遺跡	平成9年度	石見焼生産遺跡 連房式登り窓1、作業場跡3	平成9年度 埋蔵文化財調査センター年報
横路古墓	平成9年度	古墳 占墳後期 集落跡 近世 集落跡 掘立柱建物5、上塙墓5	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
室崎商店裏遺跡	平成10年度	古墳 横穴式石室	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
長東坊跡	平成10年度	石見焼生産遺跡 連房式登り窓1、建物跡1、粘土採掘坑	平成10年度 埋蔵文化財調査センター年報
佐々木窓跡	平成11年度	石見焼生産遺跡 連房式登り窓1、作業場、道	平成11年度 埋蔵文化財調査センター年報
上條古墳	平成11年度	古道（土橋） 時期不明の段状構造、加工段	平成11年度 埋蔵文化財調査センター年報
上條遺跡	平成11年度	柱穴群、古道	平成11年度 埋蔵文化財調査センター年報
堂々窓跡	平成11年度	白磁瓦窓跡	平成11年度 埋蔵文化財調査センター年報
近世後半～末期		房窓跡（半地下式構造）	平成11年度 埋蔵文化財調査センター年報
先打井畑遺跡Ⅰ区	平成12年度以降		
先打井畑遺跡Ⅱ区	平成12年度以降		
先打井畑遺跡Ⅲ区	平成12年度以降		
大尾谷遺跡	平成12年度以降		
立女遺跡	平成12年度以降	山城跡	
上ヶ山遺跡	平成12年度以降		

2. 神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓の位置と歴史的環境

神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・ 横路古墓の位置と歴史的環境

鳥取県中部に位置する江津市は、北に日本海を望み、市の中央を中国地方最大の河川である江川が流れ、日本海に注いでいる。神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓の所在する江津市二宮町・同敬川町は江津市西部の日本海側に位置している。岡町の北部は都野津町から続く三日月形の沖積平野となっており、南部には標高約150～200mの山塊が広がっている。沖積平野の中心に位置する二宮町東部には水尻川が、西部に位置する敬川町には敬川が江津市南部の山地から日本海へと流れ込んでいる。以下、江津市内で確認された各時代の主要な遺跡を紹介したい。

旧石器・縄文時代

江津市では、現在のところ旧石器時代の遺跡は見つかっていない。縄文時代の遺跡としては、波子町大平山遺跡群や鹿伏山遺跡、古八幡付近遺跡など数ヶ所が知られている。大平山遺跡群では縄文中期から晩期にかけての土器が出土しており、特に縄文中期の地域的な土器型式として「波子式」が設定されている。また、古八幡付近遺跡で出土した縄文土器は後期と晩期のものが多いが、早期の可能性のある上器片が数点含まれている。

弥生時代

前期の資料はまだ少なく、後地町の波来浜遺跡や古八幡付近遺跡、横路古墓で当該期の土器が出土している。中期の遺跡としては波来浜遺跡、都野津町の稻荷山遺跡、半田浜遺跡、古八幡付近遺跡などが挙げられる。古八幡付近遺跡では環壕集落を調査しており、分銅形土器が出土している。また、波来浜遺跡で中期中葉の貼石墓が調査されている点も注目される。後期になると確認されている遺跡の数はさらに増加する。都治町の高津遺跡、千田町の宮倉遺跡、古八幡付近遺跡では弥生時代後期の集落跡の調査が行われており、古八幡付近遺跡では当該期の可能性のある木臼跡も確認されている。また、波来浜遺跡では中期から引き続き貼石墓が造られており、B区1号墓は四隅突出型埴丘墓の可能性がある。

古墳時代

古墳時代の遺物は市内各地で確認されている。集落跡としては高津遺跡、二宮C遺跡、横路古墓が調査されている。市内で確認されている古墳は後期の横穴式石室を主体部とするものがほとんどだが、都野津町の行者山古墳は箱式石棺を主体部とし直刀が出土している。江津市内で最も古墳が密集しているのは江津市西部の高野山古墳群である。二宮町の天ヶ峰古墳群、高野山火塚、千田町空山古墳群など、横穴式石室を主体部とする後期古墳によって構成されている。これに対し江川東岸の後地町では4基の横穴墓からなる佐占ヶ岡横穴墓群が確認されており、西部とは異なる様相を見せていている。また、古墳時代後期から奈良時代にかけて和氣川流域では須恵器や瓦などの窯業生産が行われた。久本奥窯跡はその1つである。

古代

江津市の古代の中心は西部の二宮町周辺と考えられている。宮倉遺跡からは石見国分寺跡と同文の軒平瓦が出土しているほか、久本奥窯跡から浜田市下府町の下府庵寺と同文の軒丸瓦や瓦尾が出

土しておりこれらの遺跡との関係が注目される。また、二宮町の半田浜西遺跡からは奈良三彩や上製壺、越州窯青磁が、古八幡付近遺跡では統一新羅土器などの特殊な遺物が出土している。律令体制になると地方上要道である山陰道が設定された。山陰道沿いに設けられた駅のうち、樟道・江東・江西の3駅が江津にあったと言われている。江東駅が所在したと推定される渡津町では、長出遺跡で奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器片が採集されている。また、波来浜遺跡でも数百点に上る当該期の須恵器片が見つかっている。このほか都野津町の清水遺跡からは火葬骨を納めた平安時代の須恵器壺が出土している。

中世

古代末から中世の遺跡としては、波来浜遺跡から壺・皿や石帶を副葬した中世墓と、1000枚近い銭貨が束になった状態で検出されている。これらの銭貨の大部分が12世紀初頭までの銭貨であることが知られている。また、二宮町の恵良遺跡では、白磁碗などの遺物を伴う掘立柱建物跡が見つかっており、古代末から中世にかけての集落跡と考えられる。

中世には、海運で栄えた都野氏が都野郷を中心に勢力をふるっており、二宮町の神主城跡は、都野氏に関係が深いものと考えられている。その麓にある二宮C遺跡では掘立柱建物が確認されている。南北朝期、都野氏は南朝側につき、石見で戦いを繰り広げている。1336年の散ヶ浜の合戦は敷川河口付近で行われたと考えられるが、古八幡付近遺跡では当該期の遺構・遺物を検出しているので関連が注目される。都野氏はその後も一貫して反幕府勢力として戦いを続けるが、1376年の江津での戦闘を最後に石見での南北朝の内乱は終結している。その後戦国期には益田氏の一族である福屋氏が江津市域に勢力を伸ばしているが、古八幡付近遺跡では引き続き遺構・遺物を検出している。

近世・近代

近世から近代にかけては、都野津層に含まれる豊富で良質な粘土を主原料に瓦・陶器等の石見焼の生産が活発になり、現在に至るまで江津市の主要産業の一つとなっている。石見焼の窯は山の斜面を利用した連房式登り窯であり、市内では三浦窯跡、田室窯跡、飯田A遺跡、大田屢窯跡で発掘調査が行われている。この結果、江津市内の窯業の歴史も徐々に明らかになりつつある。

【参考文献】

- 宍道正年 1974 「島根県の縄文式土器集成」
- 江津市 1982 「江津市誌」
- 島根県教育委員会 1992 「島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）」
- 島根県教育委員会 1995 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」
- 島根県教育委員会 1993 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報」
- 島根県教育委員会 1995 「飯田IC遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡」
- 島根県教育委員会 1973 「波来浜遺跡発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会 1997 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」
- 島根県教育委員会 1997 「島根県中世城館跡分布調査報告書（第1集）石見の城館跡」
- *高津遺跡は、江津市教育委員会によって発掘調査中で、担当梅木茂雄氏の教示による。

3. 神主城跡

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査前の状況

神主城跡は、江津市二宮町の丘陵部と平野部の境に位置する中世の山城跡である。遺跡周辺の都野津・二宮地区は江津市内で最も遺跡の集中する地域で、これまでにも弥生時代から中世の遺構や遺物が多数確認されている。また、神主城跡の南の谷奥には、室町時代頃まで神主城を拠点としていたと言われる、都野氏と関係が深いと指摘される石見二宮多鳩神社が控えている。このように神主城跡は地元では既に著名な山城で、調査前は山林になっていたが標高約92mを測る山頂周辺とそこから三方に伸びる尾根上には平坦地を確認することができた。さらに寺井毅氏によって略測図が作成されており、山城の概要を把握することは比較的容易だった。

江津道路によって破壊されることになったのは神主城跡の主郭から北に向かって伸びる尾根と東西の尾根の一部で、地表観察では確認できない遺構が存在する可能性が考えられた。南西側は平成6年までに行ったトレンチ調査で、遺構・遺物とも確認できなかったので本調査の範囲から除外した。北側の尾根は平成8年度にトレンチ調査を行った結果、尾根上で179個もの集石と備前焼の甕の底部を検出したので、尾根上を中心で翌年本調査を行うことにした。

第2節 調査の経過と概要

本調査は、平成9年度4月16日より開始している。調査前の丘陵は樹木が茂っていたため見通しがきかなかったが、伐開後は非常に眺望が良くなった。その結果、調査区外になる尾根の西側斜面で複数の平坦地と、墓標の可能性がある石のまとまりを確認した。この段階では墓の時期を判断できず、直ちに建設省浜田工事事務所と協議を行い新たに調査区に加えることにした。

調査は主郭から北に向かって伸びる尾根の東西両側トレンチ調査と並行して丘陵西側（Ⅰ区）から開始した。丘陵の西側斜面では最終的に平坦地4カ所と18基の近世の上塙墓を検出したが、調査開始時には墓壙プランの検出に非常に苦しんだ。近世墓群の調査に手間取っている間に東側斜面のトレンチ調査で炭と燃土の堆積を確認したので、Ⅱ区として以後そちらを重点的に調査することにした。ところが建設省浜田工事事務所から、10月に調査を予定していた古八幡付近遺跡を先行して調査してほしいとの要望があり、調査班を二つに分けて対応することになった。このため5月12日からは作業員が半減し、2現場を車で移動しながら同時に把握しなければならず、調査のベースは日立って落ちるようになった。6月に入ると検出から1ヶ月以上たったⅠ区の近世墓群で、ようやく墓壙の検出ができるようになった。幸いⅡ区は傾斜が急で調査区南側で崩壊した炭窯状の遺構を検出するにとどまった。6月30日からは、神主城主郭から北に向かって伸びる尾根筋の付根部分にⅢ区を設定し調査を開始し、翌日には古八幡付近遺跡の調査を行っていた調査班も再び合流した。Ⅲ区では溝状遺構と集石を確認したほか明確な遺構は検出できなかった。7月に入ると一部で工事が開始され、7月29日に現地調査を終了した。

第2章 調査の結果

第1節 I 区の調査

調査区の立地（写真図版5）

近世の土壙墓群を検出したI区は、神主城本体から北側に伸びる尾根の西向き斜面に位置している。標高は約51~59mとやや高めであり、日本海や郡野津・二宮の町並みを望むことができる。

1. 第1支群（土壙墓1~10）（第5・27図、写真図版6・7・26）

土壙墓群の中では南側最高所に位置している。調査前から多数の集石が確認され、土壙墓群発見のきっかけになった支群である。丘陵西側斜面を大規模に削平してカマボコ型の平坦地を造っている。規模は全文群中最大の約4.5×10mを測る。また、平坦地の南東には、1段高い平面三角形の別の平坦地が造られていたが、遺構は検出できなかった。この支群に限らず、神主城跡の上壙墓は、標石は簡単に検出できるものの、肝心の墓塚の確認は当初非常に苦しんだ。しかし、近世の遺構を調査する際にプランの検出が困難なことがしばしばあり、多少地山を削れば確認できるという調査指導を受けたので、実際に20cm前後地山をとばしてみた。その結果、この平坦地からは全上壙墓の半数以上になる、10基の上壙墓が確認された（写真図版7下）。平坦地の規模や上壙墓数から、第1支群が上壙墓群の内最初に築かれたか、中心的なものであった可能性が高い。平坦地からは27図6~9に示した、上師質の皿、唐津系の甌、寛永通寶（新寛永）、鉄錢等が出土している。なお、神主城跡で検出した土壙墓の標石は2~3尺を基準に方形に組まれるものが多く、墓壙と位置や上軸がずれるものもある。

土壙墓1（第6図）

平坦地の西側、土壙墓2の北側で検出した。墓壙上面には石が4個置かれていた。墓壙断面は逆台形で壁面はやや膨らみを持つ。床面はほぼ平坦で長方形を呈している。遺物は出土していない。

土壙墓2（第6・9図、写真図版12・24）

平坦地の中央やや北寄り、上壙墓1の南側、土壙墓4と隣接する位置で検出した。墓壙上面には石11個が、ほぼ墓壙に沿うような形で長方形に置かれていた。墓壙断面は逆台形を呈する。床面は平坦で平面は南側が膨らむ長方形を呈している。遺物（第9図）は寛永通寶（古寛永と新寛永）が出土したほか、床面北西で粉々に碎けた漆の膜を採取した。

土壙墓3（第7・27図、写真図版8・9）

平坦地の南側、土壙墓2の南で検出した。墓壙上面には石が約70×80cmの範囲で方形に組まれていた。石組みは丁度箱式石棺を組むように方形に区画した後、蓋をするように板石を置き、さらにその合わせ目に30cm前後の円錐を2個並べている。この石組みを解体すると、石組み中央に8~25cmのやや緑がかった川原石が集められていた。川原石は出土状況から、本来石組みの中心にあったものが、棺の陥没によって墓壙内に落込んだものと考えられる。また、この石組みに接して約80×100cmの石組みを検出した。ここでは27図5の上師質土器が完形で出土している。上壙墓3と

4の中間に位置するが、土壙墓4に伴う可能性がある。墓壙断面は逆台形で北側の壁面はほぼ垂直になる。床面は平坦で不整長方形を呈している。遺物は床面中央で刀子と漆膜が出土した。

土壙墓4（第8図、写真図版14）

土壙墓2の西側約35cmの位置で検出した。墓壙上面には18~44cmの石が置かれていたが、二段壙上壙の二段目の真上に置かれた1番大きな石のみが標石と考えられる。南側に本体よりも浅い段が付く。墓壙本体の床面はわずかに窪みを持ち、平面は楕円形を呈している。神主城跡で調査した土壙墓の中でも特異な墓壙形態といえる。遺物は出土していない。

土壙墓5（第8・9図、写真図版10・11・24）

平坦地の北側の傾斜地にかかる位置で検出した。墓壙上面には石が6個置かれていた。また、墓壙検出時には中央が陥没したが、土層断面からも明らかなように棺の腐食によるものである。墓壙断面は逆台形で、床面は短辺の膨らむ長方形を呈している。棺内からは刀子、釘が出土したほか、床面で人骨と漆の膜を検出した。人骨の状態は良好でなく、検出できたのは頭部と脚の一部と思われるものののみである。頭を北にし、顔は西側を向いており、脚部は折り曲げられた状態だった。

土壙墓6（第10・12図、写真図版24）

土壙墓5の南約50cmの位置で検出した。墓壙上面より西側にずれた位置に石が置かれていた。壁はほぼ垂直に掘られている。床面は中央がやや窪み、平面は長方形を呈している。遺物は床面から、釘、漆片、元豊通寶1枚、寛永通寶5枚（古寛永3枚、新寛永2枚）が出土した。このほか明灰色の陶器碗の細片が棺内から出土した。埋め戻しの際に流入したものと考えられる。

土壙墓7（第10図）

土壙墓3の東で検出した。墓壙上面には85×95cmの丸い石が1個置かれていた。壁はほとんど垂直に掘られ、床面は平坦で不整長方形を呈する。遺物は出土していない。墓壙の形態は異なるものの、大型の石を一つだけおいている点や墓壙が比較的小さい点が土壙墓4と共通している。

土壙墓8（第10図、写真図版13）

土壙墓3の東、土壙墓7の南で検出した。墓壙上面には約80×80cmの範囲で石が組まれており、中心には板石が乗せされていた。墓壙断面は逆台形で壁面はやや膨らみを持つ。床面は中央に向かって窪み、不整長方形を呈している。遺物は出土していない。

土壙墓9・10（第11・12図、写真図版14・24）

平坦地の最も南、土壙墓8の南20cmの位置で検出した。墓壙上面には石が6個置かれていたが、墓壙周辺にも同様の石が散乱していたので本来は他の土壙墓同様方形の石組みを構成していた可能性もある。比較的大型の墓壙で、床面から60cm以上高い位置で刀子、釘、漆片が出土した。このため2基の土壙墓が切り合っていると判断し、深い方を土壙墓9、遺物を伴う浅い方を土壙墓10とした。壁面は南側がほぼ垂直で、北側は垂直に立ち上がった後段が付いて広がる。土壙墓9の床面は墓壙上面より北側に軸を振っており、ほぼ平坦で比較的整った長方形を呈している。土壙墓10の床面は認識できなかった。

2. 第2支群（土壙墓11・12）（第13・27図、写真図版15・26）

第1支群の平坦地の北西に隣接して造られている。平坦地の床面は第1支群より1段低く標高約54mを測る。平坦地の平面は不正形な平行四辺形を呈し、規模は約2.3×4mと小さい。土壙墓は2

基確認された。床面からは27図1、2に示した土師質の皿が出土している。

土壙墓11（第13図）

土壙墓12の南側で検出した。墓壙上面からややずれた位置で方形に石が並べられていた。壁面は北側が大きく開くほかは、ほとんど垂直に掘られている。床面は中央に向かって窪み、南側が膨らむ長方形を呈している。遺物は出土していない。

土壙墓12（第13図）

土壙墓11の北側で検出した。墓壙上面から西にかなりずれた位置に石が並べられていた。墓壙断面は逆台形を呈する。床面は中央が窪み、長方形を呈している。遺物は出土していない。

3. 第3支群（土壙墓13）（第14・15図、写真図版16・25）

第2支群の北側に隣接して造られている。平坦地の床面は第2支群よりさらに1段低くなっている。標高約53mを測る。平面は不正な平行四辺形を呈し、規模は 2.5×3 mと第2支群とほぼ同じであるが、確認された土壙墓は1基のみである。墓壙上面には10~50cmの石が置かれていた。墓壙断面は逆台形、床面は比較的整った長方形を呈している。遺物は釘、鉄が出土したほか、人骨2片を検出した。

4. 第4支群（土壙墓14~18）（第16図、写真図版16）

他の支群とは直線上に並ぶものの、やや距離を置いて造られている。最も近い第3支群とも直線距離で約6m離れている。平坦地床面の標高も約51mと第1支群から見るとかなり低くなる。平坦地の平面は不正長方形を呈し、規模は 3.4×6.1 mを測る。ここでは5基の土壙墓を検出したが、標石に使われている石が他の支群に比べて小さい点が特徴的である。

土壙墓14（第16・18図、写真図版18・25）

平坦地の南側で検出した。墓壙上面には大小の石が散乱していた。南側の壁面はほぼ垂直に掘られているが、北側は床面から38cmの所で開いている。床面は比較的整った長方形を呈している。床面から「包丁」、古寛永1枚、新寛永4枚、文銭1枚、漆膜が出土した。

土壙墓15（第17・18図、写真図版17・25）

平坦地の北側で検出した。墓壙上面には4~26cmの石が多数置かれていた。検出時の状況から、元来方形に並べられた集行が東側に崩れたものと考えられる。墓壙断面は逆台形で、床の平面は正方形に近い。釘、棺金具が床面より43~65cm高い位置で出土したが、組み合わせ式の棺の蓋を打ち付けたものと考えられる。また、床面中央で人骨を検出した。頭部は脚部の下に落ち込んでおり、頭は西に向かっていた。このほか頭部周辺では毛抜きと数珠玉4個が出土している。

土壙墓16（第19図）

土壙墓14の北側で検出した。墓壙上面には8~26cmの石が多数置かれていた。土壙墓15同様方形の石組みが北に崩れたものと考えられる。墓壙断面は逆台形で、床面は不整長方形を呈している。遺物は出土していない。

土壙墓17（第19図、写真図版18）

土壙墓16の北側で検出した。墓壙上面よりに石9個が置かれていた。方形に組まれた石の北側のみ残ったものであろう。墓壙は神主城跡の土壙墓群の中でも極端に浅く、特徴的である。墓壙断

面は逆台形で、壁面は膨らみを持つ。床面は不整長方形を呈している。遺物は出土していない。

土壙墓18（第19図）

土壙墓15の南東に接する様な位置で検出した。墓壙上面には大小の石が散乱していたが、これも元来は方形に組まれていたものと考えられる。墓壙断面は逆台形である。床面はほぼ平坦で、両短辺が膨らむ長方形を呈している。遺物は出土していない。

神主城跡土壙墓一覧

報告番号	支群	上 虹	平面形	基盤(cm)	頂輪(cm)	深さ(cm)	主 特	出 土 遺 物	銘 賞	人骨 焼存
1	1	不 積	長 方 形	144.0	95.0	74.0	N-56°-E			
2	1	不 積	長 方 形	107.5	102.0	87.0	N-73.5°-E	漆器	古寛永(1)、新寛永(2)	
3	1	不 積	長 方 形	95.0	96.0	91.0	N-9°-E	刀子(1)、漆器		
4	1	不 積	円 形	95.0	55.0	68.0	N-55°-E			
5	1	長	方 形	137.0	105.5	118.0	N-14°-E	刀子(1)、鉢(24)		○
6	1	長	方 形	146.5	100.0	122.0	N-13°-E	刀(18)、漆器 漆器片(溶込み)	古寛永(3)、新寛永(2) 元豐造室(1)	
7	1	不 積	長 方 形	74.0	55.0	58.0	N-17°-E			
8	1	不 積	長 方 形	65.0	38.0	72.0	N-34.5°-E			
9	1	長	方 形	161.5	94.0	154.0	N-27°-E			
10	1	長	方 形	81.0	53.0					
		長	方 形	79.0	60.0	91.0	N-38°-E	刀子(1)、鉢(2)		
11	2	不 積	長 方 形	(71.0)	(55.0)	89.0	N-26°-W			
12	2	不 積	長 方 形	53.0	45.0	64.0	N-26°-W			
13	3	長	方 形	69.3	45.0	90.0	N-12°-E			
14	4	長	方 形	50.0	34.0	72.0	N-20°-E	はさみ(1)、鉢(17)		○
15	4	長	方 形	137.0	98.0	116.0	N-20°-E			
16	4	長	方 形	104.0	75.0	93.0	N-21°-E	鉢(1)、漆器	古寛永(1)、支鉢(1) 新寛永(4)	
17	4	長	方 形	117.0	70.5	107.5	N-21°-E	金具(1)		
18	4	長	方 形	116.0	103.0	133.0	N-8°-E	刀子(1)、刀子(1) 刀(13)、金具(1)、鉢(5)		○
19	4	長	方 形	84.5	57.0	78.5	S-80°-W			
20	4	長	方 形	89.0	69.0	33.0	真 北			
21	4	不 積	長 方 形	50.0	45.0					
22	4	長	方 形	98.0	53.0	78.0	N-8°-E			
23	4	長	方 形	71.5	39.0					

神主城跡遺跡 土壙墓2、5出土遺物（第9図）

掘削名	器種	出土地點	形狀(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 澄	備考
1	古鉄	土壙墓	2			寛永通寶			3・4の重 なった状態
2	24	〃	〃	0.13		〃(新寛永)			〃
3	24	〃	〃	0.14		〃(新寛永)			
4	24	〃	〃	0.11		〃(古寛永)			
5	24	鉄器 刀子	土壙墓	11.5	1.3	(片面にのみ)縛ってい た頭が残る			
6	24	鉄器 鉗	5	3.3	0.4				
7	24	〃	1.5	0.5		鉗の頭が露出			
8	24	〃	4.6	0.3		くわわが横木の木質が残る			
9	24	〃	3.3	0.3		横木の木質が付着 横木目			
10	24	〃	3.1	0.3		鉗が露出 木目が欠差			
11	24	〃	2.1	0.3		横木目			
12	24	〃	3.2	0.3		横木の木質			
13	24	〃	3.5	0.2		横木目			
14	24	〃	5.1	0.3		鉗が露出 木目が欠差			
15	24	〃	5.2	0.3		鉗の頭が露出			
16	24	〃	4.6	0.3		木質が残る			
17	24	〃	4.5	0.7		木質付着			
18	24	〃	5.2	0.4					
19	24	〃	5.9	0.3		横木目			
20	24	〃	4.0	0.4					
21	24	〃	3.8	0.4		木質付着			
22	24	〃	3.3	0.3		裏側には縱木日の木質 がわずかに残る			
23	24	〃	(4.65)						
24	24	〃	5.8	0.4		横木目			
25	24	〃	(2.2)	0.5					
26	24	〃	1.70	0.4					
27	24	〃	3.5	0.5		全体に木質におおわれている			
28	24	〃	(3.4)	0.4					

神主城跡遺跡 土壌墓6、10出土遺物（第12図）

割合	年齢	器種	山土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1		古鉄 土壌墓 6								2-7の6枚重 なった状態
2	24	"	"	2.4		0.1	元豊通貫			
3	24	"	"	2.5		0.1	乾木通貫(古賣水)			
4	24	"	"	2.3		0.1	" (新賣水)			
5	24	"	"	2.4		0.1	" (古賣水)			
6	24	"	"	2.5		0.1	" (新賣水・文鏡)			
7	24	"	"	2.5		0.1	"			
8	24	鉄器 刃	"	0.7	0.3					
9	24	"	"	1.9	0.3		全体に横木日の木質付着			
10	24	"	"	1.6	0.2					
11	24	"	"	3.6	0.3		木質付着 横木目			
12	24	"	"	4.9	0.3		横木目			
13	24	"	"	4.1	0.3		剝き露出 垂木日の木質			
14	24	"	"	2.1	0.2		木質付着			
15	24	"	"	1.8	0.4		横木目			
16	24	"	"	1.0	0.4		木質が残る			
17	24	"	"	1.4	0.3					
18	24	"	"	2.6	0.4					
19	24	"	"	2.9	0.3		横木目			
20	24	"	"	2.0	0.5					
21	24	"	"	1.8	0.3					
22	24	"	"	1.2	0.3					
23	24	"	"	1.5	0.4					
24	24	鉄器	"	1.6	0.4		横木日の木質が付着			
25	24	鉄器 刃子	上巻第10	1.8	0.9					
26	24	鉄器 刃	土壌墓6	2.8	0.3		横木日の木質付着			
27	24	鉄器	"	2.8	0.2					

神主城跡遺跡 土壌墓13出土遺物（第15図）

割合	年齢	器種	山土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	25	鉄器 はさみ	土壌墓13	4.9	2.4					
2	25	鍔器 刃	"	3.0	0.4					
3	25	"	"	2.4	0.3		横木目			
4	25	"	"	2.9	0.7					
5	25	"	"	3.1	0.3		横木目			
6	25	"	"	2.3	0.4		横木日の木質			
7	25	"	"	3.8	0.3					
8	25	"	"	2.5	0.4					
9	25	"	"	3.6	0.3		頂部に僅かに横木目の 木質部分残る			
10	25	"	"	1.8	0.3					
11	25	"	"	4.9	0.4					
12	25	"	"	6.5	0.6					
13	25	"	"	1.5	0.3		薄く横木日の木質部分 残る			
14	25	"	"	2	0.5					
15	25	"	"	3.3	0.3		周辺を木質がおおう			
16	25	"	"	3.7	0.4					
17	25	鍔器 刃	"	2.4	0.3		横木目			
18	25	"	"	1.2	0.4		横木目			

神主城跡遺跡 土壌墓14、15出土遺物（第18図）

割合	年齢	器種	山土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1		占鉄	土壌墓14	2.4			乾木通貫			4-5-7の重 なった状態
2		"	"				"			3-6-8の重 なった状態
3	25	"	"	2.4		0.1	" (占賣水)			
4	25	"	"	2.4		0.1	" (新賣水)			
5	25	"	"	2.3		0.1	"			
6	25	"	"	2.3		0.1	"			
7	25	"	"	2.5		0.1	" (文鏡)			
8	25	"	"	2.2		0.1	" (新賣水)			
9	25	包丁	"	20.6	3.6		木質が付着 横の木質 部分が僅かに残る			
10	25	鍔器 刃	土壌墓15	4.7	0.3					
11	25	"	"	4.7	0.4		横木目			
12	25	"	"	3.5	0.4		横木目			
13	25	"	"	5.0	0.3					
14	25	"	"	1.9	0.2		横木目			
15	25	"	"	3.2	0.3		横木目 2木の刃が1つに なっている。打ち直しか?			
16	25	"	"	3.7	0.3					
17	25	鍔器 刃	"	残存長 0.4			全体に横木日の木質が付着			
18	25	"	"	1.9						
				残存幅 0.2			木質は目が斜めに走る			

標印	年数	器種	出土地點	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査者	色調	備考
19	25	鉄器 劍	土塁裏	残在長 3.0		0.3	横木目の木質			
20	25	鉄器 鎌	土塁裏	4.6	0.8		横木目の木質			
21	25	鉄器 劍	土塁裏	3.7	0.4					
22					0.5					
23	25	鉄器 刀子?	土塁裏	3.7	0.4					
				1.0	2.2					

第2節 II区の調査

調査区の立地

II区は、神主城本体から北側に伸びる尾根の東向き斜面標高58~66mに位置している。東斜面は西側に比べて傾斜がかなり急で、遺構は段状遺構1・2のほかは第4トレントで小炭窯1基を検出したのみである。しかしII区下方の第5トレントで集石を検出しているので、調査時には認識できなかった遺構が存在したかもしれない。なお、II区の北端には丘陵裾と尾根上の道を結ぶ古道があり、トレント調査時に近世の陶器碗が出土している。

段状遺構1・2（第21・22図・写真図版19）

東向き斜面の標高約60~63mの位置で上下に並んで検出した。段状遺構1は平面三角形の平坦地で、規模は2×5.6mを測る。斜面を削りだして平坦地を造っているが、床面は斜面下方に向かって傾斜しており、柱穴や溝は検出されなかった。床面上には炭片が多く含む黒色土が堆積していた。段状遺構2は段状遺構1の床面に隣接し、30×90cmの範囲で粘土が張られていた。また、この部分を中心にして、床面では木炭が放射状に出土した。床面より上には焼土ブロックの層が厚く堆積し、斜面下方の調査区外まで続いている。以上の状況から段状遺構1と2は一体の遺構だったと考えられる。遺構の時期は、検出面の上層にIII区から流れ落ちた橙褐色土が堆積し、周辺から須恵器の坏（27図12）が出土しているので、古墳時代以降中世以前と考えられる。遺構の性格は、粘土貼りや木炭の出土状況から崩壊した炭窯を連想させるが、詳しいことは不明である。

小炭窯（第21図）

II区から約11m離れた第4トレント内で検出した。平面は円形を呈し、規模は88×96cmを測る。壁面には粘土貼りが残存し、一部が赤色に熱変していた。遺物が出土していないので時期は不明である。

遺構外出土遺物（第27図、写真図版26）

II区では遺物がわずかしか出土していない。磨製石斧（11）はII区南の地山上で出土した。第7トレントで出土した石錐（10）とともに付近に網文・弥生時代の遺跡が存在することを想起させる。土師質上器（本報告書では候輪成形の土師器・中世以降の土師器のこと）の坏（12）は段状遺構1の斜面上方で出土した。表土下の橙褐色土中より出土しているので、III区から転落したものだろう。このほか产地不明の陶器擂鉢（15）が出土している。外面及び断面は灰色で須恵器に似るが、内面は1~2mmの厚さで淡茶褐色に変化している。非常に硬質でよく使い込まれている。青磁片（17）はII区の斜面上方で出土した。盤の可能性があり、表面には火を受けた痕跡がある。

第3節 Ⅲ区の調査

調査区の立地（写真図版20）

Ⅲ区は、神主城主郭から北側に伸びる丘陵の尾根筋付け根部分に位置している。標高約71～75mの平坦地で北西に向かって緩く傾斜している。ここからは和木町から波子町までの平野部を一望することができる。

郭状遺構（第23・27図、写真図版20～22・26）

城館分布調査時に平坦地が確認され、郭と認識された所である。平面は台形状を呈し、規模は南北約20m、東西約25mを測る。平坦地には茶褐色の土が全面にわたって10～30cm堆積していた。床面検出後、上輪に合わせて十字にベルトを設定し断ち割りを行ったが、盛土は確認できなかった。床面では中央部で溝状遺構2を、北西角で集石と杭の痕跡を検出した。また、この平坦地の東側肩部には幅5.5m、高さ約60cmの高まりが存在する。分布調査時に上塁とされたものである。断ち割って断面を観察したところ、平坦地床面に堆積した茶褐色土との境界が明確でなく、盛土も確認できなかった。これら以外に柱穴・土壙等の遺構は検出していない。

郭状遺構の南側は、傾斜がやや急になった後一段高い平坦地となり、ここから東に向かって溝状遺構1が伸びている。西側では大小多数の石が出土した。この一段高い平坦地は、調査前上郭方面に登るための通路と考えられていた。しかし実際に発掘してみると、調査区外の斜面上方から流れ込んだ茶褐色土が約80cm堆積したものであることが分かった（写真図版21下）。堆積土には大きいもので70cmを越える石が多数含まれており、調査区外の平坦地には石を使った遺構が存在した可能性がある。なお、床面が当初予想していたよりも低くなっていたので、調査区外南の平坦地との高低差は4m近いものとなった（写真図版22下）。

郭状遺構の北は幅約4m、長さ約20mの土橋状の地形になっている。トレーナーを入れて掘り下げてみたが、盛土は確認できなかった。さらにその北は尾根上を切り通しの道が太平寺の裏へと続いている。郭状遺構西側はかなり急な傾斜になっている。調査所々に見られた平坦地は、地元の人々の話で以前茶畠にしていた所とわかったので、本調査の範囲から外してある。

遺物（第27図）は床面から備前焼窯の口縁、胴部、底部の破片が1点ずつ出している。口縁（19）は細片で復元できないが、形態から備前焼編年Ⅳ期（間壁忠彦 1991 「備前焼」『考古学ライブラリー60』ニュー・サイエンス社）、15世紀代のものと判断される。土師質土器の底盤（18）はⅡ区出土の坏に比べ、かなり径が小さい。その他の特徴から土壙墓群と同時期のものかもしれない。

土橋地形の西側では、Ⅲ区床面に堆積していたのと同様な茶褐色土層から、鉄鎌（23）が出土した。頭部と刃部を欠損しているが、中世の「鑿根形式」の鎌と考えられる。この種の鉄鎌は県内でも発見例が増えつつあり、江津市内では室崎商店裏遺跡山頂で出土している。

溝状遺構1（第23・24・27図、写真図版22・26）

Ⅲ区の南東角で検出した。郭状遺構南部から北東調査区外へと伸びている。平面は北東側に向かって広くなり、断面は逆台形を呈している。遺物（27図）は、床面から備前焼の壺（20）が出土している。暗灰色及び青灰色を呈し、15世紀のものと考えられる。このほか表土下で、須恵器壺の破片や備前焼擂鉢（16）、石見焼碗（22）が出土した。付近に別時期の遺構が存在する可能性が高い。溝状遺構1は、山城と同時期に使用された、調査区外東側と郭状遺構を結ぶ道と考えられる。

溝状造構 2 (第23図、写真図版20)

郭状造構の床面は中央で検出した。平面は南側で二股になり不整形である。断面はV字もしくは逆台形で、床面には石が落ち込んでいた。遺物は出土していないがこの溝も古道と考えられる。

集 石 (第26図、写真図版21)

郭状造構の南西で、大小の石が180個以上まとまって出土した。当初は「つぶて石」と考えていたが、拳大から一抱えもあるような大きさのものまであり、別の目的で集められた可能性も有る。

これら石の間からは備前焼甕の底部片が1点出土している。表面を観察した限りでは、他の備前焼と同時期と考えられる。

神主城跡遺跡 I・II・III区出土遺物 (第27図)

遺物番号	年	器種	高さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	形状・文様の特徴	調査		参考
							回転ナデ	回転糸切り	
1	26	土師質上器	I区 7.2	1.6	4				淡茶褐色
2	26	"	" 4.3	1.3	6.5				淡黄褐色
3	26	"	"		3.8				淡燈褐色
4	26	"	"		5.0				"
5	26	土師質上器 燈明皿	" 7.2	2.0	4.3				"
6	26	"	" 7.6	1.6	4.4				スス付着
7	26	唐津系甕	"			良好	タカキ		外面茶色 内面青茶色
8	26	古鏡	"			寶木通寶(新舊永) (銅鏡)			
9	26	石鐵	第7 trench 長さ 2.9	厚さ 2.5mm		黒曜石			透明白色
10	26	"	"						刃部欠損
11	26	磨製石斧	II区 長さ 11.1	幅 5.3					
12	26	須恵器环身	"				回転ナデ		淡灰色
13	26	土師質環	"		6.3		回転ナデ 回転ハラケズリ		茶褐色
14	26	磁器染付碗	"	11.0		染付	回転ナデ		淡青灰褐色
15	26	陶器(焼鉢)	"			5~6条のクシ目	回転ナデ		淡茶褐色
16	26	備前焼甕外	III区 8条以上のクシ目				回転ナデ 輪状工具によるスリ目あり		青茶褐色 暗赤褐色
17	26	吉縄	"			N縄か? 輪の厚さ約0.8~1mm			淡白褐色
18	26	土師質土器环	"		4.0		回転ナデ		淡桜褐色
19	26	備前焼甕	"				回転糸切り		外面 淡栗褐色 内面 暗赤褐色
20	26	備前焼甕	"				ナデ		外面深灰色 内面青灰色
21	26	磁器染付 中盤	"	10.3		白色でガラス質 良好			乳白色 乳白色は青色
22	26	石見焼甕	"		5.9	高台型	回転ナデ		淡灰褐色 (綠釉)
23	26	鉄錠	"	長さ 8.0	幅 1.2	先端に近い方の断面は 六角形 基に近い部分の断面は 八角形			肥前系

第4節 小 結

これまで神主城跡は中世に都野氏が拠点とした山城と言わされてきたが、今回の調査では明確な遺構を検出することはできなかった。出土遺物も極めて少なく、伝承のように南北朝時代から実際にこの山上が城として活用されたのか疑問も残る。ただし、Ⅱ区とⅢ区で出土した遺物には室町時代のものと思われる土師質土器や備前焼が出土しているので、15世紀頃には何らかの形で山上を利用していたと考えられる。現在山頂部で確認できる郭については、調査指導の際に山根正明氏から戦国期に改修されたものではないかとの教示を得ている。

第1章で述べたように、神主城跡周辺では中世の遺跡がいくつか調査されている。神主城跡北側の麓では平成5年度に二宮C遺跡を調査しており、室町時代の掘立柱建物やⅣ期の備前焼、防長系の鉢などが出土している。15世紀には山上を利用していたと考えられるが、同時期の遺構群が麓に展開していたと推測される。また、多鳩神社へ続く谷を挟んだ東側には宮倉遺跡があり、「宮倉」以外に、「殿屋敷」、「城」等の字名が残っている。このほか神主城跡周辺の水尻川と飯田側で開まれた範囲には、「二の森」と呼ばれる比高40m以上の山や飯田八幡宮等が存在し、中世に都野氏が神主城跡を拠点としていた可能性は充分考えられる。ただし、敬川河口の古八幡付近遺跡で検出したような建物群や時期幅のある陶磁器類が検出されていないので、居館等の中心的な遺構群の位置はなお不明と言わざるを得ない。また、水尻川東岸の都野津町には中世の港町都野津が栄えていたと伝えられる。半田浜西遺跡の調査で室町時代の遺構面が、現在の砂丘の下から検出されており、江津市の中世集落について考える上で重要な資料と思われる。

さて、文献を基にした研究では、都野氏は戦国時代になると江川に面した郷田龜山城に拠点を移したとされる（井上寛司 1987 「中世の江津と都野氏」「山陰地域研究第三号」鳥根大学山陰地域研究総合センター）。実際に都野津・二宮地区の発掘調査で出土した遺物を見ると、室町時代までのものばかりである。陶磁器類は時期の新しい貿易陶磁や国产の陶磁器類は出土せず、備前焼はⅣ期以前のもののみ出土している。調査範囲が極めて限定されているので、今後戦国期の遺物が出土する可能性もあるが、現在の所はほぼ文献を基にした研究を支持できる状況である。ただし中世集落の移転原因については、この地域の室町時代以前の遺構面が厚い砂の下に埋没していることも考慮せねばなるまい。また、神主城跡が16世紀以後も改修を加えて引き続き利用されている点も注意される。中世の江津や都野氏を理解するためには、今後は郷田龜山城や郷田地区の発掘調査や分布調査を行って、都野津・二宮地区的成果と比較していくことも必要であろう。

Ⅰ区で検出した近世の上塙墓は、土壤内周辺からほとんど土器が出土していない。一部の墓では漆模が検出されているので、陶磁器類ではなく漆器を納める風習だったのかもしれない。上塙墓群の詳しい時期は不明だが、新寛永が出土していることや土塙墓15人の骨の残存状況から見て、近世後半頃と推測される。敬川西岸の横路古墓でも近い時期と思われる土塙墓を検出したが、相違点がいくつかある。神主城跡は土塙墓を造る為に平坦地を削平しているが、横路古墓の土塙墓は建物に付随するような造られ方である。墓域の規模も神主城跡の方が大きい。神主城跡では墓域内で古説や釘が出土しているが、横路古墓では1点も出土しなかった。このような相違が、地域差や階層差によるものか判断できなかったが、今後類例が増加すれば明らかにできるかもしれない。

4. 室崎商店裏遺跡

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査前の状況

調査前の状況（写真図版28）

室崎商店裏遺跡は、江津市敬川町の東端、二宮町の平野部に接する丘陵上に所在する。この地域は良質な陶土である都野津層が豊富に埋蔵され、近世以降窯業が盛んである。室崎商店裏遺跡の440m西にも、平成9年度に調査を行った石見焼の窯跡である飯田A遺跡が所在する。遺跡の北では室崎商店窯業部が石州瓦の生産を行っており、遺跡周辺にも灰白色の粘土層があちこちに露出していた。今回調査区とした丘陵頂部周辺は、調査前は疎らな松林で、かなり広い平坦地になっていた。この平坦地の南側は急な崖で、その下を二宮町と敬川町を結ぶ切り通しの道が通っている。さらにその脇に幅約5mの上段頭があり、古墳と想定されていた。

トレンチ調査

室崎商店裏遺跡は、当初東側斜面と谷部分も含め14,000m²の遺跡と考えられていた。しかし、平成4・6年度のトレンチ調査の結果、東側斜面に明確な遺構が無く、谷部にも砂が厚く堆積していることが明らかになった。これにより遺跡の範囲を尾根上の2,500m²に絞り、平成10年1月に再度トレンチ調査を実施した。その結果、遺跡北側の平坦地は吹き上げられた砂の堆積で、地山は北に向かって傾斜していることが分かった。また、丘陵頂部より南側では須恵器と10~50cmの石が出土したが、土師器は1点しか出土しなかった。こうした結果から、後期古墳が存在すると予想された。なお、当初古墳と考えられた土段頭は、不要な粘土を山積みしたものと判明した。遺跡の南側では、明確な遺構や遺物が見つからなかったので本調査から外すこととした。

第2節 調査の経過と概要

本調査は平成10年4月7日から行った。遺跡北側の砂は予想以上に厚く、重機2台で除去した。調査は遺跡の南側から開始し、まず段状遺構を3ヵ所検出した。当初は集石を近世墓と考えていた。ここで鉄斧、耳環が出土したために急速地山を断ち削ってみた。その結果、集石の下に近世墓は無く、古墳もすでに存在せず、地山を大規模に削りだした1つの段であることが判明した。これと前後して丘陵頂部の調査を行ったが、古墳は検出できなかった。ただわずかに盛土らしきものを確認することができた。統いて丘陵頂部の東では、浅い溝を検出した。周溝と考えて調査したが、不整形で、須恵器に混じって中世の鐵鏟が出土した。山道の可能性もあり、周溝であるか判断できなかった。次に丘陵北側の調査を行った。砂を取り除いた後は、日本海に向かって約10度傾斜しており、別の古墳が存在すると予想された。しかし、焼土壙1基を検出し、西側で須恵器片が出土したほかは、遺構・遺物とも検出できなかった。こうした状況の中、5月19日に遺跡の約520m西の江津道路建設予定地内に、後期古墳群（占八幡付近遺跡9区）が存在することを確認した。最終的に調査が終了したのは5月22日である。

第2章 調査の結果

第1節 遺構・遺物

調査区の立地（写真図版27）

調査区は標高約85mの丘陵頂部に位置し、都野津町から波子町大崎峠まで、平野部全てを眼下に望むことができる。調査は、遺跡内を東西に伸びる尾根を境にして、南北に分けて行った。

1. 遺構

段状遺構（第29～31図、写真図版29・30）

調査区の南側で検出した。段状遺構北側では表土を除去すると、割石の集石と石見焼の擂鉢・行半が出土した。割石の下からは近世の土塙基等が検出されると予想されたが、何の遺構も確認できなかった。南側は地山と同様な土が堆積しており、10cm前後から50cmを越える大きさの石が多数出土した。これらの石は丘陵頂部に近い位置と、段状遺構のほぼ中央の2カ所にまとまっている。石の間からは須恵器、上飾器椀、鉄斧、鐵鎌、耳環、石見焼等が出土した。

段状遺構は当初浅い加工段を予想していたが、床面確認のため断ち切ってみると、かなり深くなることが分かった。完掘後の段状遺構は、北側の壁面がかなり急角度に立ち上がり、最も高いところでは床面から約2mを測る。床面は凹凸があり、壁に向かって約10°傾斜している。床面ではさらに大型の石を検出した。最も大きいものは長さ1mを越える。

この段状遺構の性格は、調査時には不明な点が多く、遺構の約80m北西に連房式甕裏窯が存在することや、その後の調査の類例から、陶土採掘の跡と考えられる。遺跡内外の崖面も同様のものであろう。また、出土した遺物から後期古墳（横穴式石室）を破壊していると考えられる。

段状遺構で出土した須恵器には、丘陵北側出土の須恵器と接合するものがある。古墳破壊前に、すでに破碎されていたといえる。遺物については丘陵北側出土遺物と併せて後述する。

土壙 1（第30図、写真図版31）

室崎商店裏遺跡の北側では唯一の遺構である。丘陵北側に堆積した砂の層を取り除いた後に検出した。上面の規模は42×20cmで、平面形は不整楕円形を呈している。土壙の北側と西側はかなり強い熱を受けたようで、最大で厚さ16cmも赤変している。上層内には炭・焼土を多く含む赤褐色粘質土が堆積していた。床面では炭のブロックが出土した。また、土壙床面付近は熱変した部分が見られず、上面とは対照的である。遺物は炭以外出土していない。この焼上層の年代は、海から吹き上げられた砂の下で検出しているので、近世以前と考えられる。土壙の詳しい性格は不明である。

2. 出土遺物

遺物は主に段状遺構と調査区の西側で出土した。調査区北側斜面の砂の下には、地山がやや潤ったような粘質土が堆積しており、遺物出土量が最も多い。砂の堆積が近世以降と考えられ、ここで石材を検出していないことから、粘土採掘による石室破壊以前に遺物が外に出されていた可能

性が高い。遺物の出土状況を見ると、須恵器は丘陵頂部やや西を起点に、北西方向へと流れるように出土している（第31図）。図面で一部空白があるのはトレンチ調査時に取り上げた部分で、実際には途切れずに出土している。また、金属器は段状遺構南側の集石内でしか出土していない。以上のことから石室は丘陵頂部西よりに築かれ、西、若しくは北西に開口していたと推測される。

須恵器（第32～35図、写真図版32～34）

細片が多かったが、可能な限り接合・図化を行った。しかし、調査区境界に近づいても出土量が減らなかったので、古墳に伴う全須恵器数は反映していない。

蓋杯（32図10～12）にはバリエーションがある。2・8・9・10の平坦な天井部・底部は、この地域に特徴的なつくりである。古八幡付近1号墳、横路古墓の須恵器にも同様のものが見られる。出土した蓋杯の時期は、古八幡付近1号墳の石室外遺物よりも新しく、2号墳よりも古い印象を受ける。楕14は形態・色調などから古墳よりも後の時代のものと思われる。高杯は有蓋3点、無蓋2点を確認した。17・18は同一個体と考えられる。蓋19は色調・焼成や出土地点から20とセットと考えた。24は21の脚部の可能性がある。なお、22は、古八幡付近2号墳で出土した様な、高台が付く杯かもしれない。短頸壺（33図）も多様である。9は非常に扁平で特徴的である。出土した須恵器の内、32図13・21・23・24、33図9は外面は暗灰色、断面は暗紫色を呈し、焼成良好である。同じ窯で生産された可能性がある。12は台付き壺と考えた。13は胴部が球形になる壺である。このほか適3点、提瓶2点、壺1点（第33・34・35図）を確認した。

これらの須恵器に混じって、整理中に類例を探せなかった遺物が出土している。第33図11の口縁で、一見すると壺の口縁の様である。他の須恵器に比べ厚さが非常に薄く、外面には緻密な波状文を施す。屈曲部には2本の沈線をめぐらせ、その下には波状文若しくはスタンプ文が確認できる。最も特徴的なのは、外面全てに厚い黒色の釉がかかっているのに対し、内面は無釉で代わりにガラス質のものが多量に付着している点である。出土状況が他の須恵器と変わらないので（写真図版31上）、古墳に伴うものと考えられるが、時期や産地は異なる可能性が高い。

土師器（第32図15、写真図版32）

土師器は楕（15）が1点出土したのみである。色調は淡茶褐色。風化が著しく図示することを避けたが、かろうじて暗文も確認できる。畿内産と思われる。江津市内では千田町空山1号墳に統いて2例目となる。このほか右見では旭町小才1号墳、瑞穂町江迫1号横穴墓で出土している。

金属器（第36図、写真図版34）

有袋鉄斧（1）は刃部が袋部よりやや幅広になる形をしている。鉄鏃は3点出土している。2・3は段状構造から出土したもので、古墳に伴う遺物と考えられる。4は蠶根形式の鉄鏃で、丘陵頂部より東で出土した。神主城跡Ⅲ区で出土したものとよく似ている。二宮町と敬川町の境に位置するこの高地でも、中世に何らかの活動があったことが窺える。耳環（5）は金貼りで、金がよく残っている。

近世陶器（石見焼）（第37図、写真図版34）

粘土採掘の時期を判断できる資料である。この内、捕鉢（4）は口縁端部を折り返すが、完全な口縁ではなく、面を持っています。削り出しの高台は、径が小さく高い。釉は八束郡六道町で採れる米待石から作られた、淡茶褐色の米待釉である。これらの特徴から石見焼であることは間違いない。江津道路建設に伴って調査を行った窯（明治以降）の福鉢より占いものといえる。また、口縁の形

室崎商店裏遺跡 出土遺物① (第32図)

件名	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考	
1 32 須恵器蓋	北西	12.6	4.3		口縁部は厚く、丸い 大井部は平知につくる	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰色		
2 32	“	13.6	3.6			回転ナデ	暗灰色		
3 32	“	13.6			口縁端部に面がある	回転ナデ	青灰色		
4 32	“	12.7	4.3		口縁端部は先細りした 後丸くおさめる	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘア切り後ナデ	明黄灰色		
5 32	“	北西				回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘア切り後ナデ	暗灰色		
6 32 須恵器身	北西	11.4			口縁端部に平坦な面が ある	回転ナデ	暗灰色		
7 32 須恵器	北西		1.4	4.0		回転ナデ 回転ヘラケズリ 中心ケズ(孔)	灰黑色		
8 32 須恵器身	北西	13.0	3.1	15.1	底部が平坦で、板目が 残る	回転ナデ	暗青灰色		
9 32	“	7.5			底部が平坦で、平頂につくる	回転ナデ	灰色		
10 32	“	南西		8.5	底部が平坦で、板目が 残る	回転ナデ	淡灰色		
11 32	“	南西	10.3	3.4	5.6	口縁の立ち上がりが低い	回転ナデ 舟型脚部へラ ケズリ(ヘア切り底残部)	青灰色	
12 32	“	北西				回転ナデ	淡灰色		
13 32 須恵器柄	北西	10.4	5.8		口縁端部はシャープに 先細りし、体部には沈線 を2条刻む	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黑灰色		
14 32	“	南西	14.1		「縁は厚みがあり、清 部は丸い」	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗茶褐色 灰黑色		
15 32 上部器身	段状遺構	11.4	3.7	3.0	風化の為明確では無い が内部に暗文を施す	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ ナデ	淡茶褐色	縦内縫?	
16 32 須恵器 有蓋高环	北西 南西	11.3	11.1	12.0	脚部にスカラは無く、端 部は丸くおさめる	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ ナデ	灰色		
17	“	段状遺構	10.4		立ち上がり短く、脚は無 透	回転ナデ	淡灰色	やや軟質	
18 32	“	“		10.9	端部は角張っている	回転ナデ			
19 32 須恵器 蓋	北西 南西	13.0	4.1		口縁部は先細りする 内部は丸い状態を残す	回転ヘラケズリ 回転ナデ	暗灰色		
20	須恵器 有蓋高环	南西	10.2		口縁はうすく、上に向け て屈曲させる	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ 回転ヘラケズ リの後ナデ	暗灰色		
21	須恵器	北西	17.3		端部は丸くおさめる	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ 不定方向のナデ	暗灰色 (かなり黒い)		
22 32	高坏	南西	“	17.2	端部は丸くづくる	回転ナデ	外面 黑灰色 内面 品灰色		
23	“	“		11.0					
24 32 須恵器脚	南西	1.5	9.6	以上	筒部と脚部の境に緩い 段	ヘラケズリか? 回転ナデ	暗灰色 断面 品灰色	自然輪	

室崎商店裏遺跡 出土遺物② (第33図)

件名	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1 33 須恵器 蓋	北西	12.9			口縁部は外反し、湯部シャ ーピングによる シャープな シーブな後 沈線を2条透 らされた後、L字状工具で施 文する 表面は人ぶくれ有 り 沈線を2条刻む	回転ナデ 内面 回転ナデ 回転ナデ	明灰色	
2 33	“	南東	12.0			回転ナデ	灰色	
3 33	“	南西				回転ナデ 指おさえ ヘラケズリ	淡灰色	
4 33 須恵器 高脚蓋	南東 南西	10.8	15.4	5.6	頭部に1条、胸部に2条 の沈線 肩部に羽状のシグ耐方 向脚部は外に広がる	回転ナデ の跡一部ナ デ カキム(羽状)痕部後 ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	
5 33 須恵器 短脚蓋の蓋	北西	10.4	3.2			手持ヘラケズリ	明灰色	
6 33 須恵器 短脚蓋	南東 南西	8.3	7.8	5.8	容着した蓋のあとあり	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ 内面は回転ナデ	青灰色	
7 33	“	北西	6.6	10.5	1.縁端部は丸い 盖の状跡がある 口縁部は先細りし、内 側に屈する彎曲	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	明青灰色	
8 33	“	南西	8.9			回転ナデ	灰色	
9 33	“	南西	6.0	4.9	5.9	口縁部泡出直	回転ナデ 回転ヘラ ケズリの後ナデ 回 転ヘラケズリ	外向 品灰色 内面 品灰色
10 33 須恵器脚 短脚蓋	北西	8.6				回転ナデ 回転ヘラケズリ の後ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	
11 33	“	南西	13.3		尻部に2条の直線 密な波状文	調型は不明	外向 黑色 内面 品灰色	
12 34 須恵器 付合蓋	南西		脚端付合	12.9	二方向に方形スカ ンボ段脚 平坦な脚	回転ナデ ヘラ ケズリ 内面は回転ナデ	品灰色	明青灰色
13 33 余呂器蓋	段状遺構	13.0	22.8	5.0	口縁部に平坦面	回転ナデ ケズリ 回 転ヘラケズリの後ナデ	淡灰色	

室崎商店裏遺跡 出土遺物③（第34図）

遺物名	器種	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 33	須恵器提梁	南西			21.1	環状把手	回転ナデ カキ目たたき 内面指印压痕	灰色	
2 33	“	北西			15.3		銅部下面は回転ヘラ ケズリのあと回転ナデ	明青灰色	

室崎商店裏遺跡 出土遺物④（第35図）

遺物名	器種	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 34	須恵器甕	東南				外側 平行押造 内面 青海波		青灰色	
2 34	須恵器甕	“				外側はタタキの後頭部にはカキメを施す	“	“	

室崎商店裏遺跡 出土金属製品（第36図）

遺物名	器種	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 34	有袋鉄斧	段状遺構	全長 10.3	刃部幅 5?					
2 34	鉄鎌	“	残存長 1.35	幅 4mm	厚さ				
3 34	鉄鎌	“	残存長 5.2	幅 2.4	厚さ 35~40mm				
4 34	鉄鎌	南東	残存長 14.2	幅 1.4					
5 34	耳環	段状遺構	長径 2.5	短径 2.3	厚さ 0.6	金貼り			

室崎商店裏遺跡 段状遺構出土陶器（第37図）

遺物名	器種	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 34	石見焼平行平	段状遺構	19.6	10.5	8.2	飛鉈が施される	回転ナデ	淡黄褐色	
2 34	石見焼弛利	段状遺構			4.8		回転ナデ	緑灰色	
3	陶器模倣				9		回転ナデ	白色	窯焼き
4 34	石見焼弛利	段状遺構	29.8	12.5	11.2	内面に沈線1条 口縁 折返しにより丸拂状 斧による削り出し高台	回転ナデ	茶褐色の釉	

態から、益田市北ヶ迫遺跡で出土した福鉢よりも新しいものと判断される。現在石見焼の編年は確立されていないが、江戸末期から明治初頭に生産されたものであろう。

第2節 小 結

室崎商店裏遺跡には、出土した遺物の時期や石材の検出状況から、6世紀末に築造された古墳が存在したと考えられる。主体部は、出土した石材や周辺の古墳の状況から横穴式石室であった可能性が高い。遺跡の南東には、「高野山古墳群」が広がっている。横穴式石室を上体部とする7世紀の古墳群で、益田市「鶴ノ鼻古墳群」や旭町「やつおもて古墳群」と並んで石見を代表する後期古墳群である。これまで高野山南側の古墳のみが遺跡とされていたが、地元では以前から北側にも古墳が存在すると指摘されていた。今回の室崎商店裏遺跡の調査は、すでに徹底的に破壊されていたとはいえ、敷川町初の古墳の発見であり、古墳群がさらに西へ広がっていく可能性が生まれた。事実調査の最終段階で、古八幡付近遺跡の古墳群を当遺跡からの遠望で発見している。室崎商店裏遺跡や古八幡付近遺跡と同様な立地の丘陵は敷川町内に多数見られるので、ほかにもまだ未発見の古墳が存在するかもしれない。

江津市では波米浜遺跡や半田浜西遺跡の発掘調査の結果、厚い砂の下にも中世以前の遺跡が存在することが知られていた。この砂は室町時代以降に一挙に堆積したと考えられ、江川で行われた鉄穴流しとの関連も考えられる。今回の調査では、この砂の堆積が標高80mを越える丘陵上にも及んでおり、遺跡の発見を極めて困難にしていることが明らかになった。

また、石見では地山に良質の陶土を大量に埋蔵していることから、近世以降盛んに窯業が行われた。これに伴う粘土採掘は非常に大規模で、旧地形を大幅に改変した。その結果、確認できる遺跡の数がさらに減少したものと思われる。室崎商店裏遺跡調査後に行った、浜田市「長東坊師窯跡」の調査では、連房式登り窯に隣接して4×3m以上の大型土壙を多数検出している。室崎商店の段状遺構とよく似た上層堆積状況で、床面からは1~数個の石見焼が出土する。粘土採掘坑であり、これを元に室崎商店裏遺跡の段状遺構も粘土採掘跡と判断した。さらには付け加えると、同様の大型土壙は古八幡付近遺跡9区にも存在する(古八幡付近遺跡土壙11)。室崎商店裏遺跡で検出した様な割石の集石も、2号墳の石室上で確認した(第146図、写真図版94)。つまり粘土採掘による遺跡破壊が、もろに古墳に及んだのが室崎商店裏遺跡で、同一髮免れたのが古八幡付近遺跡の古墳群ということになる。

以上述べてきた、江津市西部の後期古墳群の分布圏拡大や、高所でも砂により遺跡が埋没する事実、粘土採掘による破壊を合わせて考えると、本来の古墳数は現在知られているよりも、かなり多かったのではないかと考えられる。かつて『江津市誌』には「高野山の丘陵上には、横穴式石室を上体とする古墳が100基に近いほどに多数群在して高野山古墳群を形成している。」と、記された。その後柳浦俊一氏の分布調査によって、28基が遺跡として確認された。確認できる古墳数が大幅に減少したため、市誌の記述について疑問視されることもあった。しかし、室崎商店裏遺跡や古八幡付近遺跡の調査、地元から寄せられた情報により、新たに13基の古墳が確認された。これに近年確認できなくなった古墳が加われば、相当な数になると思われる。今後は古い文献を再検討し、地元の情報を基に再度分布調査を行う必要があるといえる。

5. 古八幡付近遺跡

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査前の状況

古八幡付近遺跡は江津市西部を流れる敬川の河口近くに位置している。ここは江津市西部の三日月形の沖積平野の南端であるとともに、高野山から北に向かって伸びる山塊の先端にあたる場所でもある。古八幡付近遺跡の存在は比較的早い段階から知られていたようで、『江津市誌』には遺跡周辺は「古八幡遺跡」として記述され、既に提点的な大規模集落が存在する可能性が指摘されている。

その後平成4年に、「有限会社島根急送」の移転に伴って「古八幡付近遺跡」の名称で江津市教育委員会による発掘調査が実施され、以後江津道路建設に伴う発掘調査もこの名称で行っている。以下、平成9年までに実施した古八幡付近遺跡の発掘調査の概要を記す。

平成4年度 江津市教育委員会が実施した調査で、調査区は県道下府江津線の東側に位置している。主な遺構は掘立柱建物3棟、土墳3基、溝状遺構6条である。遺物は縄文時代から古墳時代中期のものが中心である。また、分銅形土製品、碧玉製の勾玉と管玉が1点ずつ出土している点が注目される。このほか平成4年度調査区は、全調査区内で最もピットの密度が高かった。

平成5年度 江津道路の建設に伴って島根県教育委員会が実施した。以後の全面発掘に先立って行った調査で、丘陵裾の畠地や水田のトレンチ調査を行った他、水田部と丘陵部の境に設けられたコンクリート製水路の両側を調査している。丘陵裾の調査区は極めて範囲が限定されていたので遺物を抽出するには至らなかったが、70基以上のピットと溝状遺構、段を検出した。遺物は調査区が狭かったにも関わらず、弥生時代と古代・中世前半のものが比較的まとまって出土した。

平成6年度(1~5区) 平成5年度に引き続き島根県教育委員会が実施した。平成6年度は調査範囲がそれ以前に比べかなり広くなっていたので、調査区を1~5区(1997年に刊行した報告書ではI~V区と記述)に分けて調査を行った。検出した遺構は少ないがほとんどの調査区で縄文時代から中世の遺物が出土し、遺物の出土量は最も多かった。1区では縄文時代の遺物が比較的まとまって出土した。2区では弥生時代と思われる溝を検出した。3区では弥生時代後期の可能性がある水田遺構を検出した。3区は古墳時代中期の上師器を中心に最も多くの遺物が出土した調査区であるが、特に水田遺構と合わせて多様な木製品が出土した点が注目される。丘陵西側斜面に設定した4・5区では古代と中世前半の段状遺構を3ヶ所検出している。

平成8年度 平成8年度は江津市教育委員会によって、県道拡幅部分と一部本線部分の調査が行われた。主な遺構は中世前半の掘立柱建物で、他に上面幅が約4mを測る中世の溝も検出している。遺物は古墳時代中期の上師器が多数出土したほか、全調査区で最も多数の貿易陶磁が出土した。貿易陶磁は中世前半に時期が限定される点も注意される。

以上が平成9年度調査開始以前の状況である。この段階で当初遺跡として括っていた範囲の調査は終了していたが、5区の調査で検出した中世の段状遺構の残りが5区南側の工事地内に存在することが確実と思われたので、4・5区間の400m²を6区として調査することになった。調査前の6区は棚田が竹林になったもので、耕作上からは須恵器や土師器を表探すことができた。

第2節 調査の経過と概要

平成9年度の調査は5月6日から開始した。6区は調査前に柵田になっていたため耕作土が厚く堆積しており、重機によって耕作土を除去した後人力掘削に切り替えた。その結果、面積400m²と非常に狭い調査区ながら、掘立柱建物6棟、段状遺構を6ヶ所検出した。また、調査区の南側は8区から流れた水の為に土石流のようになっており、1m以上もある岩を少人数で除去するのにかなり手間取った。最終的に調査が終了したのは7月1日である。

6区ではコンテナ30箱以上の遺物が出土したが、遺構を検出していない時代のものが多数含まれており、斜面上方から流れ込んだものと考えられた。そこで建設省浜田工事事務所と協議を行い、6区の斜面上方に新たに7区を設定して調査を実施することになった。しかし、6区と平行して行っていた神主城跡の調査を先に終了せねばならず、さらに飯田A遺跡と横路古墓も急ぎ調査しなければならなかつたので、7区の調査は11月から着手することに決定した。

7区は11月4日から重機による表土と耕作土の掘削を開始した。7区の範囲は、本調査に先立って行ったトレンチ調査で遺構・遺物を確認した1,200m²である。初めに調査区を南北に分け、北側から先に調査を行うことにした。11月10日から人力掘削を始めたが、調査班の半分は横路古墓の調査を継続して行っており、調査はなかなか捗らなかった。このため、12月1日には7区のほぼ中央で大規模な段状遺構と多数の柱穴を検出したが、調査期間の関係で最低限の情報を記録をするに留めた。12月18日からは、横路古墓の調査を行っていた残りの調査班も合流して南側の谷状地形の本格的な掘削を始めたが、急斜面という足場の悪さに加えて排水用の溝を切ってもなお斜面に水が流れるという惡条件で、岩を退けながらの掘削は困難を極めた。最終的に掘立柱建物9棟、段状遺構2ヶ所、土壤1基を検出し、12月25日にラジコンヘリによる写真撮影を行い一旦調査を中断した。

この間12月11日には横路古墓と合わせて調査指導会を行い、山中敏史氏から7区の斜面上方にも遺構が存在する可能性があるとの教示を得た。また、7区南側の谷状の地形からは中世前半の遺物が集中的に出土しており、斜面上方に中世の遺構が存在することはほぼ間違いないと思われた。そこで建設省と協議を行い、翌年1月に斜面上方の遺跡範囲の確認を行うことになった。斜面上方と尾根上のトレンチ調査は平成10年1月13日から開始した。これと平行して、前年にプランを検出仕切れなかつた建物8・9や段状遺構2の補足調査を1月23日まで行った。トレンチ調査は1月30日まで実施した。その結果、建設省と再び協議を行い、7区の東斜面と尾根上の約4,300m²の範囲に8区を設定し、平成10年度に本調査を行うことに決定した。

平成10年度の調査は、前年度末のトレンチ調査をうけて、6月から8区の調査を行う予定だった。ところが宝崎商店街遺跡の調査を行っていた5月19日に、8区から約80m東の江津道路建設予定地内の丘陵尾根上に、横穴式石室を主体部とする古墳群が存在することを確認した。古墳群は建設省が発注した工事に先だって立木の伐採を行った際に、重機で丘陵を削ったことによって発見された。既に工事を開始する運びだったが、発見された横穴式石室は一部重機で破壊されているとはいえ、江津市内では最も規模の大きなものであり、何とか調査を行えるよう急遽建設省と協議した。その結果、至急古墳の数と分布範囲を確認し、期間1ヶ月を目途に発掘調査を行えることになった。古墳群を検出した丘陵は当初の古八幡付近遺跡から200m以上東に位置するが、この頃にはかなり広範囲に遺跡が広がっていると考えられたので、調査区名は古八幡付近遺跡9区とした。

9区の調査は5月22日より開始した。当初は多数の古墳が存在する懸念もあったが、表土除去後に確認したのは径約10mの円墳2基だけだった。ただ古墳周辺の表土掘削を行った際弥生上器の細片が数点出土したので、古墳下層や周辺に弥生時代の集落が存在する可能性が考えられた。そのため、調査は古墳群を検出した尾根上全域で行うこととした。横穴式石室は天井石がはずされていたが、壁は比較的よく残っていた。また、石室は50cm前後の石を多数積み上げて構築しており、破壊を前提とした調査なので実測にかなりの時間を費やすねばならなかった。こうした中6月8日に、1・2号墳西側の斜面で環壕と思われる断面逆台形状の落ち込みを検出した。環壕は完全に埋没しているため掘削には相当の日数がかかると考えられ、いかに調査を簡略化しても当初の予定期間ではとても調査を終えることはできないと判断した。このため埋蔵文化財調査センターに調査員の応援を求めるとともに、調査期間の延長について建設省と協議した。その結果、出雲部より約1ヶ月の間2名の調査員の応援を得ることができ、調査も7月いっぱい行えることになった。

横穴式石室の全容が明らかになった6月21日には、古墳群を対象とした1回目の現地説明会を行い150人近い見学者の参加を得た。その後弥生時代の遺構面を調査しなければならなかったので、直ちに石室の解体作業を行った。弥生時代の遺構は、環壕の内側で竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟を検出し、環壕内からは弥生時代中期の遺物が多数出土した。7月16日には調査指導会を行い、25日には2回目の現地説明会を行って再び100人以上の参加を得た。環壕外側の状況は不明だったが、既に調査の期限が迫っており長東坊師窯跡の調査に着手する必要があったので、これ以上調査区を広げることはできなかった。9区の調査が最終的に終了したのは8月3日である。

8区の調査は10月2日から開始した。10月中は浜田市の長東坊師窯跡と平行して調査を行っており、主に丘陵東斜面に設定した8-1区の調査を行ったが遺構・遺物ともほとんど検出されなかつた。10月27日からは残りの調査班も合流し、尾根上に設定した8-2区の調査を開始した。尾根の北側は削平が著しく、遺構や遺物をほとんど検出できなかつた。これに対し、南側は縄文・弥生時代の遺物包含層の上から古代以降の掘立柱建物が整然と建てられていることを確認し、ほとんどの柱穴で柱の痕跡を確認することができた。遺物は、下層では古墳時代以前のものが出土し、上層では奈良時代から近世にかけてのものが出土した。北西部でも段状遺構から多数の柱穴を検出した。柱穴の中には土師質土器を納めたものや、柱根が残っているものもあった。遺物は須恵器や上師質土器のほか、15世紀以降の貿易陶磁や備前焼が出土している。この時点では11月が終わろうとしていたが、西側斜面に設定した8-3区は全く手つかずの状態で、年内の調査終了は困難と思われた。そこで11月30日から再び調査員2名の応援があり、尾根上と斜面の調査を同時に進行させることにした。12月9・10日には調査指導会を行い、建物群について多くの知見を得ることができた。

8-3区では段状遺構と多数の柱穴を検出し古代から近世初頭の遺物が出土したが、12月24日には斜面中央付近から統一新羅土器が出土していることが判明した。掘削・実測とともにかなり手間取ったため年内で全ての調査を終了できず、12月26日に一旦調査を中断した。

翌年の調査は1月6日から行った。7区と隣接する部分は特に遺構が集中し、連口遺構の実測作業が続いた。8区では最終的に掘立柱建物20棟、段状遺構13ヶ所等を検出し、全ての調査が完了したのは2月1日である。

第2章 調査の結果

第1節 6・7区の調査

調査区の立地（第38図、写真図版35・36・45）

6・7区は北西に向かって伸びる丘陵の西側斜面、標高約10～27mに設定した。調査区の西側には水路を挟んで平成5年度調査区が、南北には4・5区がある。当初は4・5区に挟まれた部分のみ、6区として調査する予定だった。しかし、6区の斜面上方に遺跡が広がったため、新たに7区を設定した。便宜上段状遺構2より斜面下方が6区、上方が7区であるが、厳密には一体の調査区で境界は無い。このため遺構については、斜面上方の7区から順次記述する。

溝状遺構1（第39図、写真図版46）

調査区の北角で検出した。ここは近代に2m以上の造成が行われたところで、地形も大幅に改変を受けている。溝状遺構1は、この造成土を全て除いた地山の面で検出した。北側と西側が調査区境界にかかっているため、正確な平面形や規模は不明である。溝の南側の肩には石が並べられていた。これだけでは遺構の性格を判断しかねるが、遺構配置図を見ると、調査区外を挟んで溝状遺構1・9、8区占道がほぼ一直線上に並んでいる点に気付く。詳しくは小結で述べるが、一連の遺構（近世の古道）の可能性がある。床面出土遺物から18世紀後半以降に使用され、近代に造成土下に埋没したと考えられる。溝状遺構1の南東方向には幅3～4mの平坦地が続いている。ここでは遺構を検出していないが、調査区外北側に何らかの遺構が存在する可能性が高い。

溝状遺構2（第39図）

7区の東側で検出した。規模は、幅約1m、長さ約12mを測る。断面はU字又は逆台形状で、床面には凹凸がある。埋土に土師質土器が含まれるので、中世以降に埋まつたと考えられる。また、溝状遺構2・3・5は、それぞれ蛇行しつつも直線上に並んでいる点が注目される。これらの溝は同様の形態を呈し、ほぼ斜面に直行している。溝の性格は、遺跡内に多く見られる自然流路の様であるが、斜面上方へ登るための古道と見ることもできる。江津市内の調査で検出した、斜面に直行する古道（溝状遺構）の例としては、神主城跡のものを挙げることができる。

段状遺構1（第39図、写真図版46）

7区ほぼ中央で検出した。規模は平面が5×26m以上、壁の高さは床面から70cmとかなり大きい。これだけの規模にも関わらず、調査前の地表観察では全く存在を掴めなかった。これは調査前に、遺跡が耕田にされていたためである。このため、古八幡付近遺跡の斜面に位置する段状遺構には、大量の耕作土が堆積している。段状遺構1には、最大で2m以上の土が堆積していた。

段状遺構1床面では多数の柱穴を検出した。柱穴は、段状遺構北側では比較的容易に検出できた。これに対し、南側の柱穴や溝は地山と区別が付きにくかった。また、柱穴は大まかに、掘り方が大きく埋土が地山と似て明るい粘質土のものと、径が小さく埋土が暗い色のものに分けられる。このことは建物の時期に関係していると考えられる。これらの柱穴から建物1～9、柱列1を組んでみた。出土した遺物の時期が古代以降だったので、建物の復元は柱間距離が基本的に30cmの倍数に近

くなることを心懸けて行った。ただし、柱間によっては6.5尺や7.5尺の様なものもあるので、必ずしも正数で割り切れないことをことわっておく。さらに調査前の重機による確認調査の際、段状遺構の北西端と中央の床面を大幅にとばしてしまった。結果、この位置にかかる建物には、多少強引に復元したものもある。なお、調査期間の関係で柱痕の確認作業はほとんど行っていない。

建物 1 (第40図)

段状遺構の最も北で検出した。1間以上×4間以上の柱穴配置を持つ。建物北西の地山を確認調査時にとばしてしまったため、正確な規模は不明である。P5・6の約40cm西側にP7~9が並んでおり、建て替えを行っている可能性がある。柱穴掘り方は、平面が楕円形のものが多い。掘り方の規模は段状遺構1の建物中では最も大きい。柱痕は確認していないが、P1・2・5の底面に見られる窪みから、径は15~20cm前後と考えられる。柱間距離は、梁行きが9尺、桁行きと建て替え後の梁行きが5尺を指向したものと見られる。壁溝は確認できなかった。P1・2は段状遺構床面の外に位置しているので、建物1に伴う段は削平されたと思われる。

遺物は建物の斜面下方で、上師器がまとめて出土している。(第43図12・14・15)。

建物1の時期は、周辺で出土した遺物や柱穴掘り方の規模が大きい点から、奈良時代から平安時代前半の建物と考えられる。

建物 2・3 (第40図)

段状遺構の中央東寄りで検出した。ほとんど一直線上に重複している。斜面を60cm以上削った平坦地に建てられている。壁溝は北西側で長さ約2m確認できた。この平坦地は壁から約1.7mの所でほとんど流失しているため、確認できたのは桁行き1列のみである。桁行きは3間以上の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方はほぼ円形である。掘り方の規模や底面レベルは、建物3が不揃いである。柱根は確認していない。柱間距離は、建物2がほぼ一定であるのに対し建物3は真ん中の柱間が約60cm短くなる。

遺物はP5と6の間で検出した柱穴の中から、須恵器壺の破片が出土した(第43図9)。

建物2・3の詳しい時期は不明であるが、南西側を削平されているので建物6・7に先行すると考えられる。柱穴の切り合い関係から建物2が古く、建て替え後が建物3と判断した。

建物 4・5 (第41図)

建物1の東側で南北に並んで検出した。1間以上×2間の柱穴配置を持つ。建て替えと考えられるが、柱穴が切り合わないので前後関係は不明である。柱穴掘り方には方形に近いものも見られる。柱痕は、P5で径約15cmのものを確認した。柱間距離は、梁行きが7尺、桁行きが6尺と6.5尺を指向したと見られる。壁溝は建物の西側でのみ検出した。建物5は、桁行きが東西軸に近い。

遺構の時期は不明だが、主軸が段状遺構1や他の建物の軸と大きくずれる。

建物 6 (第41図)

段状遺構のほぼ中央で検出した。床面は南側が流失し、一部トレンチでとばしてしまった為、柱穴配置に不確定な部分もある。柱間距離を元に2間×3間の柱穴配置を復元してみた。柱穴掘り方は、平面円形と楕円形のものがある。掘り方の規模は、建物1~5に比べ格段に小さい。柱痕は確認していないが、おそらく掘り方とほとんど変わらない太さの柱が使われていたであろう。梁行きの柱間距離は、P6が南側桁行きの柱穴とすると、5尺と7.5尺の柱間が互い違いになっていたと考えられる。桁行きは、トレンチで抜いた部分に柱穴があったとすると、ほぼ6尺になる。

柱穴内で遺物は出土していないが、掘り方の大きさから中世の建物と推測される。

建物 7 (第42図)

段状遺構のほぼ中央に位置し、建物 6 と重複する。1間×3間の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は平面円形で、規模は建物 6 同様かなり小さい。柱間距離は、梁行きが8.5尺を指向したものと見られるが、桁行き10尺とするにはばらつきがある。主軸は段状遺構とほぼ一致している。流失した南側にもう1列柱が並んで、梁行き2間の総柱建物になるかもしれない。

遺物（第43図）は、P3 から須恵器の壺（2）、紡錘形の土錐（19）、P6 から碁石（21）が出土した。

柱穴掘り方が小さい点や、柱間が長く、不揃いな点から平安時代後半以降の建物と思われる。

建物 1～7 出土遺物（第43図、写真図版111）

段状遺構 1 には大量の土が堆積し、多数の遺物が含まれていた。ほとんどが斜面上方からの流れ込みで、細片になっている。この内、建物 1～7 周辺で出土したものと、斜面すぐ下方で出土したものを見第43図に示した。2・3 は古墳時代の須恵器である。壺蓋の可能性もある。5 は平安時代の壺と思われるが、色調が紫がかかった茶褐色で特徴的である。焼成も良い。10 の甕はタタキの後、内面にナデを施す。13 は灰白色を呈する上質の楕で、外面にカキメを施すなど、焼成以外は須恵器と同様のつくりである。16 は小型の甕又は鍋と思われるが、14・15 とは形態・胎土等が異なる。古代末のものであろうか。20 はミニチュアの土製支脚である。建物 2・3 の斜面下方で出土した。遺跡内で出土する土製支脚（第51図3等）をかなり忠実に表現している。平成 6 年調査の 3 区でも、ほぼ同じサイズ、形のものが出土している。

建物 1 計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き				
	1間以上 (2.68m)				4間以上 (6.02m)				
主 軸	N-66°-W								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
柱穴 (cm) 番 号	66×42	76×59	52×48	63×(62)	62×(52)	50×44	52×50	24×20	36×28
上 面 疵 (cm)	21.17	21.22	21.25	21.16	21.30	21.08	21.15	21.22	21.02
底面標高 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P7-8	P8-9		
柱間距離 (m)	1.48	1.52	1.49	1.53	2.68	1.58	1.52		

建物 2 計測表

規 模	梁 行 き		桁 行 き	
	1間以上		3間以上 (5.42m)	
主 軸	N-55°-W			
	P2	P4	P6	P8
柱穴 (cm) 番 号	37×26	34×25	27×26	29×26
上 面 疵 (cm)	21.40	21.46	21.47	21.60
底面標高 (m)	P2-4	P4-6	P6-8	
柱間距離 (m)	1.79	1.85	1.78	

建物 3 計測表

規 模	梁 行 き		桁 行 き	
	1間以上		3間以上 (4.8m)	
主 軸	N-59°-W			
	P1	P3	P5	P7
柱穴 (cm) 番 号	32×24	48×45	52×40	31×30
上 面 疵 (cm)	21.26	21.56	21.47	21.66
底面標高 (m)	P2-4	P4-6	P6-8	
柱間距離 (m)	1.78	1.22	1.80	

建物 4 計測表

規 模	梁 行 き		桁 行 き	
	1間以上 (2.13m)		2間以上 (3.54m)	
主 軸	N-76.5°-W			
	P1	P2	P3	P7
柱穴 (cm) 番 号	59×46	39×38	54×45	18×16
上 面 疵 (cm)	21.18	21.32	21.16	21.18
底面標高 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	
柱間距離 (m)	1.81	1.73	2.13	

建物5計測表

規 模	梁 行 き		桁 行 き	
	1間以上		2間以上(3.69m)	
主 軸	N-87-W			
柱穴 (cm) (m)	番 号	P5	P6	P7
上 面 梁(cm)	44×37	40×38	36×32	
底面標高(m)	21.20	21.18	21.34	
柱間距離(m)	P1-2	P2-3		
	1.93	1.76		

建物6計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	〔2間(3.76m)〕				〔3間(5.59m)〕			
主 軸	N-60-W							
柱穴 (cm) (m)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
上 面 梁(cm)	17×14	13×10	20×13	29×20	14×12	18×18	19×14	
底面標高(m)	21.36	21.38	21.30	21.32	21.10	20.55	20.87	
柱間距離(m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P7-8	P8-9	
	1.54	1.88	3.71	2.25				

建物7計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	1間(2.50m)				3間(8.97m)			
主 軸	N-56.5-W							
柱穴 (cm) (m)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
上 面 梁(cm)	21×18	20×16	22×20	19×17	18×18	50×44	280×(23)	35×30
底面標高(m)	21.38	21.16	21.27	21.32	21.10	21.08	21.04	20.93
柱間距離(m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P7-8	P8-9	
	2.83	3.08	3.01	2.59	3.19	1.58	2.79	2.53

古八幡付近遺跡 建物1～7出土遺物(第43図)

順序	判斷	器 物	出土場所	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	測 定	色 調	備 考
1	111	須恵器蓋	建物1-7周辺				幅較つまみ	回転ナデ	灰色	
								回転ナデ後不定方向のナデ 回転ヘラクズリ後にナデか?	黒色の斑点が多数付着	
2	111	須恵器環?	建物7					回転ナデの後不定方向のナデ 回転ヘラクズリ 回転ナデ	明灰色	高坏の可能性あり
3	111	須恵器	建物1-7周辺	14				回転ナデ	灰色	
4	111	須恵器環	〃		5.9			強い回転ナデ		
5	111	須恵器蓋	〃		最大径	20.6		回転ナデ 回転系切り	暗灰褐色	
6	111	須恵器蓋	〃	20.6			口縁屈曲し上面に平坦面	回転ナデ タタキ タタキの後ナデ	淡灰色	
7	111	〃	〃		11.9			回転ナデ	青灰褐色	
8	111	須恵器蓋	〃		高台径	17.6	高台径 外側する高台	回転ナデ 回転ヘラクズリ後ナデ	灰色	
9	111	須恵器蓋	建物2-3					格子状即同心円当具痕	淡青灰色	
10	111	〃	建物1-7周辺					〃	青灰色	
11	111	須恵器蓋?	〃					〃	淡青灰色	
12	111	土師器把手	建物1-7周辺	15.2				柄銀色		素の押手か
13	111	土師器碗	建物1-7周辺	4.7			口縁強部は内側に面を押さずかに外反する	回転ナデ カキメ	淡灰白色	
14	111	土師器蓋	建物1	21			L字縁外反	同部内面はヘラクズリ	茶褐色	
15	111	〃	〃	24.6			〃	同部内面はヘラケズリ 内面は内面はヘラケズリ	外面暗灰褐色 内面檢褐色	
16	111	〃	建物1-7周辺	15.9			口縁強屈曲	輪褐色		
17	111	土師質	〃		4.2		柱状高台	回転ナデ	明褐色	
18	111	〃 环	〃		5.8		内面に沈線	回転ナデ	淡茶褐色	
19	111	上鍤	建物7	幅3.2	長さ4.7	重量41.4kg	穴があけられている(両面空孔)一部欠損	外側には一部指頭圧痕が残る	淡灰褐色(黒斑有り)	
20	111	ミニチュア土器	建物1-7周辺	3.3	2.1				淡橙褐色	
21	111	基盤?	建物7	長径2	短径1.9	重量3.23kg			灰褐色	

柱列 1 (第44図、写真図版47)

段状遺構1の北西側で、建物1と重複して検出した。段状遺構1では多数の柱穴を検出したが、中から石が出土したのは2つだけだった。南側の柱穴の石には加工痕を確認できるものもある。2つの柱穴は、ほぼ同じ位置で2~3回の建て替えを行っている。柱間距離がおよそ5尺になるので、一对になる特殊な柱穴と考えた。この柱穴を基準に建物は復元できなかった。柱列1の東側には、建物2・3と建物6が、柱列1に近い軸で建てられている(第39図)。柱列1をこれらの建物に伴う柵または扉とすると、石を使った柱穴の間が「入り口」ではないかと考えられる。

建物8・9 (第45図、写真図版50)

段状遺構1の最も南東で検出した。建物8は1間以上×2間以上の柱穴配置を持つ。西側の床面が削られており、P4の西に建物が伸びる可能性が高い。また、P3・4のほぼ中間から約1.5m北東で、P5を検出した。掘り方の底面レベルが近いので、建物8に伴う柱穴とも考えられる。柱痕はP2の断面で確認した。掘り方を一度埋め戻した後、柱を据えたことがわかる。柱痕を観察すると、斜面下方に向かって大きく傾いている。建物32のP15(第100図)で検出した柱根の様に、根本の曲がった木を柱に使ったかもしれない。壁溝は東側のコーナーだけ確認できた。土層観察から、柱穴掘り方を埋めた後に造られたことが分かる。

建物9は、建物8より北東に約1mずれた位置で検出した。1間×1間以上の柱穴配置を持つ。柱穴堆積土が建物8の溝を切っているので、建物9が新しいと判断した。建物9の東には小規模なテラスがあり、床面では、焼土と炭と地山のブロックが混ざった固まりを、約50×40cmの範囲で検出した。テラスの東側では長さ90cm程度壁溝を検出した。このテラスは、建物8・9のいずれかに伴うものと考えられる。建物9 PBからほぼ180cmの所でPDを検出した。PDが建物9に伴う柱穴であれば、焼土面も建物9に伴う可能性が高い。

遺物は、PD内から土師質土器の壺(皿?)底部が出土している。

建物9の時期は出土した土師質土器から平安時代末以降、建物8はそれ以前と考えられる。

建物8計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き		
	1間以上 (1.75m)				2間以上 (3.52m)		
主 軸	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	
		上 面 幅 (m)	48×44	54×42	37×33	41×35	50×46
柱穴 (m)		底面標高 (m)	21.28	21.48	21.48	21.55	21.48
		柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P2-5	
			1.73	1.45	2.07	2.90	

建物9計測表

規 模	梁 行 き			桁 行 き	
	1間以上 (1.2m)			1間以上 (2.13m)	
主 軸	N-56' - W				
	番 号	PA	PB	PC	
柱穴 (m)	上 面 幅 (m)	34×(32)	42×35	37×32	
	底面標高 (m)	21.63	21.75	21.82	
	柱間距離 (m)	PA-B	PB-C		
		1.20	2.13		

溝状遺構3・4 (第39・45図)

溝状遺構3は建物8・9の東側と重複する位置で検出した。切り合は、こちらが新しい。溝状遺構4は間に土石流があって検出できなかったが、本来は溝状遺構3が途中で東に枝分かれした一つの溝かもしれない。溝状遺構2で述べたように古道の可能性もある。溝状遺構4から約7m東の

斜面上方で、平坦地と柱穴群を検出した。次年度の調査で、斜面すぐ上に段状遺構18・19を検出しており、それに関係する柱穴と考えられる。

杭列1・2 (第39図、写真図版48・49)

7区南側の土石流の中で検出した。杭は2列平行して地山に打たれている。杭の間隔は、杭列1が80~160cm、杭列2が37~65cmで、杭列1が倍以上広い。また、ほとんどの杭は斜面下方に約35度傾けて打たれていた。杭の太さは2.6~5.7cmで、斜面上方から常に水が染み出すのでよく残っていた。杭の先端は、鋭利な刃物で4面を作るよう削られている。

杭列の詳しい時期は不明だが、遺跡内では比較的新しい時代のものと思われる。

建物10 (第44図、写真図版51)

6区東角で検出した。ここは土石流のほぼ中軸上に位置し、遺構上には、大小の石を含む黒色土が堆積していた。石は遺構面にも多数含まれており、遺構の検出は遺跡中で最も困難した。斜面を削って造られた平坦地は、西側がほとんど流失している。検出した柱穴の内、P1~4が直角に並んでいる。柱間距離は他の建物に比べて短い。

柱穴から遺物が出土していないので、建物の時期は不明である。

建物11・溝状遺構5 (第46・47図、写真図版51・111・112)

6区の東、建物10の約2m西で検出した。1間×2間の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は、上面に対し底面がかなり小さくなり特徴的である。柱間距離は不揃いである。

遺物（第47図）は床面から甌（1）と鉢（2）がひとかたまりになって出土した。調査時には同一個体として取り上げ、整理中に別個体と見付いたものである。色調・胎土・焼成とも非常によく似ている。鉢はほぼ関係に復元できる。底部を観察すると、外面は強い熱を受けた時に暗赤色に変化し、内面は焦げつかせたのか黒色になっている。この甌と鉢は、出土状況から同時に廃棄されたことは間違いない。ただ、一般に甌は甌とセットで使用されたと考えられるので、この甌と鉢がセットになるかは不明である。

溝状遺構5は、建物11の東側で一部重複して検出した。床面から土師質土器が出土するので、時期はこちらが新しいと判断した。建物11の時期は、周辺の出土遺物より古墳時代後期から奈良時代頃と考えられ、溝状遺構5は建物11廃絶後に造られた古道の可能性がある。

建物10計測表

規 模	渠 行 き		柱 行 き	
	1間以上 (0.96m)		2間以上 (2.2m)	
主 索	N-20°-W			
柱穴番号	P1	P2	P3	P4
(cm) 上面径 (cm)	36×24	(56)×38	64×(44)	35×26
底面標高 (m)	19.38	19.47	19.43	19.26
柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	
	1.20	1.00	0.96	

建物11計測表

規 模	渠 行 き				柱 行 き			
	1間 (1.34m)				2間 (3.38m)			
N-31.5°-W								
柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
(cm) 上面径 (m)	30×(23)	(64)×46	37×22	26×25	44×38	22×21	17×15	22×14
底面標高 (m)	18.80	18.61	18.38	18.37	18.40	18.51	18.56	18.63
柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7		
	1.48	1.80	1.34	0.57	1.13	1.68		

古八幡付近遺跡 建物11・溝状造構5出土遺物 (第47図)

順位	測量	器種	出土地点	口径(cm)	深さ(cm)	蓋深(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	111	土師質鉢	建物11	13	底面は肥厚する		内面はヘラケズリ	橙褐色		
2	111	土師質鉢	"	26.6	15.6	18	底面は肥厚する 底部前面は薄くススが付いてる 強い火を受けた跡	内面はヘラケズリ	淡褐色	
3	112	土製支脚	溝状造構5		12.7			内面はヘラケズリ	輕褐色	
4	112	土師質盤	"	19.8				内面はヘラケズリ	淡褐色	
5	112	"	"	13.2				内面はヘラケズリ	淡褐色	
6	112	須恵器蓋	"	10.0	かえり溝	8.7	ヨコナデ	内面はヘラケズリ	淡灰色	
7	112	須恵器	"	13.0	4.45	8.0	回転ナデ	内面はヘラケズリ	青灰色	
8	112	須恵器蓋	"			5.2	回転ナデ	内面はヘラケズリ	青灰色	
9	112	"	"		7.2		回転ナデ	内面はヘラケズリ	淡灰色	
10	112	"	"		6.3		回転ナデ	内面はヘラケズリ	青灰色	
11	112	土師質環	"		5.6		回転ナデ	内面はヘラケズリ	明褐色	
12	112	土師質皿	"		3.8		回転ナデ	内面はヘラケズリ	明褐色	
13	112	土師質環	"		5.6		回転ナデ	内面はヘラケズリ	棕褐色	
14	112	土師質皿	"	約7.4	5.0		回転ナデ	内面はヘラケズリ	淡茶褐色	
15	112	"	"		5.2		回転ナデ	内面はヘラケズリ	淡茶褐色	
16	112	"	"		5.4		回転ナデ	内面はヘラケズリ	淡茶褐色	
17	112	土師質皿	"		4.6		回転ナデ	内面はヘラケズリ	乳白色	
18	112	土師質環	"		6.4		回転ナデ	内面はヘラケズリ	棕褐色	

段状造構2 (第48・49図、写真図版52・112・113)

6区と7区の境界で検出した、弥生時代の段状造構である。東側の埋土は、地山と非常によく似た粘質土で、他の時代の造構に比べて検出にはかなり苦しんだ。初めに49図1の甕を検出したが、造構が認識できず埋め戻しと考えたほどである。掘り方が検出できないので思い切って断ち割ったところ、断面で段状造構であることを確認した。プランは地山の目が切れるところを追って、ようやく検出することができた。床面平坦地の規模は約1.8×14.5mを測る。柱穴は20以上検出したが、明確な建物は抽出できなかった。複数の段が切り合っている可能性が高い。

遺物 (第49図) は、床面と段状造構の斜面下方から出土している。本報告書では出土した弥生土

古八幡付近遺跡 段状造構2出土遺物 (第49図)

順位	測量	器種	出土地点	口径(cm)	深さ(cm)	蓋深(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	112	甕(?)	段状造構2	21.8	(31)	6.0	口縁は上方に弧状2 条の凹線文を施す 底部は上げ底	外面は風化が著しく、 調整は不明 内面はナメ及びタガヘラ ケズリ	外面: 淡黄褐色 内面: 下部赤褐色 内面: 上部は黄褐色 下部は暗茶褐色	
2	112	"	"	19.6			口縁は上方にみる當する 凹線文を3条施す	ヨコナデ 頸部以下 はヘラケズリ	淡茶褐色	
3	113	"	"	18.7			口縁は上方に弧状 風化の為凹線文の有無は不明	ヨコナデ ヘラケズリ	外面: 暗茶褐色 内面: 調整なし	
4	113	甕(?)	"	15.3			口縁は粘りを巻きつけ 上下にわずかに凹線3条 の凹線文を施す	ヨコナデか?	暗茶褐色	
5	112	弥生甕	"	16.6			2条のハサギ印跡、肩には へこみによる刻文文を施す	内面頸部より下はヘ ラケズリ	外面: 暗茶褐色 内面: 明黄褐色	
6	113	"	"	22.7			口縁は上に波打つ、4の凹 文と斜めに走る丸み、変化が 無い(見られない)。頂部は質 感の異なる表面が施される。	内面、頸部以下はヘ ラケズリ	明黄褐色	
7	113	弥生底部	"			7.0	底部は上げ底	内面はヘラケズリ(底 部中心に凹)	外: 明黄褐色 内: 淡灰色	
8	113	弥生 總	段状造構 2下方	19.0			全體に書く磨滅している 3条の凹線文を施す	ヨコナデ	淡茶褐色	
9	113	弥生 總	"	18.0			磨滅の為凹線の有無が確 認できない。肩部に刻文	ヘラケズリ	暗茶褐色	
10	113	甕(?)	"	6.5			正円ではなく楕円形	ヨコナデ	淡褐色	
11	113	弥生底部	"	11.2			風化の為調整不明	内面: 淡茶褐色	外: 淡茶褐色	
12	113	"	"	8.2			底部はあざかに上方に へこむ	内面: 淡茶褐色	外: 淡茶褐色	
13	113	"	"			10.2	底部は外側に溝り出す 内 盤に筋文を読み上げたと 考られる。焼成後に孔	内面: 淡茶褐色		

器は基本的に松本岩雄氏による石見編年（正岡陸夫・松本岩雄 編 1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰』木耳社）に従って分類している。しかし石見編年は資料が乏しいこともあって、類例の見つからない個体も多々ある。こうした場合は他地域の例も参考にしながら分類を行った。

段状遺構2から出土した弥生土器は後期前葉、石見V-1様式のものである。1は遺構東側の壁際に、口縁を下にして据えてあった（写真図版52下）。風化が著しいものの、完形に復元できるだけでなく、収納状況が分かる重要な資料である。2はP10内、3～7は遺構西側の床面から出土した。4は口径が小さく口縁が直立気味であることから、頭部がハの字に開くタイプの壺と判断した。6は頸部を貝殻による施文で飾っている。床面で出土した遺物をみると、西側のものが若干新しそうである。8～13は段状遺構西側の斜面下方で出土した。9と10は同一個体で、台付きの鉢になる可能性がある。13は焼成後に底部を穿孔している。

溝状遺構6（第39図）

溝状遺構5と接する位置から北西方向に伸びている。急斜面に、等高線と平行するように造られていた。溝の西側は調査前まで宅地になっていた関係で、大きく削られている。

遺物は一点も出土しておらず、遺構の年代・性格共に不明である。

段状遺構3（第39・51図、写真図版54・113）

段状遺構2の斜面下方に位置している。壁から約50cm離れた位置で、幅20cm前後の溝を約6mにわたって検出した。柱穴等は確認できなかった。床面から遺物は出土していない。

段状遺構3は南東を自然流路に切られている。流路内からは土師器が数点出土し、この内第51図3に示した土製支脚は、完形のまま天地逆になって流路内に落ち込んでいた。古八幡付近遺跡で出土する土製支脚は、指頭圧痕がはっきり残り、大きく前傾するものが多いのが特徴である。

段状遺構3の時期は不明だが、周辺で出土した遺物から古代の可能性が考えられる。

土壙1（第50・51図、写真図版53・113）

標高約18mの西側調査区境界付近で検出した。ここから段状遺構2までは、約5×11mの平坦な地形になっている。土壙1はこの平坦地の西隅に位置し、周辺で他の遺構は検出していないが、調査区外に建物等が存在した可能性はある。検出したのは地山面で、深さは10cm程度しか確認できなかった。規模は検出面で38×38cmを測る。床面は斜面下方に向かってわずかに傾斜している。

土壙床面の南端には、土師質上器の壺2点が、口縁を合わせるようにして置かれていた。上の壺（第51図1）は斜面上方側がやや浮き上がりがあるので、土壙内に上が流入した時にずれた可能性が高い。下の壺（第51図2）は底部が床面に接しており、ほぼ原位置を保っていると考えられる。古八幡付近遺跡周辺の土師質上器の編年は、浜田市上府町の古市遺跡（浜田市教育委員会 1995『古市遺跡概報』）で11世紀後半から14世紀初頭までを対象に行われている。古八幡付近遺跡で出土した土師質上器を浜田市国府地区で出土したものと比較した結果、11世紀後半から13世紀前半ではほぼこれに従えると判断した。上壙1から出土した土師質上器の時期は、古市遺跡のⅠ期（11世紀後半～12世紀前半）に平行すると考えられる。

溝状遺構7（第39図、写真図版54）

段状遺構3の西側で検出した。非常に不整形で、人為的に造られたものではなく、斜面上方から水が流れ落ちた痕跡の可能性がある。遺構の中央では遺物がまとまって出土した。第51図13の須恵器壺は、同一個体と思われる破片が段状遺構4で出土している。他の出土遺物も段状遺構4出土遺

物と、種類・時期共に同様なので、2つの遺構には何らかの関連があると考えられる。

段状遺構4（第図50～52、写真図版55）

溝状遺構7の斜面下方で検出した。2つの平坦地があり、平面はいずれも不整形である。床面は斜面下方に向かって約20度傾斜している。西側の平坦地は、中央部の壁面が大きくへこんでオーバーハングしている。この部分では石の下から遺物（第51・52図）が集中的に出土したが、斜面上方からの流れ込みか、意図的に廃棄されたものか判断できなかった。段状遺構4の時期は、出土した遺物から奈良時代以降と考えられるが、性格については不明と言わざるを得ない。

ところで段状遺構4周辺では土錘が36個まとまって出土している。調査時に認識できず、順次取り上げてしまったが、網に付いたまま廃棄された可能性もある。出土する土錘は、全く胎土・焼成の違う1の他、2の管状土錘を除いて全て棒状土錘という点が注意される。古八幡付近遺跡では、須恵器を含め様々な形態の土錘が、調査区内のあらゆる箇所で出土している。しかし、棒状土錘は出土する位置が、きわめて限定される。棒状土錘が出土したのは、段状遺構4と溝状遺構7、包含層では6区の段状遺構4よりも斜面下方、6区の北西に隣接する5区である。これらは奈良時代の遺構とその周辺という点で共通している。近年、江津山内でも発掘調査件数が増加し、それに伴って土錘の出土量も増えている。ところが棒状土錘となると市内での報告例は皆無である。また、遺跡から約6.5km南西では、浜田市教育委員会によって石見国府周辺の調査が行われているが、出土した土錘は全て管状だった。県内の棒状土錘の出土例は近年増えつつある。この内、鳥取県境に近い徳見津遺跡では9個体分が出土し、奈良時代のものとされている。また、県内でもっと多くの棒状土錘が出土した出雲市上長浜貝塚も、奈良時代後半から平安時代初期に使用されたと考えられている。このほか弥生時代後期から古墳時代前期と考えられるものもあるが出土数が少なく、8世紀頃が中心と考えられる。

古八幡付近跡 土壌1、段状遺構3・4出土物 (第51図)

測量点	名前	種類	出土場所	高さ(cm)	幅(㎝)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	登録	色調	備考
1	113	土師質灰	土壌1	11.8	4.4	6.6	端部は比較的シャープ に先細りする	見込み部は同軸ナデ	凹削み切りか?		
2	113	"	"	12	3.7	6.2				淡茶褐色	
3	113	土製支脚	段状遺構 3段邊	15.5	重大器		内側にくわすかに凹面する 二股天足	見込み部は同軸ナデ薄	不明凹削み切りか?		
4	114	須恵器蓋	"	16.0			全体に指彫压痕	端部は同軸ナデ	端部は同軸ナデ	黒褐色	
5	114	土師蓋	"	21.2						淡茶褐色	
6	114	須恵器蓋	段状遺構 4段邊	14.1				ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	外表面自然積
7	114	"	"	14.2				同軸ナデ	同軸ナデ	灰色	
8	114	"	"				輪状つまみ	ナデ	ナデ	青灰色	
9	114	須恵器環身	"	12.6	4.55	8.8		同軸ナデ	同軸ナデ	灰白色	
10	114	"	"	14.3				同軸ナデ	同軸ナデ	灰白色	
11	114	"	"	16.9				同軸ナデ	同軸ナデ	青灰色	
12	114	"	"	15.0				同軸ココナデ	同軸ココナデ	灰白色	
13	114	須恵器蓋	"	13.8				同軸輪廓出	同軸ナデ	青灰色	
14	114	土師蓋	"	20.6			口縁加く彎曲	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	
15	114	"	"	22.0				ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶褐色	
16	114	"	"	26.0				ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	
17	114	移動式蓋	"					ナデ	ナデ	明茶褐色	

古八幡付近跡 段状遺構4出土土錐 (第52図)

測量点	名前	種類	出土場所	高さ(cm)	幅(㎝)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	登録	色調	備考
1	114	上蓋(音符)	段状遺構 4段邊	1.4	2.7	3.49	窓状			黒茶褐色	
2	114	"	"	1.75	5.6	17.66	側縁溝部に孔			棕褐色	
3	114	土錐(棒状)	"	1.4	5.4	13.38				不透明	
4	114	"	"	1.2	3.4	5.49				棕褐色	
5	114	"	"	1.6	4.6	12.41				棕褐色	
6	114	"	"	1.7	4.7	13.46				棕褐色	
7	114	"	"	1.6	4.1	11.50				棕褐色	
8	114	"	"	1.75	6.8	20.40				棕褐色	
9	114	"	"	1.75	4.9	12.76				棕褐色	
10	114	"	"	1.7	3.3	5.66				棕褐色	
11	114	"	"	1.8	3	9.56				棕褐色	
12	114	"	"	2	6.8	24.11				棕褐色	
13	114	"	"	1.9	6.3	20.60				棕褐色	
14	114	"	"	1.9	6.85	21.01				棕褐色	
15	114	"	"	1.9	4.7	12.91				棕褐色	
16	114	"	"	1.9	4.1	11.70				棕褐色	
17	114	"	"	2.0	7.2	30.20				棕褐色	
18	114	"	"	2	7.25	27.08				棕褐色	
19	114	"	"	2	5.75	21.46				棕褐色	
20	114	"	"	2	4.4	16.93				棕褐色	
21	114	"	"	2	4.7	16.83				棕褐色	
22	114	"	"	2	4.8	18.49				棕褐色	
23	114	"	"	2	4.45	15.24				棕褐色	
24	114	"	"	1.8	2.5	8.77				明茶褐色	
25	114	"	"	2	3	12.02				棕褐色	
26	114	"	"	2	3.7	9.32				棕褐色	
27	114	"	"	2	7.85	25.48	側縁溝部に孔			棕褐色	
28	114	"	"	1.9	7.85	26.48				棕褐色	
29	114	"	"	1.9	8	27.76				棕褐色	
30	114	"	"	2	8.4	29.37				棕褐色	
31	114	"	"	2	7.25	27.75				棕褐色	
32	114	"	"	1.9	6.1	18.91				棕褐色	
33	114	"	"	2.3	5.8	25.25				棕褐色	
34	114	"	"	2.2	6.8	34.58				明茶褐色	
35	114	"	"	2.4	8.2	43.48				棕褐色	
36	114	"	"	2.4	5.3	24.07				棕褐色	

段状遺構 5 (第53・57図、写真図版55・56・115)

6区のほぼ中央で検出した。平成6年度に行った5区の調査で北半分を調査しており、調査前から存在が確認されていた。平坦地の規模は、5区と合わせると約5×20m測る。段状遺構南側で検出した石組みは、遺跡や周辺でよく見られる近世の棚田に伴うものと判断した。南側を棚田に、東側を現代の宅地によって削られているので、本来はさらに大規模な平坦地が造られて可能性が高い。床面では30以上の柱穴を検出し、掘立柱建物2棟と柱列を抽出した。床面は北側が地山削り出し、南側は盛上で造られている。地山部分に対し盛土部分がどの程度の規模なのかは、棚田に削られているため不明である。盛土を断ち割ると、地山に掘り込まれた溝と8世紀の須恵器壺を検出した(写真図版51下)。これは建物15の溝と遺物で、段状遺構5は、奈良時代の建物が建てられた平坦地を斜面上方に拡張して、再利用していることが明らかになった。同様な関係は、段状遺構16~19にも見られる。

以上の状況から、段状遺構5が造られた時期は平安時代以降と考えられる。

建物 12 (第54図)

段状遺構5の東側で検出した。2間×2間以上の柱穴配置を確認したが、本来は桁行きが南側にさらに伸びていたと考えられる。柱間距離は、梁行きが11尺、桁行きが5.5尺と8尺を指向したものと見られる。このように梁行きの柱間が、桁行きの柱間の倍近くなる総柱建物は、古八幡付近遺跡平成8年度調査区、仁摩町白石遺跡、清石遺跡で確認されている。これらの建物はいずれも12世紀後半から13世紀前半の建物と考えられている。

建物12の時期は、柱穴から遺物が出土していないため不明であるが、他の例を参考にすると中世初頭の可能性がある。

建物 13 (第55図)

建物12と重複する位置で検出した。柱穴は2×1間しか検出していないが、建物12と同様桁行きが南側に伸びていたと考えられる。柱間距離は、梁行きが5尺、桁行きが9.5尺を指向したものと見られる。主軸は建物12とほぼ同じで、建て替えに大きな時間差が無かったのは明らかである。建物13の西側は平成6年度に調査を行った5区と接している。図上で合成できなかつたため不明な点が多いが、5区の東側で検出したピット状の落ち込みとSX-1は、建物13の柱穴だった可能性がある。この内SX-1では、切断された柱根と建物の撤去に伴う匂いの痕も確認されている。

SX-1から出土した土師質土器は、平安時代末頃と見られる。

柱列 2 (第54図)

建物12の梁行きと、ほぼ同軸上に重複している。柱間は6.5尺を指向したものと見られる。5区で検出した柱穴と対応して、建物になる可能性もある。

建物 14 (第56図)

段状遺構5の床面盛土下で検出した。1間以上×2間以上の柱穴配置を持つ。柱間距離は、梁行きが5尺、桁行きが5.5尺を指向したものと見られる。主軸は建物15とほとんど同じである。

建物の時期は段状遺構5より古いので、古代の可能性がある。

建物 15 (第56・57図、写真図版57・115)

段状遺構5の床面盛土下で検出した。建物南側は棚田によって切られており、柱穴は桁行きの1列しか検出していない。この為、建物の正確な規模や柱穴配置は不明である。PA~Fの柱間距離は

不揃いで、組み合わせは判断できなかった。桁行きから約60cm北側には溝が造られている。

遺物（第57図）は主に壁際で出土した。建物15の壁溝は途中で途切れており、遺物も東西にまとまりがあった。出土量は東側の方が多く、建物14のP2・3間にあたる部分の焼土周辺では、特に遺物が集中して出土した。25・26・29・30・36がここで出土した遺物で、同時期に廃棄されたものと思われる。36は瓦質で、37はその取っ手と考えられる。28は東側の溝が途切れる部分で出土した土器の壺である。西側では24と35が出土した。

西側の遺物が東側に比べて古そなうだが、建物15の時期は奈良時代と思われる。

段状遺構6（第56図、写真図版57・58）

建物15の西側と重複して検出した。床面はほぼ流失している。しかし、北側に幅20cm前後の溝が掘られており段状遺構とした。柱穴はPaとPb・Pcのどちらかが遺構に伴うと考えられる。

建物15調査時に地山面で検出し、遺物も出土していないので、時期は不明である。

段状遺構7（第39図）

6区斜面の最も下方で検出した遺構で、ここから南側は大きく落ち込んでいる。西側の5区では段状遺構7とほぼ同レベルで古道が検出されている。平坦面の幅はほとんど同じなので、段状遺構7は5区の古道の続きをと考えられる。時期は不明である。

建物12計測表

規 模	梁 行 き							桁 行 き						
	2間 (6.61m)							2間以上 (3.45m)						
主 軸														
柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7							
上 面 隆 (cm)	23×22	62×50	22×20	43×34	16×15	24×20	28×24							
底面標高 (m)	14.08	14.12	14.12	14.14	14.50	14.22	14.34							
柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P2-4	P3-5	P4-5	P4-6	P5-7	P6-7						
	1.82	1.63	3.26	3.34	1.78	3.27	3.27	1.68						

建物13計測表

規 模	梁 行 き							桁 行 き						
	2間 (5.90m)							1間以上 (1.53m)						
主 軸														
柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7							
上 面 隆 (cm)	(24)×21	13×11	22×21	47×27	23×21	24×20	16×9							
底面標高 (m)	14.22	14.41	14.2	14.20	14.14	14.06	14.45							
柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P1-4	P4-5	P5-7	P4-6	P6-7							
	1.53	2.78	2.93	1.48	3.12	2.82	1.38							

建物14計測表

規 模	梁 行 き							桁 行 き						
	1間以上 (1.54m)							2間以上 (3.28m)						
主 軸														
柱穴番号	P1	P2	P3	P4										
上 面 隆 (cm)	20×18	26×25	28×25	35×24										
底面標高 (m)	14.31	14.20	14.35	13.82										
柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4											
	1.68	1.58	1.54											

建物15計測表

規 模	梁 行 き							桁 行 き						
	3間以上 (6.02m)													
主 軸														
柱穴番号	PA	PB	PC	PD	PE	PF								
上 面 隆 (cm)	28×26	24×20	20×20	42×35	40×38	32×28								
底面標高 (m)	13.92	13.94	13.10	13.73	13.73	13.86								
柱間距離 (m)	PA-B	PB-C	PC-D	PD-E	PE-F									
	0.30	1.80	2.26	1.66	0.70									

古八幡付近遺跡 段状遺構 5、建物15出土遺物 (第57図)

測定	立場	器種	高さ(cm)	幅面(cm)	底面(cm)	形態・文様の特徴	調査	整	色調	備考	
1	115	須恵器片	5	6.0		輪状つまみ	回転ナデ		薄い青灰色		
2	115	"	4.2			輪状つまみ	回転ナデ		青灰色		
3	115	"	5.6			輪状つまみは上方へ伸びる	回転ナデ ナデ		明灰色		
4	115	"	14.4			つまみを有す	回転ナデ		(外)青灰色 (内)明灰色		
5	115	"	14.6			輪状つまみ	回転ナデ ナデ		薄い青灰色		
6	115	須恵器环			6.7		回転ナデ 砕切刃		明灰色		
7	115	須恵器环身			10.2		回転ナデ ヘラキリ		明灰色		
8	115	須恵器环			6.4		回転ナデ ナデ 砕切刃		青灰色		
9	115	須恵器环身			10.0	貼り付け高台	内外とも回転ナデ 底部は回転糸切り		青灰色		
10	115	須恵器环			8.0		回転ナデ ヘラキリ		明灰色		
11	115	須恵器环身			8.9	高台が付く	回転ナデ ヒナナデ		青灰色		
12	115	須恵器环			15.6	底部はわざり凹溝へ塑型	回転ナデ		明灰色		
13	115	須恵器环			16.2	端部に凹気泡	回転ナデ		明灰色		
14	115	須恵器			7.6	吹き出し物らしいものが 出ている	回転ナデ		青灰色		
15	115	須恵器蓋			8.3	しまりの底がわずかに 残る 厚く緑色の釉 がかかっている	回転ナデ ナデ		外画 明灰色 内画 明灰色		
16	115	土師器蓋			23.0	縁は厚でたが端部は シャープに尖りする	回転ナデ ヘラケズリ		赤茶色		
17	115	須恵器				自然釉付着	回転ナデ ナデか		明灰色		
18	115	土師器蓋				体部は球形			明灰色		
19	115	土師器蓋(棒引)				最大径2.3cm			明灰色		
20	115	"				最大径2.2cm 最大径1.9cm			明灰色		
21	115	"				最大径1.9cm			茶褐色		
22	115	土師質環	便物15			方舟から穿孔					
23	115	須恵器环			16.5	底部は突出する 縁は内側に折った後、 わずかに外反させる	回転ナデ 回転糸切り 回転ナデ		淡褐色 外画 明灰色 内画 青灰色		
24	115	須恵器环身			14.2	4.1	8.0	体部はゆるやかにわん 出して口縁部へ至る	回転ナデ(後ナデ) ヘラ切刃?	乳白色	
25	115	"			14.3	4.2		静止ナデ 回転ナデ	明灰色		
26	115	"			13.8	3.8	9.6	ヘラ切刃後ナデ			
27	115	土師質環			11.6	1.6	10.6	回転ナデ		淡褐色	
28	115	土師質環			10.4	5.1	5.6	ナデ		淡褐色	
29	115	土師質環			11.8			ヨコナデ ヘラケズリ		茶褐色	
30	115	"			11.4			ナデ		赤茶色	
31	115	"			14.8			ナデ ヘラケズリ		茶褐色(外側側面)	
32	115	"			27.0			ヨコナデ? ヨコ及び ナデのヘラケズリ		淡褐色	
33	115	"			16.2			ヨコナデ ハケメ		茶褐色	
34	115	"			19.0			ヘラケズリ			
35	115	"			18.6			ナデ		淡褐色	
36	115	瓦質上器			20.8			全体的に風化著しく 調整はわからない		茶褐色	
37	115	瓦質上器 把手				2つの孔の間に深い溝を 施す 第1の接合部が見 れる 内面は凹凸が有るな り良い 中程で鋸く留曲する				灰白色	

土石流 (第39図、写真図版35・49・58)

調査区の南側を斜面上方から流れ落ちている。堆積土中からは、大小の石と共に多くの遺物が出土した。調査区北東の上層断面を観察すると、調査前に棚田として平坦にされていた地形は、幅13m以上の谷状の地形を埋めたものだと分かった。表上下には耕作土が70~90cm堆積していた。その下には明灰色、暗灰色、暗青灰色、黒色、灰褐色の順に粘質土が堆積し、最下層で明灰色砂質土を検出した。遺物は全ての層から出土し、黒色粘質土が最も多く遺物を含んでいた。暗灰色粘質土以下の層には多くの石が含まれ、斜面下方ほど大きな石が出土した。上層の堆積状況から、長期間水が流れていると考えられる。7区で検出した杭列はこの流れを意識したものと思われる。この流

れは途中4区を通過して6区の南側へと続いている。斜面下方の6区では、1mを越える大きさの石も出土した（写真図版53下）。遺物の時期は、縄文時代から室町時代まで幅が広い。ここに水が流れていた時期は、建物10・11の時期よりも後であることは間違いない。同様の黒色土は斜面上方の8区でも検出したが、中世初頭の造構を切っている。このことから水が流れていたのは中世以降、出土遺物から室町時代前後と推測される。なお、流れの基点は8区の集石1、もしくは集石3と考えられる。

6・7区出土遺物

6・7の遺物包含層からは、縄文時代から近代に至る多種多様な遺物が出土した。これらの遺物は、基本的に棚田を造る際に斜面上方から下方に向けて押し流されている。この為、6区の耕作土中で出土した遺物は7区の造構から、7区の土石流内の遺物は8区の造構から廃棄されたものと考えられる。なお、出土数の少なかった遺物は6・7区合わせて記述する。

縄文土器（第58図、写真図版116）

縄文土器は6区の土石流内で2点確認した。2点とも著しく摩滅しており、1が鉢であること以外は器形・時期共に不明である。古八幡付近遺跡では、縄文時代と考えられる石器はほぼ全城で確認できるが、土器は1区を除いてほとんど出土していない。第3章でも述べるが、この地域の縄文集落の立地の外、調査方法にも関係があると思われる。

弥生土器（第58図、写真図版116）

6区で出土した弥生土器の内、段状造構2の周辺で出土したものは、そこから廃棄されたものと判断した。それ以外の弥生土器は、6・7区とも全て土石流内で出土した。ここから斜面上方では弥生時代の造構を全く検出していないので、弥生土器がやまとまって出土した丘陵尾根上から流れ込んだ可能性が高い。出土した弥生土器の時期は、1様式と思われる3、Ⅲ・Ⅳ様式と思われる4・5を除いて、ほとんどがV-1・2様式だった。古八幡付近遺跡で出土する弥生土器は、出土地と時期からある程度の傾向が読みとれるので、他の調査区も含めて第3章で詳しく述べたい。

石 器（第59・60図、写真図版116）

石器は斜面下方の調査区や上方の8-2区に比べると、出土量が目立って少ない。特に黒曜石は石鎚（横形石匙か）が1点出土しただけで、剥片を含めると約280点出土した8-2区とは比較にならない。砥石（2・3）は土石流の中から出土したので、8-3区の造構に伴うものだろう。4は黒色の石で、大きさや形から碁石と判断した。5-11は石斧である。7は両端に刃部を持つもので、これとよく似た形態・大きさの石斧が、頼原町板屋Ⅲ遺跡の第2黒色土層上面から縄文時代後期中葉の土器と共に出土している。

6区出土須恵器（第61・62図、写真図版117・118）

6区では古墳時代後期から平安時代の須恵器が出土した。この丘陵の調査区では古墳時代の造構を検出してないが、古代や中世の遺跡によって壊された可能性もある。第61図30は壺等の脚部と考えられる。逆三角形？のスカシを6-7方向に入れており、遺跡周辺で類例を見ないものである。第62図4は管状土錐で、古八幡付近遺跡出土した土錐の中では唯一須恵器製である。5は紡錘車で、外側は手持ちヘラケズリ後ナデを施す。

6区出土土師器（第62・63図、写真図版118）

6区で出土した土師器は、甕、高壺、瓶、移動式竈、土製支脚、土錐である。甕は口縁の長さや

胸部の張り方に多くのバリエーションが見られる。高坏（12）は横路古墓のものと似ている。13は瓶の取っ手と思われる。古八幡付近遺跡では、瓶の取っ手は出土するが全形が分かれる資料は確認されていない。建物11の瓶がやや形を窺える程度である。甕の破片と判断したものに瓶が含まれており、実際にはもっと多く使用されていたと考えられる。土製支脚は、ほとんどが第51図3と同じタイプのものである。全て二股尖起タイプで、かなり前傾している。背面からの穿孔には貫通するものとしないものがある。外面には指頭圧痕が明確に残る。15では特にはっきりと確認でき、作者がかなり細い指であったことも分かる。14は、調査区内で出土した他の上製支脚と異なり、扁平な作りのものである。棒状土錘（2）は斜面下方の黒色上から出土したもので、段状遺構4周辺で出土するものと胎上・色調・焼成ともよく似ている。その他の土錘は全て縱方向に貫通しているが、形態や大きさは多様である。これは土錘が使用される時期にも関係があると思われる所以、8区の土錘と合わせて後述する。8は移動式甕の破片と判断したが、径が8.6cmと非常に小さい。ミニチュアの甕で、第43図20のミニ土製支脚等とセットで使用されたのかもしれない。内外面ともに指頭圧痕が残る。

土 製 権（第63図、写真図版118）

7は建物11の瓶や鉢の近くで出土した土製品だが、土石流黒色上から出土したため、建物11に確實に伴うか不明であり、ここで報告することにした。

この種の土製品の性格については、これまでにも色々と議論されている。江津市半田浜西遺跡で報告されたのを初めとして、江津市飯田C遺跡、古八幡付近遺跡、棚橋押込遺跡（報告書未刊）、浜田市横路遺跡で出土が確認されている。この土製品の正確な分布は、石見地方の発掘調査件数が少ないため不明な点もあるが、現在のところ江川西岸から下府川流域に限られている。半田浜西遺跡の報告で重量がほぼ3段階に分類できることが分かり、飯田C遺跡では焼成後に重量調整を行った可能性のあるものまで出土している。このため、半田浜西遺跡の報告以後、土製の分銅（権）として報告されている。しかし、土師器では水分などにより重量が変化するとの指摘もあり、土錘説もなお根強い。土錘説については飯田C遺跡の報告の中で林健亮氏が否定している。

以上のようにこの土製品の性格は現在定まっていないが、通常の土錘に比べて出土数が非常に少ない点（棚橋押込遺跡では例外的に26個出土している）と、未報告の棚橋押込遺跡を除いて出土する遺跡に共通する性格が見られる点が注目される。この土製品が出土する地域が非常に狭い地域であることはすでに述べたが、これらの遺跡はいずれも古墳時代末から中世前半にかけて存続する集落である。また、詳しくは後述するが特殊な遺物や從来官衙的と言われた遺物を出土する遺跡が多い点も共通している。さらに、遺跡調査中に福岡県甘木市宮原遺跡（福岡県教育委員会 1990『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告17』）でこれとよく似た土製品が出土し、土製権として報告されていることを知った。実物を比較していないので確実なことは不明だが、石央地域で出土するこの種の上製品も基本的には土製の権と考えられ、以下土製権として報告する。

なお、松江市才ノ崎遺跡（鳥取県教育委員会 1993『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財報告書XII』）では、「遺跡とは形状の異なる用途不明の分銅状土製品が出土している」。

6区出土土師質土器（第63図、写真図版118）

土師質上器は主に段状遺構5の南側で出土している。ここはすでに述べたように調査前まで家が建てられていた所で、大規模に削平されている。しかし、斜面下方は包含層が生きており、龍泉窯

系青磁や宋銭も出土している。黒色土からの出土なので斜面上方からの流れ込みと思われる。

6 区出土瓦（第63図、写真図版118）

古代の平瓦が2点、丸瓦が1点上石流内から出土している。丸瓦は玉縁式と思われるのもので本遺跡内では初の出土である。時期は8世紀後半頃と推測される。古八幡付近遺跡で出土する瓦はいずれも8~15cm前後の小片で、出土点数もごくわずかしかない。また、古代の瓦が出土した調査区は、平成5年度調査区の外は、平成8年度調査区、6~8区と古代から中世の建物を検出した調査区である点が共通している。さらに、遺構周辺での出土は平成8年度調査区と8区で、いずれも中世の遺構からである。8区は古代の遺構が存在するにも関わらず、そこでは1点も出土していない。

こうした出土例を遺跡周辺に求めるとき、浜田市横路遺跡の例が比較的よく似ている。横路遺跡は石見国府に付随する集落と考えられ、古代から中世の柱穴が1500以上検出されている。中世の柱穴には下府廃寺や石見国分寺の瓦を基礎として使用したものがある。これは横路遺跡が古代寺院に極めて近い立地で、瓦の採集が容易だった為と考えられている。出土した瓦の大きさや横路遺跡の例を参考にすると、古八幡付近遺跡で出土する古代の瓦は、中世に遺跡周辺で採集され、柱穴の基礎等に転用されたものと推測される。

6 区土石流出土土師質土器（第64図、写真図版119）

6区の斜面下方でひとかたまりになって出土した土師質土器である。重なって出土したものもあり、一括で発見されたと見て間違いない。この為他の土師質土器とは区別して報告する。時期は平安時代終わり頃と思われる。当初これらの遺物は斜面上方から流れ込んだものと考えていたが、西側に位置する建物12・13が桁行き4間以上の建物であればそこから廃棄された可能性もある。

7 区出土須恵器（第64・65・66図、写真図版119・120）

7区では主に奈良・平安時代の須恵器が出土した。7区の遺物は基本的に斜面上方からの流れ込みであり、須恵器も8区で検出した段状遺構16~19の遺物と考えられる。27は胎土にほとんど砂粒を含まず、内面を丁寧に撫でてなめらかにしており、美しい仕上がりである。

須恵器の壺と椀の区別は、円盤状の底部に内縛する体部が付けられるものを椀と報告することにした。7区出土須恵器では33は壺、35は椀となる。34の様にはっきりしないものは壺とした。椀の底部には回転糸切り後に回転ナデを加えて端部をツマミ出し、小さな高台状にするものが多い。また、今のところ漠然とではあるが、壺と椀では壺の方が先に土師質土器化し、椀はしばらく須恵器として残るものと考えている。第64図37と第65図1は実測図で分かるように、須恵器と全く同じ形態の土師質焼成の椀である。調査区内では同様の焼成の壺も數点出土している。第65図4・5は須恵器椀で、時期は12世紀頃と思われる。段状遺構16に伴う遺物を見てほぼ間違いない。土師質土器と形態が類似している。この時期の須恵器椀は出土数が極端に少なく、第103図26のような土師質の椀が確かに多く出土する。1の椀の時期に始まった土師質土器の増加が進んで、この時期には比率が逆転したことがよく分かる。

16は壺の底部と判断したが、窓壁が付着している。底径の6分の1程度しか残存していないので付着した窓壁の人気は不明だが、実用の際は不安定だったであろう。甕はタタキの種類が豊富だったが、外面が格子目のものは7・8区境界の黒色土中からのみ出土している。

7 区出土瓦（第66図、写真図版120）

7区では瓦は1点しか出土していない。出土地は段状遺構1の斜面下方である。

7 区出土土師器（第66図、写真図版120）

土師器は主に甕が出土した。口径が小さく胴部が張る10は建物1の斜面下方から出土したもので、他は十石流内の遺物である。12は鍋で、口縁をわずかに内側に屈曲させ、受部を作り始めている点が注目される。土師器の高坏は段状造構1の斜面下方で13が出土したのみである。かなり風化しているが、脚部内面は強くナデた跡が確認できる。14は土師器の坏で、手捏ねである。

7 区出土土師質土器（皿・坏・土錘）（第67・68図、写真図版121～123）

7 区南の十石流黒色粘質土中からは、上師質土器が集中して出土した。これらの上師質土器は、色調によって大まかに褐色系のもの（1～19）と白色系のもの（21～37）に分かれる。褐色系の中では、1～3と16、5～7と17・19の胎土・色調・焼成がよく似ている。1～3のタイプの皿は底径が6.5cm以上とかなり大きく、体部は短く歪んでいるものが多い。鎌倉時代のものか。8は近世の灯明皿で表探した。坏は回転糸切りした底部が下方に張り出するものが多い。12は褐色系の坏の中では器壁が薄く焼成も良い。段状造構1床面遺物の坏（第101図16）とよく似ている。これらの坏の時期は、鎌倉時代前半頃と思われる。白色系の坏は褐色系のものに比べて器壁が薄く、体部は内側気味で口縁はやや外反する。時期は平安時代後期・古市遺跡遺跡Ⅰ期に併行するものと思われる。白色系の皿は、褐色系の皿に比べて底径が一回り小さい。第67図に掲載した土師質土器の内、3・11・15・23・25・26・33は浜田市教育委員会の好意により、石見国府周辺で出土した同時期の土師質土器と共に胎土を分析し、比較を行っている。詳しくは『横路遺跡（原井ヶ市地区）』（浜田市教育委員会 1998）を参考にしていただきたい。

7 区で出土した土錘は、全て縦方向に孔を開ける管状タイプである。ほとんどが12～15のサイズだが、16の様に大型なものも数点出土している。重量は小型の土錘の約8倍もあり、孔の径も3～4倍になる。この種の土錘は、遺跡内では7区の土石流上方と8区でのみ出土している。

7 区出土土師質土器（甕）（第68図、写真図版123）

第68図9～11の甕は、他の甕と大きく異なる形態・焼成をしているのでここで扱うこととした。これらの甕は口縁から胴上部に丁寧な回転ナデを施されている。胴上部外面は10・11の様に凹凸が明確なものも多い。胴部は外面にタタキの跡を明確に残し、内面は横方向のヘラケズリ後ナデを施している。内面のヘラケズリは上部より下部の方が単位が短い。以上の特徴から、古墳時代以降のいわゆる上師器甕とは異なるものと考えられる。土師質土器の破片を正確に分類・カウントしていない為不明な点もあるが、代表的な3タイプを図示した。

9は口縁が長めでやや内側する。底部近くと思われる破片も出土したが、胴上部と接点が無いため全体のプロポーションは不明である。図よりさらに長くなる可能性がある。外面はかなり白に近い色調で焼成や胎土も第67図の白色系の土師質土器に近い。10は口縁端部を屈曲させ受部を作っている。胴上部外面には凹凸が目立つ。色調は赤みがかった茶褐色で、胎土・焼成も第67図10・14の坏と似ている。11のタイプは口縁が短く受部もより明確である。胴上部の凹凸は沈線のように細くはっきりしている。ナデの前にクシ状工具を使用していると思われる。表面は淡茶褐色を呈しているが、断面は芯が暗灰色でこの部分の焼成は良い。第68図6の擂鉢や第111図4の茶釜とよく似た特徴的な焼成である。3タイプの甕を比較すると、9が最も古く統いて10・11と変化するように思われる。図示していないが、これ以外に第67図17の坏と同様な胎土・色調・焼成のものも出土している。他のタイプより厚手で、胴部外面を浅い回転ナデ調整で成形しタタキの痕が確認できない点

がやや異なる。底部は丸底で、丁寧なナデが施されている。10または11と併行する時期の別用途の甕かもしれない。これらの甕は、段状遺構16~19及びその下方で出土した以外は、3区の包含層でのみ確認されている。3区の報告では、第67図の皿・环に伴う時期の可能性が高いとされている。今回の出土状況はほぼそれを補うものであり、およそ古代末頃から中世にかけて使用されたと考えられる。

この種の甕は周辺の遺跡では、飯田C遺跡で出土が報告されている。また、県内の遺跡では飯石郡領原町中原遺跡（島根県教育委員会 1999『中原遺跡』）で出土しているものがよく似ている。遺構に伴わない遺物だが、北陸地域に類品がある奈良・平安時代頃の長胴甕とされている。

貿易陶磁（第68図、写真図版123）

貿易陶磁の分類は太宰府のものを用いた（横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について—形式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館）。1は龍泉窯系青磁碗 I 5類碗である。2も龍泉窯系青磁碗で、時期はIV類が上限と思われる。1・2とも7区土石流黒色土中の遺物で、7区の貿易陶磁は全て上石流内から出土した。8区で廃棄されたものであろう。3・4は6区で出土した白磁IV類碗である。6区ではこれ以外に龍泉窯系の青磁碗1点が土石流内から出土している。

擂 鉢（第68図、写真図版123）

5は土師質のもので、口縁には粘土を巻き付けて内側に肥厚させ、上面には沈線を1条廻らせる。6は表面が風化しているが、断面は暗灰色を呈し、焼成は硬い。口縁は5の様に肥厚しないが、端部には沈線若しくはツマミの痕を確認できる。掘り目は4条のクシ描き沈線で、5より本数が少なく間隔も広いので、6の方が古い印象を受ける。5・6とも7区土石流内から出土した。7・8は備前焼擂鉢で、16世紀のものと思われる。

金 屬 器（第69図、写真図版124）

1・2は書体が異なるが、ともに皇宋通寶である。6区斜面下方の自然流路から出土した。3は同じ流路から出土した鉄製の羽釜である。4は先端が先細りし、断面は平行四辺形を呈している。先端から約6.5cmの部分にはわずかに木質が付着している。7区の上石流黒色土から出土した。

骨 片

図面・写真とも掲載していないが、黒色土中で骨片2点が出土した。いずれも白色で硬く、腐っていないので白色系の土師質土器と混同していた。火葬骨の様だが、報告書作成の最終段階で気付いたため正式な鑑定を行っておらず、詳しいことは不明である。

古八幡付近遺跡 6・7区出土縄文土器、弥生土器 (第58図)

測量用区分番号	器種	出土地点	径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 116	縄文深鉢	6区				沈縁を2条施す	風化のため調整は不明	暗茶褐色	時期?
2 116	縄文	〃						外面 茶褐色	時期不明
3 116	弥生甕	7区	22.7			口縁はゆるく外反する 済部は丸い	風化のため不明	内面 黒色	
4 116	〃	〃	20.7			口縁やや肥厚し 外面に凹線を2条施す	頸部以下ケズリ	暗茶褐色	
5 116	〃	〃	19.6			蓋部は直線	ヨコナデ ヘラケズリ	淡褐色	
6 116	弥生甕	〃	14.0			口縁端部は上方に拡張 凹線文を2条施す	ヘラケズリ	淡灰褐色	
7 116	〃	〃				4条の凹線文を施す ヘラによる斜文	弱いナダ ヘラケズリ	淡灰褐色	
8 116	〃	6区				4条の凹線文を施す 4条のケン状文を施す クレヨンの墨痕文または墨文	ユビオサエか? ヘラケズリ	暗茶褐色	
9 116	弥生	7区				口縁は上にわざかに拡張する2条の凹線を施す	ヘラケズリ	淡茶褐色	
10 116	弥生甕	6区				口縁間に以登る羽状文を施す 横方向のヘラケズリ	後にナダ? ナナメ 方向のヘラケズリ	外面 茶褐色 内面 暗褐色	
11 116	〃	7区	13.7			口縁は上にわざかに拡張する2条の凹線を施す	ヨコナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	
12 116	〃	〃	17.7			口縁端部は下方に拡張 3条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ	外面 茶褐色 内面 暗褐色	
13 116	弥生甕	〃	17.2			口縁端部は上方に拡張 凹線文を2条施す	ヘラケズリ	淡茶褐色	
14	〃	〃	11.8			口縁端部は上方に拡張 凹線文を2条施す	ヨビオサエか? ヘラケズリ	淡灰褐色	
15	〃	〃	17.3			口縁端部は上方に拡張する4条の凹線文を施す	ヨビオサエか? ヨコナデ ヘラケズリ	暗茶褐色	
16 116	〃	〃	17.8			口縁端部は下方に拡張 4条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ	淡褐色	
17 116	〃	6区	17.0			口縁端部は上方に拡張 3条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	
18 116	〃	7区	17.0			口縁端部は上方に拡張 2条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	
19 116	〃	〃	15.3			口縁は上方に拡張する 4条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ ヨビオサエ エーヘラケズリ	暗褐色	
20	〃	〃	12.1			口縁は上に拡張し 4条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ	明褐色	
21 116	弥生底部	〃		6.6		口縁は上に拡張し 4条の凹線文	内面はヘラケズリ	外面 暗茶褐色 内面 淡茶褐色	
22 116	〃	〃		4.9				外面 明褐色	
23 116	〃	〃		6.4		底面には8mmの孔 穿孔は焼成前		内面 暗茶褐色 外面 淡茶褐色 内面 淡黄褐色	
24 116	〃	〃			4.5		底部内面はヘラケズリ	外面 淡灰褐色 内面 淡黑褐色	
25 116	弥生高坏	〃				底部の中心は苗床底が 残る部分は割離している		明褐色	
26 116	弥生底部	〃			13.7	一部折断底がみら れる	内面 暗茶褐色		

古八幡付近遺跡 6・7区出土石器 (第59図(1~4)、第60図(5~11))

測量用区分番号	器種	出土地点	径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 116	石刀 or 横彫石刀	6区	2.0	3mm		四面使用	両面ていねいに加工	黒色	黒曜石
2 116	砥石	7区				二面使用			重さ14.6kg
3 116	〃	〃							
4 116	砾石	〃							
5 116	砾刃石斧 (泥岩)	6区	5.7	6.7		刃部磨製		黒色	重さ5.8kg
6 116	砾刃石斧 (砂岩)	〃					全体的に風化激しく 擦痕等は不明		
7 116	磨製石斧	〃							
8 116	〃	〃							
9 116	蛇足石斧	〃						青灰色	
10 116	打撲石斧	〃							
11 116	磨製石斧	7区							

古八幡付近遺跡 6区出土遺物① (第61図)

測量用区分番号	器種	出土地点	径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 117	須恵器环蓋	6区	13.5	3.5		大井平環	回転ナデ後ナダか?	淡灰色	
2 117	〃	〃	11.0	2.0		つまみは笠珠つまみ	回転ナデ ヘラケズリ	外面 青灰色 内面 白灰色	
3 117	〃	〃				内面かえり	ナダ 不定方向のナダ	灰白色	
4 117	〃	〃				高い輪状つまみ	回転ナダ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 青灰色	資料未記載 目録へ記載

番号	区分	品種	出土地点	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
5	117	須恵器环	6区				輪状つまみ	回転ヘラ切り後ナデ	青灰色	
6	117	~	~			5.2		回転ナデ		
7	117	~	~	16.6	3.2	8.0	輪状つまみ	不定方向のナデ	淡灰褐色	
8	117	~	~	~	~	~	輪状つまみ	回転ナデ	山面 明灰色	
9	117	~	~	14.4			輪状つまみ	回転ナデ	表面 灰褐色	
10	117	~	~	16.0			輪状つまみ	指によるナデ	内面 白灰色	
11	117	~	~	~	~	~	輪状つまみ	回転ナデ	自然釉	
12	117	~	~	~	~	~	輪状つまみ	回転ナデ	淡灰褐色	
13	117	~	~	~	~	~	輪状つまみ	回転ナデ	暗灰色	
14	117	~	~	~	~	~	輪状つまみ	回転ナデ	青灰色	
15	117	須恵器环身	~	19.1			輪状つまみ	回転ナデ	青灰色	
16	117	須恵器环身	~	11.1	4.0	2.0	輪状つまみ	回転ナデ	青灰色	
17	117	須恵器柄	~			7.3	体部内凹気味	ヘラ切り後ナデ	从口色	
18	117	須恵器环身	~	17.0	5.75	11.0	体部下で横づく	回転ナデ	灰褐色	
19	117	~	~			8.3	体部内凹で横づく	回転ナデ	灰褐色	
20	117	~	~			12.0	高台高い	回転ナデ	青灰色	
21	117	~	~			9.4	高台端部凹面	回転ナデ	青灰色	
22	117	~	~	12.8	4.0	8.8	低い台	回転ナデ	青灰色	
23	117	~	~	14.4	3.7	11.6	~	回転ナデ	青灰色	
24	117	~	~			8.2	~	回転ナデ	青灰色	青灰焼き直し 窯壁付着
25	117	~	~			7.8	~	回転ナデ	指によるナデ	灰白色
26	117	須恵器環	~			6.4	~	回転ナデ	輪状つまみ	青灰色
27	117	~	~			6.4	~	回転ナデ	輪状つまみ	青灰色
28	117	須恵器	~			7.2	~	回転ナデ	輪状つまみ	青灰色
29	117	須恵器	~			6.6	~	回転ナデ	輪状つまみ	青灰色
30	117	須恵器面部	~			12.8	第二角形のスキを6~7方 向に入れる 轮滑部は凹面	回転ナデ	内外面とも回転ナデ	青灰色
31	117	須恵器高台	~	17.5			口縁内凹	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白色
32	117	~	~			10.9	腰窓側面凹	回転ナデ		青灰色
33	117	~	~			6.8	腰窓側面凹	回転ナデ		青灰色
34	117	~	~			12.5	腰窓側面平坦面	回転ナデ		青灰色
35	117	~	~						しづり?	
36	117	~	~			11.0	腰窓側面凹	回転ナデ		青灰色
37	117	須恵器蓋	~	16.8			口縁大きく外反	回転ナデ		青灰色
38	117	須恵器蓋	~			22.0	口縁端部平坦面	回転ナデ		青灰色
39	117	須恵器蓋	~			7.3	~	回転ナデ		青灰色
40	117	~	~			9.2	~	回転ナデ		青灰色
41	117	~	~			高台	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	青白色	
42	117	~	~			10.6	高台端部平坦面	回転ナデ	回転ナデ	自然釉

古八幡付近遺跡 6区出土遺物②(第62図)

番号	区分	品種	出土地点	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	118	須恵器蓋	6区			13.6	内側は当て痕をへ ラでナデしている 下部はタタキをヘラケ ズリ上部酒してある	内側は当て痕をへ ラでナデしている	青灰色	
2	118	須恵器横瓶	~					回転ナデ		
3	118	須恵器(把手)	~				把手	把手	淡灰褐色	
4	118	須恵器 等材土器	~	長径	薄厚	3.9 1.5		手づくね	淡灰褐色	須恵器
5	118	須恵器 幼童車	~			4.7 1.5	6.0	側面と上面は手持ち ヘラケズリ後ナデ	青灰色	
6	118	土師器覆	~	16.0			側面すき目彫れ	ナデ ヘラケズリ	青灰色	
7	118	~	~	16.2			1.縦外反	ヘラケズリ	淡灰褐色(出筋)	
8	118	~	~	20.4			~	ヘラケズリ	板褐色	
9	118	~	~	16.6			~	ヨコナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	
10	118	~	~	17.6			~	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	
11	118	~	~	30.0			側面彫る		淡灰褐色	
12	118	土師器蓋	~						青褐色	
13	118	須恵器	~						淡灰褐色	
14	118	土師支脚	~				載突起		淡灰褐色	
15	118	~	~				側面にれあり	底面に筋道にれあり	板褐色	

古八幡付近遺跡 6区出土遺物③(第63図)

編號	形態	出土地點	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 118	土製支脚	6区				底穴?		棕褐色	
2 118	土製環状	〃				柱狀 側面輪廓に孔		棕褐色	
3 118	土器	〃				管状 筒錐形		淡茶褐色	
4 118	〃	〃				長さ 4.5	手づくね	暗茶褐色	
5 118	〃	〃	1.6	0.6		長径 壁厚 5.0 2.6		明褐色	
6 118	〃	〃	4.8	3.0		長径 壁厚 4.8 3.0		明褐色	
7 118	土製軸	〃			4.4	断面形三角形 上部に孔	部分的に指おさえの痕跡 (指頭圧痕)	暗茶褐色	
8 118	ミニチャコ	〃			8.6			淡茶褐色	
9 118	土削質環	〃			7.0	口縁及び内鷲	新削仕痕	淡粉褐色	
10 118	〃	〃			7.0	回転ナデ 回転系切り底	回転ナデ 回転系切り	淡茶褐色	
11 118	土削質環	〃			6.8	回転ナデ 回転系切り底	回転ナデ 回転系切り底	内 淡茶褐色 外 淡茶褐色	
12 118	〃	〃			6.3	柱状高台	回転ナデ 回転系ケズリ	赤褐色	
13 118	〃	〃			6.2		回転ナデ	淡茶褐色	風化
14 118	〃	〃			7.0	回転ナデ 回転系切り?	回転ナデ 回転系切り?	淡粉褐色	風化
15 118	〃	〃			22.4	無い化粧ナデによるものか? 口縁外反	回転ナデ 回転ヘア切り	淡茶褐色	
16 118	丸瓦	〃			14.2	口縁内湾	回転ナデ 回転ヘア切り	淡茶褐色	
17 118	半瓦	〃				有段	布目庄底 横目多キケズリ	暗青灰色	
18 118	丸瓦	〃					布目庄底 横目多キケズリ後にナデ	灰色	
19 118	半瓦	〃					布目庄底 横目多キケズリ	青灰色	

古八幡付近遺跡 6区土石流出土遺物、7区出土遺物①(第64図)

編號	形態	出土地點	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 119	土削質環	6区 土石流	6区	13	4.2	5.4	回転ナデ	淡茶褐色	
2 119	〃	〃			14.4	口縁端部外反	回転ナデ	淡灰褐色	
3 119	〃	〃	12.2	4.55	4.7		回転ナデ 回転系切り	淡灰褐色	
4 119	〃	〃	12.4	4.7	4.9			淡茶褐色	
5 119	〃	〃	14.0	3.35	5.7	口縁内湾	回転系切り 回転ナデ	外部 淡茶褐色 内部 暗茶褐色	
6 119	〃	〃	12.7	3.9	5.6		回転ナデ 回転系切り	外部 淡茶褐色 内部 暗茶褐色	
7 119	〃	〃			5.8			淡灰褐色	
8 119	〃	〃			5.2		回転ナデ 回転系切り底	淡茶褐色	
9 119	〃	〃			5.6		回転ナデ 回転系切り底	淡茶褐色	
10 119	〃	〃			7.4		回転ナデ 回転系切り	淡茶褐色	
11 119	〃	〃			5.0		回転ナデ 回転系切り	外部 乳白色 内部 明茶褐色	
12 119	〃	〃			5.5	高い高台	回転ナデ 回転系切り	外白	
13 119	〃	〃			9.8			淡茶褐色	
14 119	土削質高台	〃			6.9		ナデ 横にヘアで切つ	乳白色	
15 119	土削質環	〃			5.8		ナデ 横にヘアで切つ	乳白色	
16 119	〃	〃			4.7		回転ナデ 回転系切り	薄褐色	
17 119	土削質環	6区 土石流			5.4		回転ナデ	淡茶褐色	
18 119	土削質環	3.3				底部高台状	回転ヘア切り	淡茶褐色	
19 119	土削質環	10.4	2.2	3.8			回転ナデ 回転系切り?	淡茶褐色	
20 119	〃	5.0					回転ナデ 回転系切り	淡茶褐色	
21 119	〃	10.4	2.7	4.9			ク	明茶褐色	
22 119	〃	10	3.5	4.1			ク	淡茶褐色	
23 119	〃	10.8	2.2	4.0			ク	淡茶褐色	
24 119	〃				4.8	輪状つまみ	明褐色		
25 119	須恵器坏葉	7区	14.3	2.25	5.7	口縁端部曲出	回転ナデ 回転ナデ 後ナデを施してなめらかにする	淡青灰色	
26 119	〃	14.9			6.1		回転ナデ ヘアケズリ後ナデ 回転ナデ	灰色	
27 119	〃	12.7	2.5~ 2.6			輪状つまみ 口縁端部曲しない	回転ナデ	灰色	
28 119	〃					ツマミの 輪状つまみ 佳	回転ナデ	淡青灰色	
29 119	須恵器坏身	5.7				低、高台 端部凹窓	回転ナデ 後不定方向 にナデ 回転ナデ	明灰色	
30 119	〃	12.7	5.3	5.3	9.4	高台径 低、高台	回転ナデ 後不定方向 にナデ 回転ナデ	灰色	
31 119	〃	13.5	4.4	4.4	10.6	高台径 低、高台	回転ナデ 後不定方向 にナデ 回転ナデ	外面 灰色 内面 淡青灰色	

遺物	形態	器種	出土地点	口幅(cm)	縁幅(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 调	備 考
32	119	須恵器环	7区			高台径 7.9	高い高台	回転ナデ ヘラ切り	明灰色	
33	119	須恵器环	"			8.5	口端たらあがき急 底部付近に穂 (7.3)	回転ナデ 回転余切り 回転ナデ	明灰色 暗灰色	砂粒多く含む
34	119	須恵器碗	"			高台径 7.1	非常に低い高台	回転ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	明灰色	
35	119	須恵器碗	"			6.9	つまみ出しの低い高台	回転余切り 回転ナデ	明灰色	
36	119	土師質碗	"			高台径 6.4	非常に低い高台	回転余切り後ナデ 回転余切り後ナデ	明灰色	

古八幡付近遺跡 7区出土遺物②(第65図)

遺物	形態	器種	出土地点	口幅(cm)	縁幅(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 调	備 考
1	120	土師質碗	7区			高台径 6.9	非常に低い高台	回転ナデ 高台はツマミ出しか?	明灰色	
2	120	須恵器碗	"			高台径 7.8	"	回転ナデ 高台は強くツマミ出しつくる	明灰色	
3	120	"	"			7	"	回転ナデ回転余切り 高台つまみ出し	明灰色	
4	120	"	"	16.2	5	5.8		回転ナデ 回転余切り	灰色	重ね燒痕
5	120	"	"			6.5		回転ナデ 回転余切り	暗灰色	
6	120	須恵器高环	"	14.6 (环部)		4.3	口縁端先端	回転ナデ後不定方向 のナデ 回転ナデ	明灰色	
7	120	"	"				壁端部大きく聞く	回転ヘラケズリ		
8	120	"	"					回転ナデ	暗灰色	自然釉
9	120	須恵器高环	"	7.2			直口	回転ナデ	暗灰色	
10	120	須恵器鉢	"	15			端部大きく内湾	回転ナデ	灰色	
11	120	須恵器高环	"	11.9			口縁端子端	回転ナデ	明灰色	
12	120	"	"			(高台) 12.7	肩部なる	回転ナデ	明灰色	
13	120	"	"	16			最大径 23.5	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ調整	暗灰色
14	120	"	"			18.4		回転ヘラケズリ後ナデ	灰色	
15	120	"	"	19.6			口縁端部平坦	回転ナデ	灰色	
16	120	"	"			14.9	笠型が付着している	回転ナデ 笠型はヘラ切り後ナデ	明灰色	
17	120	須恵器甕	7区	16.8			口縁端部平坦	カキメ 回転ナデ	灰色	
18	120	"	"	15			口縁端部平坦	タタキ 回転ナデ	灰色	
								タタキの後の回転ナデ	タタキ	

古八幡付近遺跡 7区出土遺物③(第66図)

遺物	形態	器種	出土地点	口幅(cm)	縁幅(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 调	備 考
1	120	須恵器甕	7区					タタキの後カキメ	外面 品吉灰色 内面 灰色 底面 暗紫色	
2	120	"	"					格子開き	灰色	
3	120	"	"					縁口のタタキ	青灰色	
								同心円文タタキの後 ナデ(ヨコ力印)		
4	120	"	"					タタキの後カキメ	灰色	
5	120	"	"					タタキ、格子ヨコタタキ	灰色	
6	120	須恵器横瓶	"					カキメ	外面 暗灰色 内面 底色	
7	120	平肩	"					縁口タタキ 斧刃仕切	灰色	
8	120	土師質甕	"	21.5				ヨコナデ ヘラケズリ	茶褐色	
9	120	"	"	23.1					外面 深褐色 内面 品吉褐色	
10	120	"	"	13.1				ヨコナデ ヘラケズリ	外面 暗褐色 内面 品吉褐色	
11	120	"	"	18.9				ヨコナデ ヘラケズリ	外面 暗褐色 内面 品吉褐色	
12	120	土師質鍋	"	16.6			口縁短く外反	ナデ	内面 品吉褐色	
13	120	土師質高环	"				底部は粘土つまる	ナデ 指を引きずつ た痕が残る	暗茶褐色	
14	120	土師質环	"	7.8	3.4				黑色	

古八幡付近遺跡 7区出土遺物④ (第67図)

件名	形	質	高さ	幅(φ)	厚さ(φ)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考	
1 122 上師質目	筒	高士地質	7.8	1.7	6.5	口縁無く内溝	回転ナデ 回転糸切り 内面みごみナデ	淡茶褐色		
2 122	〃	〃	8.3	1.9	6.6	〃	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色		
3 122	〃	〃	8.8	2.2	6.75	〃 -7.5	回転糸切り	暗赤褐色		
4 122	〃	〃	8.2	2.7	6.6	口縁やや長唇	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色		
5 122	〃	〃	8.5	1.8	4.7	口縁外反	回転ナデ 回転ナデ	淡褐色	中心やや盛り上がる(やや暗め)	
6 122	〃	〃	8.9	1.8	5	〃	回転ナデ	淡褐色	(中心出る、いねい)	
7 122	〃	〃	8.9	1.65	4.6	〃	回転ナデ	淡茶褐色(暗黄褐色の斑点有り)		
8 122	〃	〃	7.7	2.1	3.7	〃	回転糸切り 内面は回転ナデ網目	淡茶褐色	スヌ付著	
9 122	〃	〃	8.3	1.5	7.1	口縁無い	回転ナデ 回転糸切り	外面 明褐色 内面 暗褐色		
10 121 十師質環	環	15.1	4.2	8	口縁外側	回転ナデ 回転糸切り	外表面 明褐色			
11 121	〃	〃	7.2			回転ナデ 弧型回転ナデ	内面 暗褐色			
12 122	〃	〃	7.1			回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色			
13 121	〃	〃	13.1	4.8	7.9	端部やや内溝	回転ナデ 回転糸切り	明茶褐色		
14 121	〃	〃	13.5	4.4	7	端部やや肥厚	回転ナデ 回転糸切り	黒褐色		
15 121	〃	〃	14.1	4.4	7.2	端部はやや厚くなる	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色		
16 121	〃	〃	13.4	4.2	9	口縁端部はやや内側に まく	内面は回転ナデ	茶褐色		
17 122	〃	〃	6.3			底面厚い	回転ナデ 回転糸切り	明茶褐色		
18 122	高台径	(5.5)	〃			高台は外には出ず	回転ナデ			
19 122	〃	〃	6.5			6.2	回転ナデ 回転ナデ の後不定方向のナデ	明褐色		
20 122	土師質環	〃	8.7	1.25	8.4	4条の沈線が彫る。工具 痕か?	回転ナデ 回転糸切り	茶褐色		
22 121 十師質環	環	13.8	4.6	5.6	端部はシャープ	回転ナデ	白褐色			
23 121	〃	〃	12.2	4.05	5.0	やや外反ぎみ	回転ナデ 内面回転ナデ	灰白色 (一層赤みおびる)		
24 122	〃	〃	8				回転ナデ 回転糸切り	外表面 明褐色(白) 内面 黒褐色あり		
25 122	〃	〃	10.2	3.1	5.5		回転ナデ 回転糸切り	灰白色		
26 121	〃	〃	14.5	4.5	5.6	やや外反	! 東ナデ 回転ナデ麻痺る	淡褐色		
27 122	〃	〃	6			6 中央凸状	回転ナデ	灰白色 (やや赤ばむ)		
28 122	〃	〃	5			体部はゆるく内側にカ一 ブする	回転ナデ 回転糸切り	暗褐色		
29 122	〃	〃	5.5				回転ナデ 回転糸切り	明褐色		
30 122	高台	外傾する高台	5.7				回転ナデ 回転糸切り	白褐色		
31 122 上師質環	環	4.1	中央凹む				回転ナデ 回転糸切り	明褐色		
32 122 上師質環	環	5.3	低い高台				回転ナデ	明褐色		
33 122	〃	〃	5.8				浅い回転ナデ	灰白色		
34 122 土師質環	環	11.5	端部面取り				回転ナデ	肌色		
35 122 土師質環	環	6.6	高い高台				! 宽な回転ナデ			
36 122	〃	〃	7				回転ナデ	白褐色		
37 122 上師質環	環	3.8	柱状高台				回転ナデ 回転糸切り	白褐色		
							回転糸切りか?	灰白色		

古八幡付近遺跡 7区出土遺物⑤(第68図)

登録番号	出土地点	器種	出土地點	寸法(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1 123	百軒町	石鏡	71X	16.0			鏡面が 反する	回転ナデ	淡緑色	鏡裏深灰色 縦N横 (DかC占)
2 123	〃	〃	〃	17.2						
3 123	白幡廻	石鏡	〃				玉ね状口縁			
4 123	白幡廻	石鏡	〃		6.0		引け出し高台 底面は無削。内面に段	内側には砂目彫みの 痕跡あり	灰白色	
5 123	上御器窪井	石鏡	28.9	13	14.6	8.6	8条1列+枚のクシ彫目 口縁肥厚	かすかにナナメ方向 のハケ目が彫られる 指痕U痕が残る	黒褐色 暗茶褐色	
6 123	丸蓋? 瓶体	瓶	25.6	(10.3)	14		4条1列のクシ彫目		淡灰褐色	
7 123	筒尚焼瓶体	瓶	35.2				2条の凹線		暗赤褐色	V形
8 123	〃	〃								
9 123	土師質壺	壺	21.3				U縁長い	回転ナデ	明褐色	
10 123	〃	〃	22.7				口縁上方に溝曲させる4 条の凹線	外側に平行印痕 裏 内面ケズリ、ナデ	赤茶褐色	
11 123	〃	〃	19				口縁上方に凹曲 3~4条の凹線		淡茶褐色	
12 123	土鏡	石鏡	4.4	8.34g			幅 長さ 重さ		房部下半はかなり ヌスが少々	
13 123	〃	〃	1.5				幅 長さ 重量		淡褐色と黒褐色 (墨斑か?)	
14 123	〃	〃	1.5	3.3	5.66g		幅 長さ 重量	手づくね、やや面が 多い	黒灰色	
15 123	〃	〃	1.6	5	13.64g		幅 長さ 重量		暗茶褐色	
16 123	〃	〃	1.5	5.2	10.99g		幅 長さ 重量		茶褐色	
			3.9	6.4	78.77g				暗褐色	

古八幡付近遺跡 7区出土遺物⑥(第69図)

登録番号	出土地点	器種	出土地點	寸法(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1 124	古鉄	刀鍔	61X				U字端質			
2 124	〃	〃	〃							
3 124	鉄器羽釜	羽釜	33.32				最大径 33.32 木体 25.2	全体に黒く締化している		
4 124	鉄器	刀鍔	現存品	10.3			全体に銷が付着 一部鏡本日の木質部分 0.7			

第2節 8区の調査

調査区の立地（第38図、写真図版36・37・44）

8区は北西に向かって伸びる丘陵の尾根上平坦部と東西の斜面に設定した。8区はこれまでの調査区に比べて面積が2~3倍だったので、調査区は東斜面を8-1区、尾根上平坦部を8-2区、西斜面を8-3区と三分した。調査は8-1区北側から西に向かって順次行った。

1. 8-1区（第70図）

東斜面に設定した8-1区は、約80m西の9区と谷を挟んで向かい合う立地である（写真図版40下）。9区は8区に先立って調査を行っており、弥生時代中期の環壕集落と後期古墳2基を検出している。このため8-1区でも同時期の遺構が存在すると予想されたが、明確な遺構は全く検出されなかった。同じ丘陵の西斜面に設定した8-2区から多数の遺構が検出されたのとは極めて対照的である。しかし、改めて8区の標高を確認すると、36~40mと西斜面で遺構が検出されたレベルよりやや高いことが分かる。調査時にはすでに工事が始まっていたため確認できなかったが、8-1区の斜面下方は傾斜が緩くなっているので西斜面同様に遺構が存在した可能性が高い。

このほか8-1区も調査前は棚田になっていたため、狭い間隔で行列が並んでいた。正確にカウントしていないため実数は不明だが、西側斜面や調査区外のものも含めると莫大な数である。この種の石は地山に含まれていないので近傍から運ばれたものと思われ、かなりの労力を要したと推測される。今回の古八幡付近遺跡の報告では近世の遺構・遺物は一部を除いて扱わない。しかし、横路古墓の近世資料共々、平野の少ない石見地方の近世集落を考える上で重要な資料と考えられる。

出土遺物（第27図、写真図版126）

8-1区は遺物がわずかしか出土しなかった。ほとんどが調査区の北側、標高36m付近で出土した。これらの遺物は8-2区北側から廃棄されたものと考えられ、尾根上が削平される以前に遺構が存在していたことをうかがわせる。3は8-1区南側で出土した鉄器である。8-2区南側の建物群に伴う遺物かもしれない。4は9区の1号墳石室内部遺物や2号墳周溝内遺物と同時期の蓋である。8区ではこれ以外に古墳時代の蓋杯がほとんど出土していない。6は弥生土器の底部で、8-2区の弥生土器と同時期のものである。8は龍泉窯系青磁碗で15世紀頃のものと思われる。

2. 8-2区（第70図）

8-2区は丘陵尾根上に位置しており、日本海や都野津から敬川河口に至る平野部を一望にできる。麓の水田との比高差は約35mになる。8-2区は調査前水田にされており、特に北側は大規模な削平を受けている。耕作土の下からは黄白色の粘質土が検出され、地山の「芯」近くまで削平されていることは明らかである。このため、近世以降と思われるものを除いて、東西斜面との変換点に近い部分でしか遺構・遺物は検出されなかった。一方、調査区の南側では縄文時代から近世に至る遺物や掘立柱建物群が検出された。これは南側--帶に黒茶褐色の遺物包含層が広がっていることが示すように、南側が元は北側よりも低い地形だったため、削平の度合いが小さかったことによる。ここでは下層の黒茶褐色土から縄文・弥生時代の遺物が出土し、上層の灰褐色土からは主に古代から中世の遺物が出土した。

段状遺構8・柱列3（第70・72図、写真図版60・126）

調査区北側の東斜面との変換点近くで検出した。検出したのは縫溝のみで床面はほとんど流失していた。溝の規模は長さ約3.4m、幅約35cmを測り、断面は逆台形を呈している。溝の埋土は黒灰色粘質土で8-2区南側下層の土と似ている。遺物は第72図1・2が溝の床面から出土している。1は甕の口縁である。風化が著しく明確ではないが、口縁外面には擬凹線文が施される。2は壺の肩と思われる。クシ状工具による大振りな波状文が施されている。このような文様の弥生上器は西側斜面の流れ込み遺物でも1点確認している。江津市内では弥生土器の出土数が少ないものもあって類例を見ないが、県内ではV-1様式の上器で目に見える文様である。段状遺構8の時期は出土した遺物から、弥生時代後期前様と考えられる。また、削平前はほぼ同時期の遺構である段状遺構2（第48図）に近い形態・性格のものだったと思われる。

柱列3は、段状遺構8と一緒に検出した3つの柱穴で、直線上に並んでいる。柱穴の径は検出面で15~20cmと小さめである。段状遺構8から約9m北西の調査区北壁付近では、柱列3と同様の形態・埋土の柱穴を3つ確認している。調査区の北側には中世の遺構が存在した可能性が高く、柱列3は北側の柱穴と一緒に遺構の残骸かもしれない。

土壤2（第70図）

段状遺構8の約4m南で検出した。平面は不整形円形を呈し、規模は検出面で65×99cmを測る。埋土は黒灰色粘質土で段状遺構8とよく似ており、床面は東に緩く傾斜している。主軸はほぼ東西軸に乗っている。遺物が全く出土していないので時期や正確は不明である。

段状遺構9（第71・72図、写真図版126）

8-2区南側の黒茶褐色土下で検出した唯一の明確な遺構である。床平面は三角形を呈し、東側のコーナーから南東に溝が伸びている。床面及び周辺で柱穴は検出していない。非常に不整形であるが、東側の床面が流失したためで、もとは多角形を呈していたと考えられる。床面から第72図22が出土している。弥生時代後期後葉の甕の口縁で、この丘陵で出土した弥生上器の中では最も新しい時期のものである。このほか21の甕も段状遺構9に伴う可能性が高い。

8-2区下層出土遺物（第71図、写真図版61）

8-2区南側は、耕作土と灰褐色の遺物包含層の下に、黒茶褐色の土が7~10mの幅で帯状に堆積していた。当初、調査期間の都合から地山まで一気に剥いで調査していたが、黒茶褐色土上面で柱穴を多数検出したので、建物調査後に改めて掘削することにした。この黒茶褐色土層はツルハシで掘削せねばならない程度で非常に硬く、建物群建設に伴って造成されている可能性が高い。また、黒茶褐色土が帶状に堆積していた範囲が小さな谷になり、ここから北が高くなっていたと考えられる。この層では黒曜石の石器及び剥片と弥生上器が主に出土した。黒曜石や弥生上器は上層でも出土しているが数が少ないので、縄文・弥生時代の遺物はここでまとめて説明する。

縄文土器（第72図、写真図版126）

11は断面逆三角形状の高台を貼付ける底部である。縄文時代中期のものか。10は深鉢の口縁で福田KII式に併行するとと思われる。また、10は当初地山と判断していた灰褐色粘質土にめり込んだ状態で出土した。この上を観察すると、ごく僅かではあるが炭の小片を含んでいることが分かった。このため、急遽掘り下げたが、遺構・遺物とも検出できなかった。なお、8-2区南東では同様の上に埋土の柱穴プランを20以上確認している。

弥生土器（第72図、写真図版126）

弥生土器はいずれも摩滅が著しく、ほとんどが原位置を保っていないと思われる。12は細片であるが、I-3様式の甕の破片と思われる。これ以外の弥生土器は全てV様式である。中でもV-1様式が圧倒的多数で、段状遺構9周辺で僅かにV-2・3様式の土器が出土する程度である。また、出土した弥生土器の内、器種を判断できるものは、24の高壙を除いて全て甕だった。9区で多種多様な弥生土器が出土したことと、きわめて対照的である。検出した遺構も含め、古八幡付近遺跡の弥生時代集落については、第3章において詳しく述べることにする。

石 器（第72図、写真図版124・125）

石器は石斧・石鎌・スクレイバー・石匙・楔形石器・円形石製品が出土した。出土数は二次加工のあるものを含めると51点である。剥片数は黒曜石が237点、安山岩が22点で黒曜石が10倍以上多く出土している。また石材と器種について見ると、石鎌は安産岩・黒曜石両方で作られているが、それ以外の器種は石材が分かれている点に気付く。また、透明度の高い黒曜石が出土し、姫島産の可能性を考えたが、分析したわけではないので正確には不明である。

これらの石器は掘立柱建物群建設に伴う造成でほとんど原位置は保っていないと考えられる。しかし石器が出土した範囲は、試掘トレンチより東側の約20×15mの範囲と段状遺構9周辺にほぼまとまっている。ここは既に述べたように地山面では緩い谷地形になっている。この範囲は遺跡内ではしばしば多くの石器・剥片が出土した箇所であるが、建物や土壤等の遺構は全く検出していない。また、ほとんど同じ範囲で縄文・弥生土器を検出したが摩滅が著しく細片ばかりだったので、破損後に谷地形に向けて廃棄された可能性が高い。以上の状況から8-2区で検出した石器を製作・使用していた居住城本体は、調査区外南側の緩斜面に存在すると推測される。

古八幡付近遺跡 段状造構 8・9、8-1・2区造構外出土遺物 (第72図)

編目	地番	基盤	高さ	幅	厚さ	形態・文様の特徴	調査	監	色	測	備考
1	126	寺牛塗	8			擬回線	ヨコナデ		赤褐色		
2	126	寺牛塗				3条の回線文	ヘラケズリ		暗茶褐色		
3	126	鉄器	8-11X			3条の波条文			外西 淡茶褐色		
4	126	須恵器環	12.2	最大径	13.5		回転ナデ		淡灰色	7C後半	
5	126	須恵器縁	"	(6)		底部は端をつまんで高台状にする	回転ナデ		淡灰色		
6	126	弥生古付金	"		6.2	台状にする	ユビオサエ ナデ		暗褐色		
7	126	須恵器縁	"		15.5	凹み底	強いナデ				
						?	回転ナデ				
8	126	吉原鏡	"	15.4		口縁端部はやや外反する	回転ナデ		暗灰色		
9	126	土師質打削銀 繩文深鉢	"	8	1.5	3.8	回転ナデ 回転糸切		淡灰色	15C	
10	126	繩文深鉢	8-2区 下層			波状口縁 細削繩文	ミガキ		暗茶褐色	スズ小着	
11	126	繩文深鉢	"		8.5	底部高台状			明褐色	繩文山形?	
12	126	弥生鏡	"			へら構きの芯縁を5条以上施す。沈底下に刺突	ヘラケズリ		茶褐色	前期	
13	126	"	"	14.1		上縁3条、肩部に3条以上	ヘラケズリ		暗褐色		
14	126	"	"	13.9		上の凹縫	4条の回線を施す	ヘラケズリ	外側 黒褐色		
									明褐色		
15	126	"	"	16.1			ヨコナデ? ヘラケズリ		黒茶褐色	風化	
16	126	"	"	(26)			ヨコナデ ヘラケズリ		明褐色	風化	
17	126	"	"	23.2		口縁端縁には4条の凹縫を施す	ヘラケズリ		はだ色		
									暗茶褐色		
18	126	"	"	19.3		5条の平行波線かなり摩滅している	ユビオサエ ヘラケズリ		淡茶褐色		
19	126	"	"	15		口縁に4条の凹縫			明褐色		
20	126	"	"	14		肩部にへら刺穴	ヨコナデ ヘラケズリ		淡灰褐色		
						口縁端はやや肥厚			茶褐色		
21	126	"	"	段状遺構	15.5	6条の擬凹縫	ヨコナデ ヘラケズリ		淡灰茶褐色		
22	126	"	"	9					淡褐色		
23	126	弥生底部	8-2区 下層		(5.2)				(断面墨褐色)		
24	126	弥生環	"			脚部		内面に歯り模	明褐色		
						4					
25	126	磨製石斧	"	長さ 6.1	幅 6.15	厚さ 3.45 重さ 148.9g	全面ていねいな研磨				
26	126	打製石斧	"	残存長 5.8	幅 4.5	厚さ 1.65 重さ 55.14g			暗緑褐色		
27	126	磨製石斧	"	残存長 8.4	幅 4.6	厚さ 2.2 重さ 131.31g			淡緑灰色		
28	126	"	"	残存長 9	幅 5.2	厚さ 3.9 重さ 252.39g	高支持痕あり		淡緑灰色		
29	126	"	"	長さ 7.9	幅 5.25	厚さ 1.95 重さ 106.48g	上部は再加工か?		表面 明灰色 断面 暗灰色		
30	126	"	"	残存長 8.4	幅 4.5	厚さ 1.7 重さ 103.91g			暗灰色		
31	126	"	"	残存長 7.3	幅 4.5~5	厚さ 3 重さ 116.76g	高支持痕あり		淡緑灰色		

古八幡付近遺跡 8区出土石器計測表

番号	石材・器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	安山岩・スクレイバー	4.4	4.5	1.2	25.59	
2	安山岩・スクレイバー	5.1	3.4	0.7	15.01	
3	安山岩・石礫	1.8	1.3	0.2	0.47	
4	同 上	1.9	1.5	0.3	0.77	
5	同 上	2.5	1.7	0.7	2.02	
6	同 上	2.4	1.3	0.5	0.98	
7	同 上	1.5	1.4	0.3	0.45	
8	同 上	1.4	1.1	0.2	0.34	
9	同 上	2.7	2.3	0.4	2.23	
10	同 上	2.3	1.4	0.4	1.04	
11	安山岩・石礫	2.6	1.8	0.4	1.81	
12	同 上	3.9	3.6	0.7	8.23	
13	黒曜石・コア	2.5	2.1	1.2	6.52	
14	同 上	2.1	1.6	1.0	3.21	
15	同 上	3.2	1.6	1.4	5.91	
16	同 上	2.2	1.5	1.2	3.29	
17	同 上	2.4	1.7	0.9	3.90	
18	同 上	3.5	2.1	1.3	7.02	
19	黒曜石・くさび形石器	3.2	1.4	1.1	3.81	
20	同 上	2.5	1.7	1.1	3.35	
21	黒曜石・二次加工品	3.3	2.0	0.8	4.62	
22	同 上	2.0	1.5	0.6	1.92	
23	同 上	2.0	1.3	0.5	1.79	
24	同 上	2.4	2.4	0.7	3.58	
25	同 上	4.3	3.2	0.7	7.72	
26	同 上	3.0	1.3	0.7	2.35	
27	同 上	3.0	1.6	0.7	3.31	
28	同 上	2.7	1.4	0.5	1.96	
29	同 上	1.8	1.5	0.6	1.47	
30	同 上	1.6	1.4	0.4	0.89	
31	同 上	2.9	1.4	0.7	2.77	
32	黒曜石・石礫	1.9	1.5	0.3	0.76	
33-1	同 上	1.6	1.1	0.4	0.79	
33-2	同 上	1.8	0.9	0.3	0.48	
33-3	同 上	0.9	0.8	0.3	0.16	
34	同 上	2.2	1.9	0.3	1.32	
35	同 上	1.5	1.0	0.4	0.38	
36	同 上	1.3	0.6	0.3	0.20	
37	同 上	2.5	0.9	0.7	1.41	
38	同 上	1.5	1.5	0.3	0.43	
39	同 上	1.6	1.3	0.2	0.38	
40	同 上	1.3	1.1	0.1	0.16	
41	同 上	1.0	1.2	0.3	0.21	
42	同 上	2.1	1.7	0.3	0.60	
43	同 上	1.6	1.5	0.4	0.77	
44	同 上	2.0	1.5	0.3	0.93	
45	同 上	1.5	1.3	0.2	0.39	
46	同 上	1.7	1.4	0.3	0.42	
47	同 上	2.5	1.6	0.4	0.92	
48	同 上	1.7	1.0	0.3	0.32	
49	同 上	1.8	1.3	0.5	0.47	
50	黒曜石・異形石製品	2.0	1.6	0.7	2.09	
51	新島城?黒曜石・剥片	1.9	1.6	0.4	1.45	
52	同 上	2.3	1.5	0.6	1.48	

古八幡付近遺跡 黒曜石剥片計測表

番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	1.5	1.2	0.4	0.71	85—5	1.5	1.3	0.4	0.69
3	3.3	1.4	0.7	2.83	85—6	1.8	1.2	0.4	0.71
4	3.4	1.5	1.2	4.84	86—	1.9	1.0	0.2	0.21
5	3.4	2.1	0.8	3.99	87—	1.6	1.4	0.3	0.72
6	2.9	1.0	0.5	1.16	88—2	2.5	0.8	0.2	0.14
7	2.5	1.1	0.5	1.74	88—2	2.5	0.8	0.2	0.15
8	2.1	1.3	1.0	2.04	89—	2.6	1.6	0.3	0.95
9	1.8	1.0	0.3	0.50	90—	1.9	1.0	0.2	0.26
11—1	1.3	0.8	0.3	0.28	91—	1.4	0.9	0.3	0.31
11—2	1.8	1.5	0.2	0.50	92—	3.1	0.9	0.3	4.37
12	1.3	1.0	0.4	0.55	93—	2.2	1.9	0.6	1.08
13	2.5	1.8	0.8	3.89	94—	1.0	0.7	0.2	0.31
14	2.1	1.8	0.5	1.40	95—	2.3	1.3	0.5	1.42
16	1.5	0.7	0.6	0.51	96—	1.5	0.8	0.3	0.29
17	1.9	1.7	0.3	1.08	97—	1.8	1.1	0.7	2.05
20	1.9	1.7	0.4	1.18	98—	1.4	1.4	0.4	0.58
21—1	1.4	1.0	0.7	0.75	99—	2.0	1.5	0.4	2.05
21—2	2.0	1.5	1.1	3.13	100—	2.0	1.5	0.7	0.98
23	2.0	0.9	0.5	0.80	101—	2.4	1.0	0.5	1.88
24	2.8	1.1	1.0	2.41	102—1	3.6	1.5	1.0	4.20
25—1	1.9	1.6	0.9	2.34	102—2	2.2	1.1	0.4	0.94
22	2.1	1.2	1.2	2.56	102—3	2.0	1.2	0.4	0.85
23	2.6	2.3	0.3	1.91	102—4	2.0	1.0	0.5	0.95
24	1.8	1.5	0.2	1.01	102—5	2.0	1.4	0.3	0.72
25	1.9	1.6	0.5	1.62	102—6	1.4	1.3	0.4	0.61
26	1.5	1.4	0.7	1.60	102—7	1.9	1.3	0.1	0.46
28	2.5	2.4	0.7	4.09	102—8	1.4	0.8	0.2	0.31
29—1	1.9	0.9	0.3	0.26	102—9	2.4	1.0	0.5	3.00
29—2	1.1	1.1	0.1	0.10	102—10	1.5	0.8	0.1	0.29
29—3	2.0	1.3	0.2	0.60	102—11	1.2	0.9	0.2	0.17
30	3.2	1.1	0.9	2.23	102—12	1.2	0.6	0.1	0.18
31	2.1	1.9	0.8	4.05	102—13	0.7	0.4	0.2	0.06
32	2.4	1.6	0.6	2.65	103—	2.0	1.5	0.3	0.95
34	2.7	1.6	0.5	2.45	104—	2.0	1.1	1.0	2.20
35	2.6	1.8	0.5	2.16	105—	2.6	1.6	0.3	1.65
36—1	0.9	0.6	0.2	0.07	106—	1.7	1.3	0.7	1.83
36—2	2.0	1.6	0.8	2.07	107—	1.8	1.5	0.5	1.41
36—3	2.2	1.7	0.4	1.40	108—	2.5	1.8	0.8	2.95
38	2.6	2.6	1.0	5.07	109—	2.5	1.8	0.8	4.94
41—1	1.4	1.5	0.5	1.18	110—	2.4	1.0	0.6	1.25
41—2	1.9	1.5	0.9	1.99	111—	1.6	1.3	0.6	1.07
41—3	1.5	1.1	0.5	0.63	112—	1.5	1.4	0.2	0.29
42—2	1.4	0.8	0.1	0.19	113—	1.6	1.3	0.3	0.58
42—3	2.0	1.5	0.9	2.13	114—	1.4	1.0	0.2	0.25
42—4	2.1	0.9	0.7	1.76	115—	2.3	1.3	0.4	0.99
42—5	2.2	2.0	1.7	2.18	116—	2.0	1.6	0.5	1.25
43—1	3.1	2.6	1.2	8.41	117—	1.1	1.0	0.3	0.25
44—2	1.3	0.5	1.48	118—	1.1	1.0	0.2	0.21	
45—2	2.0	2.1	0.2	1.00	119—	2.3	1.5	0.5	1.53
46—2	2.3	1.9	0.6	1.88	120—	2.6	1.7	1.0	3.69
48—1	2.6	2.6	1.8	7.95	121—	1.6	0.8	0.6	0.80
49—1	2.0	1.3	0.6	1.49	122—	2.0	1.0	1.0	1.81
49—2	3.0	2.1	0.4	1.98	123—1	2.5	1.2	0.8	2.26
51	2.2	1.2	1.1	2.48	123—2	1.5	1.1	0.5	0.59
52	1.6	1.4	0.2	0.45	124—1	1.1	1.3	0.2	0.35
53—1	1.0	0.9	0.2	0.17	125—	2.6	1.3	0.8	2.83
53—2	1.2	0.8	0.2	0.26	126—1	1.8	1.5	0.8	1.78
53—3	1.5	1.3	0.3	0.53	126—2	1.2	0.9	0.2	0.13
53—4	2.3	1.5	0.4	1.15	127—	2.3	2.2	0.2	0.62
58—2	2.8	2.5	0.5	3.20	128—	2.4	1.2	0.3	0.63
59—1	2.5	2.5	0.5	3.25	129—	2.2	1.1	0.6	2.34
60—1	1.6	1.2	0.5	0.75	130—	2.3	1.5	0.5	1.22
60—2	0.8	0.7	0.2	0.10	131—	1.3	1.0	0.2	0.18
60—3	0.8	0.6	0.1	0.07	132—	1.1	1.0	0.4	0.41
60—4	2.0	1.2	0.4	0.75	133—1	1.7	1.3	0.4	0.99
60—5	2.0	0.6	0.2	0.10	133—2	2.5	1.5	0.4	0.90
62—1	1.2	1.1	0.3	0.38	134—	2.5	1.3	1.1	2.79
62—2	1.7	1.3	0.8	1.74	135—1	1.5	0.7	0.6	0.83
69	1.4	1.3	0.4	0.62	135—2	1.2	1.1	1.1	1.86
71	2.4	1.7	0.5	4.41	136—1	1.2	0.8	0.2	0.26
78	2.5	0.7	0.5	2.13	137—1	1.7	0.7	0.2	0.19
79—1	1.6	0.7	0.5	0.05	137—2	1.5	0.6	0.2	0.11
79—2	0.9	0.8	0.1	0.06	138—1	1.5	1.0	0.4	0.56
79—3	0.7	0.7	0.1	0.05	138—2	1.5	1.0	0.2	0.26
79—4	1.1	0.9	0.1	0.17	138—3	1.0	0.6	0.2	0.13
79—5	1.2	0.7	0.5	0.34	139—1	1.8	0.9	0.4	0.62
79—6	1.2	1.0	0.2	0.18	139—2	1.8	0.7	0.4	0.63
79—7	1.5	1.4	0.3	0.56	140—	1.7	1.2	0.3	0.58
79—8	1.7	0.8	0.5	0.80	141—	1.8	0.8	0.6	0.57
80	1.7	1.5	0.5	1.62	142—	1.8	0.9	0.4	0.44
81—1	1.5	1.1	0.3	0.51	143—	1.5	1.2	0.3	0.60
81—2	1.6	1.4	0.3	0.56	144—	1.5	1.2	0.3	0.51
82—1	0.9	0.9	0.2	0.11	145—	2.8	1.2	0.8	2.67
82—2	1.7	0.7	0.4	0.62	146—	1.2	1.6	0.2	0.24
83	3.0	1.4	0.7	2.94	147—	1.4	1.1	0.3	0.51
84	1.8	1.3	0.4	0.86	148—1	1.4	0.6	0.4	0.25
85—1	2.1	1.1	0.8	1.32	148—2	0.9	0.5	0.1	0.04
85—2	2.0	0.7	0.1	0.06	150—	2.9	1.2	0.4	1.44
85—3	1.1	0.9	0.4	0.36	151—	2.9	0.2	0.8	3.53
85—4	1.6	1.2	0.3	0.52	152—1	1.3	0.7	0.2	0.27

古八幡付近遺跡 安山岩剥片計測表

番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	1.8	1.7	0.4	1.83
2	1.7	1.5	0.3	0.56
3	2.5	2.7	0.3	1.82
4	5.0	2.7	1.2	16.67
5	2.5	2.5	0.6	2.86
6	2.2	2.1	0.4	1.56
7	2.5	1.5	0.4	1.10
8	2.6	1.5	0.3	1.09
9	3.7	3.0	0.7	5.88
10	4.2	2.6	0.5	7.28
11	4.2	2.0	0.6	4.90
12	3.8	2.4	0.4	6.81
13	3.7	2.6	0.5	6.57
14	3.0	2.6	0.4	4.42
15	4.1	2.6	0.4	6.18
16	2.8	1.8	1.0	1.04
17	2.8	1.9	1.0	3.25
18	3.4	2.0	0.8	6.32
19	2.7	2.0	0.7	3.30
20	2.0	1.5	0.6	1.73
21	1.7	1.4	0.6	1.94
22	6.3	3.6	2.9	39.79

8-2区南側掘立柱建物群（第70・152図、写真図版38・60～63）

8-2区南側上層では、古代から中世の掘立柱建物を9棟検出した。掘立柱建物の主軸は、北東側で検出した建物は北西に向く、南東側で検出した建物はこれと直行するように北東に向いている。また、建物16の西側梁行きと建物23の西側桁行きはほぼ直線上に並び、2棟の間隔はおよそ25尺である。同様に建物17の西側梁行きと建物21の西側桁行きもほぼ直線上に並び、2棟の間隔はおよそ20尺だった。さらに各建物は重複することがあっても、柱穴掘り方は大形のものですから全く切り合っていなかった。こうした状況から掘立柱建物群は各建物の正確な前後関係や同時性などは不明だが、一定期間に企画性をもって建てられたことは間違いない。建物群は主軸を丘陵の北側でなく南東側の地形に合わせており、調査区外にも平坦な地形が続いているので、調査区外にも建物群は統一、中心もそこにある可能性がある。

各建物の柱穴・柱間は遺跡内で最も整っており、ほとんどの柱間距離が30cmの倍数に近かった。そのため柱穴を検出する際は位置を予測することもできた。さらにほとんどの柱穴で柱痕（抜き取り痕も含めて）を平面的に確認でき、多くの情報を得ることができた。まず、この建物群の柱穴からは精緻な建物を建てるための工夫が窺える。柱を押入した後で柱間を揃える調整ができるように予め掘り方を大きくし、それでも調整しきれない場合は掘り方を拡張している。柱は上層を基準に合わせるので、短い場合は掘り方を埋め戻し、なお足りなければ石を使って調節する。これは遺跡内のそれ以外の時代では見られない特徴である。遺跡内の柱穴ではこれより時代が新しくなると、柱の太さに関係なく掘り方が小さくなる傾向が見られる。次に、各建物は平面的には比較的整っているが、掘り方の底面レベルは不揃いな点が注意される。この理由としては、掘立柱建物を建てる基準はあくまで平面形であって、柱穴掘り方は柱の位置を決めた段階で大まかに掘るためだと考えられる。このため掘り方の深さは旧地形にも左右され、建物が斜面に位置する時は建物21の様に、掘り方の底面レベルが斜面上方と下方で大きく違ってくることもありうる。こうした状況から占八幡付近遺跡で抽出した建物には柱穴底面レベル揃わない、または極端に違うものがあるが、ある程度平面的に整っていれば十分復元できると判断した。

このほか掘立柱建物群周辺で、建物と平行する柱列と鍛冶炉を検出した。柱列は柱間が整っているわりに掘り方の様が小さく浅いものが目立つ。これらの柱列は単独で立っていたとは考えにくく、それぞれ付近の建物に伴うものと考えられる。詳しい性格は不明だが、建物に接する簡単な上屋を支えていたとも考えられる。鍛冶炉は炉2が建物19の柱穴に切られているので、建物群以前か同時期のものと考えられる。

掘立柱建物群の時期は、柱穴内や周辺で出土した遺物により平安時代から中世初頭と判断されるが、性格については遺跡全体の様相を踏まえた上で第3章で述べることにする。

建物16（第73・80図、写真図版63・127）

建物群の最も北で検出した。2間×3間の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は平面円形で、梁行きの中間柱は桁行きの柱より掘り方が小さい。このことは掘立柱建物群の他の建物にも共通した特徴である。柱痕を観察すると、柱痕そのものは桁行きと変わらないが、掘り方が浅いので地山に接しているものが多い。これは、建物を建てる際に初めに桁行きの掘り方を余裕をもって掘っておき、桁行きの柱の位置やレベルが決まった後で梁行きの掘り方を掘る。その結果梁行きの中間柱は無駄が少ないのでないかと考えられる。なお、建物16の東側梁行きの中間柱はトレンチで掘りとばして

しまった可能性がある。柱間距離は梁行きが6.5尺と8尺を指向したものと見られる。桁行きは北側が7.5尺を、南側は8尺と7尺を指向したものと見られる。北側の柱が等間隔であるのに対し、南側は中の柱間が狭く、全体の長さも北側よりやや長くなっている。P9は二段掘りになっているが、柱間を調整する際に東側にずらしたものと思われる。

遺物はP4の柱痕部分から土師質の坏（第80図1）が出土したのみである。摩滅が著しく調整はほとんど判断できないが、底径は7.6cmと大きめで体部はやや内彎する。平安時代末頃のものか。この坏が建物廃絶後に流れ込んだと考えられるので、建物16の時期は平安時代後期以前と考えられる。

建物17（第74・80図、写真図版63～66・126・127）

建物16の南東で検出した建物で、規模は建物群中最大である。柱穴を黒茶褐色の造成土に掘り込んでおり、最初に検出した建物でもある。建物16と同じ軸で隣接して建てられているので、当初同一の建物の可能性も考えた。しかし、建物の変わり目で梁行きが狭くなり、桁行きの柱間が極端に短くなることから別々の建物と判断した。1間×5間の柱穴配置を持ち、梁行きの中間柱は検出されなかった。東側は試掘トレンチによってとばした可能性があるものの、西側は掘り方を持つような柱穴が初めてから存在しなかったと考えられる。柱穴掘り方は平面円形または不整積円形を呈し、P8・10・12は柱間を整えるために掘り方を拡張したことが明確である。掘り方の規模は検出面で1m近くなるものもあり、確認した柱痕も径25～30cmと他の建物より大きめの柱が使われていたようである。P10は掘り方に扁平な石を据えているが柱痕が届いていない。建て替え又は柱の据え直しを行っていると考えられる。柱間距離は梁行きが16尺を、桁行きが7尺を指向したものと見られる。遺物（第80図）はP4の掘り方から3が、P9の柱痕部分上面で2・4が出土した。3・4は須恵器の坏だがどちらも焼成不良のため、一部淡茶褐色を呈し軟質である。平安時代前半のものと思われる。掘り方埋土からの出土だが口縁を上にして出土している点が注意される。（写真図版59下）。2は土師質の坏で、断面は芯が暗灰色を呈し、建物16から出土した1とよく似た焼成である。

建物17の時期は、掘り方から平安時代の坏が出土しており、それ以降であることは間違いない。

建物18（第75図）

8-2区で検出した建物の中では最も南東に位置し、建物の一部が調査区外にはみ出している。P1から直角に折れた位置で柱穴を検出できなかつたので、さらに南東に建物が伸びる可能性がある。2間×3間以上の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は平面円形で、規模は他の建物と比べかなり小さい。梁行きの中間柱P5は特に小さく、掘り方埋土を確認できなかつた。確認した柱痕は径15cm前後なので、使われた柱は他の建物とほぼ同じサイズのものと思われる。柱間距離は梁行きが7尺、桁行きが6尺を指向したものと見られる。遺物は出土しなかつた。

建物18は他の建物との軸のずれが大きく柱穴掘り方も小さいので、やや時間差のある最も新しい時期の建物と思われる。

建物19・炉2（第75図、写真図版38・63・67）

掘立柱建物群のほぼ中央に位置している。検出した建物の中では特殊な24を除いて最も規模が小さい。柱穴配列は2間×3間で、比較的精緻な建物である。柱間距離は東側の梁行きが6尺、西側の梁行きは5尺と7尺を指向している。桁行きは北側が6尺と5.5尺、南側が6尺を指向したものと見られる。建物19は梁行きの柱穴に特徴がある。すでに述べたように、通常梁行きの中間柱は桁

行きに比べて掘り方が小さい。ところが建物19の西側の中間柱P5は桁行きの柱穴と変わらない規模の掘り方だった。これはP5に建物の構造上重要な柱が立てられるので、桁行きと同時に柱の位置が決められた為と思われる。さらにP5に関しては、P6との柱間が建物の中で意図的に最も長くされている点が注意される。以上のP5の特殊性については様々な理由が考えられるが、建物19の入り口が西側に造られていた可能性もある。このほかP1・2・4・8の柱痕部分には柱痕とほぼ同じ太さの石が刺さっていた（写真図版61上）。柱の長さを調節するのに用いた石と思われる。遺物は出土していない。

炉2は建物19のP7に切られる位置で検出した。規模は23×35cmを測り、黒色の炭層の上で淡灰色の粘上面を検出した。また周辺ではが底溝や羽口が出土している。黒茶褐色土の面で検出し建物19に切られるので、ほぼ同時期のものと考えられる。炉2がどの建物に作るかは判断が難しいが、検出した位置から建物20に作る可能性が最も高い。

建物19の時期は、建物21に伴うと思われるが¹²を切っているので、建物17・20より新しいと考えられる。

建物20（第76図、写真図版63）

建物19の南東に隣接して検出した。北側の桁行きが建物19とほとんど直線上に並ぶので、建物16・17の時と同様1棟の建物になる可能性も考えた。2間×3間の柱穴配置を持つが、西側の梁行きでは中間の柱が検出されなかった。また、P7では柱痕が2つ確認された。柱間距離は梁行き東側が7尺と7.5尺、西側が14.5尺を、桁行きが7尺を指向したものと見られる。P6では柱痕を確認できなかったが、丁度柱が置かれる位置に石が刺さっていた。このような石は建物の柱の位置を反映していると考えられ、P6の様に掘り方が無い場合でも注意が必要と思われる。

遺物が出土していないため詳しい時期は不明である。

建物21（第77図、写真図版63）

建物19・20・22と重複する位置で検出した。建物の西側が建物17の西側と直線上に位置するのでセットになる可能性がある。2間×3間の比較的整った柱穴配置を持つ。西側の中間柱は建物19と同じく北側に寄っていた。柱穴掘り方は平面円形で、建物17に次ぐ規模である。また、II地盤が高くなる東側の柱穴P1・2・9の掘り方底面レベルが浅くなる。こうした状況は、削平前の掘り方の深さが柱穴底面レベルを統一することを意識したものではなく、地表面からの深さに関係していたことを示すものと考えられる。P2では柱痕が確認できなかったが、掘り方と同じ面で検出した扁平な石が柱の位置を示していると思われる。柱間距離は東側の梁行きが7.5尺を、西側が6.5尺と8尺を指向している。桁行きは基本的には7尺で、一部7.5尺を指向した可能性がある。このほか建物19の柱穴に切られる炉2は、建物21に伴う可能性が高いと考えている。

柱穴内から遺物が出土していないので建物19の時期の詳しい時期は不明である。柱穴掘り方が他の建物より大きいので、切り合い関係にある建物19・20・22に先行する、最も古い時期の可能性がある。

建物22（第76図、写真図版63）

建物群の最も南に位置している。建物の南西が調査区外にはみ出すため正確な規模は不明である。2間×2間以上の柱穴配設を持つ。柱穴掘り方は平面円形で、検出面での径が30cm以下の小さいものもある。柱間距離は梁行き桁行きともほぼ7尺を指向したものと見られる。上軸は北東側の建物

と直行する。また、建物22の西側桁行きは、建物17の西側梁行きから約25cm北西に併行にずらした線上に並んでいる。重複する建物21の後に建物17を意識して立てられた可能性がある。

柱穴から遺物が出土していないので詳しい時期は不明である。

建物23(第78・80図、写真図版61)

建物群の最も西側で検出した。建物の南側が調査区の外にはみ出しているので、正確な規模は不明である。検出した柱穴は2間×4間以上の配置で、南側にもう1間伸びて建物17と同規模の建物になる可能性がある。柱穴掘り方は検出面での径が50cmを越えるものが3つしかなく、建物17と比較すると明らかに小さい。柱間距離は梁行きが8尺を、桁行きが7尺を指向したものと見られる。主軸は建物16と直行し、西側の柱の並びがほぼ同一線上に並ぶのでセットになる可能性が高い。これは建物17・22の位置関係に似ており、同時期の建物配置を考える材料になると思われる。

遺物(第80図)は、P4から須恵器の椀(5)が、P6から脚部(7)が出土した。5は建物16～24周辺で最も多く出土するタイプで、時期は10世紀頃と思われる。7は一見すると土製支脚のようだが外面の調整はヘラとナデによる丁寧なもので、かなり薄くなっているが赤色顔料も確認できる。脚部が充填してあるため天地は不明で、弥生土器の可能性もある。

建物23の時期は柱穴内の遺物から平安時代中頃以降と思われる。

建物24(第77図、写真図版61)

建物23の柱穴配置内で検出した。1間×4間以上の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は、建物のコーナーに位置するP5・6が平面楕円形を呈し、その他は円形である。P5・6は他の柱穴より掘り方上面が大きく、建物の外側(北側)に向かってハの字に聞く点が注目される。このような形態の柱穴掘り方を持つ建物は、建物24以外に遺跡内で検出していない。また、遺跡周辺でも類例を見ない。柱間距離は梁行きが7.5尺を、桁行きが3.5・4.5・5.5・9尺を指向したものと見られる。柱穴から遺物は出土していない。

建物24は他の建物と違った柱穴配置をしており、主軸もずれが大きい。このため他の建物と時期差があると思われるが、前後関係は不明である。

柱列4～7・炉1(第70・79図)

掘立柱建物の周辺では同じ柱列を4列検出している。各柱列は建物になる可能性はほとんど無いと考えている。しかし、柱間距離は柱列4～6が7尺、柱列7が6尺を指向しているので、建物群に伴うものと判断した。柱列4は建物16の約9.5尺南東に建物と平行して並んでいる。また、P3が建物16の東側梁行きの延長線上に位置するので、建物16に伴う可能性が高い。各柱穴は平面円形でP1は掘り方が大きい。柱穴は径が小さいものの地山に深く掘り込んでおり、建物16に接する簡単な上屋を支えていたかもしれない。柱列4P1と建物16P7のほぼ中間で被熱面を確認した。ほとんど削平されているが、一部粘土も確認できたので#1とした。検出した位置から建物16と同時期の可能性が高い。柱列5は柱列4と同様の理由で建物23に伴うと考えられる。特にP1は建物23の西側桁行きの線上に同じ柱間に位置し、掘り方の規模も変わらないので、建物の一部になる可能性もある。柱列6は建物21の南側桁行きとほぼ重複して検出した。柱列の軸は建物20に近く、検出した位置からも建物20に伴うものと考えられる。柱列7は建物23・24と重複する位置で検出した。柱間は他の柱列よりも短く、付近にセットになりそうな建物は無い。

建物16計測表

規 模	梁 行 き				板 行 き					
	2 間 (4.40m)				3 間 (6.95m)					
主 軸	N - 57° - W									
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	50×48	43×40	47×46	48×42	34×32	45×43	38×32	41×39	56×53
	底面標高 (m)	40.50	40.46	40.52	40.56	50.56	40.46	40.46	40.41	40.38
	柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9	P9-1
		2.26	2.30	2.25	2.00	2.38	2.40	2.15	2.40	4.40

建物17計測表

規 模	梁 行 き				板 行 き				
	1 間 (4.85m)				5 間 (10.51m)				
主 軸	N - 57° - W								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	70×69	88×78	88×74	73×62	60×59	62×61	72×60	81×68
	底面標高 (m)	40.22	40.32	40.50	40.22	40.40	40.33	40.30	40.40
柱 (cm)	番 号	P9	P10	P11	P12				
	上 面 深 (cm)	98×72	88×64	70×58	70×58				
柱 (cm)	底面標高 (m)	40.30	40.40	40.34	40.42				
	柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
		2.17	2.06	2.06	2.14	2.08	4.75	2.14	2.05
		P9-10	P10-11	P11-12	P12-1				
		2.10	2.15	2.04	4.73				

建物18計測表

規 模	梁 行 き				板 行 き				
	2 間 (4.18m)				3 間以上 (5.58m)				
主 軸	N - 50° - W								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	26×22	30×26	34×27	36×26	21×18	28×25	30×29	32×25
	底面標高 (m)	40.54	40.54	40.57	40.48	40.66	40.50	40.58	40.60
柱 (cm)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
	上 面 深 (cm)	75×48	26×23						
柱 (cm)	底面標高 (m)	40.52	(40.80)						
	柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
		1.87	1.66	1.90	1.48	2.15	1.85	1.75	1.74
		P9-10	P10-1						
		1.80	1.80						

建物19計測表

規 模	梁 行 き				板 行 き				
	2 間 (3.63m)				3 間 (5.43m)				
主 軸	N - 60° - W								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	41×40	46×40	40×40	50×47	56×50	47×45	51×42	52×47
	底面標高 (m)	40.48	40.49	40.59	40.59	40.39	40.41	40.38	40.43
柱 (cm)	番 号	P9	P10						
	上 面 深 (cm)	75×48	26×23						
柱 (cm)	底面標高 (m)	40.52	(40.80)						
	柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
		1.87	1.66	1.90	1.48	2.15	1.85	1.75	1.74
		P9-10	P10-1						
		1.80	1.80						

建物20計測表

規 模	梁 行 き				板 行 き				
	2 間 (4.40m)				4 間 (6.44m)				
主 軸	N - 56° - W								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	48×41	42×35	50×36	53×42	42×36	49×42	56×42	38×33
	底面標高 (m)	40.35	40.45	40.41	40.46	40.40	40.47	40.77	40.37
柱 (cm)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P9-1
	上 面 深 (cm)	2.00	2.10	2.17	4.40	2.20	2.12	2.12	2.13

建物21計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(4.52m)				3間(6.57m)			
柱穴 (cm)	N-58°-W							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
	上面径(cm)	46×43	58×54	61×55	68×60	41×56	67×62	51×45
	底面標高(m)	40.56	40.64	40.36	40.48	40.54	40.22	40.29
	番 号	P9	P10					
	上面径(cm)	68×67	36×34					
	底面標高(m)	40.48	40.78					
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
	柱間距離(m)	2.11	2.22	2.24	1.90	2.42	2.08	2.22
	P9-10	P10-11						2.12
	2.28	2.24						

建物22計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(3.32m)				2間以上(4.40m)			
柱穴 (cm)	N-32°-E							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
	上 面 径(cm)	34×30	41×39	47×45	37×33	28×26	34×34	37×35
	底面標高(m)	40.65	40.45	40.56	40.40	40.48	40.38	40.43
	番 号	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	
	上 面 径(cm)	2.20	2.20	2.16	2.16	2.10	2.14	
	底面標高(m)							
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
	柱間距離(m)	2.20	2.20	2.16	2.16	2.10	2.14	2.19

建物23計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(4.82m)				4間以上(8.30m)			
柱穴 (cm)	N-58°-E							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
	上 面 径(cm)	41×32	49×48	40×37	58×47	47×35	54×40	52×47
	底面標高(m)	40.16	40.38	40.38	40.22	40.48	40.40	40.31
	番 号	P9	P10					
	上 面 径(cm)	47×42	39×38					
	底面標高(m)	40.49	40.39					
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
	柱間距離(m)	2.12	2.13	2.05	2.40	2.42	2.09	2.10
	P9-10	P10-11						2.19
	2.14	2.06						

建物24計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	1間(2.17m)				4間以上(6.64m)			
柱穴 (cm)	N-23°-E							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
	上 面 径(cm)	43×49	34×30	23×22	64×44	48×34	31×28	42×36
	底面標高(m)	40.44	40.46	40.60	40.50	40.46	40.44	40.50
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
	柱間距離(m)	1.40	1.00	1.65	2.17	2.68	1.34	1.30
								1.32

建物16~24周辺出土遺物

建物周辺の灰褐色土及び耕作土からは、黒曜石の石鎚から銅製の煙管まで様々な遺物が出土した。この内弥生時代までの遺物は、本来下層の遺物と一体のものと判断されるので下層遺物とまとめて報告し、ここでは古墳時代以降の遺物を扱うこととする。

須恵器(第80・81図、写真図版126・127)

第80図6は須恵器の口縁部である。口縁端部は平坦で、外面には緻密な波状文が施される。全体に内彎し、遺跡周辺ではほとんど類例を見ない形態だが、江津市嘉久志町久本奥窓跡の搅乱土層から1点出土している。こちらは口径が54.7cmで6よりも約20cm大きい。器種は甕として報告されており、胎土は他の須恵器よりきめ細かい。6も甕の口縁の可能性を捨てきれないが、こうした口縁の甕が他に全く出土していないので、接点の無かった破片が脚の一部で器台になると想定してみた。また、6は建物22周辺で出土したが、同じ場所の建物造成土下で耳環(第82図5)が出土しており、建物群建設時に古墳が破壊された可能性もある。

第80図8~21は須恵器の蓋および坏・榙である。平安時代初め頃のものもあり、検出した建物の

内、最も古いものはこの頃まで遡るかもしれない。建物周辺で最も多く出土したのは16・17のタイプの碗である。時期は10世紀頃と思われ、幾つかに分類できる。16・17とも底部の端を回転ナデによって整えるが、16が底部全てに回転ナデを施すのに対し、17は端部以外は回転糸切りの後を残している。また、器高も高いものと低いものがある。こうした違いが時期差によるものなのか判断できなかった。今後類例の増加を待って検討したい。20・21は口縁下に段がつくもので出土状況から古代のものと判断したが、底の口縁の可能性もある。22・26は須恵器の皿である。26は内面がツルツルで僅かに墨痕も残っていることから、硯として使用されたと思われる。27の須恵器は自然釉の付着状態から脚部と判断した。内面に花弁の様な文様が施されているが、造跡周辺で全く類例を見ない。脚部内面に文様が施されるのか疑問も残り、製作時に偶然ついたともみられる。時期についても不明と言わざるを得ない。

須恵器甕は比較的小さな破片が少量出土した。第81図3は内面および断面に黒色の釉が付着し、内面には巻の破片が溶着している。破片になった後に再利用したものと考えられる。

土師器・土師質土器（第80・81図、写真図版127）

5は土師器の甕である。形態は6・7区で出土する奈良時代の甕と似ているが、色調は暗茶褐色で奈良時代以前の土師器のように赤っぽい色調ではない。また、建物群周辺では煮炊き具がほとんど出土しておらず、奈良時代以前と大きな違いがある。6～15は土師質の皿・壺である。須恵器と同じ形態のものから明らかに中世のものまで時期幅がある。21～33は土鍤である。紡錘形の直景は、焼成が須恵器に近い26が3gと非常に軽い以外は、ほぼ10・30・50g台に分かれている。30・50g台の土鍤には、最大径付近に孔と直行する方向の溝が明確に残るものがある。土鍤を網に固定した際にいたものであろうか。ただし溝の幅は1.5～2mmで、幅4～5mmの孔径と比べるとかなり細い印象を受ける。筒状の土鍤では28・29のような大型品も出土している。最小孔径が18mmもあるためか重量は70gとさほど重たくない。古八幡付近遺跡ではこの種の土鍤は出土量が少ないので、平安時代以降の遺構周辺でのみ出土している。胎上・色調・焼成も中世の土師質土器と同様なので、新しい時期のものと考えている。他の土鍤に比べ極端に孔径が大きく、出土数が少ない等不明な点も多い。

その他の遺物（第80・81図、写真図版127・128）

擂鉢が2点出土している。第80図17は網片であるが東播系須恵器の擂鉢口縁と思われる。時期は鎌倉時代初頭と考えられる。16は備前焼擂鉢で、内面には9条の撻り目を放射状に施す。時期は備前焼編年Ⅳ期、15世紀のものと思われる。16は建物16と北側の基壇状の高まりの中間で出土した。また、同一個体と思われる破片が8-1区北側で、第72図8の青磁碗等と共に出土している。18は備前焼と思われる壺の口縁で、16とほぼ同地点で出土した。19は鍋又は釜と思われるもので、内面には煤が付着している。非常に硬い焼成である。20は建物24の南側で出土した刃口の破片で、これ以外にも接合できなかった破片が4点ある。このほか貿易陶磁の破片（第81図1～4）が出土したが、いずれも網片で数も少なかった。7・8は鉄釘で、8は長さ20.4cmを測る。かなり大型の建物に使用されたと思われるが、調査区内ではこの2本しか出土していない。このほか掲載していないが、馬齒が1本だけ出土している。

古八幡付近遺跡 建物16~24出土遺物① (第80図)

順序	器種	基盤	出土地點	「前」(cm)	「後」(cm)	「左」(cm)	形態・文様の特徴	測定	色	調査	備考
1	127	土師質環	建物16 P4			7.6		回転ナデ? 回転糸切り?	淡褐色		
2	127	"	建物17 P9			7.4		底面ナデ?	外側 淡褐色 内側 透明白色		
3	126	須恵器环	建物17 P4	12.9	4.7	6.5	口縁端部はシャープに先 端にわざりて外反させる	回転ナデ 回転糸切り	外側 灰色 内側 淡茶褐色		
4	127	"	建物17 P9	14	4.7	7.5	端部は先端にわざり て外反せる	回転ナデ	外側 灰色 内側 淡茶褐色		
5	127	須恵器碗	建物23 P4	14.0			口縁内湾気味	回転ナデ	上半 淡灰色 下半 淡茶褐色		
6	127	須恵器蓋台	建物16~ 24周辺	35.0			口縁、脚部に沈線と4~ 5条の腰溝波状文	回転ナデ	受部 淡褐色 脚部 灰色		
7	127	脚部	建物23 P6			7.6		ヘラミガキ	底部 淡褐色 外側には赤色 釉料を残る 青灰色		赤色顔料 発生の可能 性あり
8	127	須恵器環蓋	建物16~ 24周辺	5.8	2.15	12.2	棒状つまみ 口縁外側に凹曲	回転ナデ 回転ヘラケリ後回転	青灰色		
9	127	"				13.6	口縁端部は内側に強く 折り曲げる	回転ナデ	淡青灰色		
10	127	須恵器環身	"			高台状 7.2		底部回転ナデ	淡青灰色		
11	127	"	"			6.6	高台低い 口縁大きく開く	回転ナデ 回転糸切り	青灰色		
12	127	土師質環	"			6.6	低い高台 ぼく約6mmの 穴を空孔(焼成後)	底面回転ナデ	灰白色		
13	127	須恵器環	"			7.6	低い高台	底面回転ナデ?	灰白色		
14	127	"	"			6.4		回転ナデ 回転糸切り	淡灰色		
15	127	須恵器碗	"			5	断面三角形のつまみ出 し高台	底部回転ナデ	淡灰色		
16	126	"	"	13.1	5.5	6	高台はつまみ出し 口縁落葉は大きく外反する	底面回転ナデ	灰色		
17	126	須恵器碗	建物16~ 24周辺	12.7	4.75	5.8	口縁落葉は大きく外反する 高台つまみ出し	回転糸切り	明灰色		
18	"	"		(13.4)				回転ナデ	青灰色		
19	126	"	"	12.4	4.5	6.5	口縁直輪的	回転ナデ 回転糸切り	明灰色		
20	127	須恵器環	"		12.8		体部に支拂	回転ナデ	青灰色		
21	127	"	"		12.4			回転ナデ	淡灰色		
22	127	須恵器皿	"		13.8			回転ナデ	淡青灰色		
23	127	須恵器蓋	"				口縁滑脱面	回転ナデ	外側 灰白色 内面 灰色		
24	127	"	"				回縁 列点文	回転ナデ	青灰色		
25	127	"	"				口縁鉄錆	回転ナデ	青灰色		
26	127	須恵器皿	"	14.0	2.75	5.2	口縁上方に星波	回転ナデ 回転糸切り	青灰色		
27	127	須恵器碗	"				脚漏筋 自然釉 れんべんのよ	回転ナデ	自然釉		
28	127	須恵器蓋	"			14.6	14.2 うなぎ文様(?)	ナデ 回転ナデ	灰色		

古八幡付近遺跡 建物16~24出土遺物② (第81図)

順序	器種	基盤	出土地點	「前」(cm)	「後」(cm)	「左」(cm)	形態・文様の特徴	測定	色	調査	備考
1	127	須恵器蓋	建物16~ 24周辺					タタキ 内面ナデ	青灰色		
2	127	"	"					平行タタキ 内面ナデ	淡灰色		
3	127	"	"					同心円当具痕	淡灰色		
4	127	"	"					格子目タタキ			
5	127	土師質蓋	"	23				タタキ 同心円当具痕 ヨコナデ ヨコナデの 後ユビオサエ 部 タテ方向のハケメ有り	青灰色 暗茶褐色		
6	127	土師質皿	"	14.1			端部はシャープに先細り する		淡灰色		
7	127	"	"	6.9	1.5	5.7	口縁短く内湾	回転ナデ 回転糸切り	暗黒茶褐色	黒化	
8	127	"	"	7.1	1.5	5	"	回転ナデ 回転糸切り	暗茶褐色	-	
9	127	土師質環	"			5.9		回転ナデ 回転糸切り	灰白色		
10	127	"	"			5.4		回転糸切り?	外側 黄褐色		
11	127	"	"			6.8		ヘラ切りか?	淡褐色		
12	127	"	"			6.7	低い高台	回転ナデ	外側 明灰色 内面 開窓 乐白色		
13	127	"	"			5.8	端部を高台状につまみ 出す	回転ナデ	明灰褐色		
14	127	"	"			6.4	底部厚い	回転ナデ	淡褐色		
15	127	"	"			6	"	回転ナデ 回転糸切り	外側 淡茶褐色 内面 暗茶褐色		
16	127	雜面殘片鉢	"	29.6			9~10条のクシ日 片口	回転ナデ	外側 淡茶褐色 内面 淡褐色	青褐色	
17	127	東横系擂鉢	建物16~ 24周辺					回転ナデ	内面 淡褐色		
18	127	繩面残蓋	"	11.8			口縁略状	回転下ナデ	淡茶褐色	自然釉	

測定番号	年月	名	種類	出土位置	寸法(cm)	重さ(gm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	調査	色	調査	備考
19	127	丸器(?)	建物16-24周辺					把手		外面 明灰白色		
20	127	羽口								内部 黒色(スズ)		
21	127	土瓶	"	長さ 幅 重さ	手捏ね					無釉(ガラス質)		
22	127	"	"	4.5 1.6 1.0g	管状					明黄灰色		
23	127	"	"	2.3 4.8 20g	手捏ね 管状					暗黄褐色		
24	127	"	"	3.9 1.8 9.0g	管状					淡黄褐色		
25	127	"	"	5.2 2.0 15g	凹凸 葵状					無釉		
26	127	須磨削土瓶	"	3.5 2.1 10g	管状					無釉		
27	127	土瓶	"	3.8 1.8 3g	管状					淡灰褐色		
28	127	"	"	5.7 3.1 53.92g	糸をかけた溝あり 管状					暗褐色		
29	127	"	"	6.3 3.8 70g	手捏ね 管状					深褐色		
30	127	"	"	6.2 3.8 59.0g	管状					深褐色		
31	127	"	"	7 2.9 52.9g	手捏ね					表面は墨褐色		
32	127	"	"	4.9 3.4 50g	管状 糸をかけた溝あり					暗黄褐色		
33	127	"	建物16-24周辺	4.1 3.0 30g	手捏ね 管状					黒褐色		

古八幡付近遺跡 建物16~24出土遺物③ (第82図)

測定番号	年月	名	種類	出土位置	寸法(cm)	重さ(gm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	調査	色	調査	備考
1	128	白磁皿	建物16-24周辺	10.4				白色釉が薄くかかる	クチハゲ	白色		
2	128	青底碗	"					灰がかった淡緑色の釉が薄くかかる		緑灰色		
3	128	"	"		7.8			底部内面に花文		淡緑色		
4	128	"	"					片切型の蓮弁文		暗緑色		
5	128	耳輪	"									
6	128	銅製煙管	"	建物16-24周辺			1.7	管内部に僅かに竹材が残る				
7	128	鐵器	"	現存長 17.2								
8	128	"	"	現在長 20.4								

段状造構10・11 (第70図、写真図版36・68)

段状造構10・11は斤陵西側斜面との変換部に位置している。調査前から平坦になっており、トレノチ調査時にもほとんど遺構を確認できなかったので、かなり削平を受けていると思われた。しかし全面發掘を行うと、当初地山と認識していたのは尾根上を削平した地山を1m近く造成したもので、その下に耕作土を挟んで近世以前の遺構面が存在することが判明した。地山検出後の平坦地は中央に段差があり、ここから東側が段状造構10、西側が段状造構11である。この段差は段状造構10東側の壁と平行するように造られているので、段状造構10・11は造成される前に一度耕田にするための削平を受けたと思われる。段状造構10・11床面では多數の柱穴を検出した。ここは水脈に近いのか標高40m前後の丘陵上であるにも関わらず、柱穴内に柱根の残るもののが14基もあった。また、検出した柱穴は8-2区南側の建物群に比べ掘り方の小さいものが多く、並びも整然としていない。このため建物の復元は柱間距離よりも、柱根の残る柱穴や石を使っている柱穴を基準にして行った。

建物25 (第83図)

段状造構10のほぼ中央で検出した。2間×4間の柱穴配置を持つ。柱穴掘り方は径が小さく、底面の径はほぼ柱の径に近いものと思われる。P8・11は特に規模が小さく、この種の柱穴は削平を受けた際にいくつかとばされている可能性が高い。柱穴の内、P2・3・9では柱材の一部を検出した。柱間距離は梁行き東側が5尺と8尺を、西側が13尺を指向していると思われる。桁行きの柱間距離は、東側の1間以外は不揃いである。主軸は斜面に直行している。遺物はP3内から土師質の壺(第86図13・14)が出土した。13は口徑に比べ器高が低く皿とした方が良いかもしれない。2点とも柱根上面で出土したが、斜めに傾いて出土し時期差があるようと思われる所以、建物廃絶に伴

う祭祀かは不明である。

建物 26 (第84図)

建物25と重複し、主軸はほぼ直行する。2間×5間の柱穴配置を想定したが、北側に溝状遺構8が在り正確な柱穴配置や建物規模は不明である。柱穴には石を使ったものもある。P12は柱根を検出した西側が一段深く、東側には扁平な石が置かれていた。梁行きは合わせて14尺を指向したものと思われるが、桁行きの柱間距離は不揃いである。柱穴から遺物は出土していない。

建物27・28 (第85図、写真図版68)

段状遺構11の西側斜面寄りで検出した柱穴には、掘り方が深く柱根の残るものがある。建物の上柱穴と思われるが、東側にこれらと対応する柱穴を検出できなかった。段状遺構11で検出した柱穴が構成していた建物は、西側と南側のほとんどを失ったと考えられる。建物27・28は、まず柱根の残っていた柱穴で桁行きを設定してから復元した。桁行きの並びは北側調査区外に続く可能性があり、建物27・28の正確な梁行きは不明である。柱根が残っていたP10は、掘り方の径が小さく柱とあまり隙間がない。また柱穴内で検出した石は、柱を固定するためのものと思われる。柱穴内から遺物は出土しておらず、建物の詳しい時期は不明である。

溝状遺構 8・集石 2 (第70図、写真図版130)

段状遺構10の北側を東西に伸びている。検出したのは段状遺構10の床面範囲だけだが、西側は棚田の段を付ける際に斬ち切られており、溝の南東に位置する集石2と一緒に遺構である可能性が高い。同様に東側は棚田の壁を造る際に削られたと考えられるので溝の正確な起点は不明である。平面はややいびつで、断面は逆台形を呈している。溝の中からは大小の石が検出され、中には石臼(第88図3)も混じっていた。遺物は溝状遺構8南東部の右の間から近世の陶器碗が出土している。

集石 1 (第70図、写真図版69)

段状遺構11と西側斜面の変換点に位置している。黒色の遺物包含層で検出した集石で、黒色土からは古代から中世にかけての遺物が多数出土した。また、この集石1は斜面下方の調査区で検出した黒色の遺物包含層の直線上に位置しており、ここが黒色土の起点にあたると思われる。

集石1および下方の黒色土の性格について、はっきりした説明は難しい。しかし黒色土とその下層の砂の堆積状況から長期間水が流れていることはほぼ間違いない。県内の遺跡で類例を探すと、松江市福富I遺跡の2区SX01~03、3区SX01・02が非常によく似ていることに気がついた。これらは丘陵の傾斜が急になる変換点に位置し、斜面に大型の不整彫円形な穴を掘り、その斜面下方側に大小の石を使った堰を設けている。何れも湧水点に造られていることから、水溜め遺構の可能性が指摘されている。古八幡付近遺跡の集石1は、周辺で検出した柱穴内に柱が残っているように地山が常に湿った状態で、水脈近くに位置していると考えられる。集石1斜面下方の黒色土を検出した範囲は約80cmの深さに亘んでおり、調査時には意味を認識できずに外してしまったが、一部側石もはめられていた。集石1の斜面下方に位置する集石3は、より福富I遺跡の水溜遺構とよく似ている。集石3の下方は降雨時には水が流れるため6・7区調査時には排水用の溝を切った程である。また、5・6区では現代の住宅に削平された部分で黒色土を検出し、ここでも湧水と集石を確認した(第39図テマークの所)。こうした状況から集石1はそれ自体が水溜遺構の可能性があり、斜面下方の一連の水溜遺構の起点であると考えられる。福富I遺跡の水溜遺構は、出土した遺物から16世紀頃のものと考えられている。集石1の周辺出土遺物には古い時代のものも混じっているが、お

よそ15~16世紀頃に使用されたと考えられる。

建物25~28周辺出土遺物（第86~89図、写真図版128・129）

段状遺構10・11床面で検出した建物や集石の年代は、すでに述べたようにほぼ中世後半のもとを考えている。しかし、集石周辺や段状遺構11斜面下方の黒色土からは時期幅のある遺物が出土している。最も古い遺物としては、第86図7が球形に膨らむ胴部に丁寧にハケメを施し、赤い色調をしているので古墳時代中期頃の可能性がある。このほか古代の須恵器・土師器も出土している。土師質上器の内14・16は中世初めの环と思われ、建物の中にはこの時期のものもあるかも知れない。第87図1は李朝陶器の小皿である。出土した地点は段状遺構8・柱列3の近くだが、時期や形状の同じ個体が集石1下方で出土しているのでここに掲載した。2・3は龍泉窯系の青磁碗で2は見込み部に「福」のスタンプがあるほか、茶筅による細かい傷が確認できる。4は青花の皿である。5~8は備前焼の擂鉢である。建物周辺や集石下方では10個体以上の擂鉢が出土したが、何れも備前焼編年IV・V期のものである。10~12は土錘で、集石1下方の黒色土から出土した。ここで出土した土錘は全て大型で、孔径も1.5~2cmと大きめである。第88図1・2は石製の鉢である。1は全体に火

建物25計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き				
	2間(4.08m)				4間(5.88m)				
主 柱	N-65°-E								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm)	上 面 幅(cm)	28×24	40×33	39×36	26×23	30×29	41×34	42×36	22×19
	底面標高(m)	39.82	39.74	39.74	39.94	39.68	39.60	39.89	40.22
	參 号	P9	P10	P11					
柱間距離(m)	上 面 幅(cm)	33×28	38×36	26×19					
	底面標高(m)	39.77	40.00	40.19					
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9	
柱間距離(m)	0.82	2.00	1.52	1.54	4.08	2.30	0.90	1.82	
	P9-10	P10-11	P11-1						
	0.84	2.40	1.54						

建物26計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き				
	2間(4.24m)				4間以上(7.56m)				
主 柱	S-28.5°-E								
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm)	上 面 幅(cm)	17×16	25×24	30×27	30×25	24×22	40×37	34×24	32×24
	底面標高(m)	39.88	39.95	39.82	39.80	40.04	40.06	40.10	39.94
	參 号	P9	P10	P11	P12				
柱間距離(m)	上 面 幅(cm)	36×34	30×28	27×26	48×36				
	底面標高(m)	39.95	40.06	39.82	39.76				
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9	
柱間距離(m)	1.92	2.18	1.80	2.10	2.18	2.06	0.50	0.78	
	P9-10	P10-11	P11-12						
	2.18	1.04	3.06						

建物27計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(2.86m)				4間以上(8.48m)			
主 柱	N-56°-W							
	P1	P2	P3	P5	P6	P7		
柱穴 (cm)	上 面 幅(cm)	34×26	22×21	22×16	50×40	46×36	38×31	
	底面標高(m)	39.00	38.88	39.06	39.30	39.20	38.96	
	參 号	P1-2	P2-3	P3-5	P5-6	P6-7		
柱間距離(m)	1.92	0.94	2.47	4.07	1.94			

建物28計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	1間以上(1.90m)				3間以上(6.10m)			
主 柱	N-38°-W							
	P8	P9	P10	P11	P12			
柱穴 (cm)	上 面 幅(cm)	39×30	30×30	42×38	31×25	40×29		
	底面標高(m)	39.15	39.27	38.70	38.88	38.80		
	參 号	P8-9	P9-10	P10-11	P11-12			
柱間距離(m)	1.90	2.04	2.24	1.82				

を受けているが、内面に工具痕が明確に残る。2は特に強く火を受けており、一部黒褐色に変色し触るとボロボロとくずれる。どちらも集石1下方で出土した。

15・6世紀の貿易陶磁や備前焼は段状遺構8周辺でも出土しており、段状遺構8から10・11まで調査区外北側の平坦地（写真図版36ド）にも中世後半の遺構が存在した可能性が高い。

古八幡付近遺跡 建物25~28周辺出土遺物①（第86図）

測定	目盛	器種	出土地点	寸法(cm)	高さ(cm)	幅高さ(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	128	須恵器环	建物25~28周辺	14.6 (3.2)	14.6	3.2	1.0	輪状つまみ 腰端部広がる	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ後ナデ	青灰色	
2	128	須恵器环	"	"	"	"	"	"	ナデ 回転ナデ	青灰色	
3	128	須恵器环	"	"	"	"	"	"	タタキ カキメ	灰色	
4	128	須恵器环	"	"	"	"	"	"	同心円当具底		
5	128	須恵器环	"	"	"	"	"	"	内面 大きな横溝 外面 ハケ日状調整痕	暗灰色	
6	128	平丸	"	"	"	"	"	"	タタキ カキメ	青灰色	
7	129	上師質環	"	"	"	"	"	端部強く屈曲	同心円当具底		
8	128	"	"	25.3	"	"	"	山形端部平坦 脚部らない	網目印取り	網目印取り	
9	128	"	"	20	"	"	"	口縁短く外反	ナデ ヘラケズリ	赤茶褐色 内面 暗茶褐色 外面 暗褐色	やや薄手
10	128	"	"	"	"	"	"	口縁端部平坦	ナデ ナメ上方回 のヘラケズリ	内画 暗茶褐色 外面 暗茶褐色	やや薄手
11	128	土師質環	"	"	7.4	"	"	"	風化の為調整不明	内画 暗茶褐色 外面 黒褐色	内画 黑褐色
12	128	"	"	"	6.4	"	"	"	回転ナデ 丁寧な回 転ナデ 回転未切り	淡褐色	
13	129	"	"	15.3	3.1	6.8	1.0	淡身	回転ナデ 回転未切り	淡褐色	
14	129	"	"	12.8	3.3	6.0	1.0	淡身	回転ナデ 回転未切り	淡茶褐色	
15	128	"	"	15.0	"	"	"	"	回転ナデ エコサエ	淡茶褐色	
16	128	"	"	2.2	3.5	6.1	1.0	山形のたちあがり意 体部がある	回転ナデ 回転未切り	淡茶褐色	
17	128	"	"	"	6.22	"	"	風化の為調整不明	回転ナデ 回転未切り	暗赤褐色	
18	128	上師質環	"	10.2	"	"	"	"	の後タテ方向のナデ	暗赤褐色	
19	128	"	"	7.0	16.0	4.4	1.0	口縁外側	回転ナデ 系切り	茶色	
20	128	土師質 模印皿	"	6.8	2.1	4.8	1.0	"	回転ナデ 回転未切り	淡褐色	灰化物付着

古八幡付近遺跡 建物25~28周辺出土遺物②（第87図）

測定	目盛	器種	出土地点	寸法(cm)	高さ(cm)	幅高さ(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	129	李柄輪25	建物25~28周辺	"	3.8	"	"	上げ底	回転ナデ ヘラケズリ	暗灰色の輪	
2	129	青磁瓶	"	11.0	6.8	4.2	1.0	擦損の葉文	全体に回転ナデ	透明白	
3	129	"	"	"	"	5.6	"	内面に花文	"	透明白	
4	129	青花皿	"	"	"	(7.8)	"	底外部曲に花文	"	透明白	
5	129	施釉燒盤	"	"	"	31.3	"	山形端下付	回転ナデ	暗灰色	
6	129	"	"	"	"	8条のケン目	"	"	ナデ 回転ナデ後不 定方向へのナデ	青灰色	
7	129	"	"	28.4	"	"	"	"	回転ナデ	暗赤褐色	
8	129	"	"	"	13.6	"	6~7条のケン目	回転ナデ 繰り目回転ナ の後不定方向へのナデ	青灰色		
9	129	"	"	"	"	7条のケン目	"	"	回転ナデ後不定方向 へのナデ	暗赤褐色	使用痕あり
10	129	土壺	"	4.6	8.0	103.35g	1.0	輪 長さ 重量 幅 重さ 重量	外側は丁寧なナデ	淡褐色	
11	129	"	"	3.25	7.2	55.16g	1.0	"	表面は比較的凹凸 目立つ	暗灰褐色+ 明褐色	
12	129	"	"	4.1	8.6	83.30g	1.0	"	"	明褐色	
13	129	鐵鎌刀子	"	"	"	"	"	"	"	"	

古八幡付近遺跡 建物25~28周辺出土遺物③（第88図）

測定	目盛	器種	出土地点	寸法(cm)	高さ(cm)	幅高さ(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	130	右鉢	建物25~28周辺	21.1	"	"	"	内面に工具痕が残る 全体に火を受けたよう	使用痕(内面ツルツル)	暗灰色	
2	130	"	"	"	"	16.2	"	"	バの痕跡残る	深緑灰色	画面に磨痕
3	130	石口	"	口径 厚	27.1	8.7	1.0	"	"	"	

3. 8-3区（第70図、写真図版70）

8-3区は丘陵西側斜面の最高所に位置している。ここでは6・7区と同じように、主に古代から中世の遺構・遺物を検出した。この結果、奈良時代以降は丘陵西側斜面全域に集落が展開していることが明らかになった。また、西側斜面で検出した大型削平段（古代末から中世）は全部で6段になったが、平面ではほぼ10~15m間隔を開けて造られている。そのほか段状遺構13周辺で統一新羅土器が出土したことが特に注目される。

段状遺構12・集石3（第89~91図、写真図版71・72・130）

西側斜面の標高約34mの位置に造られた平坦地で、段状遺構10・11との高低差は約6mである。平坦地の規模は幅が約2.6~3.6m、長さは北側が調査区外にはみ出るため正確な規模は不明だが、調査区内で約20mを測る。平坦地のほぼ中間の位置で集石3を検出した。集石3より南側の床面では炭の面を1ヵ所検出した以外遺構・遺物とも検出できなかった。これに対し平坦地北側は柱穴や溝を検出した。検出した柱穴はみな浅く建物は復元できなかつたが、斜面で検出したP7~9は直線上に並び掘り方もしっかりしている。段状遺構12以前の建物の柱穴かもしだい。また、床面で上師質の壺が2個、口縁を合わせる状態で出土した（写真図版72上）。出土した土器は第91図1・2で、1が下、2が天地を逆さにして1の上に伏せてあった。1は底部の糸切りに特徴がある。

集石3は、集石1の斜面下方から堆積する黒色の遺物包含層中で検出した。幅3.6m長さ4.5mの不整檜円形な土壇の中に大小の石を放り込んだ状態で、当初遺構の性格は全く分からなかった。遺物（第91図）は須恵器、土師質土器の他、貿易陶磁や鉄器も出土した。集石3は前記福富1遺跡の水溜遺構の例から、集石1と一連の水溜遺構と考えられる。また、段状遺構12の床面東側で検出した

古八幡付近遺跡 段状遺構12出土遺物（第91図）

編號	性質	器種	出土地點	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	130	上師質壺	段状遺構	8.5	4.9	6.8	端部はやや厚みがある	内面は全て回転ナデ	淡褐色	
				12				回転糸切り		
2	130	"	"	13.7	3.9	5.7	端部はシャープに先細りする	回転ナデ 回転ナデ	淡褐色	
								の後ナデでなめらかにする		
3	130	輪縫燒成	"			15.8	7条のクシ目	回転ナデ	淡褐色	使用済でグ
		器種								シ日消える
4	130	"	"	幅	長さ		管状			
				3.9	6.2				外面 暗褐色	
5	130	"	"	幅57cm	高さ		管状		内面 淡褐色	
				4.4	以上				深黒茶褐色	
				4.3						

古八幡付近遺跡 集石3出土遺物（第91図）

編號	性質	器種	出土地點	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
6	130	上師質壺	集石3				小型			
7	130	土師質壺	"			5.4				
8	130	"	"			7.0				
9	130	"	"			6.0	見込みに光線			
10	130	"	"			12.1				
11	130	須恵器壺	"			19.0				
12	130	青磁碗	"			5.2	底部は上方にくぼみ(基盤底)			
13	130	"	"			5.0	底部内面に花文?			
14	130	"	"			4.8	底部内面に花文	回転ナデ	淡褐色	
15	130	青磁盤	"				内面に輪書き文様			
16	130	土壺	"	幅	長さ	重量	管状	外面は指おさまるの後	淡茶褐色	
				4.6	7.2	86.24g		ていねいなナダ		
17	130	鍼器刃部(小刀か?)	"							
18	130	鉄器	"							

溝は南側に向かって床面が深くなっている。その南端は集石3の掘り方に接続している。このため雨水又は排水を集石3に誘引するための性格を考えることもできる。段状遺構12の北側がどのような状況であるか不明だが、この平坦地は集石3周辺での活動を目的に造られた可能性もある。集石1から始まつた黒色の遺物包含層は集石3の下方にも続いており、溝状遺構10を経て6・7区の土石流黑色土となる。

溝状遺構9（第70図）

8-3区ほぼ中央に位置し、東西方向に伸びている。溝状遺構1のところで述べたように近世の古道と考えており、尾根上に位置する古道とは溜め池を迂回してほぼ直線上に並んでいる。調査前は棚田の下に埋没していたので、近代には機能を失っていたと考えられる。

段状遺構13・建物29・溝状遺構10（第92~94図、写真図版72・131）

8-3区北側の標高約31mの位置に造られた平坦地で、集石3の下方に位置する為、段の中央部を集石3から流れた路路（溝状遺構10）に切られている。北側の床面では建物29を検出した。南側では浅い柱穴や溝を検出したが、建物は復元できなかった。建物29は1間以上×2間以上の柱穴配置を持つ。柱間距離は梁行きが5尺を、桁行きは7尺又は7.5を指向したものと見られる。建物29の柱穴内からは第94図3・6・8が出土し、時期は奈良時代から平安時代前半頃と思われる。

段状遺構13と溝状遺構10の周辺では、主に奈良・平安時代の遺物が出土した。これだけでは段状遺構13は他の遺構と何ら変わらないが、これらの遺物の中に統一新羅系の土器が2点含まれている点が重要である。

統一新羅土器（第94図10・11、巻頭図版1）

建物29P4付近、段状遺構16上層の灰色土から4点出土し、文様や形態、焼成から2個体と判断した。第94図10は長頸壺の肩で破片数は1点である。頸部には丸みのある段があり、段より上には菱形？のスタンプ文が、下にはロッキング手法を用いた縦長連続文が緻密に施される。焼成は良好だが11程ではなく、須恵器に似ている。段状遺構13からかなり離れた位置の出土で、内面は風化しており、調整は明確でない。この種の長頸壺としては大型の部類に入ると思われる。

11は瓶と思われるもので、出土したのは肩と胴部の破片計3点である。図示した形態は出土した破片に接点が無かった為、胴部に施された文様を基に岡上復元した。文様は上から多弁花文、ロッキング手法を用いた縦長連続文、間隔のある縦長連続文の順に施される。肩部内面は丁寧なナデを施しているが、細かい同心円文がわずかに確認できる。確認した調整から肩部の製作工程は、次のように推測される。①タタキによって肩を形成する。②外面はカキメを施し、内面は丁寧なナデによってタタキ痕を消す。③外面はカキメを施した後さらにナデを施す。④多弁花文、縦長連続文を施す。胴部外面はカキメの後ナデを施し、その後に縦長連続文を施す。胴部内面下半は強い回転ナデで形成される。断面は暗紫色を呈し、焼成はきわめて良好である。

段状遺構13周辺で出土した統一新羅土器は、両方ともロッキング手法による縦長連続文を施している。宮川禎一氏の分類（宮川禎一 1988 「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」「歴史と考古学」高井悌三郎先生尊寿記念論集）では、縦長連続文C手法に当たるものである。実物を宮川氏に鑑定していただいたところ、縦長連続文の形状と施文手法から8世紀後半頃、あるいは8世紀末まで下る時期のものではないかとの教示を得た。出土した統一新羅土器は、元は全て段状遺構13に置かれていたものと考えられる。段状遺構13に確実に伴う最も古い須恵器の時期がおよそ8世紀後半と思

われるので、この点はほぼ宮川氏の見解に一致している。ただし平安時代の遺物も出土していることから、9世紀以降のものである可能性も否定できない。一方、平城京で出土した縦長連続文C手法を施す瓶形土器が8世紀前半の土器と共存しているので（奈良国立文化財研究所 1989『平城京右京八条一坊一三・一四坪発掘調査報告』）、古八幡付近遺跡出土品も製作年代は8世紀前半まで遡るという見解もある。いずれにせよ8世紀後半以降にこの丘陵に持ち込まれた可能性が高く、古八幡付近遺跡の集落が奈良時代を境に飛躍的に発展することと密接に関わっていると考えられる。江津市西部の一集落で、何故統一新羅土器が出土したのかという疑問には様々な理由が考えられるが、遺跡周辺の奈良時代の資料の増加を待って改めて検討したい。

建物29計測表

規 模 主 軸	梁 行 き				桁 行 き				
	1間以上 (1.45m)				2間以上 (4.44m)				
	N-58.5-W								
番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	
柱穴 (cm) (m)	上 面 径(cm) 底面標高(m)	42×29 30.70	42×36 30.68	34×30 30.76	49×46 30.77	22×21 31.04	52×30 30.73	25×21 30.98	22×20 30.75
番 号	P9	P10	P11						
上 面 径(cm) 底面標高(m)	18×18 30.94	24×24 31.04	18×17 31.06						
柱間距離(m)	P1-2	P2-4	P4-6	P6-7	P3-5	P5-6	P6-7		
	1.45	2.26	2.18	0.77	2.66	1.40	0.76		

古八幡付近遺跡 段状造構13、溝状造構10出土遺物 (第94図)

遺物名	器 確	高さ	頂上地点	口幅(cm)	底幅(cm)	形状・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1 131	須恵器环唇	段状造構	7.0	2.25	15.4	輪状つまみ	回転ナデ	暗灰色	自然釉
		13							
2 131	"	段状造構				"	回転ナデ	深灰色	
3 131	土師器環	建物29 (25.5)				口縁端部は平坦面		明灰褐色	
4 131	須恵器環唇	段状造構	10			低い高台	回転ナデ	灰色	
5 131	須恵器碗	段状造構	10			低い高台	回転ナデ	深灰色	
6 131	須恵器环	建物29	13			直線的な口縁	回転ナデ	深灰色	(外側自然釉)
7 131	土師質环	段状造構	15.6				回転ナデ	明茶褐色	
8 131	土師器環	建物29	10下方			頸部の屈曲強い	ヨコナデ わずかにタテ 方向のハサメを見る	暗茶褐色	
9 131	須恵器环蓋	溝状造構	14.5			口縁屈曲	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ後回転ナデ	灰色	
10 131	磁-斎事土器	段状造構	10			菱形?のスタンプ文 ローラーリングによる輪状連続文	ナデ	灰色	統一新羅 系
11 131	磁-斎事土器	段状造構	13下方			最大径 印文花(多弁花文)	回転ナデ?	外面暗灰色	
12 131	須恵器环身	溝状造構	13			ローラーリングによる輪状連続文	回転ナデ?	内面明灰色	
13 131	須恵器环身	溝状造構	9.0			高台径 9.0	回転ナデ	灰色	
14 131	磁-生糞	" (13.5)				7.5	回転ナデ 回転ナデ?	灰褐色	
15 131	土師質环	"				7.3	口縁折強 环の底部見込み上辺 継ぎが遅い	風化の為不明 回転ナデ	明褐色
16 131	"	"				5.0	回転ナデ 回転ナデ	明褐色	
17 131	土師質环	溝状造構	10			6.2	回転ナデ 回転ナデ	外面暗褐色 内面明褐色	
18 131	土鍤	"	幅 1.7	長さ 4.8	重量 9.26g	管状	ヘラケズリ タテ方向のナデ	暗褐色	
19 131	"	"							
20 131	土師質环	"				7.3	回転ナデ 回転ナデ	茶褐色	
21 131	"	"				8.1	回転ナデ 回転ナデ	淡茶褐色	
22 131	"	"				7.7	回転ナデ 回転ナデ	淡茶褐色	
23 131	土鍤	"	幅 4.4	長さ 6.0	重量 71.69g		回転ナデ	淡灰褐色	

段状遺構14・土壌3（第95図、写真図版73）

8-3区南側標高約30.5mに位置している。8-3区南側は北側に比べて検出した遺構が少なく、これより上のレベルでは遺構を検出していない。段状遺構14は床面がほとんど流失し、東側が僅かに確認できる程度である。段に伴うと思われる柱穴は2穴検出している。どちらもしっかりした柱穴なので、建物が立てられていた可能性もある。床面で遺物が出上していないので時期は不明である。しかし、遺跡内の段状遺構の内平安時代以降のものは基本的に床面盛土が残っていることから、それ以前の時期と思われる。段状遺構14の形態や残存状況は横路古墳の急斜面で検出した古墳時代後期の遺構と似ており、斜面下方の段状遺構18・19の出土遺物に古墳時代後期の遺物が混じっているので、あるいは古墳時代後期の遺構かもしれない。

土壌3は段状遺構14の南側で検出した。平面は不整橢円形で、埋土は炭を含む焼土と灰色の粘土が交互に堆積していた。一見小炭窯の様でもあるが床面は焼けていない。段状遺構14に伴うものか不明だが、もし伴うとすれば段状遺構は調査区外に統一している可能性がある。

段状遺構15（第95図、写真図版73）

段状遺構14の西側で検出した。床面はほとんど流失していると思われる。東側の壁の立ち上がりはほとんど無いが、幅10~20cmの浅い溝が掘られていた。柱穴は北側でのみ検出したが、40cm近く掘り込まれたものもあるので何らかの上屋が存在したかもしれない。遺物は出土していない。検出状況や形態、規模が段状遺構15とほとんど同じなので近い時期の遺構と思われる。

段状遺構16（第96・97図、写真図版74・75・132）

8-3区の西側では、段状遺構16~19が標高27mを中心にまとまって検出された。これらの遺構は、奈良時代に造成された平坦地を、平安時代以降に再度山側を掘削・造成して再利用したものである。段状遺構16は山側を大規模に掘削して段状遺構17を埋め、長さ18m以上、幅6m以上の平坦地を造っている。土層を観察すると壁側の地山上に暗灰色土粘質土が堆積し、その上に地山上と灰色粘質土が堆積している。この2つの層の上面はほぼ水平で、その上に再び暗灰色粘質土が堆積している。以上の上層堆積状況から、段状遺構16は一度床面を貼り直して建て替えを行ったか、柱穴掘り方を隠すために貼り床をした可能性がある。調査期間が大幅にオーバーしていただけ、一気に地山まで下げて柱穴の検出作業を行っておりどちらか判断できない。同様の土層堆積状況は7区で検出した段状遺構1でも確認している。段状遺構16床面では多数の柱穴を検出した。近くに水脈が通っている関係で柱穴内に柱材の残るものもあり、このような柱穴を中心して建物を復元した。このほか床面では上塙を2基検出している。

遺物（第101図）は主に古代の須恵器・土師器と中世前半の上師質土器が出土した。床面や柱穴内出土の遺物から、建物の時期は平安時代後半から鎌倉時代前半と思われる。埋土中で出土した25は土製樋で、サイズは半田浜西遺跡の分類の中型に相当する。また、7区上石流黒色土中から出土した奈良時代から鎌倉時代の遺物は、段状遺構16・17で使用されていたものと考えられる。このほか掲載していない古銭2枚と鉄滓が出土している。古銭はどちらも劣化が著しく、外面の文字は全く判別できない。鉄滓は柱穴内で出土したもので、鍛治滓と思われる。

ところで、段状遺構16では竈や比熱面は一切は検出されなかった。建物の時期は平安時代後半から鎌倉時代前半の遺構と考えているが、この時期ならば据え付けの竈であろう。通常この時期の掘立柱建物は平地で検出されるため、ほとんどの場合床面は削平を受けている。これに対し斜面で検

出した段状遺構16は、柱穴の残り方を見ても比較的削半の度合いが少ないとと思われる。このため元々窓のない建物だった可能性が高いが、斜面下方で煮炊きに使用したと考えられる甕（鍋？）が出土している点が気になる。

建物30（第98図）

1間以上×3間以上の柱穴配置を持つ。柱間距離は梁行きが6.5尺、桁行きが7尺を指向したものと見られ、比較的整った配置をしている。柱穴掘り方は建物31・32の柱穴に比べて浅く、埋土は地山に近い粘質上で柱根も残っていなかった。主軸も建物31・32とやや異なっており、おそらく時期差のある建物と思われる。柱穴から第101図1～3の土師質土器が出土している。細片の為詳しい時期は不明だが、中世初め頃のものと思われる。

建物31（第99図、写真図版76・77）

柱材を確認したP3から北西方向に桁行きの並びを抽出し、2間×7間の柱穴配置を復元した。梁行きの柱間距離は6.5尺を指向したものと見られる。中間のP2は掘り方が浅く、P1底面には磁板が置かれていた。これに対し桁行きの柱間距離は不揃いなので何箇か縮まる可能性がある。柱穴内からは第101図4・5・8が出土した。5は白色系の土師質上器で、高台部のみ剥離して出土した。8は同安窯系青磁1類の皿で、P9床面で天地を逆にして出土した。これらの遺物から建物31の時期は中世前半と思われるが、詳しい時期や建物30との新旧関係は不明である。

建物32（第100図）

柱材を検出したP15を基点にして復元した。柱穴配置は2間以上×5間を想定した。梁行きの柱間距離は6尺を指向したものと思われる。桁行きの並びは建物31とほぼ重なっており、柱間距離は真ん中が6尺で他は5尺前後である。桁行きの柱穴掘り方は、コーナーのP10・15が間の柱穴より1段深く掘られている。梁行きの柱穴P17も1段深いので、梁行きは2間までの可能性がある。建物31・32の周囲では浅い柱穴を多数検出している。これらは上屋を支える柱穴とは思えないが、中にはほとんど掘り方と同じ径の柱が検出されるものもある。このため、樋・塀・床を支える東柱等何らかの機能を持っていたと考えられる。

建物32を調査して特に驚いたのはP15と中に残っていた柱材である。P15で検出した柱は根本が曲がった木を使っており、柱穴掘り方はこれに合わせてほとんど隙間無く掘られている。さらに柱の接地面部は斜めの切断面と切り離し部分がそのままになっており、ちょうどYの字のようである。P15は特に極端な例であるが、段状遺構16・18で検出した柱材のほとんどがこのように難な作りのものだった。このような柱穴は柱材が残らず土にかえっていれば、本当に建物の柱穴か疑問視したくなる。しかしP15の状況から、遺跡内の柱穴で掘り方が小さいものや、土層断面で柱痕が曲がっているもの、柱痕の先端が先細りのものでも建物を構成する柱に成りうると言える。また、古八幡付近遺跡で検出した柱材は全て円柱だった。

建物の32の柱穴内から遺物は出土していない。詳しい時期は不明だが、周辺の出土遺物や建物埋没後に溝状遺構10が通っていることから、中世前半の建物と考えられる。

建物33（第98図）

段状遺構16東側で検出した小規模な柱穴の中から、西側の建物と軸の近い並びを考えて抽出した。これらの柱穴には土師質土器や木の残るものがあり、西側の建物に付随する構造物が造られていたと考えられる。柱穴配置は1間×1間で、土壙5と重複している。柱間距離は全て1間5尺を想定

した。建物33を含めた小柱穴と上壇5の前後関係や同時性は不明である。

土 壤 4 (第97図)

段状造構16の中央壁際で検出した。平面は不整多角形を呈している。床面は中央に向かって緩く窪み、規模は長さ69cm、幅42cmを測る。床上には暗灰色粘質土が堆積し、須恵器壺片1点、土師質土器片2点、炭化した細長い木質2点を検出した。土師質土器は第101図9・10の壺で、13世紀頃のものと思われる。木質は2点とも長さ約10cm、ばば約1cmを測る。

土 壤 5 (第98図、写真図版132)

段状造構16の東側で検出した。平面はかなり歪で、規模は上面で長さ2.75m、幅1.45mを測る。床面で土師質土器の壺と皿(第101図11~16)が出土している。12・13・16には煤が付着しており、他の土師質土器とともに灯明皿・灯明受皿として使用されたものと考えられる。出土した土師質土器の時期は13世紀頃と思われる。

建物30計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	1間以上(1.97m)				3間以上(6.43m)			
主 軸	N-41°-W							
柱穴 (cm)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上 面 横(m)	40×36	51×32	42×36	42×36	41×38		
	底面標高(m)	27.00	27.13	27.22	27.19	27.34		
	柱間距離(m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5			
		1.97	2.16	2.11	2.16			

建物31計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間以上(4.05m)				7間以上(9.96m)			
主 軸	N-54.5°-W							
柱穴 (cm)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上 面 横(m)	31×24	38×38	38×33	20×16	28×22	37×30	24×(20)
	底面標高(m)	26.73	27.06	26.80	27.24	27.06	26.83	27.02
	番 号	P9	P10					26.95
	上 面 横(m)	26×20	50×37					
	底面標高(m)	26.95	27.02					
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
	2.05	2.00	1.15	1.14	1.38	1.53	1.45	1.61
	P9-10							
	1.67							

建物32計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間以上(3.61m)				5間(7.84m)			
主 軸	N-57°-W							
柱穴 (cm)	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上 面 横(m)	32×24	24×20	20×16	33×26	33×18	40×25	40×25
	底面標高(m)	27.20	27.31	27.30	27.18	27.39	27.21	27.08
	番 号	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
	上 面 横(m)	29×20	36×30	(30)×28	40×32	52×34	48×29	24×16
	底面標高(m)	27.09	26.82	27.02	26.96	26.90	26.99	26.78
	番 号	P17	P18	P19				
	上 面 横(m)	22×18	14×12	18×15				
	底面標高(m)	26.82	27.20	27.31				
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9
	1.94	2.23	2.20	1.42	1.34	1.96	0.96	2.08
	P10-11	P11-12	P12-13	P13-14	P14-15	P15-16	P16-17	
	1.50	1.44	1.80	1.43	1.67	1.82	1.79	

建物33計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	1間(1.90m)				1間(1.52m)			
主 軸	N-61°-E							
柱穴 (cm)	番 号	P1	P2	P3	P4			
	上 面 横(m)	16×15	24×17	23×17	32×30			
	底面標高(m)	27.11	27.13	26.84	27.04			
	柱間距離(m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-1			
	1.50	1.52	1.50	1.52				

古八幡付近遺跡 段状造構16出土遺物（第101図）

遺物名	器種	出土点	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 132	土師質环	建物30		6.8			回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
2 132	〃	〃		5.9			回転ナデ 回転糸切り	淡褐色	
3 132	〃	〃		5.8			回転ナデ 回転糸切り	明褐色	
4 132	土師質皿	建物31		4.3		底部はわずかに突出する	回転ナデ 回転糸切り	明茶褐色	
5 132	〃	〃		3.8			ナデ 回転糸切り	灰白色	
6 132	土師質环	段状造構 16号穴内		7.3			回転糸切り	回転ナデ?	明褐色
7 132	〃	〃		6.1			回転糸切りか?	淡茶褐色	
8 132	青磁皿	建物31		5.4		同安窯系(工ib) 底部には釉がかからない 縁及びヘラによる文様	回転糸切り	緑灰色	
9 132	土師質环	土壤4		8			回転ナデ 回転糸切り	淡褐色	
10 132	〃	〃		7.5			回転ナデ 回転糸切り	外画暗茶褐色	
11 132	土師質皿	土壤5	8.5	2.0	6.1	口縁端部にやや厚みをもつ	回転ナデ 回転糸切り	山茶淡茶褐色	
12 132	土師打明皿	〃	7.5	2.0	5.5	表面は丸い 内面にススが付着	回転ナデ 回転糸切り	淡褐色	
13 132	〃	〃	8.1	1.9	5.8	表面は丸い ススがわずかに付着	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
14 132	土師質皿	〃	8.15	2.3	5.5	端部は丸い	回転ナデ 回転糸切り	淡褐色	
15 132	〃	〃	8.1	2.2	5.8	端部は丸く先細りする	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
16 132	土師質环	〃	14	4	7.8	刀支部は先細りする	回転ナデ 回転糸切り	淡褐色	
17 132	須恵器環	段状造構 16					回転ナデ	灰色	
18 132	須恵器環身	〃		高台付 8.4			回転糸切り後回転ナデ	青灰色	
19 132	〃	〃		11.8			回転ナデ	灰色	
20 132	須恵器環	〃		高台付 11.2			回転ナデ	青灰色	
21 132	須恵器環	〃		6.7		表面をナデてつまみ出し高台にしている	回転ナデ	灰色	
22 132	須恵器皿	〃		6.5			回転ナデ(自然釉)	灰色	
23 132	須恵器蓋	〃		9.6		3条の沈線を施した後 ヘラによる削突実を施す 口縁端部附近に凹曲し 端部は厚して曲を持つ	手もちのヘラケズリ後 ていねいなナデ		
24 132	〃	〃					回転ナデ	灰色	
25 132	上製施	〃	高さ 5.4	幅 4.45	厚さ 4.0	縫を出るす為の孔が見 られる 底部はほぼ平坦	前記ヘラ切り	明褐色~ 淡白色	
26 132	土師器甕	〃	25.4			口縁端部は丸い	ヘラケズリ ナデ	外画淡茶褐色 内面茶褐色	
27 132	土師質皿	〃			3.8		回転ナデ 回転糸切り	灰白色	
28 132	〃	〃			4.2		回転ナデ 回転糸切り	明褐色	
29 132	土師質环	〃	12.1	5.1	5.0	口縁端部は丸くつくる	回転ナデ 回転糸切り	灰白色	
30 132	〃	〃			5.8		回転ナデ 回転糸切り	明褐色	
31 132	〃	〃			5.3		回転ナデ 回転糸切り	明褐色	
32 132	〃	〃			6.0	見込みにはらせん状に 沈線が彫刻	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
33 132	土師質环	〃			5.9		回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
34 132	〃	〃			6.7		回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
35 132	〃	〃			6.8		回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
36 132	〃	〃			7	見込みには沈線が彫る	回転ナデ ナナメ方向 ヘハケメのよう調整	淡茶褐色	
37 132	〃	〃			6	高台は斜め付け 焼成後に穿孔	回転ナデ	淡褐色	
38 132	〃	〃			5.8		回転ナデ 回転糸切り	淡褐色	
39 132	備前燒指环	〃				口縁部にクシのようなもので引っかけた跡がある	回転ナデすり口 (前記暗赤褐色)	暗灰色	

古八幡付近遺跡 段状造構17周辺出土遺物① (第102図)

順番	形態	器種	高さ	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1	133	須恵器环蓋	7.2	3.0	14.0	17周辺	輪状つまみ	回転ナデ	淡灰色	
2	133	〃	〃	14.8	〃	〃	回転ナデ	淡灰色		
3	133	〃	〃	15.2	〃	〃	回転ナデ	淡灰色		
4	133	須恵器环身	12.6	4.6	8.4	17周辺	斜リ尖切?	回転ナデ	灰色	
5	133	〃	13.4	4.0	9.1	17周辺	回転ナデ	暗灰色		
6	133	〃	〃	7.2	〃	〃	回転ナデ	灰色		
7	133	須恵器皿	14.8	〃	17周辺	回転ナデ	回転ナデ	灰色		
8	133	須恵器底盤(蓋)	15.0	〃	〃	回転ナデ	灰色		青灰色	
9	133	須恵器長縄蓋	〃	沈渡	回転ナデ	灰色				
10	133	須恵器長縄身	14.9	(削形) 輪状	21.5	17周辺	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ後ナデ	青灰色		
11	133	須恵器皿	18.2	白縁扁平壺	回転ナデ	青灰色				
12	133	〃	〃	沈渡	タタキ	青灰色				
13	133	〃	〃	波状文	タタキ	外面淡灰色 内面青灰色				
14	133	〃	〃	〃	タタキ後カキメ	灰色				

古八幡付近遺跡 段状造構17周辺出土遺物② (第103図)

順番	形態	器種	高さ	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1	133	土師器底	23.3	段状造構	17周辺	口縁は厚みがある	回転ナデ ヘラケズリ			
2	133	〃	20.9	口縁端部は厚手	回転ナデ	淡褐色				
3	133	土師器底?	12.2	口縁は短く強く開曲	ヨコナデ 内面はヘ ラケズリ	赤茶色				
4	133	土師器底?	10	底部は平坦で厚手	強いナデ	外面 赤茶色 内面 淡褐色				
5	133	土師質皿	11.5	2.1	4.8	体部は中ほどで凹曲する	回転ナデ	淡灰白色		
6	133	〃	10.8	2.1	6.7	口縁外反	回転ナデ	明褐色		
7	133	〃	4.3	回転ナデ 回転系切り	灰白色					
8	133	〃	8.6	1.6	4.2	溝底はわずかに外反する	回転ナデ 回転系切り	淡灰白色		
9	133	〃	4.5	回転ナデ 回転系切り	淡灰白色					
10	133	土師質丸皿	9	2	6.1	溝底がレバ?に先端りする	回転ナデ 回転系切り	淡灰白色		
11	133	土師質皿	8.4	1.7	4.8	口縁端部上面に凹面 りか?	回転ナデ 回転系切り	淡褐色		
12	133	〃	8.3	2	5.5	回転ナデ 回転系切り	淡褐色			
13	133	土師質皿	5.3	回転ナデ 回転系切り	淡褐色					
14	133	〃	5.3	内面回転ナデ 回転 系切り	淡褐色					
15	133	土師質皿	7.6	1.8	5.4	回転ナデ 回転系切り	淡褐色			
16	133	土師質環	6.6	6.6	6.6	回転ナデ? 回転系切り	内面 茶褐色			
17	133	土師質環	5.2	6	6	回転ナデ 回転系切り	淡褐色			
18	133	〃	5.8	内面中心が高く盛り上がる	回転ナデ 回転系切り	淡褐色 (内面黒褐色)				
19	133	〃	7.3	7.3	7.3	回転ナデ 回転系切り	灰白色			
20	133	〃	6.4	回転ナデ 回転系切り	暗褐色					
21	133	土師質環	7.6	6.6	6.6	回転ナデ 回転系切り	明褐色			
22	133	土師質環	11.3	3.2	3.2	強い回転ナデ 回転 系切り	外面 明褐色 内面 明褐色			
23	133	土師質	13.2	3.7	6.4	口縁端部は削平する	回転ナデ カキメ秋	外面 淡褐色		
24	133	土師質環	13.8	4.7	4.7	回転ナデ 回転系切り	暗褐色			
25	134	土師質碗	18.3	口縁大きく外反する	回転ナデ	外面 明褐色 内面 墓灰褐色				
26	134	土師質環	4.7	口縁端部は丸い 高い高台	回転ナデ	淡褐色				
27	134	土師質環	26.8	4.7	4.7	内面は回転ナデ 回転系切りか?	淡褐色 (断面明灰褐色)			
28	134	土師質環	4.5	4.5	4.5	回転ナデ	明褐色			
29	134	土師質環	5.8(6.6)	5.8(6.6)	3.5mm	厚さ	回転ナデ カキメ秋	外面 明褐色 内面 暗褐色		
30	鉄器	鉄器	残存長	4.5	4.5	3.1	回転ナデ			
31	鉄器	鉄器	残存長	4.5	4.5	3.1	回転ナデ			

段状遺構17（第96・97・102図、写真図版133）

段状遺構16の斜面側に切り合う形で検出した。段状遺構16と同時に地山面まで下げる検出したが、土層断面から段状遺構16に先行することが明らかである。床面はほとんど流失し、北側と東側の壁に近い部分だけが残っていた。残存する床面は東西約6.1m、南北2.6mを測る。床面で柱穴・溝等は検出されなかった。段状遺構16床面西側の黒灰色土（第97図10層）では、古代から中世初めのやや時期幅のある遺物（第102図）が出土した。段状遺構17は16に先行する遺構なので、1～5の蓋杯の時期、8世紀後半頃の遺構と考えられる。

段状遺構18（第104・106・107図、写真図版74・78）

段状遺構16の南側と切り合った位置で検出した。段状遺構16同様斜面を大規模に掘削して造られ、壁の高さは最大で約1.5mを測る。床面のレベルは段状遺構18が一段低い。床面は最大で幅約2m残っていたが、段の南側が調査区外に伸びているので正確な規模は不明である。床面では柱穴を36穴検出した。北側の柱穴は径が小さく浅いので段状遺構16に伴うものかもしれない。南側の柱穴には柱材の残るものもあり、建物2棟と柱列1組を抽出した。壁側に溝は掘られていない。これは段状遺構5・13・16も同様で、どのように排水したのか疑問が残る。出土した遺物（第106・107図）は奈良・平安時代のものが多い。1は弥生土器の底部で、接地部は不定方向のナデにより平面三角形に窪み、高台状になる。外面はタテ方向のハケメを施し、底部内面は人差し指から薬指までの痕がはっきりと残る荒いナデを施す。2は古墳時代後期の長頸壺と思われ、調査区南壁の床面に刺さっていた（写真図版78下）。斜面上方や調査区南側にこれらの時期の遺構が存在する可能性がある。

建物34（第105図）

柱材を検出したP4・5を北側の梁行きとして、1間以上×3間以上の柱穴配置を想定した。調査区の南側にも柱穴があると思われるが、桁行きがどこまで伸びるかは不明である。柱穴掘り方は段状遺構16の建物に比べ規模が小さい。P5の柱材は先端がY字状だった。柱穴から遺物は出土していない。段状遺構18床面で出土した遺物の中で最も新しい時期、平安時代後期の建物と考えられる。

建物35（第105図）

建物34の西側に1間以上×3間以上の柱穴配置を想定した。柱間距離は梁行きが7尺、桁行きが5尺である。建物35の柱穴は、段状遺構19完掘後に検出したのでどれも浅い。P9は掘り方を検出していないが、ちょうど柱穴に当たる部分で石を検出したので柱が立てられていたと判断した。柱穴から遺物は出土していない。建物34に近い時期の建物と思われる。

柱列9（第105図、写真図版79）

段状遺構18・19で検出した柱穴の中で、この2穴のみ柱穴内から石が検出された。2つの柱穴はほぼ東西に並んでいるが、他に対応する柱穴は検出されなかった。このように他の柱穴と異なる柱穴が2穴だけ並ぶ状況は、段状遺構1で検出した柱列1と酷似している。柱列1は大規模な削平段の北側に位置しており、これより南に位置する建物への「入り口」的性格を考えた。柱列9の北側には建物30～32が存在するので、そこへの「入り口」的なものと見ることもできる。しかし、第152図を見ると、段状遺構18の南側の調査区外には緩斜面が続いているので、大規模な削平段が南に伸びる可能性は充分あり、柱列9はその北側に位置すると考えた方が良いかもしれない。

段状遺構19（第104・107図、写真図版74・78）

段状遺構18の西側床面で検出した。段の北側には幅1m前後の溝が掘られている。床面は不整形で西側の大半が流失していると思われる。周辺では古墳時代から平安時代の遺物（107図）が出土した。段状遺構19の時期は、段状遺構18に先行するのでおよそ8世紀頃と思われ、北側の段状遺構17と同時期に存在した遺構と考えられる。

13は8世紀後半の壊身であるが、底部をよく観察すると高台内側に径6.2cmの円形の範囲で色の薄い部分がある。この部分だけ何かに隠されたために焼成が違ったのだが、隠していたのは壊蓋の輪状ツマミではないかとの指摘をセンター職員から受けた。確かに壊蓋11のツマミの径は6.3cmで、色の薄い部分の径とほぼ一致する。もしそうならこの杯は、焼成時に蓋の上に置かれていたことになる。古八幡付近遺跡周辺で調査された古代の窯跡としては、江津市嘉久志町の久本奥窯跡がある。

建物34計測表

規 模	棟 行 き			桁 行 き	
	1間以上 (1.52m)			3間以上 (4.74m)	
主 軸	N-10.5' - W				
	P1	P2	P3	P4	P5
柱穴 (cm) 上 面 深 (cm)	24×22	24×20	22×18	44×32	25×22
底面標高 (m)	26.44	26.23	26.32	26.38	26.41
柱間距離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	
	1.06	2.24	1.44	1.52	

建物35計測表

規 模	棟 行 き			桁 行 き	
	1間以上 (2.08)			3間以上 (4.60m)	
主 軸	N-16' - W				
	P6	P7	P8	P9	P10
柱穴 (cm) 上 面 深 (cm)	23×17	22×21	22×17	(22×13)	20×13
底面標高 (m)	26.44	26.38	26.37	(26.42)	26.17
柱間距離 (m)	P6-7	P7-8	P8-9	P9-10	
	1.60	1.50	1.50	2.06	

古八幡付近遺跡 段状遺構18出土遺物（第106図）

編號	形態	器種	上寸	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形狀・文様の特徴	測 定	色 調	備 考
1 134	弥生壺?	段状遺構	18			9.6	底部は上げ底	ハケメ、ナデ	淡褐色	
2 134	須恵器長筒		~	8.2			沈線(3条)の間に列点文	回転ナデ	灰色 (一部黒色)	
							列点文			
							沈滑(2条)			
3 134	須恵器耳身		~	16.0				回転ナデ		
4	"	"		高台	9.4		高台は鋸けつけ	回転ナデ	外面 明灰色 内面 灰白色	
5 134	須恵器壺		~					タタキ	外面 暗灰色 内面 淡灰色	
6 134	須恵器把手		~				外縁は強(い荒い)ナデ 内面はていねいなナデ	灰白色		
7 134	土師器壺		~	10.1			口縁はゆるく外反する 胴部は火を受けて赤変	口縁黒色 内面 赤茶		
							ヨコナデ			
							ユビオサエ			
8 134	"	"	19.7				口縁は稍曲する	ヘラケズリ	赤茶色	
9 134	"	"	19.2				口縁端部は厚め	ヘラケズリ	淡茶褐色	
							口縁は稍曲する			
10 134	"	"	25.6				口縁は強く凹曲する	ナデ	外面 黒褐色 口縁・内面 淡褐色	
							端部は先細りして角ばる	ヘラケズリ		
							外表面は赤変			
11 134	"	"	15.9				口縁はゆるく外反し、端部は丸くぐくる	ヘラケズリ	外面・口縁端部 黒茶 内面 橙褐色	
12 134	"	"	21.6				口縁は粗曲する	ヘラケズリ	外面 茶褐色 内面 暗茶褐色	
13 134	土師器鉢		~	13.0			口縁端部はわずかに屈曲する	ヘラケズリ後ナデ	茶褐色	
14 134	須恵器壺		~					タタキ、水平方向のかキメ	外面 青灰色	
15 134	土製支脚		~				底部内面は上方にへこむ 接地部分には1~1.5cmの平坦面をつくる	ナデ ユビオサエ	暗赤褐色	

ここでは8世紀後半の須恵器も生産されていたが出土した溶着資料は13以前の時期のみで、13が蓋の上に載せて焼かれたものか直接参考にすることはできなかった。しかし、焼成時の窯の内部を復元する手掛かりのひとつになると思われる所以、他地域の窯で生産された可能性も含めて今後も検討していく必要があるだろう。

古八幡付近遺跡 段状造構18・19出土遺物（第107図）

出典	年	器種	出土場所	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	画	焼	色	調	備考
1	135	土師質皿	段状造構	10.4	2.3	4.8	口縁は体部に比べ厚くなる	回転ナデ	灰白色			
2	135	"	"	(11)	(2.5)	(5.0)	体部の中ほどで強く内湾	回転糸切り				
3	135	七師質環	"			6.6		回転ナデ	灰白色			
4	135	土師質皿	"			4.0		ナデ?	根褐色			
5	135	土師質環	"			6.2		回転糸切り				
6	135	"	"			5.8		回転ナデ	明褐色			
7	135	"	"			6.0		回転糸切り	明褐色			
8	135	紙石	"					3面に横溝あり	青灰色			
9	135	"	"					打痕・研磨痕あり	淡褐色			
10	135	須恵器环身	段状造構	11.6		般人径 13.4		回転ナデ	青灰色			
11	135	須恵器环蓋	"	6.3			輪状つまみ	回転糸切り後回転ナデ	灰白色	自然釉		
12	135	"	"			14.6		回転ナデ	暗灰色			
13	135	須恵器环身	"	1.8	4.2	8.2	低い高台	ヘラ切り後ナデ	暗灰色	茶ね焼痕 砂粒多く含む		
14	135	"	"	6.5	6.0	11.6		ヘラ切り後不定方向 のヘラズリ	暗灰色			
15	135	"	"			9.2		回転ナデ	灰色			
16	135	須恵器碗	"			5.1	端部をナデてつまみ出し し高台にしている	回転ナデ	灰色			
17	135	須恵器环蓋	段状造構	9.0				回転ナデ	暗青灰色			
18	135	上縁	"	幅 3.85	長さ 5.7	重量 55.7kg	帯状		黒茶褐色			
19	135	上縁器手捏ね	"	(7.0)	(4.4)	(4.7)	口縁はやや内側にカーブする 端部はシープに先細りする	ナデ	赤茶色			
20	135	土師質甕	"	14.0				回転ナデ	灰白色			
21	135	土師質皿	"			3.9		回転糸のナデ ナデ	暗茶褐色			
								回転糸切り				

8-3区出土遺物

8-3区遺構外で出土した遺物の時期は中世が中心で、斜面下方の調査区に比べてやや偏りがある。また、貿易陶磁や国産の陶磁器類の出土片数は、敬川近くの水田部に位置する平成8年度調査区に次ぎ、中世後半以降は集落の中心が再び丘陵上に移ったことを示している。

弥生土器（第109図、写真図版135）

弥生土器はIV様式とV-1様式の細片が僅かに出土したのみで、8-2区からの流れ込みと考えられる。このため弥生時代の造構は8-3区に造られなかったと考えられる。

石 器（第109図、写真図版135）

8-3区遺構外では石器と考えられるものが3点出土した。1は欠損した面以外は全て丁寧に磨いてある。一見砥石の様だが上面の角を面取りしているので、扁平片歯石斧と思われる。遺跡内で石斧は打製・磨製合わせて26本出土しているが、扁平片歯石斧と思われるものはこれのみである。

須 恵 器（第109図、写真図版135）

8-3区で出土した須恵器もほとんどが古代以降のもので、古墳時代の須恵器は非常に少ない。

出土した古墳時代後期の須恵器は造構埋土から出土したものと合わせてみると、壺や甌の出土数に比べ確認できた蓋杯の数が段状造構18の僅か1点と極めて少ない点が特徴的である。

土師器（第109図、写真図版135）

斜面下方の調査区に比べ、造構外で出土した土師器は細片が多く、これは丘陵尾根上近くに古墳時代から奈良時代の造構が少なかった為と考えられる。9の高环は脚部が短く、色調は肌色に近い。杯部と脚部の接合部分にはハケメが確認できる。8-3区北側の斜面上方で出土した。

土師質土器（第110図、写真図版136・137）

8-3区では土師質土器が最も多く出土した。22は土師質の鍋で段状造構16に伴う可能性が高い。出土位置や形態が近いので第68図11と同一個体の可能性も考えたが、口縁の形態がやや違うので別々に図化した。口縁は胴部以下よりも薄く、明確に受部を造っている。この種の甌（鍋）の蓋と思われるものは全く出土していない。木製の蓋だったために残らなかったのかもしれない。胴部下半には菱形の宛具痕を確認できる。

陶磁器類（第110図、写真図版136）

8-3区では造構外からも貿易陶磁が出土している。ほとんどが龍泉窯系の青磁で、一部14世紀以前のものもあるが15世以降のものが大半を占めている。耕作上中出土のため細片が多く、火を受けたものもある。瀬戸・美濃灰釉皿（21）は8-1区でも一回り小さいものが出土している。このほか同化していないが、天目茶碗・李朝陶器皿・船上目の絵唐津が出土している。大日茶碗は瀬戸・美濃に混じって中国産と思われる小片も確認している。李朝の皿は第87図1と同様のものである。絵柄津は釉の特徴が「志野」とよく似ている。江戸時代初期のものと思われる。これら非掲載の陶磁器類の一部は巻頭写真図版3に入れてあるので参考にしていただきたい。

擂鉢・鉢・釜（第110・111図、写真図版136）

擂鉢はここでも備前焼と在地系のものが出土している。第110図6は瓦質の擂鉢で全体に火を受けている。口縁内面に断面三角形の粘土を貼り、上面に幅1.3cmの平坦面をつくっている。第111図1は土師質の擂鉢で内面は煤が付着して黒褐色になっている。底部には作業板？の板目が残っている。3は内側するタイプで口縁の作りも第68図5と似ている。これら在地系擂鉢の時期は、15世紀以降の備前焼擂鉢が多数出土したことを考えると、15世紀以前の可能性が高いと思われる。2は瓦質の鉢で、径はもう少し小さくなるかもしれない。防長系のものか。4は土師質の釜で、土師質といつても在地系の擂鉢同様非常に硬い。取っ手が折れた痕があるので茶釜と思われる。外面の鍋以下はススの為に黒褐色になる。このほか巻頭写真に掲載した瓦質の香炉も出土している。

古代瓦（第111図、写真図版136）

古代の瓦は2点とも斜面北側で出土した。これで古八幡付近遺跡で出土した古代の瓦を全て報告したことになるが、改めて瓦の出土地を第152図で確認すると、どれも集石1を起点とする水の流れ（黒色土の堆積範囲）から大きくはずれていないことが分かる。また、調査区内では段状造構10・11より東側や南側で古代の瓦は出土しなかった。第66図7が7区北側の耕作上から出土しているが、これは北側調査区外の段状造構11の続きから転落した可能性も考えられる。瓦を転用した時期は6区出土瓦のところで述べたようにほぼ中世と考えられるが、以上の状況から室町時代以降まで下るかもしれないことを付け加えておく。

銃 弾 (第111図 6、写真図版136)

銃弾と思われる鉛玉が近代の溜め池の斜面下方の耕作土中で出土している。周辺には遺構が存在せず、詳しい時期は不明である。全体に面が残っており、やや歪な球形である。ここは鍛で荒掘りをしていた場所で、ほとんど偶然に採集できたと言つてよく、遺跡内における実数はほとんど不明である。同じことは石鎚や墓石についても言えることで行政発掘では回避困難な問題かもしれない。

4. 尾根上で検出した近世の遺構

丘陵尾根上では段状遺構20を中心に近世の遺構が検出された。特に段状遺構20の南側では、17世紀初頭から19世紀までの陶磁器類が大量に出土している点が注目される。このことは近世以降も継続してこの丘陵が集落の一角であったことを物語っている。本来はこれら近世集落の遺物も分類・数値化して報告すべきだが、今回の古八幡付近遺跡の報告は近世以前に限って行うこととしたので、同時期の遺跡である「石見焼窯跡」の報告書で詳しく述べるとしたい。

土 壤 6 (第108図、写真図版72)

8-2区中央に位置する基壇状の高まりと古道の間で検出した。平面は不整梢円形を呈し、検出面の規模は長さ約3.2m、幅約1.5m、深さは約1.3mを測る。断面は逆台形状で、床面はほぼ平坦だが、北側に約6度傾斜している。埠上土層では近世の陶磁器が出土した。その下には無遺物の層が堆積し、最後に床面付近で素焼きの「盛り鉢」が出土した。これは石見焼の粘土を乾燥するのに使用されるものである。土壤6は形態や出土した遺物から近世の粘土採掘坑の可能性が高いが、古道や基壇に近すぎる点が気になる。近世以降の遺構の中でも最も新しい時期の遺構かもしれない。

古八幡付近遺跡 8-3区出土遺物① (第109図)

順番	形態	基 壁	出土地點	寸法(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	形態・文様の特徴	調 整	塗 色	調 色	備 考
1	135 甕生壁	〃	8-3区	16.4			口縁は下に傳はず 口縁外側にはクシ書き 開口部を各邊らせん	ヨコナデ ヘラケズリ	明褐色		
2	135 〃	〃					全体に風化	ヘラケズリ	明褐色		
3	135 甕生高環	〃		12.4			口縁端部は上に伸ばす 口縁は風化のため不明	ヘラケズリ	外面 淡褐色 内面 淡茶褐色		
4	135 甕生高環	〃				7.0	脚径 4条以上の凹線文を施す	風化の為調査不明	淡灰褐色		
5	135 甕生底部	〃				5.1	底部は上げ底	ヘラミガキか?	外面 淡褐色 (黒唐塗り) 内面 スス付着		
6	135 扁平刃刀石斧	〃	残存長 幅	5.5 4.0	厚さ1.1 重さ 41.54g				淡黄灰色	泥板岩(質 岩)	
7	135 磨製石斧	〃	残存長 幅	7.4 4.8	厚さ2.2 重さ 101.9g				外面 灰色 断面 黑灰色		
8	135 磨製石斧	〃	残存長 幅	11.9 3.6	厚さ23.1 重さ 233.12g				明緑灰色		
9	135 土師器高环	〃				5.2	脚径 2本の突起の間のへダ による割文を施す	ハゲヌ ユビオサエ	淡褐色(はだ色)		
10	135 土師器把手	〃					口縁端部には厚みがある	ユビオサエの後ナデ	明緑褐色		
11	135 ミニチア	〃		5.5	3.5				茶褐色		
12	135 須恵器灰身	〃				11.3			淡灰色		
13	135 須恵器蓋	〃			20.8		端部は内側に肥厚する	回転ナデ 回転ナデ タタキヌ ナデ	暗灰褐色 灰色		
14	135 須恵器蓋	〃			11.0				灰色		
15	135 須恵器蓋	〃					2本の突起の間のへダ による割文を施す	回転ナデ 頭部をなでつけた跡(?)			
16	135 須恵器蓋	〃		10.4				回転ナデ	青灰色		
17	135 須恵器蓋	〃		20.6			端部はむかに上方へ張る	回転ナデ	灰色		
18	135 須恵器蓋	〃					沈線の頭に割文	回転ナデ	灰色		
19	135 須恵器蓋	〃						回転ナデ	外灰褐色 内 淡灰色		

古八幡付近遺跡 8-3区出土遺物②(第110図)

編號	器種	出土箇所	寸法(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	136 土師質打明皿	8-3区	6.7	2.1		内面らせん状の沈線	回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
2	136 上師質皿	〃		4.4			回転ナデ 回転糸切り	暗褐色(灰白色)	
3	136 上師質高台	〃		5.3		柱状高台	ていねいな回転ナデ 内面糸切り	外面 淡茶褐色 内面 黒茶褐色	
4	137 十師質環	〃	(13.8)	(4.8)	7.6	口縁部は内側にゆるくカーブする	回転ナデ 回転糸切り	外面 淡茶褐色 内面 黑茶褐色	
5	136 〃	〃			6.3		回転ナデ 回転糸切り	外面 淡茶褐色 内面 淡茶褐色	
6	136 土師質環?	〃		4.4			回転ナデ 回転糸切り	淡褐色 (断面灰白色)	
7	136 上師質環	〃		6.2			回転ナデ 回転糸切り	赤茶色	
8	136 〃	〃		5.2			回転ナデ 回転糸切り	淡橙褐色	
9	136 〃	〃			5.4		回転ナデ 回転糸切り	哈桃褐色	
10	136 〃	〃			5.2		回転ナデ 回転糸切り	明褐色	
11	136 土師質環?	〃			4.8	中心部は幾くらせん状	回転ナデ 回転糸切り	哈褐色	
12	136 土師質環	〃		6			回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
13	136 〃	〃		5.9			回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
14	136 〃	〃		4.2			回転ナデ 回転糸切り	淡灰白色	
15	136 〃	〃		5.8			回転ナデ 回転糸切り	淡茶褐色	
16	136 十師質環?	〃		4.6			回転ナデ 回転糸切り	灰白色	
17	136 十師質	〃	11.6	2.65	6.6	口縁は端部が角ぼって面がある	内面は回転ナデ 回転糸切り	淡赤系褐色	
18	136 〃	〃			5.6	口縁端部はうすくわざかに外反する	回転ナデ 回転糸切り	外面 暗茶褐色 内面 赤茶褐色	
19	136 青磁碗	〃					回転ナデ	淡綠灰色	
20	136 〃	〃			(4.4)	内面に花文 外面に擦描きの蓮弁文	回転ナデ 回転糸切り		
21	136 薩摩・美濃皿	〃	11.4	2.5	6.0	内面花文	回転ナデ	外面 黒茶褐色	
22	136 上師質盤	〃	18.2			口縁部内沿 洞部8条の沈線	回転ナデ 内面はヘラケズリの後ナデ	内面 明褐色	
23	136 猫前焼盤体	〃			32.6	口縁内側	回転ナデ	暗茶褐色	
24	瓦質鉢	〃		27		口縁内面に断面二角形の粘土をつぎ足して上面を幅13cmの平頂を形成 内面には1単位6条のクシ縫き沈線	接合痕明顯	灰白色	

古八幡付近遺跡 8-3区出土遺物③(第111図)

編號	器種	出土箇所	寸法(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	136 上師質鉢	8-3区			10.8	内面はナデの後5条のクシ縫き沈線を施す(寸目)	ナデ	外面 淡褐色 内面 スッ付青(墨褐色)	
2	136 真質火鉢	〃			25.0		ナデ	墨色 (動上は明褐色)	
3	136 上師質鉢	〃				口縁には粘土を巻きつけたて底厚せる 浅い沈線を週部に持つ 寸目は沈線のぬはつきられないが5条のクシ縫き沈線を施す	ナデ	外面 淡灰褐色 内面 明褐色	
4	136 上師質羽釜	〃				老子方にはつけてある 鶴は角ぼっており、周部に強く押しつけるようにしてはりつけてある	回転ナデ 横方向に細い単位で連続してヘラケズリをして後ナデ	外面 暗茶褐色 内面 喧褐色	茶釜の可能性あり
5	136 十師	〃	長25	幅1.7			手づくね	淡茶褐色	
6	136 銅製彌丸	〃	11.2	削さ			全面に打痕が残る	淡青灰色	
7	136 平瓦	〃			8.64g	彌丸タタキの後ユビオサエ	青灰色		
8	136 平瓦	〃				全体に厚漬が薄着し 済部は2面取りしている	布口升痕 面取り	乳白色	
							圓口タタキ痕		

段状遺構20（第108図、写真図版72）

尾根上平坦地と西側斜面との変換点に位置している。地山削り出しの平坦地で斜面側に盛土は見られず、石列が検出された所が段の端になると思われる。検出した床面は幅約6.6m、長さは10m以上で、さらに南側に続いている可能性が高い。床面では土壌7～9を検出したほか、時代幅のある近世陶磁器が出土した。このため時期の特定は難しいが、出土遺物に李朝陶器や15世紀頃の青磁が含まれるので、段が造られた時期は16世紀頃まで遡るかもしれない。

土 壤 7（第108図）

段状遺構20と古道の接する位置で検出した。平面は梢円形を呈し、規模は長さ1.4m、幅88cmを測る。土壌というよりも浅い窪みといった感じで、壁と床の境ははっきりしない。埋土中で第108図の青磁皿が出土した。小片のため文様ははっきりしないが15世紀以降のものと思われる。これと同様な皿は段状遺構10でも出土している。

土 壤 8（第108図、写真図版72）

段状遺構20北側で検出した上塙で、規模は検出面で長さ74cm、幅52cmを測る。断面は逆台形を呈し、土壙内には大小の石が詰まっていた。遺物が出土していないので時期は不明である。上塙8は規模や石の検出状況、周辺の出土遺物から中世の墓にも見えるが、詳しい性格は不明である。

土 壙 9（第108図）

土壙8の約60cm東で検出した。平面は円形に近く、規模は約50×60cmを測る。深さは5cm以下と非常に浅く遺物も出土していないので、時期・性格共に不明である。

古 道（第108図、写真図版72）

段状遺構10と20の間を通っている。すでに述べたように、溝状遺構1、溝状遺構9と一連の古道と考えられ、ここからさらに南東に伸びるものと思われる。道の床と北側の壁には丁寧に石が貼らされていた。土層観察用のベルトを残さなかったので段状遺構10・20との前後関係は不明だが、近世後半や近代の遺物しか出土しなかったことから、古道が後から段を切っていると考えられる。

近世集落および古道については第3章で詳しく述べることにする。

基 壇（第70図、写真図版38・61）

8-2区のほぼ中央に位置している。地山を平面台形状に削りだして造られ、盛土等は見られない。表土下で検出した地山面はほぼ水平で、径10cm、深さ5cm前後の小規模なピットを僅かに検出した。表土下で近代の陶磁器やガラスが出土し、北側には石見焼の甕が埋め込まれていた。基壇の南東側には溝が掘られ、裾には石列が組まれている。基壇と石列の間からは写真図版137の鉄滓が出土した。製鍊滓と思われる。基壇が現在の形になったのは近代以降と考えられる。しかし、基壇南東の面と南側の掘立柱建物群の主軸がほぼ直行する点は非常に気になる。地形に合わせて偶然このような位関係になったのか、それとも中世に基壇の前身が造られていたのか、現在の状況からは不明と言わざるをえない。

第3節 9区の調査

調査区の立地（第38図、写真図版35・39・40・42）

9区は工事中に石室を発見した為に急遽設定した調査区で、これまでの古八幡付近遺跡の調査区からは飛び地になっている。最も近い8区とも谷を一つ挟んで約80m離れている。調査区の標高も約55～62mと水田部の調査区とは50m前後の比高差がある。調査区の北側は急斜面だが南側には70m以上緩やかな地形が続いている。尾根上の眺望は極めて良好で、ここに作られた弥生時代の遺構が眺めを意識した可能性は充分考えられる。また、写真図版35の中央地山が露出した所が9区で、写真ではわかりにくいが敬川河口方面から肉眼でもはっきりと1号墳を確認できる。このように9区は他の調査区とかなり立地が異なり、それまで古八幡付近遺跡で不明とされていた時期の遺構・遺物がまとまって見つかった。特に弥生時代中期の資料は遺構・遺物とも石器部では著しく不足している。9区の弥生時代集落の調査は全く予想せぬものだったが、今後こうした立地の調査が増えれば弥生時代の資料数も増加するかもしれない。なお、これまでの調査区は遺構を検出した箇所の順番で記述してきたが、9区は遺構の時期や性格が極めて限定されるので、弥生時代集落・古墳群、その他の遺構の順に記述することにした。

1. 弥生時代集落の調査（第113・152図、写真図版39～41・82～92）

当初この丘陵に弥生時代の遺構が存在することは全く予想しておらず、1号墳調査中に弥生土器の細片が出上したことがきっかけになって古墳以外の尾根上も調査することになった。

調査の結果竪穴住居4棟と掘立柱建物1棟を検出した。これらの遺構はみな尾根上の平坦地と斜面の変換点に位置し、竪穴住居はそれぞれ直線距離で約15m離れている。竪穴住居を検出したレベルより約2～4m下がった標高56～58m付近では長さ約37mの溝を検出した。この溝は弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）に掘られ、中期末から後期初頭（Ⅳ～Ⅴ～Ⅰ様式）には埋まっているので、竪穴住居と同時期のものと考えられる。溝を検出したのは丘陵の北側と西側で、調査区外の東側と南側がどのようにになっているのかは不明である。溝の性格については様々な見解があるが、とりあえず集落の周りに深く掘られた溝、空壕ということで以下「環壕」と呼ぶことにする。

調査区内で検出した弥生時代の遺構は以上だが、弥生時代の集落の範囲はさらに広がっている可能性が高い。調査後の遺構配置図（第152図）をみると分かるように、尾根上の平坦地は南側に約70m続き、環壕を検出したレベルには調査区外にも平坦な地形が残っている。このため竪穴住居や環壕の続きが9区の南に存在する可能性は充分考えられる。尾根の北側はやや急斜面になっているが、標高40m付近より下方は比較的緩斜面が続いている。これは8区との間の谷についても言えることで、丘陵北側にも集落が広がっていた可能性はあるが既に工事が始まっていたため確認できなかった。また、9区の東側には近世または近代の大規模な削平段があり、遺構は検出できなかった。しかし、その下の斜面にトレンチを入れたところ、平面が円形、断面が台形状で壁がオーバーハングする上層を検出した。すでに予定調査期間を越えていたことに加え、弥生時代の遺構が決めかねたので調査区から外さざるを得なかった。ただし、9区の東に集落が続く可能性は否定できない。

以下、竪穴住居・掘立柱建物・環壕の順で各遺構の概要を述べる。

豎穴住居1 (第114・117図、写真図版82・83・137)

尾根上の平坦地と東側斜面の変換点に位置している。住居の斜面側半分は流失しているが、残っていた半分から本来の平面形は円形または多角形で、径6m前後の規模だったと推測される。埋土は外側から中央に向かって自然に堆積し、遺物はほとんど含まれていなかった。床面ではピットを18基検出した。P1は深さ25cmと浅く、床上に堆積した2層は炭を多く含んでおり、規模は小さいがいわゆる中央ピットと考えられる。他の柱穴は床面レベルや規模がほぼ3段階に分かれている。基本的に建て替えは山側に向かって行われ、最も深い柱穴が検出した床面に伴うと思われる。これを元に柱穴配置の変遷を想定すると、初め多角形の配置で立てられていたものから、P6・13・16～18の4角形の配置に立て替えていると考えられる。壁体溝は壁が残っていた範囲は全て廻っており、南側と西側の一部で径20cm前後の小ピットを10基検出した。

遺物(第117図)は1・4・5が床面で、2・8・9が壁体溝内で出土した。6は底部に2条の凹線を施す珍しい資料である。当地域で類例を見ないため詳しい時期は不明だが、およそ石見編年第IV様式のものと思われる。壁体溝から第IV様式の9が出土し、3回以上の建て替えを行っていることから、豎穴住居1は弥生時代中期中葉から後葉にかけての建物と考えられる。

豎穴住居1計測表

規 模	壁 高	圓 丸 多 角 形							
		上 面				下 面			
		6.2×(3.44)m				5.9×(2.98)m			
柱穴	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
(cm)	上 面 径(cm)	56×50	45×37	40×37	52×38	35×34	37×37	42×30	15×15
	底面標高(m)	60.96	60.92	60.98	60.84	61.19	60.72	60.81	61.21
	番 号	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
	上 面 径(cm)	22×22	24×23	32×32	18×17	28×23	38×(22)	18×17	38×35
	底面標高(m)	61.21	61.21	60.94	61.01	60.84	60.90	61.22	60.80
	番 号	P17	P18	P19					
	上 面 径(cm)	22×22	22×18	31×24					
	底面標高(m)	60.70	60.66	61.00					
	柱間距離(m)	P3-19	P19-11	P14-19	P19-12	P16-4	P4-7	P7-13	
		2.04	1.42	1.90	1.54	1.45	2.20	2.56	

豎穴住居2 (第115・117・118図、写真図版84・85・137・138)

西側斜面の調査区南端で検出した豎穴住居で、尾根上平坦地との変換点に位置している。ここはかなり傾斜が急で、床面の西側は流失している。プラン検出時の状況や堆積土層から建物36が先行し、豎穴住居2が新しいと判断される。豎穴住居2は平面形は東側がやや膨らんでおり多角形にも見えるが、主柱穴はPA・PCの2本と考えられるので、不整長方形の可能性が高い。残存する床面は約3.8×2.5mを測る。堆積土の内第7層は硬くしまっており住居の裏込めと思われる。また、第3層は溝状に窪んで炭を多く含み、調査区南壁でも同様の堆積状況を確認した。土層観察用のベルトを残して一気に地山面まで掘り下げた為確認できなかったが、調査区の南側に5層を貼り床面とする別の建物が存在した可能性がある。床面ではピットを8基検出した。豎穴住居2に確実に伴うのはPA-Cで、PA・Cが2本柱穴、PBが中央ピットと思われる。PBは深さ20cmと浅いが、床面には炭を多く含む土が堆積していた。また、PBの北側には80×50cmの範囲で比較面が検出された。壁体溝は東側では明確に検出できたが、PBより西側では確認できなかった。

遺物(第117・118図)は比較的まとまった量が出土した。この内床面および第5層より出土した遺物は第117図10・13、第118図9、第119図2・4・9である。これらの時期は、第117図9がIII-2

様式で一点だけ時期が古いが、ほかはやや新しい様相のものが含まれるもののはば第Ⅳ様式の上器と思われる。これに対し2~4層より出土した遺物は、竪穴住居2の廃絶後に廃棄された遺物と考えられ、明らかにV-1様式と思われる土器が混じっている点が注目される。第117図17~22、第118図3の甕や9の壺は頸部以下の内面にヘラケズリが確認でき、口縁部から頸部にかけての器壁に厚みが増しているのでV-1様式の土器と思われる。詳しくは環壕のところで述べるが、第V様式の上器は環壕埋没後に堆積した旧表土から3点出土しただけで、環壕内や9区の他の地点からは1点も出土していない。こうした状況は弥生時代後期に入つて環壕が埋没した後も継続してこの尾根が居住域として利用され、建物群の中心が9区の南に移動したことを想起させる。

このほか竪穴住居2の埋土からは備後北部Ⅳ様式の「塩町式上器」が出土している。第118図2~6の甕や第119図1の無頭壺は備後北部に特徴的な文様で飾られているが、胎土や色調は在地の土器と何ら変わらない。また、竪穴住居2から出土した「塩町式」の甕は施文や内面の調整にバリエーションがあり、時期差があると思われる。このため古八幡付近遺跡で出土した「塩町式土器」は地元で継続して作られたものと考えられるが、煩雑さを避けるため以後は塩町式土器と呼ぶことにする。塩町式土器は環壕からも出土しているので、竪穴住居2出土の塩町式土器についても環壕出土遺物と併せて述べることにする。

竪穴住居2は塩町式の上器が出土し、弥生時代後期初頭には廃棄土壤となっていた可能性があるので、弥生時代中期後葉から後期初頭までの建物と考えられる。

竪穴住居2計測表

規 模	平 面 形			側 面 方 形				
	上 面		下 面					
規 模	4.28×(2.84)m			3.88×(2.52)m				
柱 高				74cm				
柱穴番号	PA	PB	PC					
上 面 深 (cm)	50×40	53×47	40×30					
底面標高 (m)	59.68	59.80	59.50					
柱間距離 (m)	PA-B	PB-C	PA-C					
	0.95	0.86	1.81					

建 物 36 (第115・119図、写真図版84・138)

竪穴住居2に先行する掘立柱建物である。桁行きはP1~7まで7基の柱穴が並んでおり、柱間距離や床面レベルから2回以上の建て替えが考えられる。また、これと平行してP8・9が並んでおり、さらにもう1回建て替えが行われた可能性もある。柱穴の規模は竪穴住居と大差ない。壁の外側のP4・6に対応する位置で、柱穴に近い怪しき浅い窪みを検出した。7区で検出した段状造構2でも壁の外側で柱穴や窪みを検出したが、上屋を支える部材を固定するためのものかもしれない。

遺物（第119図）はほとんど出土せず、図化できた土器は13・14の2点のみである。14は細片だ

建物36計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間以上 (1.88m)				3間以上 (4.84m)			
主 軸	N-32.5°-W							
柱穴番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
上 面 深 (cm)	28×23	34×28	29×25	28×24	33×30	34×30	26×25	30×28
底面標高 (m)	59.82	59.87	59.98	59.92	59.82	59.92	59.80	59.80
柱穴番号	P9	P10	P11	P12	P13			
上 面 深 (cm)	31×29	20×20	22×(17)	45×40	40×36			
底面標高 (m)	59.72	59.91	60.08	59.88	59.61			
柱間距離 (m)	P1-2	P2-4	P4-6	P2-12	P12-13	P3-5	P5-7	P8-9
	1.56	1.78	1.50	0.99	0.89	1.52	1.12	0.64

が2条以上の突帯文が確認できる。土器以外では第135図9の砥石が出土している。ただし埋土中で出土したので、尾根上の遺物が流れ込んだ可能性が高い。

建物36は竪穴住居2に先行するので、弥生時代中期中葉から後葉頃の建物と考えられる。

竪穴住居3（第114・119図、写真図版40・85・138）

尾根上の北側で竪穴住居4と同時に検出した。2棟の埋土は非常によく似ており、土層観察では前後関係は掴めなかった。出土遺物の時期では竪穴住居3の方が新しいと考えられる。

ここはちょうど1号墳と2号墳の間にあたる位置で、古墳築造時に削平を受けたり周溝に切られた関係で竪穴住居2ほど残りが良くなかった。竪穴住居3は完掘後の平面形を見ると、それぞれの辺に膨らみのある四角形を呈している。しかし、検出した柱穴の数や位置、壁体溝の形状から数回の建て替えを行っていることは間違いない、おそらく個々の時期の平面形は多角形を呈していたと考えられる。床面ではピットを22基検出した。検出したピットの中で建物の柱穴になりうるものを床面レベルで組み合わせてみると、複数の多角形の並びを想定でき、東側の組み合わせの柱穴ほど深く掘られている。このため竪穴住居3は南東に向かって2～3回建て替えを行ったと推測される。P22は中央ピットと考えられる。規模は9区で検出した竪穴住居の中でも特に小さく、浅い窓みという感じである。焼土面は床面が削られているためか検出されなかった。壁体溝は検出した範囲ではほぼ全周していたが、古墳の周溝に切られる北側と南側はやや残りが悪い。周溝に切られていない東側は壁も比較的よく残り、壁体溝は一部壁の外側に潜り込んでいた。また、東側の壁体溝の中では、竪穴住居1の壁体溝内で検出したと同様な小ピットを12基検出した。

出土した遺物はほとんどが細片で、図化できたのは第119図15・16・19の3点のみである。15・16がP10から、19が埋土中で出土した。15は口縁端部に2条の凹線を施しており、19の脚部も凹線を多用している。どちらも第IV様式の土器と思われる。18は環濠の東1.3mの地点で出土した脚部で、竪穴住居3・4の斜面下方になるのでここから転落した可能性がある。底部の充填や全体のプロポーションから高壇以外に壺や鉢の脚部の可能性も考えられる。

先行する竪穴住居4は中期中葉の建物と思われ、周辺では後期の土器が出土していない。竪穴住居3は中期中葉以降に建てられ、数回の建て替えを行って後期までに廃絶したと推測される。

竪穴住居3 計測表

柱穴 (cm)	番 号	隅丸多角形						
		上 面				下 面		
		5.4×(4.4)m				4.8×(4.3)m		
	P1	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上 面 幅(cm)	35×32	32×30	29×26	27×24	26×23	46×33	38×34
	底面標高(m)	59.02	59.14	59.16	59.38	59.14	58.98	59.24
	番 号	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
	上 面 幅(cm)	34×34	38×34	55×(34)	22×19	22×22	31×22	26×23
	底面標高(m)	59.16	59.03	59.16	59.30	59.50	59.15	59.50
	番 号	P17	P18	P19	P20	P21	P22	
	上 面 幅(cm)	34×32	30×28	20×20	44×41	28×27	54×37	
	底面標高(m)	59.13	59.09	59.10		59.11	59.21	
	P1-6	P6-10	P2-5	P5-11	P11-16	P21-3	P3-5	P5-9
柱間距離(m)	2.16	1.42	2.44	2.52	2.44	1.72	1.85	1.54
	P22-7	P7-16						
	2.77	2.67						

竪穴住居4（第114・119図、写真図版40・85・138）

竪穴住居4は重複する竪穴住居3や1号墳周溝にかなりの部分を切られており、平面形や床面の

規模などほとんど不明である。僅かに東側で検出した壁は弧を描いているので、元は円形又は多角形の平面形だったかもしれない。床面で検出したピットはPA・Bの2基だけである。このため主柱穴の配置は不明だが、竪穴住居3の北側で検出したP4はやや掘り方の床面レベルが近く、竪穴住居4の柱穴の可能性もある。

遺物（第119図）は埋土中で17が、壁体溝の中から20が出土したのみである。20は頸部に指頭圧痕文帯を貼り付けるタイプの甕である。石見地方ではこのタイプの甕の出土例が少なく、石見編年にも含まれていなかったが、周辺地域を参考にすればⅢ-1様式と考えられる。ちなみに頸部に指頭圧痕文帯のある甕は、環濠出土のものを合わせてもわずか4点だった。

竪穴住居4は出土遺物と切り合い関係を考慮すれば、弥生時代中期後葉頃には建て替えられた建物と考えられる。

竪穴住居4計測表

現 模	不 明		
	上 面	下 面	
壁 高 度	24cm		
柱穴 上 面 径(cm)	PA 40×36	FB 30×27	
底面標高(m)	59.51	59.62	
柱間距離(m)	PA-B 1.44		

古八幡付近遺跡 竪穴住居1・2出土遺物（第117図）

件 名	器 種	南 北 地 点	口径(cm)	底面(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1 137	弥生底部	竪穴住居1		8.2		ナデ ヨコナデ	淡茶褐色 (外部黒褐色)	
2 137	〃	〃		5.4		ナデ ユビオサエ	外 淡茶褐色 内 深黒褐色	
3 137	〃	〃				ナデ	淡褐色	
4 137	〃	〃		5.6		ナデ	暗褐色 内 淡茶褐色	
5 137	〃	〃		7.4		ナデ 黒化の為調整不明	外 暗褐色 内 深黒褐色	
6 137	〃	〃		6	2条の回縞文を施す	ナデ ヨコナデ ヨコ方向へのヘラケズリ	淡茶褐色	
7 137	〃	〃		4.2		風化の為不明	外 茶褐色 内 淡黒褐色	
8 137	弥生窯	〃			口縞短く外反	風化の為不明 しづり痕	外 暗茶褐色 内 淡黒褐色	
9 137	〃	〃			口縞端部には面がある 口縞外面には四輪文を施す(4条以上)		黒茶褐色	
10 137	弥生甕	竪穴住居2	6			ケズリ後ナデ?	淡黒褐色	
11 137	〃	〃	16.4		口縞は上下にわずかに 拡張	風化の為不明 ヘラケズリ後ナデ		
12 137	〃	〃				ヨコ ハケ目	黒褐色	
13 137	〃	〃	15.6		2条の回縞文	風化の為不明 ヨコ 方向ヘラケズリ後ナデ	淡黄褐色	
14 137	〃	〃	15.0		2条の回縞文	ヨコナデ	外 淡茶褐色 内 黒褐色	
15 137	〃	〃	17.6		2条の回縞文	ナデ	淡黄褐色	
16 137	弥生体?	〃	16.8		2条の回縞文	ナデ	淡褐色	
17 137	弥生甕	〃	18.8		2条の回縞文	ナデ ヘラケズリ	淡茶褐色 (外部深茶褐色)	
18 137	〃	〃	19.2		回縞2条	ヨコナデ ヘラケズリ	淡黄褐色	
19 137	〃	〃	21.2		3条の回縞文	ナデ ヘラケズリ	暗褐色	
20 137	〃	〃	20.0		3条の回縞文 刺突文	ナデ ヘラケズリ	淡黄褐色	
21 137	弥生甕	〃	22.4		2条の回縞文 列点文	ヨコナデ ヘラケズリ 上 段と低い腰かくで押打	黒褐色	
22 137	弥生甕	〃	22.4		3条の回縞文	ヨコナデ ヘラケズリ	暗褐色	

古八幡付近遺跡 積穴住居2出土遺物（第118図）

古八幡付近遺跡 積穴住居2~4・建物36出土遺物（第119図）

測量	測定	備考		
	出土地点	形態・文様の特徴	調 整	色 調
1 138	弥生無鉛鏡 弥六住居	2 8条の沈面間に刻目 羽状文 3条の回輪文		淡褐色
2 138	弥生脚付鏡	~		
3 138	弥生底部	~	5.6	風化の為不明 ハケの後ナデ
4 138	~	~	9.4	風化の為不明 高光付 ハラケナシ
5 138	~	~	6.9	風化の為不明 ナデ
6 138	~	~	6.4	2条の回輪文 ナデ
7 138	~	~	4.3	ケズリ (外部黒斑)
8 138	弥生高环	~ 15.6	3条の回輪文 ナデ	淡黃褐色
9 138	~	~ 14.4	ヘラミガキ	外黒色
10 138	弥牛脚部	(11.0)	7条の回輪文 (1条は端部に施す) ナデ	ヘラケズリ
11 138	弥牛脚部	~	15.8 11条の回輪文 刻目 打抜あり	内面はヘラケズリ キモチ 淡茶褐色 黄灰色
12 138	盤石	~		
13 138	弥生底部	建筑物36	4.5	ヨコナデ ヘラケズリ 外 原褐色 内 淡茶褐色
14 138	弥生鑑	~	2条の交帶文	表面の剥離が著しい 為不明
15 138	弥生鑑	弥六住居3	11 2条の回輪文	内 淡褐色
16 138	弥生底部	~	6.6	ナデ 外 淡茶褐色 内 淡褐色
17 138	弥生鑑	弥六住居4	7条のクシ彫或状文?	著者褐色
18 138	弥生高环	弥六住居 4周辺	7条の回輪文 (色彩?)の4方透かし 3条の回輪文+5条の 横縞+3条の印輪文	黄褐色 ナデ 脚部内面は ハイナデ 強打抜きギザ
19 138	~	弥六住居4	10.0 3条の回輪文+5条の 横縞+3条の印輪文 風化の為不明 ヘラケズリ	淡黃褐色
20 138	弥生鑑	~	32.6 11.3 鏡面に刻字有 風化の為不明	胎毛褐色

環 壇(第120~123図、写真図版39~41・86~92)

9区の丘陵北斜面と西斜面で検出した。丘陵西斜面の標高約58m付近は、調査前から幅6m前後の平坦地が確認されていた。ここは1号墳と2号墳の間の斜面下方にあたり、削平を受けた別の古墳が埋没している可能性が考えられた。このため平坦地に直行する位置（第120図D-D'）にトレーニングチを設定して掘り下げた。その結果、表土下で黒褐色の弥生時代遺物包含層を検出したが、その下の暗茶褐色土を地山と見誤った為、当初以降の範囲や性格を全く掴めなかった。しかし、この土が弥生土器を含み細かい炭が混じっているので、思い切って礫を含むところまで掘り下げる地山が逆台形状に掘り込まれていることが判明し、底面に著しく風化した弥生土器が貼り付いていた。このため環境と判断して順次トレーニングチを設定して範囲の確認を行い、西側斜面だけではなく大きく削

られていた北側斜面でも環壕を検出した。

環壕は尾根の先端を途切れずに「く」の字状に廻り、長さは約37mを測る。幅は残りの良かった西側で上面が約2mを測り、底面は全体に20~40cm前後である。壁面の立ち上がりの角度は外側が40~50度前後、内側が50~60度前後で内側の方が傾斜がきつい。底面からの塙の高さは外側が約50~80cm、内側が約1~1.4mを測る。底面のレベルは尾根の東側の方が低く、西に向かってしだいに高くなっていく。1号墳下で南に折れた後は南に向かって底面レベルが高くなっている、尾根上から眺めてもかなり傾いた感じがする。2号墳盛土下で検出した環壕の南端は自然に浅くなる状況で、意図的にここで止められたのか、本来レベルを上げながら南にびていたものが削平を受けた為に途切れているのか、調査区内では判断できなかった。2号墳の南は溜め池によって地形を変えられていたので調査区から外してある。そのさらにも南側は9区西側斜面の続きで、9区の北側や東側の斜面に比べて傾斜が緩く、現状は6~8区同様の棚田にされている。既に述べたように第152図で確認すると、9区西側斜面で環壕を検出したと近いレベルには、環壕調査前の様に幅5~6mの平坦地が30m以上続いている。このためここに環壕の続きが存在する可能性も充分考えられる。一方北側斜面で検出した環壕は、尾根先端の屈曲部から約19mの所で立木搬出用の重機道に切られていたため、端を確認できなかった。

環壕内の堆積土層は全ての位置でほぼ共通し、以下第122図の層位順に説明する。第1層は9区のほぼ全面に20cm前後の厚さで堆積している。遺物は近世以降のものに混じって弥生土器や須恵器の細片をごく僅かに含む程度である。第2層は非常に濃い色なので多少乾燥しても地山と容易に見分けることができ、この層でプランの検出を行った。弥生土器を多く含み、この層から下が環壕埋土と言える。第147図2号墳墳丘土層断面図の第22層に相当し、古墳築造時のⅢ表土である。第3層も豊富に弥生土器を含んでいた。当初地山と誤認したように上下の堆積土に比べると茶色味が強く、くすんだ色をしていないので地表に露出していた時間が短い印象を受ける。第4層は環壕埋土の中で最も多くの遺物を含んでいた。第3層に比べて色が暗く濁っており、尾根の先端より西側では間に薄く炭の層が入りさらに上下に分層できる。環壕西側の1号墳下方にあたる部分では、4a層と炭層の上面で大小の礫がまとまって出土した(第123図、写真図版89)。これらの礫は出土状況から、環壕内側の1ヶ所に集められていたものが転落したと思われる。出土した礫には石器の可能性があるものも含まれるが、投弾の可能性も考えられる。環壕底面の地山上に堆積した第5層は、粘性が高く遺物や炭をほとんど含んでいない。

環壕内の弥生土器出土状況をみると、第Ⅲ・Ⅳ様式の土器は全ての層で出土している。しかし、V-1様式の土器は2・3層でしか出土しなかった。また、9区出土の弥生時代の遺物は9割以上が遺構内の出土で、建物など確実な部分に置かれたもの以外は全て斜面下方に転落し、環壕にひっかかったと考えられる。環壕内でV-1様式の土器が上層から僅か3点しか出土しなかった理由は、弥生時代後期初頭には調査区の範囲が居住域の中心から外れた為であると推測される。

以上の状況から環壕は弥生時代中期中葉に掘られ、後期初頭には半分以上埋まり、その後は機能していないかったと考えられる。

古八幡付近遺跡 9区環壕内出土「砾」計測表

番号	型	上層	長さ	幅	厚さ	重量(g)	(単位: cm)					
							4層	3層	2層	1層		
1	角 砂	4 層 A	8.2	5.9	5.5	306.60	48	角 砂 4 層 A	11.2	10.4	7.6	
2	角 砂	4 層 A	8.8	7.6	5.8	541.01	49	角 砂 4 層 A	10.6	9.9	11.0	
3	角 砂	4 層 A	9.2	7.2	3.9	374.19	50	角 砂 4 層 A	22.0	11.4	6.9	
4	角 砂	4 層 A	16.0	4.3	4.6	405.54	51	角 砂 4 層 A	13.7	11.6	8.3	
5	角 砂	4 層 A	9.5	7.8	4.8	563.40	52	角 砂 4 層 A	13.0	11.6	10.2	
6	角 砂	4 层 A	12.0	6.2	7.1	885.13	53	角 砂 4 层 A	16.5	10.5	8.6	
7	角 砂	4 层 A	9.7	8.4	6.5	777.65	54	角 砂 4 层 A	18.5	12.2	7.6	
8	角 砂	4 层 A	10.4	6.7	5.9	473.70	55	角 砂 4 层 A	14.9	12.2	9.8	
9	角 砂	4 层 A	10.7	7.8	6.4	606.97	56	角 砂 4 层 A	18.0	17.8	6.8	
10	角 砂	4 层 A	10.3	6.4	4.6	586.79	57	円 砂 3 层 A	21.0	16.0	6.3	
11	角 砂	4 层 A	10.9	10.4	6.5	567.24	58	円 砂 4 层 A	4.8	3.9	3.0	
12	円 砂 不 明		12.2	9.1	5.9	911.02	59	角 砂 4 层 A	6.6	3.1	2.8	
13	角 砂	4 层 A	9.3	6.0	5.9	733.96	60	角 砂 4 层 A	5.8	4.3	3.1	
14	角 砂	4 层 B	10.6	7.3	7.2	855.73	61	角 砂 3 层 A	8.4	5.2	2.3	
15	角 砂	4 层 A	10.5	8.1	5.2	969.93	62	円 砂 4 层 A	5.2	4.8	4.4	
16	角 砂	4 层 A	12.1	7.5	5.5	802.75	63	角 砂 4 层 A	5.4	3.7	2.4	
17	円 砂	4 层 A	10.8	9.1	6.5	846.79	64	角 砂 4 层 A	6.2	4.8	3.7	
18	角 砂	4 层 A	10.9	8.2	7.8	987.90	65	角 砂 4 层 A	5.3	5.0	4.8	
19	角 砂	4 层 A	10.6	8.2	6.2	1482.92	66	円 砂 4 层 A	7.1	5.0	3.7	
20	円 砂 不 明		10.2	9.4	6.0	982.90	67	円 砂 不 明	10.8	6.2	2.6	
21	角 砂	4 层 A	12.0	7.2	6.3	688.05	68	角 砂 4 层 B	6.6	6.2	5.1	
22	角 砂	4 层 A	10.8	7.8	6.3	860.88	69	角 砂 4 层 A	9.2	8.2	2.9	
23	角 砂	4 层 A	11.2	8.8	6.6	923.72	70	円 砂 表 土	10.1	6.1	2.4	
24	角 砂	4 层 A	12.2	11.1	7.6	1041.94	71	円 砂 表 土	8.3	6.2	3.5	
25	角 砂	4 层 B	11.3	8.9	7.1	861.58	72	角 砂 表 土	9.2	5.5	4.6	
26	角 砂	4 层 A	13.8	7.2	6.1	950.76	73	円 砂 4 层 A	6.5	5.5	5.4	
27	円 砂	4 层 B	14.3	9.2	4.3	795.29	74	角 砂 3 层 A	7.8	7.2	2.2	
28	角 砂	4 层 A	14.6	7.9	5.8	908.97	75	角 砂 4 层 A	7.7	7.6	5.0	
29	角 砂	4 层 B	12.0	8.5	7.2	1037.52	76	角 砂 表 土 上	8.2	7.7	3.7	
30	角 砂	4 层 A	12.8	10.7	7.3	1077.45	77	角 砂 4 层 A	9.1	6.1	5.8	
31	角 砂	4 层 A	11.7	7.8	8.4	1103.90	78	円 砂 2 层 A	8.5	7.9	4.4	
32	角 砂	4 层 B	14.1	11.5	6.9	886.04	79	角 砂 4 层 A	8.5	7.2	6.0	
33	円 砂	3 层 B	10.6	9.0	6.3	327.55	80	角 砂 4 层 A	9.7	7.8	5.8	
34	円 砂 不 明		13.1	10.4	6.9	1264.76	81					
35	角 砂	4 层 B	10.8	8.7	6.7	945.02	82	角 砂 4 层 A	10.2	8.2	7.1	782.90
36	角 砂	4 层 A	14.9	9.2	7.7	1321.37	83	円 砂 3 层 A	2.1	1.9	0.3	2.13
37	角 砂	4 层 A	15.2	10.0	6.5	1160.22	84	円 砂 4 层 A	2.2	2.3	1.5	9.81
38	角 砂	4 层 A	13.1	9.3	8.8	1315.35	85	円 砂 3 层 B	2.8	2.4	0.9	29.07
39	角 砂	4 层 A	13.7	9.3	8.6	1003.00	86	円 砂 2 层 A	3.7	2.9	1.9	16.09
40	角 砂	4 层 A	13.6	9.4	8.1	1529.20	87	円 砂 不 明	5.5	2.4	0.7	14.39
41	角 砂	4 层 A	10.5	9.6	9.8	1371.82	88	円 砂 2-3 层 土	5.6	2.9	0.8	20.96
42	角 砂	4 层 B	18.7	8.1	7.6	1269.06	89	角 砂 3 层 A	4.9	2.2	1.8	14.45
43	角 砂	4 层 A	10.8	10.7	8.4	1198.29	90	円 砂 4 层 A	4.4	3.6	1.2	28.38
44	円 砂	3 层 B	13.3	12.1	5.9	1521.19	91	円 砂 4 层 A	5.5	3.1	2.3	50.07
45	角 砂	4 层 B	15.5	12.4	6.7	1456.81	92	円 砂 3 层 A	6.9	4.7	1.1	48.59
46	角 砂	4 层 A	19.5	10.5	7.9	1723.50	93	円 砂 3 层 A	9.3	4.5	1.6	79.62
47	角 砂	4 层 A	10.7	10.7	9.9	1552.45	94	角 砂 4 层 A	4.1	3.6	3.3	62.91

※右器を含む可逆性あり

土	層	積 純 放	円 砂	角 砂
表	上	3	2	1
2	中	2	2	0
2 - 3	層 土	1	1	0
3	底	10	7	3
4	層	1	0	1
4 層 A		60	7	53
4 层 B		10	0	10
床 面 直 上		1	0	1
不 明		5	5	0
合 計		93	24	69

環境出土遺物(第124~135図、写真図版137~146)

環壕内からは弥生土器と石器がまとめて出土した。6~8区の様な通常の丘陵上に位置する集落では集落で使用された遺物は斜面のかなり広い範囲に転落するので、量を把握したり居住していた期間を判断するのが困難な場合が多い。これに対し、9区の弥生時代集落の様に周囲に溝が巡る場所では、使用された遺物のほとんどが溝にひっかかったと推測される。このため環壕内で出土した遺物は、調査区内に居住していた期間やその間使用された遺物の量をほぼ反映していると考えられる。遺物の出土状況を平面的に見ると、環壕のほぼ全面で溝遍なく出土していることが解る。層

位については既に述べたように、第Ⅲ・Ⅳ様式の土器を見る限り環壕内に順次廃棄・転落したのではなく、環壕の内側に放置・廃棄してあったものが弥生時代後期初頭頃とそれ以降の大きく2時期に転落したと考えられる。遺物個々の出土上状況（写真図版88）を見ても、大きい方を下にするという出方で、自然に落ち込んだと見るべきであろう。

さて、これまで環壕内から出土した弥生土器について大まかに第Ⅲ様式、第Ⅳ様式と分類して述べてきた。これは既に述べたように、松本岩雄氏が行った石見の弥生土器編年は当時極めて少ない資料を基に行われたもので、古八幡付近遺跡で出土したタイプの弥生土器が含まれていなかったことによる。しかし、環壕出土遺物の中には他地域で編年された資料とよく似たものも含まれており、それらを参考にしながらおよその分類を行ってみた（107頁9区環壕内出土弥生土器分類表）。これらの弥生土器は山陰東部の系統以外に備後・安芸など中国地方西部の土器に似たタイプのものが含まれており、汀川流域という地域性をよく表していると言える。

以下出土した遺物を弥生土器・石器の順に述べるが、実は環壕内からは弥生土器に混じて繩文土器が出土している。このことは報告書作成の最終段階で気付いたため、掲載した1点のほか実際にどの程度の繩文土器が混じっているのか確認できていない。出土遺物の整理中に全く気付かなかったことから明確に判断できる土器は少ないとと思われるが、9区には弥生時代以外の可能性のある遺構（建物37・土壤10）も存在するので、今後再度確認作業を行って改めて報告したい。

甕（第124～128図、写真図版139～141）

環壕内出土遺物の中では甕が最も多く、出土した弥生土器の約61%を占めている。しかし、西側の調査区で出土した第V様式以降の弥生土器の中で8割以上を甕が占めることと比較すると、中期後葉まではまだ器種に多様性が残っていると言える。第124図1～6は環壕床面出土遺物で、第Ⅲ様式と思われるものが多い。環壕内で出土した甕の中で中期中葉と考えたものは基本的に口縁に凹線を施さないタイプで、第124図7～第125図12、それから口縁は不明だが頸部以下を丁寧に磨き文様を施さない第126図1（2は同一個体）である。中期後葉と判断したものは口縁を上下に拡張し、複数の凹線文を廻らすものである。胴部最大形のやや上にはほとんどの場合列点文が施されている。このタイプの甕には塙町式上器が含まれる点が注意される。後期初頭とした土器は8区以西の調査区のものがそうであるように、粘土を張り合わせることによって口縁から頸部にかけて器壁を厚くするタイプである。

掲載した土器を具体的に石見編年に当てはめてみると、口縁端部をほとんど拡張しない第124図7～9はⅢ-1様式と考えられる。第124図11～第126図2はⅢ-2様式と判断したが、これらの甕の中には内面のヘラケズリが頸部近くまで確認できるものがあり、全てがⅢ-2様式ではなく一部Ⅳ-1様式になるかもしれない。第125図4・7・11のように1条の凹線を施しているように見えるものは、口縁を端部を摘んだときへこんだ部分が凹線状になったものと思われる。右見編年においては、この種の凹線に類するくぼみを施すタイプはⅢ-2様式となっているのでそれに従った。また、風化が著しく調整の確認ができるものが少ないが、内面上半をナデによって仕上げるものがほとんどでハケメの確認できるものは無かった。

第126図3～第128図2は第Ⅳ様式と判断した。第126図3・4は口縁部に1条だけ凹線を施すもので、このタイプの甕は図示した2点だけである。3は非常に歪んでおり、口縁に施された凹線も幅や位置にずれが見られ、土器を回転させて成形したのか疑問である。胴部はほとんど張らず、内

面は上半はヘラケズリの後ナデを施している。古八幡付近遺跡で出土した第Ⅳ様式の甕は、層位的に判断できない上に石見編年のこの時期の資料に見られないものが多いこともあって、古段階であるⅣ-1様式と新段階のⅣ-2様式に細分することは現段階では困難だった。この為まとめてⅣ様式としているが、3・4のタイプはⅣ-1様式としてもよいと考えられる。

環壕内出土の第Ⅳ様式の甕には第127図に図示した様な塩町式の甕が12点含まれている。第127図1は備後地方のものによく似ているが、これ以外は堅穴住居2出土の甕と同様地元で作られたと考えている。回線文と刺突文を施す順番によって分類すると、先に刺突文を施すタイプが圧倒的に多い。堅穴住居2の資料も合わせて比較してみると、全17点中先に回線を施すタイプが3点、刺突文を先に施すタイプが14点で8割以上を占めている。2つのタイプを内面の調整で比較すると基本的にはどちらもヘラケズリ後ナデを施しているが、回線文が先のタイプには横方向のヘラミガキを確認できるものが1点あり、刺突文が先のタイプにハケメを確認できるものが2点ある。遺跡において、施文の順番の違いが時期差によるものなのか明確には判断できないが、数の少ない回線文が先のタイプが占ければ、第Ⅳ様式古段階に塩町式の文様が地元の土器に施されるようになり、その後新段階に入ってさらに普及したとも考えられる。

第127図10は胴部の列点文がナメに傾かず、縦に2段並んでいる。さらに列点文は2段同時に施文し、上段一番上の点を軸にして右側へ僅かにずらしてから再び押しつけている。塩町式に限らず遺跡内で出土した全ての甕の中でこの1点だけが列点文に「ズラシ手法」を用いている。遺跡内では非常に特徴的な施文方法だが、塩町式土器の類例を探している時に偶然、広島市芳ヶ谷遺跡(広島市教育委員会 1984 「芳ヶ谷遺跡」「広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告」)でよく似た塩町式の甕が出土していることに気付いた。時間の都合上実物同士を比較できなかったので細かい共通点や違いは不明であるが非常に興味深い。

第128図1・2・5はいわゆる塩町式そのものではないが、台部や頸部下を回線で飾っており塩町式に似た印象を受ける。5は出土した甕の中では極端に大型で、器壁も1~1.5cmとこの時期甕にしては非常に厚くなっている。頸部以下の回線文がクシ描きであることや、列点文の位置や形状の変化、内面のヘラケズリの範囲からV-1様式とした方が良いかもしれない。

第128図3・4はV-1様式と判断した。9区出土の弥生土器を色調で比較すると、第Ⅲ・Ⅳ様式の土器は色調が明るいものや黄色っぽいものが多い。これに対しV-1様式の土器は、みな茶褐色系の色調である。

壺(第128~130図、写真図版141~142)

壺の出土量は出土した弥生土器の約16%で、甕に比べると遙かに少ない。しかしV-1集式以降には全体の7%まで減ってしまうことからすると、中期まではまだ主要な器種の一つであったといえる。出土した壺のほとんどが口縁から頸部までしか復元できなかった。ただし、甕の胴部と判断したものの壺の胴部以下が混じっている可能性は高い。全形の分かる資料がほとんど無いために甕の分類は口縁部の特徴を元に行った。

第128図6~第130図3は広口壺で出土した壺の3分の2を占めている。第128図6・9は口縁の形態や施文の特徴から第Ⅲ様式と思われ、これ以外は第Ⅳ様式とした。第Ⅳ様式の広口壺は甕と同様の理由で細分するのが困難だが、第129図3・4は頸部の指痕压痕文帯が退化しているのでⅣ-2様式としてもよいだろう。第130図1~3は口縁を特に強く屈曲させるタイプで、堅穴住居2から

もこのタイプは出土している。第129図に図示したタイプに比べ、口縁の開きが小さい。

第130図5・7～9は、環壕内出土弥生土器分類表でその他の壺としたものである。5は塙町式の無頭壺で、このタイプの壺は遺跡内では竪穴住居2から出土したものとこの壺の2点が出土したのみである。2点とも口縁以下を凹線文と刻目文によって飾り、竪穴住居2出土の壺には円形浮文の剥離した痕が確認でき、環壕出土の壺は口縁部の2ヶ所に穿孔してある。7は環壕北側で出土した台付無頭壺である。出土した口縁部・胴部・脚台部はそれぞれ接点が無かったが、ほぼ同地点で出土し何れも外側に赤色顔料が塗られていたので同一個体と判断して図上復元した。口縁は直立気味で端部を内外に拡張して平坦な面をつくり、穿孔は両側から行われる。口縁内面には一部赤色顔料が確認できる。胴部は「く」の字に屈曲し、外側はヨコまたはナナメ方向のハケ調整、内面はタテ方向のハケ調整である。脚台部の調整は外側がタテ方向のヘラミガキ、内面がヘラケズリである。また、9区で出土した朱塗りの土器はこれ一点である。石見編年第IV様式と思われる。9は高壺の脚部ではなく、この種の壺又は鉢の台部と判断した。8は一見壺の様であるが、石見編年III-2様式にこれと同じプロポーションの無文の壺があったので、塙町式の壺と判断した。頸部付近の施文の順番は凹線文を先に施している。制部の列点文は間隔の広いクシ状工具を組み合わせたのが特徴的である。色調も橙褐色を呈し他と異なっている。石見編年第IV様式と思われる。

底 部（第131・132図、写真図版143）

環壕内で出土した壺や壺には全形の分かれる資料がほとんど無く、底部から器種を判断することは困難である。このため分類は大きく平底・上げ底の2つに分けることから行い、平底・上げ底の比率はほぼ2:1である。平底・上げ底それぞれ大きさや形態によってさらに細分しているので、詳しくは分類表を参考にしていただきたい。

出土した底部の中で最も特徴的だったのは第132図18で、薄い作りの底部を刺突文と凹線文で飾っている。凹線だけ施すタイプは竪穴住居1・3でも1点ずつ出土しているが、刺突文と組み合わせるタイプは遺跡内でこれ1点だけだった。調整は外側がナデ、内面がヘラケズリである。塙町式上器の底部と思われ、第130図8と胎土・色調・焼成が似ているので同一個体の可能性も考えられるが、凹線文と刺突文を施す順番は違っている。

高 壺（第132～134図、写真図版144・145）

高壺は非常にバリエーションが豊富だった。第132図19～22は古相として分類したものである。石見編年第III様式の中に高壺の資料は無く、第III様式に位置づけられるか疑問である。21は非常に特徴的な個体で、土器を回転させずに成形している。外側を全く飾っておらず脚内面にヘラケズリの痕跡が無い。19は口縁がほぼ水平に外反し第III様式としても良さそうだが、脚部に16条も凹線を施しているのでIV-1様式になるかもしれない。22は円盤充填でなく脚内面をヘラで抉っている。第133図は新相として分類したもので、石見編年第IV様式に相当する。この内、杯部が深く凹線の条数が少ない3と、口縁を僅かしか屈曲させない7がIV-1様式と思われる。竪穴住居2で出土した第119図8も3と同タイプなのでIV-1様式として良いだろう。これ以外は全てIV-2様式の範疇で収まると思われる。

第134図1～7は第IV様式の脚部資料である。7は5方向に三角形のスカシを入れ、その間に有軸の羽状文を描く珍しいタイプである。2の高壺も破損部付近をよく観察すると線刻があり、7と逆方向の有軸羽状文が描かれていた可能性がある。脚部に有軸羽状文を描く高壺は、現在のところ

県内では頃原町板屋Ⅲ遺跡、邑智町滝原遺跡、それに古八幡付近遺跡を加えた3遺跡で出土している。これらの遺跡は何れも塙町式土器が出土している点が共通している。

第134図8・9は高環の脚接合部と判断したものである。第132図22とよく似たつくりで、円盤充填でなくヘラで脚内面を抉っている。台付きの壺・鉢の底部かもしれない。

鉢（第134図、写真図版145）

第134図10～14は鉢である。11は全形が分かる資料で、他地域の編年を参考にすると第IV様式の鉢と思われる。12・13もほぼ同様のプロポーションになると推測されるが、14は手捏ね形成である。10は甕や壺の台部になる可能性もある。

コップ形土器（第134図15、写真図版145）

この種の土器は遺跡内でこれ1点しか出土していない。非常に底部が厚く、調整は内外面共に荒いナデである。胎土には1cm前後の長石を含み、非常に硬い焼成で完形で出土した。以上の様に他の弥生土器と全く異なった作りをしていることに加え赤茶色を呈しているので、二次的に火を受けたもの、「るっぽ」の可能性も考えられる。

分銅形土製品（第145図、写真図版145）

環壕西側の第2層黒褐色土中より出土した。焼成は良好で黒褐色を呈し硬く焼き締まっている。文様は、2本一組の細い竹管状の原体による列点文を3列施し、くびれ部には線刻を描いている。側面および裏面には文様を施していない。出土した第2層がIII-1様式からV-1様式までの時期の弥生土器を含んでいるので、詳しい年代の特定は困難である。

分銅形土製品の出土は古八幡付近遺跡では、平成4年度調査区に統計2例目になる（江津市教育委員会 1992 「古八幡付近遺跡」）。山陰地方での分銅形土製品の出土遺跡を見るとほぼ出雲以東の地域であり、現在のところ石見地方での出土報告は古八幡付近遺跡でのみで、山陰地方では最も西の出土例となっている。しかし、江川流域や第IV様式に塙町式土器を「作っている」地域には、様々な意味で古八幡付近遺跡とよく似た性格の弥生集落が存在したと推測されるので、今後出土例が増える可能性が高いと考えている。

石 器（第135図、写真図版146）

9区で出土した明確に石器と判断できるものは、ほぼ全て第135図に図示した。ただし、環壕内で出土した砾の中に礫石等が混じっている可能性はある。9区では弥生集落を検出したにも関わらず、出土した石器は8区に比べ非常に少なかった。ただし、集落の居住域から出土した石器なのでこれまでの調査区では出土していない石器も見られる。また、既に述べたように環壕内からは弥生土器に混じって縄文土器も出土しているので、出土した石器の何点かは縄文時代のものになる可能性がある。

環壕内で出土した石鎚は黒曜石製（1）と安山岩製（2）の2点だけで8-2区と比べると極端に少ないと言える。石鎚の数量からは単純に高地の立地・環壕=緊張状態・戦争という岡式を想定しにくい状況である。4は第IV様式の弥生土器に混じって出土したが、縄文時代の石斧かもしれない。8は全面を丁寧に磨いており、上下面と側面の角は面取りしてある。非常に堅い石材で作られているが、類例を見つけることができず用途も判断できなかった。11は平面三角形状で剥離面以外は表面を丁寧に磨いている。砥石の様に研ぎ減っておらず角を面取りしているので、柱状片刃石斧の破片と判断した。12は側面に2条の深い溝を有する砥石でかなり使い込まれている。これ以外に

も浅い溝を2条確認でき、金属製品に使用したのではないかと推測される。調査区内で確実に弥生時代のものと判断できる金属製品は1点も出土していない。しかし、第IV様式の土器の文様に非常にシャープな羽状文・沈線文が有り、ヘラ状工具ではなく金属製品で施したものと想定されるので、この頃には金属製品も使用されていたのかもしれない。13は環壕内ではなく南側の標高約62m付近に造られた削半段の地山面に貼り付いた状態で出土した。明らかに削平に伴って移動しており、出土地点が9区で検出した全ての遺構よりも高い位置なので、調査区南側の遺構に伴う石器と考えられる。

縄文土器（第134図17、写真図版145）

第2層から出土した。金崎式の鉢の口縁部と思われる。文様以外は色調・胎土とも弥生土器とよく似ているので、弥生土器と判断した細片のなかにも縄文土器が混じっている可能性がある。

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物①（第124図）

遺物名	登録番号	器種	出土地点	口径(cm)	底面(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
	1 139	弥生甕	環壕				列点文	ハケメ ケズリ後ナデ	外 淡褐色 内 暗褐色	
	2 139	〃	〃	20.2			口縁端やや肥厚	ヘラケズリ	外 淡茶褐色 内 淡黒褐色	
	3 139	〃	〃	14.3				風化の為不明	外 淡茶褐色 内 暗褐色	
	4 139	〃	〃				口縁端わずかに拡張	ナデ ヨコナデ	淡褐色	
	5 139	〃	〃	18.4			〃	ヨコナデ ハケメ ヘラケズリ	淡茶褐色	(一澤里窯)
	6 139	〃	〃	(22.0)			縁部に指頭圧痕文	多方向のヘラ削り	茶褐色～白褐色	
	7 139	〃	〃					不明瞭	淡黄褐色	
	8 139	〃	〃					ナデ	小茶褐色	
	9 139	〃	〃	17.6			口縁端平坦面	風化の為不明	暗褐色	
	10 139	〃	〃	(24.0)			口縁端部は僅かにつまみ上げる	ヨコナデ ヘラケズリ	白色～淡茶褐色 一部淡褐色	
	11 139	〃	〃	16.0			〃		茶褐色	
	12 139	〃	〃	19.6				風化の為不明	淡茶褐色	
	13 139	〃	〃	14.6			〃	ナデ?	淡黃褐色	
	14 139	〃	〃	22.6				風化の為不明	淡茶褐色	
	15 139	〃	〃				〃	風化の為不明	淡褐色	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物②（第125図）

遺物名	登録番号	器種	出土地点	口径(cm)	底面(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
	1 139	弥生甕	環壕	20.4			口縁端わずかに上揚げる	風化の為不明	淡茶褐色	
	2 139	〃	〃	16.1			口縁端わずかに拡張	風化の為不明	淡茶褐色	
	3 139	〃	〃	15.7			〃	風化の為不明	淡茶褐色	
	4 139	〃	〃	19.8			ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ?		淡褐色	
	5 139	〃	〃	17.2			〃	風化の為不明	淡黃褐色	
	6 139	〃	〃	19.9	6.6		ヨコナデ ヘラケズリ		暗褐色	
	7 139	〃	〃	19.5			ヨコナデ		淡茶褐色	
	8 139	〃	〃	17.5			ヨコナデ	風化の為不明	淡茶褐色	
	9 139	〃	〃	(10.2)			〃	風化の為不明	外 暗褐色 内 淡茶褐色	
	10 139	〃	〃	19.6			口縁端わずかに拡張		淡茶褐色	
	11 139	〃	〃	22.8			口縁端わずかに拡張し、細目を施す	キザミ ナデ	淡茶褐色	
	12 139	〃	〃	14			縁部に押印圧痕文	ナデ ヘラ削りのちナデ ケズリ後ナデ	白褐色～ 淡灰褐色	
	13 139	〃	〃	17.8			口縁端部に上下にわずかに拡張	ナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	
	14 139	〃	〃	(14.0)			口縁非常に短い		外 黄褐色～ 内 白褐色 淡灰褐色	
							縁部 最も薄 (18.0)			

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物③(第126図)

測定	測量	器種	出土地点	L(cm)	W(cm)	H(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	140	浮生鏡	環壕					ヘラミガキ	淡茶褐色	
2	140	〃	〃			10.6		ヘラケズリ後ナデ	淡茶褐色	
3	140	〃	〃	(18.0)			口縁端部は丸くなる 最大径(20.8)　浅いが幅のある1条の凹線	ヘラミガキ ナデ ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	淡茶褐色 白褐色	126-1と 同一個体
4	〃	〃	〃	23.7			1条の凹線文	ヘラケズリ後ナデ	淡茶褐色	
5	140	〃	〃	18.9			2条の凹線文	ヨコナデ	淡茶褐色	
6	140	〃	〃	21.8			2条の浅い凹線	ナデ? ナデ? ハケナデ	外面 白褐色 淡茶褐色	
7	140	〃	〃	15.0			2条の凹線文	ヨコナデ	淡茶褐色	
8	140	〃	〃	19.2			2条の凹線文	風化の為不明	淡茶褐色	
9	140	〃	〃	18.0			口縁端部は上方に僅か に膨張 3条の凹線文	ヨコナデ、ハケ日	淡茶褐色	
10	140	〃	〃	(16.6)			2条の凹線文 最大径(20.8) 列点文(6つ)	ナデ、ヨコナデ ハケメの後ナデ ヘラケズリ	白褐色	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物④(第127図)

測定	測量	器種	出土地点	L(cm)	W(cm)	H(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	141	浮生鏡	環壕	31.4			3条の凹線文(口縁) 7条の凹線文間に刻突 (削) 列点文2條	ハケメ ナデ	淡茶褐色	
2	140	〃	〃				凹線(4条)間に刻突	ヨコナデ ヘラケズリ	黄褐色	
3	140	〃	〃	15.4			口縁は上にわずかに 傾斜(内縫2条)　肩部 は刻突後3条の凹線文	ヘラケズリ後ナデ	淡茶褐色	
4	140	〃	〃	(18.0)			口縁端部はやや上に膨 張 浅い2条の凹線文	ナデ	白褐色 (断面灰白色)	
5	140	〃	〃	(16.8)			2~3条の凹線文 ヘラキ L 見による斜行刺文条 その後2条の沈線	ナデ	淡茶褐色	
6	140	〃	〃	19.5			2条の凹線文 剣突後2 条以上の凹線文をめぐらす	ヘラケズリ後ナデ	淡黃褐色	
7	140	〃	〃	(19.6)			口縁凹線は1条(7.7)右 上がりの削突文を施した後、 而てその間2条(5.5)をぐらす	ヨコナデ ハケメ	暗茶褐色	
8	140	〃	〃	(16.1)			2条の凹線文(口縁) 剣突後3条の凹線文	ナデ ヨコナデ	淡褐色	
9	140	〃	〃	15.5			口縁は上に膨張し、同縫 3条 右上から刻突文をめぐらす	ナデ	淡褐色	
10	140	〃	〃	20.3			4条の凹線文をめぐらす	ナデ ヨコナデ 肩部削突後3条の凹線文 剣突後2条に列点文	外面 淡茶褐色 ~灰褐色 内面 淡茶褐色	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑤(第128図)

測定	測量	器種	出土地点	L(cm)	W(cm)	H(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	141	浮生鏡	浮生台付鏡	10	16.0	銅鏡強(2条の凹線文) 5.8 クレド点文2条、9.9の沈線文	ナデ ヨコナデ ヘラミガキ	淡茶褐色 (断面灰白色)		
2	141	浮生鏡	〃	12.4			口縁抜張(3条の凹線) 4条の凹線文(V字、列点文)	ハケメ	淡黃褐色	
3	141	〃	〃	14.8			2条の凹線文 (4末3条か?)	ナデ ヘラケズリ	淡褐色	
4	141	〃	〃				口縁端部は先端 2条の浅い凹線文 刻突文	ヘラ削りののちナデ	白褐色~ 淡茶褐色	
5	141	〃	〃	43.0			3条の削突文(口縁) 4条の凹線文(2列) 剣突文	ナデ ヘラケズリ後ナデ ヘラケズリ	淡黃褐色	
6	141	浮生鏡	〃	17.9			口縁下方に凸出		淡黃褐色	
7	141	〃	〃	18.6			底面3条の凹線文		淡茶褐色	
8	141	〃	〃	23.2			口縁端部の凹線文 指壓圧抜文骨	ヘラケズリ	淡茶褐色~ 白褐色	
9	141	〃	〃	22.2	4.0		4条1単位のクシ抜きの 斜格子文		淡黃褐色	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑥(第129図)

測定	測量	器種	出土地点	L(cm)	W(cm)	H(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
1	142	浮生鏡	環壕	28.2			2条の凹線文 内縫に刻突文		淡茶褐色	
2	142	〃	〃	(26.0)			凹線3条(口縁) 凹線2条(彌部)	風化剥離の為不明	白褐色~ 茶褐色	
3	142	〃	〃	25.6			口縁3条の凹線文十列 目文 朝突容文	ナデ		
4	142	〃	〃				指壓圧抜文骨(表面は無し)	ヘラケズリ ケズリ後ナデ	淡茶褐色	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑦ (第130図)

測定	測定	測定	測定	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1 142	弥生壺	古土地点	口径(cm) 高さ(cm) 腹径(cm)	口縁は凹曲する 口縁端部は2条の凹線文 不明 腹は3条の凹線文(頭部) 口縁下面には凹状文	指頭压痕?残る ナデ?	白褐色~淡純褐色	
2 142	"	"	23.0 5.4	口縁端部は3条の凹線文 3条の凹線文(頭部)		淡茶褐色	
3 142	"	"	19.2	口縁上面には4条の凹線文 1条の浅い沈線文 5条の凹線文	回転ナデ	淡褐色	
4 142	"	"	9.0		ナデか? 指頭压痕がある	淡褐色	
5 142	弥生無頸壺	"		口縁上面に2条所卓立がある 頭部文間に刻入矢、斜斜文		淡茶褐色 (一部黒度)	
6 142	弥生壺	"		2段以上の大きな割れ	ヘラケズリ	暗褐色	
7 142	弥生無頸壺 (頭付)	"	11.6	4条の凹線文(口縁) 27.5 刻溝点文	ミガキ ハケメ	(表面黑色) 外表面赤褐色 (底上は淡褐色)	月焼り
8 142	弥生短頸壺	"	15.0	剥離部 最大径 剥離部点文	ケズリ	淡茶褐色~ 橙褐色	
9 142	弥生呑口壺	"		剥離部 7条×6条の凹線文の間 18.2 文を1段ずつ施す	ナデ、ミガキ ケズリ	白褐色	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑧ (第131図)

測定	測定	測定	測定	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1 143	弥生底部	古土地点	口径(cm) 高さ(cm) 腹径(cm)	6.8	風化の為調整不明	外 淡褐色 (一部黒度) 内 淡墨褐色	
2 143	"	"		5.2 指頭压痕		淡茶褐色 (外 黑度)	
3 143	"	"		5.6		黒褐色	
4 143	"	"		6.0 指頭压痕あり	ヘラケズリ ミガキ	外 淡黃褐色 (一部黒度) 内 淡墨褐色	
5 143	"	"		7.0	ヘラケズリ	外 淡茶褐色 内 淡墨褐色	
6 143	"	"		3.4		外 淡茶褐色 内 淡墨褐色	
7 143	"	"		4.8	ヘラケズリ	外 淡茶褐色 内 淡墨褐色	
8 143	"	"		4.4	表面風化の為 調整不明瞭	外 面白褐色 内 面暗赤褐色	内面にスス
9 143	"	"		4.4		外 面暗赤褐色 内 面暗墨褐色	
10 143	"	"		5.0	ヨコナデ	淡黄褐色	
11 143	"	"		4.9	ヘラミガキ	淡茶褐色	
12 143	"	"		5.0	ケズリ	淡褐色	
13 143	"	"		6.4 剥離厚い		外 面暗褐色 内 面暗墨褐色	
14 143	"	"		6	ナデ?	外 面暗褐色 内 面暗墨褐色	
15 143	"	"		5.6	ナデ ミガキ ケズリ	淡茶褐色	内面にスス
16 143	"	"		6.6	風化の為調整不明	淡褐色	
17 143	"	"		5.4	風化の為調整不明	外 面 淡褐色 内 面 淡茶褐色	
18 143	"	"		5.9		淡茶褐色	
19 143	"	"		7.5	ナデ?	淡茶褐色	
20 143	"	"		6.3	ケズリ 指頭压痕	外 面 淡褐色 内 面 暗赤褐色	内面スズ付着
21 143	"	"		7.8	風化の為調整不明	外 面 淡褐色 内 面 淡茶褐色	
22 143	"	"		7.6	指頭压痕	外 面 淡褐色 内 面 淡茶褐色	
23	"	"		7.5		外 面 淡褐色 内 面 淡茶褐色	
24	"	"		10.0	ハケメ ミガキ	外 面 淡褐色 内 面 淡茶褐色	
25	"	"		10.0	風化の為調整不明	外 面 淡褐色 内 面 淡茶褐色	
26 143	"	"		5.2 底部穿孔(既成後)	ナデ 指おさえ	外 面 淡褐色 内 面 黑褐色	スス付着
27 143	"	"		4.2	ヘラケズリ		

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑨ (第132図)

測量年	番号	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	143	穿孔底部	環壕			3.5			淡茶褐色	
2	143	"	"		6.0		凹み底	ハケ日後ナデ?	底 淡墨褐色 外面 白褐色~	スス付着
3	143	"	"			5.6	"	ナデ ヨコナデ	外面 淡墨褐色 内面 淡茶褐色	
4	143	"	"			4.6		ヘラケズリ?	外面 橙褐色	
5	143	"	"			5.8		風化の為調整不明	外面 淡茶褐色	
6	143	"	"			7.3		風化の為調整は不明 指頭上抜	外面 黑褐色	
7	143	"	"			6.0		ケズリ	外面 淡茶褐色	
8	143	"	"		(10.0)			ナデ ハカメの後ナデ 風化のため調整不明 縦方向のヘラミガキ ケズリ	外面 淡茶褐色 部分 黑褐色 内面 淡茶褐色	スス付着
9	143	"	"			4.5		ヘラケズリ 縦方向のヘラミガキ ナデ?	外面 白褐色(黒褐色) 内面 淡茶褐色	
10	143	"	"			6.0		風化の為調整不明	黄褐色	
11	143	"	"			5.8		"	外面 淡褐色	
12	143	"	"			6.4		ナデ 底部は最後にI 周辺はかくよじにナデる	内面 淡褐色	
13	143	"	"			5.0		風化の為調整不明	外面 淡橙褐色	
14	143	"	"			6.2	高台状の底部	ナデ	内面 暗褐色	
15	143	"	"			4.6	"	ナデ	外面 黑褐色	
16	143	"	"			8.2	凹み底	ヨコ方向の強めのナデ 指頭上抜	内面 淡褐色	
17	143	"	"			4.8		ヨコナデ	外 茶褐色	
18	143	"	"			5.4	刺突後2条の回線文	ヘラケズリ ていねいにナデる	内 淡褐色	
19	144	弥生高环	"	19.7			最大径 回線文16条 23.8	ヨコナデ ケズリ	淡茶褐色	
20	143	"	"	15.8			最大径 口縁部には内外に並張	ヨコ方向にミガキ タテ方向のミガキ	外 黑斑	
21	144	"	"	15.2			口縁短く粗朾	ミガキ ナデ	暗褐色	
22	144	"	"			14.4	脚端延 指頭上抜	ナデか? ケズリ	"	

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑩ (第133図)

測量年	番号	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考	
1	145	穿孔高环	環壕	7.4			2条の印線文(縦筆) 5条の印線文(横線)	風化の為不明	淡茶褐色		
2	145	"	"	(21.0)			5条の印線文				
3	145	"	"	16.8			3条の印線文(口縫、脚 端など)	剥離の為不明 風化の為不明	淡茶褐色		
4	144	"	"	16.4		最大径	19.5	2条の印線文(口縫) 9条以上の印線文(脚部) 剥離後印線文(口縫14~ 15条)の回線文(脚部) 及ぶ風化の為不明	淡茶褐色		
5	145	"	"	(18)			2条の印線文(脚部)	シボ目	白褐色~橙褐色		
6	145	"	"	23.7			2条の印線文(脚部) 5条の印線文(口縫)	ハケメ ナデ	断面 黑灰色 淡茶褐色		
7	144	"	"	24.2	20.7	脚縫	15.3	口縫に3条の印線文 脚縫に7条の印線文 脚端部には3条の印線文	明黄褐色		
8	145	"	"	18.4		最大径	22	3条の印線文(口縫) 6条の印線文(口縫) 20条(21条)の印線文	ヘラミガキ 横方向のヘラ削り ナデ		

古八幡付近遺跡 環壕出土遺物⑪ (第134図)

測量年	番号	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1	145	穿孔高环	環壕			15.0	3条の印線文 3条の印線文	表面風化の為調整 不明瞭	根褐色	
2	145	"	"			12.0	7条の印線文		外面 黑褐色 内面 淡茶褐色	
3	145	"	"			13.7	8条の印線文	ケズリ	淡褐色	
4	145	"	"			(11.5)	15条の印線文 2条の印 前 6条の印線文	ハケ目のちナデ ヘラ削り ナデ	白褐色	

通	形	地	高	幅	厚	形態・文様の特徴	頭	茎	色	調	備考
5	145	斧生高坏	頭壞		(12.0)	3条の凹線分 透かし7 6条の凹線分 斜交文+8条の凹線文 2条の凹線文	内面はヘラ削りのち ナデ ケズリ		淡褐色		
6	145	"	"	11.8			風化の跡痕不明		淡黃褐色		
7	145	"	"	(14.0)		深い凹線が2本 二角形のスカシと有輪 羽状文交差に入る 5-6条の凹線文	ナデ ヘラ削り 表面がかなり風化して いる		白褐色		
8	145	"	"				風化の為調整不明	外面 淡茶褐色 内面 黑褐色			
9	145	"	"			指頭圧痕	ヘラケズリ		黒褐色		台付の跡 か剥がし られない
10	145	斧生右部	"		6.4	円透かしが1つ	ヘラケズリののちナデ	頭部 黄褐色 坏部 内面黒褐色			
11	145	斧生鉢	"	14.2	9.4	3.8 口縁膨張	頭部ヘラケズリ ヨコナデ ナデ	外面 淡褐色 内面 黑褐色			
12	145	"	"	12.5		口縁平坦	所割色				
13	145	"	"	13.2			ヨコナデ ケズリの後 ナデ ナデ	外面 喰褐色 内面 淡褐色			
14	145	"	"	9.3		指頭圧痕(?)	内面は指ナデ	淡褐色			手づくね 2次筋に火を 受けている るっぽい?
15	145	斧生 コップ形上器	"	7.1	8.25	2.2 指頭圧痕		赤茶色			
16	145	斧生 分割形 十脚足	"			刺文3列		外面 黑褐色 内面 淡褐色			
17	145	純文鉢	"			原沿縁文 頭部加幅		暗褐色	断面 黑色	輪郭式平行 (前開前茎)	

古八幡付近遺跡 環壕(1~11)及び9区(12, 13)出土石器(第135図)

通	形	地	高	幅	厚	形態・文様の特徴	頭	茎	色	調	備考
1	146	塊状石片頭	頭壞								
2	146	安山岩 右側	"	長さ 2.45	幅 2.0	厚さ 0.45 重さ 1.13kg					
3	146	安山岩 右側	"	長さ 4.1	幅 1.4	厚さ 0.55 重さ 1.93kg					
4	146	打石石斧	"			重さ 510.55g			淡褐色		
5	146	"	"	長さ 8.3	幅 3.8	厚さ 0.2 重さ 27.5g			暗灰色		
6	146	砲丁	"	長さ 8.3	幅 8.45	厚さ 0.55 重さ 48.8g					
7	146	砥石	"	長さ 12.5	幅 2.3	厚さ 1.8 重さ 61.4g			明黄褐色		
8	146	"	"	長さ 8.5	幅 4.75	厚さ 3.9 重さ 205.8g	全面ていねいに研磨		暗灰色		
9	146	研石	"	長さ 13.5	幅 9.7	厚さ 4.8 重さ 552.0g	四面使用		灰褐色		
10	146	"	"	長さ 5.6	幅 3.5	厚さ 3.0 重さ 91.53g	下面平坦		明灰色		
11	146	柱状 片刃石斧	"			重さ 21.14g			外側 一部黒色 断面 やや赤み がかった灰色		
12	146	砾石	9区	長さ 9.1	幅 8.6 幅 3.7 幅 6.9	厚さ (最大) 0.8 重さ 189.1g	一面に3条の溝		淡青灰色		
13	146	砲丁	"	長さ 5.6		厚さ 0.7 重さ 35.3g					

2. 古墳群の調査（第113・136図、写真図版42）

古八幡付近遺跡9区では横穴式石室を主体部とする2基の後期古墳を検出した。2基の古墳は、9区の尾根上平川地と西側斜面の変換点に南北に並んで築かれている。先に発見した尾根の先端に位置する方を1号墳、後から発見した南側の古墳を2号墳として調査を行った。このほか調査前には東側の地形変換点でも低い高まりを確認していたが、何れも古墳ではなく近世・近代の地形改変によるものだった。調査時には周辺の再踏査を行うことができなかったが、調査区周辺にはほかにも後期古墳が造られていた可能性があり、今後も敬川対岸の丘陵も含めて分布調査が必要である。

(1) 1号墳

調査前の状況（第113図、写真図版27・36・93）

標高約60.5mの尾根先端に位置している。発見時には既に工事前の伐採用重機が古墳の北半分を通過しており（写真図版93上）、天井石も一番奥の一枚を除いて全て丘陵北側の斜面下方に落とされていた（写真図版102下）。調査前の時点ではほとんど埴丘を認識できず、石室南側の僅かな地形の変化から僅10m前後の円墳ではないかと推定された。重機道は地山まで削って造られ石材・須恵器が散乱していたので、埴丘・石室の大半は破壊されたものと考えられた。

埴丘・周溝（第136・137図、写真図版93）

調査の結果、径約10mの円墳であることが明らかになった。東側と南側では埴丘盛土を検出した。1号墳は旧地形を巧みに利用して築造しており、最大で深さ約1.4mを測る大規模な掘り方に中に石室を構築している。このため、検出した盛土は旧地形の標高が高い東側が約30cm、やや低い南側が約80cmを測る。北側は重機によって削られていた為明確な盛土を検出できなかった。西側も盛土を検出していない。

周溝は山側のみ廻らされていた。幅約1～2mを測るが溝の肩は明確でなく、深さ約も30cmと浅かった。周溝内の土層堆積状況は上層に薄く黒褐色土が堆積し、その下に茶褐色土が堆積していた。南側の墳端は黒褐色土がやや厚く堆積し、地山上に茶褐色土が堆積していないかった。周溝内では石室奥壁から約2m東の位置で須恵器甕が出土した（第141図、写真図版100・101）。周溝床面に置かれたものが上方からの圧力で潰れ、破片の一部が周辺に散乱したものと思われる。上面に折り重なった口縁や胴部の破片を取り上げると、甕の底から蓋杯2セットと短径甕が現れた。これらはまことに口縁を上にして甕の底に置いた後、短径甕を納めている。このほか南側の墳端で須恵器高杯の脚部が出土している。周溝内出土遺物については1号墳出土遺物と合わせて後述する。

横穴式石室（第138・140図、写真図版42・43・94～99）

横穴式石室の開口方向はN60°Wで、北西方向に開口している。調査前に重機が天井石を剥ぐつて石室上を通してはいるため、削られていなかった奥壁および右側壁の石も非常に不安定な状況だった。これでは調査が危険すぎるので、残っていた天井石を埴丘外に移動させ、崩れかかった石を除去した後に調査を行った。1号墳の横穴式石室は、割石のほかに川または海で採集したと思われる丸みのある石を加工せずに使用している。これまでに江津市内で確認された横穴式石室には見られない特徴である。

平面形・床面 石室規模は床面で測ると、残存長が左側壁で6.5m、奥壁幅が1.9mである。平面は羽子板形を呈しており、奥壁から羨道に向かって直線的に幅が狭くなり、開口部の幅は0.7mを測る。石室の平面形では玄室と羨道の境界は明確でないが、奥壁から開口部に向けて約3.5mの位置には長

さ63cmと40cmの石が2つ並べて置かれており、ここから奥壁側が玄室として意識されていたものと考えられる。床面も奥壁から3.3mまではほぼ水平だが、そこから西側に緩やかに傾斜し始め、排水を考慮してか浅く窪んでいる。玄室床面の左右の側壁に接する位置には、20~35cm大の石が合わせて11個置かれていた。配置状況から木棺を安置するための台と思われるが、釘は1本も出土していない。

閉塞施設 奥壁から3.1~4.8mの範囲に15~40cm大の自然石を積み上げていた。積み方は雑な印象を受ける。最も高いところでは床面から約60cmの高さまで積まれている。

奥壁 奥壁基底には、左右の側壁に接する位置に長さ1mと93cmの大型の石を床面からの高さが約60cmに揃うように据えている。奥壁のほぼ中心に左右の石の隙間がくるので、幅約15cmの細長い石を2段重ねて詰めてある。2段目より上は扁平な石や細長い石を小口積にしている。奥壁はほとんど掘り方と接するように構築されており、控え積は天井に近い部分でのみ確認した。奥壁部分での高さは2.04mを測る。

奥壁と側壁の関係は、基底部は側壁が奥壁が扶む様に組まれ、2段目から4段目までは奥壁に左側壁が接するように積まれている。5段目より上は奥壁と側壁にまたがるようにコーナーに石を積んでいる。

左側壁 基底部の石は、奥壁側1個目には奥壁基底部の石に近いサイズのものが使われているが、開口部に向けて小さくなっていく。2段目からは石を小口積にし、控えの石を積みながら持ち送っている。隙間には小さい石が詰められている。掘り方と石の間には50cm前後の隙間がある。

右側壁 右側壁は左側壁と異なり奥壁側の基底部に大型の石を使用していない。玄室と意識されていたと思われる部分の3段目までは、比較的石のレベルが揃うように積まれている。4段目辺りから上は大小の石を雜然と積み上げた印象を受ける。控えの石を積みながら持ち送っているが、重機が天井石を外した際に本来の角度より前にせり出した可能性があり、結果石の並びが多少乱れたと考えられる。

天井石 発見時石室内には土砂が1m前後堆積していた。しかし、天井まではなお1mの空間があり、重機による破壊直前まで天井は原位置を保っていたと考えられる。第139図1は石室上に残っていた石で、2~4は重機運搬とその下に転落していた石材の内天井石と判断したものである。このほか弥生環壕の第2層上面でも天井石の可能性のある石を検出している(写真図版40)。

掘り方 平面羽子板形を呈し、幅2.2~3.5m、長さ6.7mを測る。地山を掘り込んで造られており、奥壁側は垂直に近い角度で約1.4m掘られている。左右の壁も80~85度と急角度で掘られているが、旧地形に合わせて西に行くほど浅くなっていく。

1号墳出土遺物(第142・143図、写真図版146~148)

第142図1~5は石室内出土遺物である。何れもほぼ完形に復元でき、時期も出土遺物の中では最も新しいと思われる。ただし4は閉塞施設の外に置かれていたものである(写真図版95下)。第142図6~21、第143図1~5は狭道および石室開口部周辺で出土した須恵器である。蓋杯・高杯はバリエーションが豊富である。12は天井部全面にカキメを施しており、有蓋高杯の蓋と思われる。19は無蓋高杯と考えたが高台の付く壺かもしれない。狭道部は調査前に重機で抉られ、その土を谷側に盛って重機道にされていたので、本来の位置や確実な共伴関係を押さえることができなかった。これらの須恵器はおよそ6世紀後半から7世紀前半のものと思われる。第143図8~13は周溝内出

土遺物である。既に述べたようにこれらは同時に片づけられたものであるが、出土した須恵器の焼成や蓋杯の形態は明確に異なっている。8・9は色調・焼成だけでなく歪みも一致することから生産時からセットのものと判断できる。もう一組の蓋杯10・11は調整・焼成とも異なっている。短径壺12は底部中心にハケメがあり、遺跡周辺では珍しいタイプである。13は口縁を上下に拡張し2条の沈線を廻らすもので、近隣の浜田市日脚遺跡（島根県教育委員会 1985『日脚遺跡』）の須恵器編年ではⅢ期に相当し6世紀中頃に位置づけられている。10の环蓋は口縁端部が丸く天井はヘラ切りの後ナデ調整だけなので6世紀後半と思われ、13とは時期差が感じられるが、生産地の違いによるものかもしれない。

1号墳北側出土遺物（第144・145図、写真図版102・149・150）

1号墳の墳裾から約4m北側には蓋杯が6セット12点置かれていた（写真図版102上）。ここは弥生環塚が埋没した後、古墳時代後期にはテラス状になっていた所である。蓋は全て口縁を上に向けて身の上に重ねてあり、3セットずつ2列に並べられていた。セットで出土した蓋杯は第145図1～12に図示したもので、形態・調整・色調・焼成等にかなりバリエーションがある。東の宿崎商店裏遺跡、西の横路古墓の蓋杯と比べてもあまり似ておらず、単純に時期差による違いなのか、複数の生産地から持ち込まれたものなのか報告書作成時には判断できなかった。

このほか1号墳北側では第145図13～21の須恵器が出土している。13は壺等の口縁に似ているが、破損部付近で内側に屈曲し手持ちヘラケズリを確認できるので、コップ形土器と判断した。口縁は梢円形で一方を外反させて注ぎ口をつくっている。13の近くで出土した把手は剥離面が内湾せず外反しており、13の反り方とカーブがほぼ一致している。このため接点は見つけられなかったが13の把手になる可能性がある。この種の土器は石見地方の横穴式石室や横穴墓で出土例が知られるが、中でも益田市北長瀬横穴墓群で出土（八雲立つ風土記の丘資料館 1978『古代の石見』展示図録）によく似ていると思われる。

なお、1号墳からは図示したもの以外にも、図化できなかった須恵器の細片が出土している。これらの須恵器の内、蓋か身か判断できない蓋杯11点と壺2点は図示したものと別個体と判断した。

1号墳墳裾出土土古銭（第145図22、写真図版150）

西側墳裾の表土中で出土した「古寛永」で、9区で出土した古銭はこれ1枚である。

古八幡付近遺跡 1号墳出土遺物① (第142図)

測量年	器種	出土地點	U形(cm)	弧形(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 146	須恵器 环身	1号墳	10.9	4.05	最大径 宝珠つまみ 12.8	ヘラケズリの後回転ナデ	暗灰色	
2 146	須恵器 环身	"	11.8	5.6	高台井 7.3	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色(表面に多 数の黒色斑点) (自然物)白褐色 (それ以外)	
3 146	須恵器 長颈壺	"	9.2	22.4	(10.0) 沈線間に刺突 副部 最大径 15.8	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	灰色-灰色褐色	
4 146	須恵器 平瓶	"	8	14.9	最大径 口縁は底部近くに回転 (推定) 15.5 を1条埋らす	回転ナデ 回転ヘラ ケズリ後ナデ? 底部には「落ヘラ切りの 痕が残る」	灰色	
5 146	土師帶裏	"	(12.5)	(9.0)	副部 最大径 11.8	ナデ	ヘラケズリ	黒褐色- 丸底 灰褐色
6 147	須恵器 环身	"	14.8	4.1		回転ヘラケズリ 回転ナデ ヘラ切り重ねる	外側 暗灰色 内面 褐色	
7	"	"	13.6			回転ナデ	外側 暗灰色 内面 断面 暗紫褐色	
8 147	"	"	13.8	4.4	波門に沈線を1条埋らす	人井部は重いヘラケ ズリ 回転ナデ後ナデ	灰色 淡赤茶色	
9 147	"	"	13.6	3.2	人井部平坦	回転ヘラケズリ	灰色(外側は 暗紫褐色)	
10	"	"	12.3		口縁端はやや内折	回転ナデ	灰色	
11	"	"	14.2	3.5	口縁端部内面には古 天井半坦	ヘラ切り後ヨコ方向に ハケ日のような濃點	暗灰色	
12	"	"	14.9	4.4	口縁端部は内側に面を つくる	回転ナデ 大川部はカキメを施す	外側 暗灰色 内面 褐色	
13 147	須恵器 环身	"	11.8	3.4	最大径 13.8 たちかり中程でやや屈 曲 底部平坦	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	
14	"	"	13.2		最大径 15.6	回転ナデ ゆるい回転ヘラケズリ	"	
15 147	"	"	13.7	4.2	最大径 14.9	回転ナデ 回転ヘラケズリ	"	
16 147	"	"	12.4	3.4	最大径 14.3	リヨン方面に日が残る	暗灰色	
17 147	須恵器 环身	"	13.9	4.4	底部平坦	ヘラ切り 横方向の クシメとX印がある	暗灰色	
18 147	"	"	10.4	3.2	6.7	回転ナデの後ナデ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	外側 暗灰色 内面 黑灰色	
19	須恵器 环身	"	17.0			回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ 回転ヘラケズリ リ回転ナデの後ナデ	暗灰色	
20	須恵器 高环	"			(底部) 沈線間に刺突かしわ 8.3 脚部径 9.4	回転ナデ	明黄色	
21 147	須恵器 有蓋高环	"	12.7	9.4	脚部径 10.2	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ 回転ナデ後所々ナデ	淡灰色 変形による 変形、火ぶ くれあり	

古八幡付近遺跡 1号墳出土遺物② (第143図)

測量年	器種	出土地點	U形(cm)	弧形(cm)	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 147	須恵器 高环	1号墳	3.6	12.7	人井型1条 脚部平坦面 10.7	回転ナデ 回転ヘラケズリの後ナデ	暗青灰色 表面の風化 が著しい	
2 148	須恵器 环身	"	8.3		四線間に刺突	回転ナデ 回転ヘラケズリ(後)ナデ	灰色	
3 147	須恵器 高环	"			脚部径 12.	回転ナデ	暗灰色	
4	須恵器 環身	"				タタキの後カキメ	"	(新幽暗紫色)
5	須恵器 輪底	"				"	外側 黒灰色	
6	須恵器 脚部	"			脚部径 6	回転ナデ	内面 灰色	
7	須恵器 环身	"	13.4	4	(推定)(推定)	回転ヘラケズリ	暗青灰色	
8 148	"	1号墳 周溝	13.6	12.7	脚部径 10.7	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	青灰色	
9 148	須恵器 环身	"	11.5	3.6	最大径 14	回転ナデ 中心 にクシメ 回転ナデ	~	
10 148	須恵器 环身	"	13.2	4.3	口縁部に段 脚部平坦面	ヘラ切り 回転ナデ クシメ	灰色	
11 148	須恵器 环身	"	12.1	3.4	最大径 14.1	回転ナデ ヘラ切り	"	
12 148	須恵器 环身	"	7.6	7.8	4.0 (?)	クシメ	外側 暗灰色 内面 青灰色	
13 148	須恵器 環身	"	25.6	4.8	口縁部に段	タタキ	明灰色	

古八幡付近遺跡 1号墳北側出土遺物（第145図）

調査年	形	寸法(cm)	説明	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1 149	須恵器 片身	1号墳 北側	13.5 4.0	口唇平坦	回転ヘラケズリ 回転ナデ クシメ	灰色	
2 149	須恵器 片身	~	11.3 3.4	最大径 底部平坦	回転ヘラケズリ 回転ナデ	淡灰色	
3 149	須恵器 片身	~	13.7 3.7	口唇に凹面 鋸い縁	回転ナデ 回転ケズリ クシメ	灰色	
4 149	須恵器 片身	~	11.5 3.9	最大径 底部平坦	回転ナデ ヘラ切り	淡灰色	
5 149	須恵器 片身	~	14.1 4.1		ヘラ切り後不定方向 にカキメ付の工具痕	外面 暗灰色 内面 淡灰色	
6 149	須恵器 片身	~	12.2 4.7	最大径 15	回転ナデ ヘラ切り	外面 黄化 内面 淡灰色	
7 149	須恵器 片身	~	13.6 3.7	1口唇凹面 天井部平坦	回転ナデ カキメ状 の工具痕 ヘラ切り	淡灰色	
8 149	須恵器 片身	~	11.8 3.5	底部平坦	ゆるい回転ナデのヘラ ケズリ 回転ナデの後ナデ	灰色	
9 149	須恵器 片身	~	14.5 4.9	口唇凹面 天井部へ 付せ 沈線による縁	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰色	
10 149	須恵器 片身	~	12.1 4.5	最大径 15	回転ナデ 回転ヘラケズリ	~	
11 150	須恵器 片身	~	15.2 4.7	口唇に沈線 縁 ヘラ記号	回転ヘラケズリ 回転ナデの後ナデ	灰色	
12 150	須恵器 片身	~	14.3 4.0	最大径 16.9	回転ナデ 回転ヘラケズリ	~	
13 150	須恵器 コップ形 上唇	~	(長径) 10.3 以上	内面は回転ナデ調整 外面部はカキメ開裂 底部はヘラケズリ	暗灰色	接点は無い が剥離面の 形状から握把 等の把手では なく、コップ 状工具の把手 と思われる	
14	須恵器 片蓋	~	14.4	口唇わずかに肥厚	回転ナデ	灰色 断面 暗紫色	
15	須恵器 片蓋	~	(14.4)	口唇著	回転ナデ		
16	須恵器 片身	~	12.2 3.7	最大径 14.8	回転ナデ ゆるい回転ヘラケズリ ヘラ切りの痕が残る	暗青灰色	
17 150	須恵器 片身	~	12.4 4.2	最大径 15	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰色 断面 暗紫色	
18	須恵器 片身	~	19	口縁端部は平坦面	回転ナデ	外角 暗灰色	
19 150	須恵器 短縁蓋	~	8.5		内面は回転ナデ 回転ナデ 頭部以下はカキメ	内面 暗青 外面 暗青灰色 内面 灰色	
20	須恵器柄	~	13	口縁端部はシャープに 先端する	回転ナデ	黄灰色	
21	須恵器	~		同心円文	タタキの後カキメ (一部ナデの痕)	暗青灰色	
22	古鉄	~		寛永通寶(古銭水)		断面 暗紫色 古銭水	

(2) 2号墳

調査前の状況（第142・143図、写真図版146～148）

2号墳は、1号墳南側の標高約60mの丘陵西側斜面に位置している。1号墳との間隔は墳幅で約6mを測る。発見時（写真図版81下、103上）には伐採用重機が石室の真上をちょうど主軸に合わせて通過していたこともあって、この時点では全く墳形や石室の有無を認識できなかった。しかし、石室石材や天井石と思われる石が一部地表に露出していたので、1号墳同様に西側に開口する横穴式石室を主体部とする方墳を想定し、2号墳として調査を開始した。

墳丘・周溝（第136・147図、写真図版105～107）

調査の結果、1号墳同様径約10mの円墳であることが明らかになった。2号墳は、1号墳が山地形を利用して、傾斜に直行する方向に横穴式石室を築いていたのに対し、傾斜に平行するように南北軸の横穴式石室を構築している。このため谷側になる墳丘西側は地山部分が少なく、ほとんどが盛土だった。墳丘西側の盛土は掘り方に石を積み上げながら、橙褐色系と黒褐色系の土を交互に

盛っている。盛土内の第147図下の第15・16層上面では、石室左側壁に用いられているのと同じサイズの石が石室に沿うように、前・中・奥の3ヶ所で検出された（写真図版106）。左側壁が半分の高さまで積み上がったところで上留めをし、斜面に築いた墳丘が崩れないように工夫したものと考えられる。

周溝は1号墳同様山側のみ廻らされていた。幅約1~2.5m、深さは最も深いところで約50cmを測る。周溝内の土層堆積状況も1号墳とほとんど同じで、上層に薄く黒褐色土が堆積しその下に茶褐色土が堆積していた。周溝内からは第150図2の蓋が1点だけ出土している。

2号墳墳丘上の割石（第146図、写真図版104上）

調査前は石室の正確な位置や規模は不明だったが、表土を剥ぐと南に約7.5m伸びる石の並びが検出された。しかし、同時に「コ」の字状を呈する石の並びの中で割石の集石を2ヶ所検出したので、近世墓の可能性も考えられた。割石は薄い板状に割られており、横穴式石室の石材のように表面が風化していなかった。また、割石周辺の表土下では石見焼や上製の人形が出土している。石室内には土砂が充満していたので、この中に墓壙を掘り込んだものと考えて精査を行ったがプランを検出することはできなかった。さらにこの土砂を断ち割っても墓壙らしき落ち込みは確認できず、割石や近世・近代の遺物は1点も出土しなかった。このため、割石は近代以降に集められたものと思われるが、性格については不明と言わざるをえない。ただし、2号墳の約5m東に石見焼関係の粘土採掘坑（土壌11）が掘られており、すでに室崎商店裏遺跡の小結で述べたように、2つの遺跡の横穴式石室・粘土採掘坑・割石集石の組み合せがよく似ている点は注意される。

横穴式石室（第148・149図、写真図版104~109）

石室の開口方向はS11°Wで、ほぼ南に開口している。1号墳と異なり石室内には土砂が充満していた。2号墳の石室は割石を多用して構築しており、平坦な面を内側にみせる様に積まれていた。また、墳丘検出時に左側壁の開口部から西に折れる外縁列石状の石のまとまりを検出した。

平面形・床面 石室規模は床面で測ると、残存長が左側壁で6.1m、奥壁幅が1.2mである。石室の平面形は右側壁が土圧によってかなり内側に倒れ込んでいるので、無袖式か肩袖式か判断に苦しんだ。基底部の石の並びを見ると、右側壁の奥壁から5個目の石までは扁平な石を敷くようにして石室内側の面が揃うように並べている。次からの4個の石は約60度内側に傾いており、本来ここで石の置き方を変えて立たせていたものが、上圧によって内側に倒れ込んだものと思われる。こうした状況から、右側壁が倒壊する前の石室の平面形は無袖式で、玄室と羨道の区別が明確でない形態を呈していたと考えられる。床面は奥壁から約3.3mまではほぼ水平だが、そこから南側は10度前後の角度で傾斜し始める。ここから奥壁側を玄室として意識していたと推測される。床面の左側には長さ28~52cmの細長い石が置かれていた。配置状況から木棺を安置するための台と思われるが、釘は1本も出土していない。床面には排水溝等は存在しなかった。

閉塞施設 石室内の南側では25~50cmの大石を多数検出した。一見閉塞施設のように見えたが、床面から浮いており検出した範囲がちょうど右側壁が倒壊した部分と一致するので、閉塞施設ではなく右側壁の石材が石室内に落ち込んでいたものと判断した。このほか閉塞施設と考えられるものは確認できなかった。

奥壁 基底部には、幅約1.1m、高さ約90cmの大型の石を東寄りに据え、その西側に幅22cm、高さ約90cmの石を立てている。2段目より上は扁平な石を小口積にしている。高さは1.3mを測る。

奥壁と側壁の関係は、奥壁基底部は側壁に接するように組まれている。奥壁2段目は左右の石を

側壁にかかるようにを積んでいる。これに対し奥壁中央は基底部の石の北寄りに積まれている。このため奥壁は2・3段目の中央部が北側に幅約30cm、奥行き約20cmの窪んでいる。

左側壁 左側壁は土圧によってやや西側に反っているものの、開口部以外は比較的よく残っている。基底部の石は、奥壁から4個目までは石の上面のレベルが揃うように、南側に向かって石が大きくなっている。ここまでは2段目以上の石も水平を意識したと思われる積み方をしている。基底部の奥壁から5個目の石からは、石の積み方に変化がある。5個目の石は小型で細く、6個目は扁平な石を立てるようにして置いている。また、6個目の石の所から床面は南に向かって傾斜し始めるが、ここから南の左側壁は地山の傾斜に合わせて積まれている。そして、石の積み方の変化によって生じるV字状の隙間には、他の部分で使用されている石よりも小型の細長い石が積まれている。このように石の積み方からも奥壁から3.3m前後までが玄室と意識されていたことが窺える。

右側壁 右側壁は斜面上方からの土圧によって石室内側に大きく傾いていた。南半分は特に崩れ方が大きく、基底部の石も含め全ての石材が原位置を保っていなかった。玄室側は辛うじて石が乗っている状態で、危険を避けるため実測後は順次石を填丘外に運び出して調査を行った。基底部の石は既に述べたように、奥壁から5個目までは扁平な石と細長い石を敷くようにして置いているが、6個目から9個目までの石は立てるようにして据えている。また、この部分だけ石室内に2段目以上の石が転落しているが、検出状況から2段目以上は小口積みであったと推測される。

天井石 石室周辺で天井石と思われる大型の石を4枚検出した。4枚とも長さ1.5m前後、幅50cm前後の大きさである。調査区内ではこれ以外に天井石と思われる大型の石は確認できなかった。

掘り方 地山を掘り込んで造られており、旧地形が南西に傾斜する左側壁南側には掘り込みが無く、平面形は「L」の字状である。規模は幅2.8m、長さは東側で5.9mを測る。奥壁部分は急角度で深さ約0.9~1m掘られている。東西の壁は旧地形に合わせて南に行くほど浅くなっていく。

2号墳出土遺物（第150図、写真図版150）

2号墳は1号墳に比べて遺物の出土点数が少なく、石室内から1点も出土していない。石室開口部の南側では須恵器の細片が出土した。全て床面から浮いており、石室の遺物が掻き出されたものと考えられる。全形の解説の資料はなかった。1は周辺あまり例を見ないタイプの壺身である。室崎商店で出土した有蓋高環（第32図17）とやや似ている。3は接点の無かった口縁部と底部を図上復元したもので、高台の付くタイプの壺と判断した。4と5は同一個体の可能性がある。6から8は同一個体と思われるが破片はこの3点のみである。9はこれらの須恵器に混じって出土した鉄器で、錯化が著しく器種は不明である。10~13は盛土内で出土し、11は右側壁基底部の最も南側の石の上に貼り付いて出土した。頸部化に断面三角形の突帯を2条張り付け、その後ヘラによる刻目文を施している。石見地方では類例が少ないがⅢ-2様式に分類されると思われる。14は西側盛土内で出土した安山岩製の石鏡で、環壕出土のものも合わせると3点目になる。

建物37計測表

規 模	突 行 き				折 行 き					
	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
柱穴 (cm)	上 面 形 (cm)	22×18	14×14	20×20	24×18	26×26	48×33	26×25	27×24	16×15
	底面標高 (m)	60.83	60.87	60.72	60.86	61.02	60.74	60.63	60.55	60.70
柱間距離 (m)	P1-5	P5-6	P6-7	P7-8	P8-9	P9-1				
	1.88	2.38	1.58	2.78	1.52	2.23				

古八幡付近遺跡 2号墳出土遺物 (第150図)

番号	年	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴・文様の特徴	調査	色調	備考
1	150	須恵器 环身	2号墳	11.0		人形 受部はわずかに上方に向転ナデ 13.5 反せれる	外画 黒灰色 内画 灰色		
2	150	須恵器 环身	2号墳	11.2		最大径 受部は下方に突出かく向転ナデ 13.0 反せれる	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色	
3	150	須恵器 环身	2号墳	19.2	4.7	(环部) 底部ははい 体部に浅縫を1条埋せる	回転ナデ 回転ヘラケズリ	外画 暗灰色 内画 明灰色	
4	150	須恵器 环身	2号墳	15.4		最大径 肩部に2条の浅縫	回転ナデ	火色	
5	150	"	"		7.6	底部はわずかな上げ底	回転ナデ 回転ヘラケズリ 底部は回転ヘラ 切妻頭部ヘラケズリ?	明灰色	
6	150	須恵器	"			当て貝の痕を回転ナデ で消すがかなり残って いる	ナメ左上切りのタタキ ナメ左上切りのタタキの 後カキを施す	灰色	
7	150	"	"				ナメ左上切りのタタキ その後カキを施す	外画 暗黃灰色 内画 暗灰色	
8	150	"	"			内面は同心円文 (青海窓)	ナメ左上切りのタタキの 痕、その後カキを施す	外画 暗黃灰色 内画 暗青灰色	
9	150	鉄齒	"						鍛もしくは 鉄、鍛先と 見われる
10	150	弥生鏡	"	15.8		端部に1条の凹線文	ヨコナデ ヘラケズリ後ナデか?	外画 淡黄褐色 内画 淡黄褐色	
11	150	"	"			刻印は小さいがはっきり とした「○」字形を程す	ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	右見、横溝に は見られない が、安政の 日-2様式に 突帯をめぐら すものがある
12	150	弥生鏡部	"		5.8		風化のため調整不明 ヘラケズリ	外画 橙褐色 内画 淡褐色	
13	150	"	"		6.0			淡褐色	
14	150	安山岩 石獣	"	長さ 3.0	幅 1.7	厚さ 0.3 重さ 1.41g	平基式		石材は灰 色の安山 岩製

3. その他の遺構

建物 37 (第151図)

9区のほぼ中央では時期不明のピットを9基検出した。肩と床面を削平された竪穴住居の可能性がある。ただし柱穴の規模は9区で検出した弥生時代の遺構と比べると小さい。柱穴配置は六角形を想定でき、この場合柱間距離は長いものと短いものが交互になる。時期は不明である。

土壙 10 (第151図、写真図版110)

建物37の北側に位置し、地山に掘り込まれていた。平面形は円形を呈し、規模は検出面で98×104cm、深さは34cmを測る。床面はほぼ水平である。遺物は出土していない。詳しい時期は不明だが、埋土は黄灰色を呈し固く締まっており建物37の柱穴埋土とよく似ているので、或いは建物37と近い時期の遺構かもしれない。

土壙11・12 (第113図、168頁参考写真)

尾根上平坦地のほぼ中央に位置している。土壙11の平面形は不整多角形を呈し、規模は検出面で約7×5m、深さは約1mを測る。埋土は地山とよく似た土が水平に堆積し、遺物は含まれていなかった。床面は南に向かって傾斜し、南側に近い位置に元形の石見焼の皿が置かれていた。以上の状況から石見焼関連の粘土探査坑と判断した。土壙12は土壙11と北側で切り合う小型の土壙で、平面形は長方形を呈し規模は検出面で1.9×1.8mを測る。土壙11が埋め戻された後に掘られており、上壙内には陶磁器類が施業されていた。出土遺物から近代以降に掘られたものと思われる。

第3章 まとめ

古八幡付近遺跡は、平成4年に江津市教育委員会によって発掘調査が行われたのを初めとして、以後平成7年を除いて毎年継続して発掘調査が行われてきた。この間遺跡の範囲は当初予想されていた水田部と丘陵裾部から大きく広がり、現在は敬川河岸から東の丘陵地帯まではほぼ全域が遺跡と考えられている。遺跡の範囲が広がったことに伴って、これまで遺跡周辺では確認できていなかった時代の遺構・遺物も検出された。この結果、時代によって資料の多少はあるものの、縄文時代から現代まで継続して居住域となっていたことが明らかになった。以下、これまでに調査区内で検出した遺構・遺物を基に古八幡付近遺跡の各時代の状況を述べる。

【縄文時代】

水田部に設定した平成4年度調査区と1区では縄文後期と晩期の土器、石器が出土したほか、黒曜石の原石が出土している。これに対し丘陵斜面に設定した4~7区・8~3区では縄文時代と思われる遺物はほとんど出土していない。尾根上に位置する8~2区では縄文時代の可能性がある石器や剥片は多數出土しているが、上器は3点しか出土していない。また、9区でも環壕内より縄文後期の土器が出土しているので、この辺りまで生活範囲だったことは確かである。このように遺物の出土状況からは、敬川河口付近の縄文時代の居住域は低丘陵や緩斜面を中心だったと考えられる。なお、1区で出土した土器には縄文時代早期の可能性のあるものも含まれている。

ところで古八幡付近遺跡では、確実に縄文時代と考えられる遺構は一つも検出できなかった。遺跡周辺でも縄文時代の遺物は多少出土するものの、遺構は希薄な地域とされてきた。しかし、8~2区で確認した縄文時代堆積土が、地山と極めて区別しにくかった点が注意される。当地域で地山としている上は場所毎で変化に富んでおり、縄文時代の堆積土は地山とよく似ているので、偶然遺物を発見しない限り弥生時代までの遺構面を地山と判断して掘削を中止する場合が多い。また、9区で検出した建物37の柱穴は、遺跡内で検出した時代の判断できる全ての柱穴と、形態・配置が異なっている。このため弥生時代以外に縄文時代の遺構である可能性も考えられる。このように遺跡内の縄文時代の遺構には、検出または認識しきれずに見落としているものもあるかもしれない。

【弥生時代】

古八幡付近遺跡では、石見編年第I様式から第V様式までほぼ全ての時期の弥生土器が出土している。弥生時代前期は確実に時期を判断できる遺構が無く、土器が出土しているのみである。前期の土器が出土した調査区は縄文土器が出土した調査区とほぼ重なっている。出土した点数も縄文土器の出土状況とほぼ比例し、水田部に設定した調査区が中心で、丘陵部ではわずか2点しか出土していない点が注意される。遺構を検出していないので居住域の中心が遺跡周辺のどこだったかは明確でないが、おそらく集落の立地は縄文時代と大差なかったと推測される。

中期の資料はこれまで水田部の調査区で包含層から僅かに出土していただけであったが、9区で集落の一角を調査した結果、遺構・遺物とも大幅に増加した。9区調査以前には古八幡付近遺跡の弥生時代中期の集落の中心は低地に立地すると見られてきたが、9区で検出した竪穴住居群はこれまでの見解を修正するものだった。竪穴住居群の周辺には深い溝が掘られていたが、周辺での集落調査例が乏しいため性格を特定することはできない。また、比高約50mという立地は「高地性集落」

古八幡付近遺跡 6・7区出土弥生土器一覧表 (V-1・2様式)

遺構名	甕	壺	底部	高坏	鉢	その他	合計
段状遺構2(下方も)	8	1	5	0	1	0	15
6・7区遺構外	40	7	10	1	0	0	58
合 計	48	8	15	1	1	0	73

古八幡付近遺跡 8区出土弥生土器 (V-1~3様式)

遺構名	甕	壺	底部	高坏	鉢	その他	合計
段状遺構8	1	1	0	0	0	0	2
段状遺構13	1	0	0	0	0	0	1
8区遺構外	59	0	8	2	0	0	69
合 計	61	1	8	2	0	0	72

古八幡付近遺跡 9区出土弥生土器 (III-1~V-1様式)

遺構名	甕	壺	底部	高坏	鉢	その他	合計
豊穴住居1	0	0	9	2	0	0	11
豊穴住居2	24	9	11	5	0	0	49
豊穴住居3	1	0	1	0	0	0	2
豊穴住居4	2	0	1	0	0	0	3
壇	80	21	85	26	1	3	216
2号培塿土内	2	0	4	0	0	0	6
合 計	110	31	111	35	1	3	291

9区環境内出土弥生土器分類表

器種	形態	点数
甕(床面5層)	中期中葉～後葉	6
甕(中期中葉)	口縁端部を拡張しないもの	6
	口縁端部を上方にわずかに拡張するもの	11
	口縁端部を上方に拡張し面をつくるもの	5
	口縁端部を上下に拡張するもの	10
	L字縁端部が肥厚し、面をもつもの	7
	口縫が無いもの	4
	その他(中期中葉と思われるもの)	4
甕(中期後葉)	口縁に周線を1条めぐらすもの	2
	口縁に複数の凹線を施すもの	7
	塙町式(刺突文の後に凹線文を施すもの)	10
	塙町式(凹線文を施した後、刺突文を施すもの)	2
	その他塙町式に似ているもの	3
甕(後期前葉)	口縁部の器壁が厚く、内面のケズリが明確なもの	3
甕	広口甕	10
	口縁が強く紡錘するもの	4
	その他の甕	7
底 部	床面5層	8
	平底(底径5cm以下)	21
	平底(底径5~7cm)	19
	平底(7cm以上)	8
	底部に穿孔するもの	3
	上げ底A(通常の上げ底)	13
	上げ底B(柄にふんばる、高台状になるもの)	12
	底部に施文するもの	1
高 坏	古相	4
	新相	10
	床面出土	1
	脚部(新相)	9
	その他の高坏	2
そ の 他 の 構種	鉢	4
	脚部	1
	分脚型土製品	1
	コップ型土器	1

としても良さそうであるが、弥生時代だけでなく他の時代も含めて比較してみると必ずしも特別な立地ではなく、むしろ敬川河口の集落の立地が数百年単位で移転するサイクルの中で考えた方が良いと思われる。県内でも高所に立地する弥生集落の調査例が増加してきたが、これらをすべて政治・軍事的緊張状態の中で捉えることは難しいと思われる。例えば今回環境内で多数の遺物を検出した結果、底地に立地する集落と変わらない性格の集落が展開していたと判断したが、環境が無ければ遺物は全て斜面下方に転落し、遺物の極端に少ない集落として別の評価がされていたであろう。

中期の遺物については塙町式土器の出土が注目される。水田部でも僅かに出土しているが、分布の中心は9区の丘陵上である。弥生上器分類表を見れば解るように、9区で出土した全ての甕の中で塙町式の甕が占める割合はさほど多くはない。しかし、塙町式の甕は全て口縁に複数の凹線を廻らせており、第IV様式の新相を中心とした時期と思われる。第IV様式と思われる甕に絞れば塙町式土器の比率はほぼ半数になり、弥生時代中期後葉にかなりこの文様が取り入れられていたことが分かる。このほか9区出土の壺や高環も中国山地や瀬戸内地方の土器とよく似たものが多い。また、古八幡付近遺跡では平成4年度調査区と9区で分銅形土製品が1点ずつ出土している。現在石見地方では唯一の出土例で、どのようなルートで伝わったのか不明だが他の土器の様子からすると備後方面から伝播した可能性が高い。

弥生時代後期は、V-1様式の段階ではなお9区で土器を確認できるが、遺構・遺物を検出した中心は西側に移っている。3区で検出した水田遺構や木製品は弥生時代後期の可能性が高いとされている。一本梯子が2点出土しており、付近にはこの時期の建物が建てられていたと推測される。次の古墳時代前期の遺物は水田部でのみ出土しているので、集落の中心は弥生時代後期にしだいに丘陵上から低地へ移っていったと考えられる。

古墳時代

古墳時代前期は比較的遺物の少ない時期である。遺構は2区で土壙1基を検出したのみである。前後の時期の遺構・遺物を検出しているので、集落はこの地を遠く離れてはいないと考えられる。遺物を検出した3区以西の調査区と近いレベルの南段丘状や、調査区を設定しなかった丘陵裾部に集落の中心が存在すると推測される。

古墳時代中期は3区以西の調査区でのみ遺構・遺物を検出した（第86図7はこの時期の甕かもしれない）。水田部で出土した遺物の量は、古八幡付近遺跡の各時代の中で抜群に多い。完形に復元できる遺物が多いのも特徴で、竪穴住居等の建物群は検出していないが集落の中心に近いと見て大過なかろう。平成4年度調査区周辺に集落の中心が存在すると推測される。

古墳時代後期の遺構は9区の古墳群のみで、建物等は検出できなかった。遺物も9区以外ではほとんど出土していない。ただ、8区で古墳時代後期の蓋杯や壺、器台と考られる須恵器や耳環が僅かに出土しているので、この時期の尾根上には古墳が存在したのかもしれない。また、調査区内では古墳時代後期の集落の所在は全く掴めなかったが、敬川河口の古墳時代後期の状況は、同時期の遺構を検出した室崎商店裏遺跡・横路占墓も合わせて考える必要があると思われる。

以下は古八幡付近遺跡の範囲を超える話になるが、遺跡調査中に確認した情報を基に江津市西部の後期古墳群の状況について述べることにする。9区で検出した横穴式石室は1・2号墳とも全長6m以上、高さは1号墳が2m以上残っているなど、江津市内の古墳としては特筆すべき保存状態だった。しかし、当地域の後期古墳の特徴として半地下式構造なので、地表観察で墳丘を確認する

ことは極めて困難で、調査前にはほとんど墳丘を確認できなかった。当古墳群のような構造の後期古墳は遺跡周辺にまだ潜んでいると思われるが、これらを分布調査段階でいかに発見するかは今後の重要な課題の一つと言える。高野山北側にも從来遺跡とされていなかった後期古墳群が存在することは室崎商店裏遺跡の小結でも述べたが、これらの中には遺跡として確認されていないために重機によって石室や墳丘を一部破壊されたものもある。また、二宮町の天ヶ峰古墳は四角突出型墳丘墓の可能性のある方墳とされ遺跡地図にもそのように記載されてきたが、実際に現地に行ってみると方墳と推定された所のすぐそばに円墳2基があり「天ヶ峰古墳」の標柱が立てられていた。このように現地の状況はかなり混乱しているので、これ以上の古墳破壊を避けるためにも人至急正確な古墳の分布状況を把握する必要がある。現地踏査を行った際に気付いた点をさらに2・3付け加えると、これまで確認されていた高野山古墳群と比較して、高野山北麓の古墳は7m前後のやや大型の石室を内部主体とするものが見られる。ちなみに現在最も墳丘・石室の規模が大きいと思われるものは天ヶ峰1号墳である。また、古墳の時期も北側の方が古いものが多い印象を受けるが、これは今後検討すべき課題であろう。

なお、調査終了時までに確認した現在遺跡になっていない横穴式石室を内部主体とする古墳については、第1回と周辺の遺跡一覧に記して置いたので参考にしていただきたい。

奈良時代

奈良時代には弥生時代の段状造構が僅かに造られるだけだった丘陵部に建物が建てられるようになり、古八幡付近遺跡の集落はこの時期を境に大きく発展する。奈良時代に削平した段は、埋没後に新しい時期の造構に再利用されることが多いため、比較的の残りは悪い。しかし、段の壁際や斜面下方に遺物が多数残っている場合が多く、平安時代以降に比べ土器の資料は豊富である。遺物では棒状土器や土製権、ミニチュア土器等の特徴的なものが出土し、統一新羅土器が遺跡内に持ち込まれたのも奈良時代終わり頃と考えられる。また、古八幡付近遺跡と葛川対岸の横路古墓では移動式竈が出土している。これは同じ石央地方でも、南部で調査された古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居が造り付けの竈を備えていたことと様相が異なり、移動式竈の分布や沿岸部と山間部の建物の違いを考える好資料になると思われる。

ところで浜田市東部に位置する石見国府推定地では、これまでの発掘調査で古代から中世の大規模な集落跡と莫大な量の遺物が発見されているが、8世紀以前の建物や遺物はほとんど確認されていない。このため現在の国府地域が発展するのは奈良時代以降と考えられる。古八幡付近遺跡や江津市西部の遺跡で奈良時代に特殊な遺物が出土したり、それ以後集落が発展する背景には、石見国府の動きが影響を与える可能性が考えられる。

平安時代

平安時代前半は集落の中心が斜面から8-2区を設定した尾根上に移動し、企画性のある配置をした建物群が出現する。建物自体も整った柱穴配置をしており、柱穴にも工夫の見られるものが多い。遺物は須恵器と同じ形態をした土師質土器が作られるようになり、しだいに比率を増していく。また、煮沸関係の上器がこの頃から目立って減少し始める。

平安時代後半になると再び斜面にも建物が建てられる。建物は奈良時代の段状造構が埋没した隙地を再利用して建てられるものが多い。建物を建てるための段状造構は大型化し、長さが20mを越える規模の段を造成するようになる。平安時代以降は床面造成土もよく残る。建物の柱穴配置はや

やくずれ始め、柱穴掘り方も柱に対して規模が小さくなる。遺物は須恵器と土師質土器の比率が逆転し、この時期から土師質土器が主流になる。

平安時代末には白磁が出土し始めるが、鎌倉時代初期の遺構に伴うものかもしれない。古八幡付近遺跡で出土した中世の陶磁器類は111項の表にまとめたが、白磁は1~3区と平成5年度調査区を中心に出土していることが分かる。また、平成5年度調査区では、4区の鎌倉時代前期の建物から転落したと思われる青磁碗が1点出土した以外は白磁しか出土していない。以上の状況から、古代末から中世初頭に集落の中心は丘陵上からしだいに丘陵側へ移っていたと考えられる。

鎌倉時代

鎌倉時代と思われる建物は、段丘上の平成8年度調査区と丘陵斜面の4~8区で検出した。建物を構成する柱穴は、掘り方の規模は小さいが本数は増加する。丘陵斜面で検出した建物は平安時代後半の建物と重複または近い位置で検出しておらず、鎌倉時代でも前半の可能性が高いと思われる。建物周辺では貿易陶磁もほとんど出土していない。これに対し平成8年度調査区は幅4m前後の溝を伴う総柱建物を検出し、全調査区内で最も多数の貿易陶磁が出土した。陶磁器類の内訳は同安窯系青磁と太宰府編年IV類以前の龍泉窯系青磁が最も多數を占め、高麗青磁の碗と思われる破片も1点混じっている。擂鉢は東播系のものが出土している。完形の青磁碗が1点出土していることから墓などが存在した可能性も指摘されている。以上の状況から、鎌倉時代には調査区内のかなり広範囲に集落が展開しているが、中心は平成8年度調査区周辺だったと考えられる。

室町時代~近世初頭

この時期の遺構は、遺跡周辺で中世後半の土師質土器の編年が行われていないので、陶磁器類の出土状況を基におよその年代を判断した。この時期の陶磁器類の出土状況を見ると、ほぼ8区に集中していることが解る。8区で出土した貿易陶磁は15世紀代の青磁碗が大多数を占め、白磁は1点しか出土していない。李朝陶器や近世初頭の唐津・瀬戸・美濃の碗・皿も8区だけで出土している。そのほか遺跡内のIV・V期の備前焼の出土数は、8区出土のものが8割近くを占めている。以上の状況から、室町時代から近世以前の集落は、8区を設定した丘陵尾根上を中心として展開していたと推測される。段状遺構10・11で検出した柱穴はこの時期のものと考えられるが、並びや掘り方の規模に規則性を見つけにくく、抽出した建物は建物25を除いて柱穴配置、柱間距離とも他の時代に比べ難な印象を受ける。或いは平面長方形の単純な柱穴配置ではなく、大小の柱穴を織り交ぜた複雑な柱穴配置をしていたのかもしれない。また、既に述べたように4~8区で検出した集石遺構や土石流は、この時期の水溜遺構とその流水の跡と考えられる。

古八幡付近遺跡で出土した土師質土器の内、13世紀前半では古市遺跡の編年従えると思うが、13世紀後半以後はやや様相が異なる印象を受けた。本来なら中世後半の編年を独自に行わなければならぬだろうが、ほとんどが包含層出土遺物で一括性の高い資料に乏しく、並べることができなかった。中世後半の土師質土器の編年は、墓・ゴミ穴等の土壙や溝等の一括性の高い資料の増加を待つて行いたい。

古八幡付近遺跡 陶磁器数量表

種 別	器 形	平成5年当時 調査 調査 数	平成5年当時 調査 数					6 区	7 区	8 区	計
			I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区				
青 瓷	瓶	1	0	0	1	0	20	1	4	31	67
	罐	0	0	0	0	0	0	0	0	3	15
	碗	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
	その他の	0	0	0	0	0	0	4	0	1	5
白 瓷	瓶	2	0	2	9	0	0	22	2	1	44
	罐	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
	碗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
青 花	山 壁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
其 の 他	皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灰 瓷	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
	罐	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	碗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
鐵	瓶 (中国産)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	罐 (中國産)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他の	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
備 品	蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	箱	0	0	0	0	0	0	0	2	13	13
御 軒 工 作 廉	瓦	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
その他の瓦	瓦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計		8	1	2	10	1	0	71	3	59	163

近世・近代

古八幡付近遺跡の調査中に地元の人から、近世の敬川集落は占墳群を検出した9区よりも遙かに高い標高まで続いているという話を聞いた。さらに8区で検出した古道は、山越えで高野山南側の有福方面へ向ける道の一部だとも説明された。実際に古八幡付近遺跡の丘陵南側に足を踏み入れてみると、切り通しの道が高野山へと続いており、途中まで石敷きを確認できる。明らかに100mを越える標高でも大規模な削平段がいくつも確認できた。ここは冷泉寺の裏山に当たるので、建物以外に神主城跡で検出した様な近世墓群が造られていた可能性もある。どちらにしても日本海に面し、河口に位置する近世集落が、弥生時代中期の集落よりも高い位置に展開していた事実は、集落の立地や変遷の原因を考える上で実に興味深い。

この時期の出土遺物を検討すると17世紀後半以降は出土した陶磁器類のほとんどを肥前系のもののが占めており、それ以前に見られた備前や瀬戸・美濃、外国産の焼き物が見られなくなる。また、古道の西側で検出した上塙6は粘土採掘坑と思われるが、段状構造20出土遺物に窯道具が混じっているので付近に石見焼の窯跡が存在する可能性が高い。

ま と め

古八幡付近遺跡の最も重要な調査成果は、大まかにではあるが地域の歴史をたどれることだと思われる。これは以前には遺跡が存在しないと思われていた立地の7区以東の発掘調査を行った結果、それまで遺跡周辺で所在を確認できていなかった時代の遺構・遺物が検出された為である。

弥生時代中期の資料は、今回居住域を調査したので一挙に増加した。これまで第V様式以降の上器は比較的まとまった量が出土していたが、第III・IV様式の資料はわずかだった。このことは周辺の遺跡にも共通しており、弥生時代後期以降は遺物だけでなく遺構も確認されているが、中期の資料は包含層出土の遺物が確認できる程度で建物群を調査した例は無かった。今回弥生時代中期の集落を調査したのは全くの偶然だが、長期間存続する集落遺跡の「抜けている」時代の遺構が、これまで調査を行ってこなかった立地に存在する可能性を示す成果だったと考えている。

平安時代や中世の集落は比高約35mの尾根上や比較的傾斜の急な斜面で検出したが、このような立地に中世の建物群が造られているとは当初予想できなかった。8区で検出した平安時代の建物群は尾根上の小さな谷地形を造成して作られている。これは遺跡周辺に企画性のある建物群を建設するだけの広い台地が無かった為と考えられる。ところが調査前休耕田だったうえに廢車が放置され

ている状態だったので、平坦地は近代以降の削平で遺跡は存在しないと考えられていた。石見地方は平野が少ない為、丘陵上を大規模に削平して耕地を造るとの考え方もあるが、周辺の丘陵で尾根上を広い水田にしたものはほとんど見ない。圧倒的に多いのは斜面を利用した棚田である。つまり尾根上の水田は、元々ある程度平坦になっていた所を選んで造られた可能性がある。棚田についても同様で、厚い耕作土の下には旧地形やかなりの遺構が削られずに残っていた。

石見地方は発掘調査件数が少ないため、集落の立地を掴めていない時代や地域がかなりある。これらについて考える際に、地形の異なる山陰東部を参考にするだけでなく、これまで発掘調査を行ってこなかった立地についても検討していく必要があると思われる。現在目にしている地形や人口の多寡、これまでの成果に基づく先入観に惑わされず、地域に即した調査を行えば現在分かっていない時代の資料を得ることができ、それぞれの地域がたどってきた歴史の実像も見え始めるだろう。

古八幡付近遺跡の今後の課題としては、調査区内で検出できなかった時期の集落や古墳時代後期以外の墓の所在について検討せねばなるまい。また、複数の機関・調査員が調査・報告を行っているため、遺物の総合的な検討が行えていない。今後もこれらの作業を継続して行うと共に、遺跡周辺の発掘調査によって資料が増加することでこれまでの成果に修正が加えられ、さらに具体的な集落像が復元されることが期待される。



古八幡付近遺跡調査指導風景

6. 橫路古墓

第1章 調査の経過と概要

第1章 調査前の状況

横路古墓は敬川西岸の標高約92mの山の南斜面麓近くに位置している。分布調査時に斜面で平坦地を幾つか確認しており、その内の1ヶ所で集石を確認したことから古墓群として遺跡に登録された。集石を確認した平坦地そのものは工事対象地から外れ、その下の標高約42mに位置する平坦地のみ調査を行うことになった。調査前の斜面は鬱蒼と草が茂り、麓近くでは棚田の石組みを何とか確認できた。この時点では近世の陶器碗が表探できた程度である。

第2節 調査の経過と概要

本調査は平成9年7月30日に開始している。調査開始直後には、近世墓の標石と思われるような石は検出されなかった。床面を地山まで掘削すると柱穴を検出したので、近世墓ではなく建物に伴う加工段であると判断した。この加工段の東端には拳大の石を無数に積み上げた集石があり、経塙かなにかではないかと考えた。そこで石の図面をとりながら掘り下げた結果、拳大の石積みの下から、墓標と思われる人頭大の石と墓塙の落ち込みを確認した。

また、急斜面の上に位置する遺跡へ登るために重機で道をつくったところ、道の黒褐色土の部分から6世紀後半の須恵器蓋杯と十師器の細片が出土していることに気が付いた。さらに加工段の床面をトレンチで断ち割ると、南側は大規模な盛土によってつくられたもので、その最下層に黒褐色の近世以前の遺物包含層があることも分かった。このため調査区の南側の斜面にトレンチを設定して遺物が出土する範囲の確認を行った。その結果、初めから遺跡として括られていた部分をⅡ区とし、遺物が出土した麓近くの緩斜面は新たにⅠ区としてⅠ区の後に調査することにした。

近世以前の遺構面を調査するために、至急近世加工段の調査を終了しなければならなかつたが、調査した時期が盛夏ということで日差しが強く、土色の区別に苦労し思うように柱穴を検出できなかつた。そこで、20あまりの柱穴を検出した時点で1棟の建物を想定して調査を一時中断した。

9月19日より重機を使って重機を使って斜面の掘削を開始した。重機で近世加工段の盛土を取り除くと、下層で近世の陶磁器類が多数出土した。その後人力による掘削に切り替え、地山面で古墳時代後期の建物2棟と段状遺構を2ヶ所を検出した。Ⅱ区の北側を拡張すると、さらにもう1ヶ所段状遺構を検出し古墳時代の遺物も出土した。このため調査区外にさらに遺跡が広がっていると考えられた。しかし、11月になって近世加工段の床面を再度精査をしたところ、柱穴を多数検出したのでそちらに専念しなければならず、これ以上の調査区拡張は断念せざるを得なかつた。

横路古墓の調査は当初調査班を2つに分けて飯田A遺跡と平行して行っており、調査期間は10月いっぱいを予定していた。11月からはもう一方の調査班と共に古八幡付近遺跡7区の調査に入る予定だったが、調査が進むにつれ検出した遺構の数が増え始め、最終的に現地調査が終了したのは12月18日である。その間、12月11日には調査指導会、同13日には現地説明会を行つた。

第2章 調査の結果

第1節 近世以前の遺構・遺物

調査区の立地（第153図、写真図版151）

調査区は標高92mの山の南側斜面に位置し、敬川から波子に抜ける谷沿いの道に面している。調査区は調査前に遺跡として括ってあった近世加工段とその斜面下方をⅠ区、新たに拡張した標高約28~34mの緩斜面をⅡ区とした。以下、近世以前の遺構・遺物について記述し、その後Ⅰ区で検出した近世の遺構について述べることにする。

段状遺構1（第155・157・159図、写真図版153・164）

調査区北側に位置し、床面の標高は約42mを測る。近世加工段の床面精査を進めたところ、須恵器や土師器を伴う黒褐色土の不成形プランを検出した。その後、近世加工段の床面造成土と黒褐色の遺物包含層を取り除いたところ、段状遺構と29基のピットを検出した。床面は西側と南側が流失しているので元の平面形は不明である。東側コーナーには壁溝が残存していた。周辺で検出したピットには北側の壁面と平行して並ぶものもあり、段状遺構1に関連する可能性もある。その中で第155図B-B'ラインのピットは比較的掘り方の規模が大きく、15~20cmの柱痕も確認している。建物2の柱穴と似ているので、段状遺構1に伴う何らかの上屋を支えていたのかもしれない。

遺物は床面と周辺で須恵器と土師器が出土している。この内第159図1~4を図化することができた。4は土師器高环の脚部と思われる。横路古墓では土師器の高环が多数出土したが、調査区内では4が最も高い標高で出土した。

段状遺構1の時期は床面付近で出土した1・2より6世紀後半頃と判断される。

建物1（第156・157・159図、写真図版154・164）

建物1は段状遺構1の約8m斜面下側に位置している。建物1を検出した標高34~42mの斜面部は調査区内で最も傾斜が急な所で、当初遺構の存在は予想していなかった。建物の南側はほとんど流失したものと思われ、本来の形態や正確な規模は不明である。床面が流失する位置から約50cm南で北壁に平行して並ぶ柱穴を検出しているので、あるいはここを中心に関転した規模の竪穴住居だったかもしれない。検出した床面の規模は3.4×0.9mで、標高は約37.6mを測る。床面壁際の一部で浅い溝を検出している。また、建物の斜面上方に建物を囲むように幅50cm前後の溝がめぐっており、斜面上からの流水を防いでいたと考えられる。この溝の中央付近には蓋をするように石が置かれていた。床面南側で検出した柱穴は何れも径10~15cmの小規模なものだが、調査時に柱穴掘り方を意識していなかったので柱痕部分のみ掘ったのかもしれない。

このほか建物1の斜面上方で5基のピットを検出した。建物1に伴う可能性は低いと思われるが、規模や形態から何らかの建物の柱穴と考えられる。詳しい時期は不明だが、土層堆積状況から建物1より後に掘られたことは確かである。

遺物（第159図）は細片が多く、図化できたのは5点のみである。5と9は、建物北側にめぐる溝内の石の周辺で出土した。また、出土した遺物の大半は6~8の様な土師器型である。出土した

建物 1 計測表

規 模	壇 行 き				街 行 き			
	P1	P2	P3	P4	PA	PB	PC	PD
主 約 体								
柱穴	上 面 徑 (cm)	13×11	15×14	16×15	28×24	40×31	31×27	40×38
(cm)	底面標高 (m)	37.06	37.29	37.05	37.82	38.70	39.12	38.85
番 号	PE							
上 面 徑 (cm)	38×37							
底面標高 (m)	38.52							
柱間距離 (m)	P1-2							
	2.24							

須恵器の時期は、およそ6世紀後半頃と考えられる。

段状遺構 2 (第156図、写真図版156)

標高約33mの急斜面と緩斜面の変換点で検出した。段状遺構3の約1.5m東側に位置する。検出した床面は東西約4.8m、南北約0.6mを測る。床面の南側は北側に対し不整形なので、多少流失したものと思われる。床面で浅い柱穴を2基検出したが、壁溝は確認できなかった。埋土中に土器の細片が出土したが図化できなかった。

時期を判断できる遺物が出土していないが、検出した位置や形態、埋土の状況から他の段状遺構に近い時期の遺構と考えられる。

段状遺構 3 (第158・159図、写真図版156・164)

段状遺構2の西隣に並ぶような位置で検出した。平面形は不整形で、床面は水平ではなく全体に浅く窪むような形態を呈している。検出した床面の規模は東西約8.2m、南北約1.2mを測る。床面で浅いピットを1基検出したが、壁溝は確認できなかった。柱穴は床面の南側で北壁に平行するように並ぶ2基を検出した。柱穴の規模は小さいが、柱間距離が約2.3mと建物1と同じである点が注意される。段状遺構3の西側斜面下方には2×0.4mを測る別の平坦面が造られていた。この小規模な段が段状遺構3に伴うか判断できなかったが、床面の北側には浅い溝が掘られていた。

横路古墓 建物1、段状遺構1・3 出土遺物 (第159図)

編	名	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・文様の特徴	南	東	色調	備考
1	164	須恵器身	段状遺構	10.6	3.2	6.6	端部はシャープ	回転ナデ 強:ナデ 回転ヘラケズリ		白色 淡灰色 内面 青灰色	
2	164	~	~	10.4				回転ナデ ヘラケズリ		灰色	
3	164	土師器甕	~	21.0				ヨコナデ ヘラケズリ		茶褐色	
4	164	土師器高环	~		6.8 以上	13.0	脚端部平坦	ナデ(ねぞうの跡がある) 不対称的ヘラケズリ		淡茶褐色	
5	164	須恵器蓋	建物1	16.4	3.8		口縁端に鈍い突線状の段	回転ナデ		灰色 断面 茶褐色 淡煙褐色	
6	164	土師器甕	~	17.2				ヨコナデ ヘラケズリ			内面に接合痕
7	164	~	~	20.6			口縁端や肥厚	ヨコナデ ヘラケズリ		淡茶褐色	
8	164	~	~	15.5	7.9		口縁直線的に外傾	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ		暗茶褐色	
9	164	土師器把手	~				幅広の把手(幅4.3cm)	ナデ ケズリ(内面)		暗茶褐色	2次焼成? ナデによる 種縫隙
10	164	須恵器 短沿甕	段状遺構	3		15.6	最大径	回転ナデ		外面淡灰色 内面 明灰色	
11	164	土師器甕	~	13			口縁端部はかなり不整形	ヘラケズリ		赤紫色	
12	164	~	~	15.2			口縁長い	ヘラケズリ		外面暗茶褐色 内面 茶褐色	
13	164	~	~	19.8			脚部張らない	強めのヨコナデ ヘラケズリ		燈褐色 黒斑有り	
14	164	~	~	15.6			口縁は直立ぎみ	横方4角のナデ ヘラケズリ		外面 茶褐色 内面 赤茶褐色	
15	164	~	~	21.9			口縁大きく外反			暗茶褐色	
16	164	土師器把手	~					ナデ		外面 暗茶褐色 (黒斑あり) 内面 赤紫色	

遺物（第159図）は埋土巾で土師器が出土した。14は西側の床面で出土した蓋で、他は細片のため図化できなかった。その他周辺で10・13・15・16が出土している。

出土した上部器だけでは造構の時期を判断しにくいが、およそ古墳時代後期以降と推測される。

I 区出土遺物（第160図、写真図版165）

近世加工段造成上の下に堆積した黒褐色の遺物包含層は、I区を設定した急斜面の西側ほぼ全面に堆積していた。ここでは古墳時代後期の須恵器・土師器を中心とした遺物が出土している。

1は斜面上方で出土した弥生土器の壺である。頸部下に20条のヘラ描直線文と竹管文を施す。内面はハケメ調整後ナデを施している。直線文が多条化しているが1本ずつヘラで描いているので、石見I-3様式に分類されると思われる。須恵器のほとんどが古墳時代後期のものだが、一部古代のものが含まれていた。14は非常に焼成が良く遺跡周辺で出土する須恵器壺と全く様相が異なっており、他地域から持ち込まれた遺物と考えられる。17は古八幡付近遺跡で出土した須恵器壺と同じタイプの壺で、調査区内でこの1点だけ出土した。16は一見糸切りの須恵器壺に見えるが、古墳時代後期の壺身である。上製支脚（12・13）は、古八幡付近遺跡で出土したものに比べ、直立気味で突起が短い。18は瓶の取っ手と判断して図化したが、断面がほぼ円形で胴部のカーブが不自然なので高環脚部の可能性がある。20は須恵器壺の底部と判断したが、非常に硬い焼成をしており中世以降の瓦質土器の可能性がある。

横路古墓 I 区出土遺物（第160図）

番号	性質	器種	出土高さ(cm)	直径(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 査 記 録	色 調 色	考 察
1	165	弥生土器	11.4	13.0		ヘラ直線文(20条) 支脚の上と中間に竹管文	ナデ、ヘラミガキ ハケメ調整のあとナデ	外面 淡灰褐色 内面 淡茶褐色	
2	165	須恵器壺	~	~	~		回転ナデ	淡灰色	
3	165	須恵器壺	~	15.0		底部はやや外反	回転ヘラケズリ	淡灰色	
4	165	~	~	11.4	2.5		回転ナデ	淡灰色	
5	165	須恵器壺	~	10.9		端部はシャープ	不定方向のヘラケズリ 回転ナデ 繋いナデ	淡灰色	
6	165	~	~	11.3			回転ナデ	灰色	
7	165	~	~	~	~		回転ナデ	外曲には自然輪 淡灰色	
8	165	須恵器壺	~	~	~	沈鉢形三脚穴	回転ナデ カキ目	タ	
9	165	須恵器壺	~	15.4			回転ナデ	タ	回古墳器
10	165	~	~	~	~		回転ナデ	タ	回古墳器
11	165	~	~	~	~	脚部平坦面	回転ナデ	タ	回古墳器
12	165	上製支脚	~	~	~		ユビオサエ ナデ	赤茶色	
13	165	~	~	~	~	表面風化 指痕有	表面風化 指痕有	茶褐色	
14	165	須恵器壺	~	17.6	10	2段突起 側面中央に孔 縁かく深目	地わざかに残る スリ 不定方向のナデ	外曲 暗黒灰色 内面 明灰褐色	ていねいな 作り
15	165	須恵器壺	~	10.2		縁かく口縁塗外反	回転ナデ ヘラケズリ	灰色	
16	165	須恵器壺	~	~	~		回転ナデ	外曲 淡灰褐色	
17	165	須恵器壺	~	16.1	7.1	7.2 口縁端部外反 高台 の断面は二角形に近い	回転ヘラケズリ 糸切り	内面 灰色 淡灰色	
18	165	上製高環	~	~	~		ナデ 指痕有	赤茶色	
19	165	須恵器壺	~	~	最大径 17.7		回転ナデ ケズリ	外曲 黒灰色 内面 灰色	(無色粒多 数付着)
20	165	瓦質壺	~	~	9.0		ナデ 回転ナデ ヘラ切り継ぎナデ	淡灰色	

建 物 2（第161・163・164図、写真図版155・166）

II区西側の緩斜面に位置し、主軸はほぼ東西軸にのっている。2間×2間の柱穴配置を持つ総柱建物と思われるが、南北端の柱穴はちょうど柱穴が予想される位置に右があり検出できなかった。P7・8の柱痕の位置や柱間距離から考えると、石と石の間に柱を据えていたのかもしれない。柱穴

掘り方の平面形は楕円形で、柱間距離を整えようとしたと思われる。掘り方の底面レベルは中央のP5だけ浅くなる。P5・6以外では柱痕をしており、柱間距離は梁行きが4尺、桁行きが5尺を指向したものと見られる。P6では柱痕を確認できなかったが、柱の位置に石が据えられていた。

遺物（第164図）は建物周辺で須恵器と土師器が出土した。5・6は出土地点がやや離れているが外側の特徴からセットと考えられる。5の天井部には全面にカキメが施されている。これは同じ江津市内でも、敬川以東で調査した跡から出土した7世紀前半の蓋には見られなかった特徴である。土師器の高环は、脚部が高いものと低脚の2タイプがある。

建物2計測表

規 規 格	梁 行 き				桁 行 き			
	2面 (2.38m)				2面 (2.82m)			
主 要 部 位 番 号	N-85-W							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
柱穴 (cm)	上 面 深(cm)	50×40	75×52	32×32	63×60	47×41	38×34	61×54
	底面 横幅(cm)	31.40	31.17	31.24	31.47	31.44	31.24	31.44
柱間距離(m)	P1-2	P2-3	P1-4	P2-5	P3-6	P4-7	P5-8	P4-5
	1.22	1.16	1.30	1.44	1.58	1.52	1.36	1.16
	P5-6	P7-8						
	1.40	1.36						

横路古墓 建物2周辺出土遺物（第164図）

順序	種類	出土地点	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1	166 須恵器 蓋の蓋	建物2 周辺	10.8			端部平坦面	回転ナデ	灰色	
2	166 須恵器身	〃	10.3			回転ナデ	外面 暗灰色 内面 暗茶褐色		
3	166 須恵器高环	〃	12.8	6.4	7.8	体部中程に梗	強い回転ナデ 回転ヘケズリ	灰色	
4	166 須恵器環 (蓋?)	〃	14.8?			口縁部外反、内面に段	強い回転ナデ 回転ヘケズリ	濃灰色	
5	166 須恵器环蓋	〃	10	2.5 以上		宝珠つまみ かえり長い	回転ナデ カギ目	暗青灰色	
6	166 須恵器身	〃	11.6	4.4		口縁部直立気味	回転ヘラケズリ 強めの回転ナデ	〃 赤み著しい	
7	166 土師器腹	〃	12.8			端部は厚く丸い	ヨコ方向のナデ ヘラケズリ	暗茶褐色	
8	166	〃	15.0			端部やうすい	ヘラケズリ	淡褐色	
9	166	〃	14.9			口縁は外側が肥厚する	ヘラケズリ	褐色	
10	166	〃	16.7			口縁は端部外側が肥厚	ヘラケズリ	外面 茶褐色 内面 暗茶褐色	
11	166	〃	16.8			端部は厚みがあり丸い	ヨコ方向のナデ ヘラケズリ	暗茶褐色	
12	166	〃	21.8			端部は丸い	ヘラケズリ	明る褐色	
13	166	〃	19.8			端部肥厚	ヘラケズリ ナデ 回転ナデ(暗茶褐色有)	赤紫色	内面に接合 痕
14	166	〃	21.4?				ヘラケズリ	淡褐色	
15	166 土師器底脚	〃		3.3	脚部 径9.2 脚部 径10.5		不明	褐色	古窓水
16	166	〃					内面はていねいに仕 上げている ヘラケズリ	暗褐色	
17	166 土師器高环	建物2 周辺				端部は丸い	ナデ ヘラケズリか? ナデ ヘラケズリ	赤茶色	
18	166 土師器把手	〃				把手	ナデ ヘラケズリか?	茶色	
19	166	〃				把手	ナデ ヘラケズリ	淡茶色	
20	166 土師器 (ニギアヒ器)	〃	4.4	5.1	1.4	直口、丸底	指による押圧	暗茶褐色	

柱列1～4（第162図、写真図版）

建物2の東側では、柱痕と掘り方を分離できない小規模なピットを30基前後検出した。これらの柱穴から建物を抽出することはできなかったが、建物2から東に伸びる柱列を4通り想定した。柱列1・2はほぼ等間隔で建物2に向かっていることから、建物2につながる柵や堀等の可能性も考えられる。また、柱列の斜面下側には土器溜まりを検出した窪みが東西に伸びていることから、これに関連するものとも考えられる。いずれにせよ、段状構造1とその東側で検出した柱穴群に関係

が似ている点は注意される。

これらの柱列より斜面下方では遺構を検出しておらず、遺物も土器溜まりより南ではほとんど出土していない。調査区の南に設定したトレンチからは遺構・遺物を検出できなかつたので、古墳時代後期集落の端に位置する可能性もある。

土器溜まり（第163図、写真図版167・168）

建物2東側の上器溜まりでは、壺・高坏・甑・罐等の土師器が大量に出土した。特に上師器の高坏はバリエーションが豊富で、大きさや形態はそれぞれ異なる。移動式竈は西隣の浜田市では現在のところ出土しておらず、石見沿岸部では分布圏の最も西になると思われる。土製支脚はT区の斜面で出土したものとよく似た形態をしている。これらの土器は須恵器の時期や出土状況から、調査区内で検出した6世紀後半から7世紀前半の遺構から廃棄されたものと考えられる。

II区出土遺物（第166図、写真図版167・168）

II区では建物2や土器溜まりから出土した古墳時代後期の遺物以外に、他の時代の遺物も僅かではあるが出土している。9・10は弥生土器で、石見V-1様式と思われる。20はかなり摩滅しているので斜面上方からの流れ込んだ遺物と考えられる。8は底部のみだが灰白色を呈しており、平安時代終わり頃の土師質土器の可能性がある。調査区内でこれらの時代の遺構は検出していないが、敬川対岸の占八幡付近遺跡では同時期の遺構・遺物を丘陵上で多数検出している。占八幡付近遺跡の状況を参考にすると、おそらく調査区を設定しなかった山の頂上付近や斜面、谷部に古墳時代以外の時期の遺構が存在すると推測される。

横路古墓 土器溜まり出土遺物 (第165図)

測定項目	名	形態	大きさ	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	測 定	色 調	備考
1 167	須恵器 溜まり	口縁部を下に突出させた形を1条割りせる	十数	17.2				口縁部を下に突出させた形を1条割りせる	回転ナデ カキメ	灰色	
2 167	須恵器身	口縁部はあまり屈曲せず内側に突起する	10.4	3.6	6.2	13.1		口縁部はあまり屈曲せず内側に突起する	タキナデ(後カキメ)施す 内側に突起する 端部は丸い 受部は先細りし、端部はシャープ	灰色	
3 167	須恵器高环	口縁部は先細りするわざかに外反する	"					口縁部は先細りするわざかに外反する	強い回転ナデ(上上げ?) 回転ヘラケズリ	灰色	
4 167	王絹器高环 (林?)	"	20.8					口縁部は先細りするわざかに外反する	軽いヘラケズリの後 端口円に調整	赤茶褐色	
5 167	土師器高环	"								茶褐色	
6	"	"								茶褐色	
7 167	"	"	8	8.7	調節 端付 8 前後			口縁部は内側に屈曲させる 端部には面がある	ナデ 強い押おさえか?	赤茶色	手づくね
8 167	土師器蓋	"	19.9					端部は先細りするが丸い	ヨコ方向のナデ ナデ タチ方向のヘラケズリ	暗茶褐色	
9 167	"	"	21.8					口縁は外にカーブ 端部は丸くて厚い	ヨコナデ ヘラケズリ?	暗黒褐色	
10 167	"	"	15.2					口縁端部は角ばってい て面がある	ヨコ方向のナデ ハケツリ施した後ナデ ヘラケズリ	暗茶褐色	
11 167	"	"	15.7					口縁は直立みで余り 開かない	不明	外面茶褐色	
12 167	"	"	22.4					端部はやや角ばる	内面はヘラケズリ	内面暗茶褐色	
13 167	"	"	16.4					ゆるい模様がある	ヨコナデ 内面はヘラケズリ	外面淡茶褐色	
14 167	"	"	17.2					口縁は端部の外方に屈 曲させる	ヨコナデ 内面はヘラケズリ	内面暗茶褐色	
15 167	"	"	16.2					端部は丸い	ハケツリ	淡茶褐色	
16 167	"	"	19.1					外側に屈曲する 口縁端部は丸くつくる	ヨコ方向のナデ ヘラケズリ 指觸口裏		
17 167	土師器蓋	"	15					端部は厚があり丸い	ヨコ方向のナデ ハケツリ	赤茶色	

横路古墓 土器溜まり・Ⅱ区出土遺物 (第166図)

測定項目	名	形態	大きさ	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	形態・文様の特徴	測 定	色 調	備考
1 167	移動式蓋 溜まり	全体に指觸してある	"	"	"	13.2		外ハケツリ 内ヘラケズリ 指觸口裏		赤茶褐色	
2 168	土師器支脚	"								暗茶褐色	
3 168	"	"								赤茶色	
4 168	"	"								カ	
5 168	土師器把手	把手部分は先端にむけて細くなっている	"					ヨコ方向のヘラケズリ		外面明茶褐色	
6 168	"	"								内面黑色	
7 168	土師器蓋?	"								外表面茶褐色	
8 168	土師器環	"	5.8							内面茶褐色	
9 167	弥生壺	端部は丸くてやや上方に突出させる、かなり肩減しているが斜開口を3本留す	"	22.3				低い段がつく	ヘラケズリ?	茶褐色	
10 168	弥生器底	"		10.4					回転ナデ	灰白色	
11 168	須恵器溜まり	端部はシャープにつくる	"	11.0	3.9			端部はシャープにつくる	民は目輪系切りと思われるがマツリしている ナナメ方向に突出す	暗茶褐色	
12 168	"	"								外輪系切り	
13 168	土師器高环	ゆるい模様がある	"					ゆるい模様がある	回転ナデ	内面青灰色	
14 168	土師器把丁	"							ナナメ方向	朱色	
15 168	土師器底	把手をつけたために内側にぶらむる	"					把手をつけたために内側にぶらむる	ナナメ	粉褐色	手づくね
16 168	土師器壺	端部は丸い	"	16.0				端部は丸い	ナデ ヘラケズリ	赤茶色	
17 168	土師器甌	"	22.3						ヨコ方向のナデ ヘラケズリ	茶褐色	
18 168	土師器高环	"								茶褐色	
19 168	土師器 土壺?	穿孔時の「かえり」が見られる	4	3.7	最大径 3.7			端部は丸い	横方向のヘラ調整	赤茶色	
20 168	須恵器身	端部はシャープに細くなる	"	18	4.7	高台径 10.8		端部はシャープに細くなる	ナデ	外表面灰褐色 内面明茶褐色	

第2節 近世の遺構・遺物

近世加工段（第167・168・176図、写真図版151～153・157・158）

調査前より東西40m以上、南北10mの広さの平坦地を確認できた（写真図版157上）。段の北西には遺跡名の由来である古墓群があり、調査区内でも近世墓やそれに関わりのある建物跡が検出されると予想された。表土を取り除くと、山側の土砂が崩れている部分以外はすぐに床面を検出できた。検出した床面は南側の幅3～5mが盛土によって造られており、盛土の高さは最大で2m近くなる。盛土の最下層には近世以前の遺物包含層である黒褐色土が堆積しており、一部は床面として削平され柱穴を掘り込まれていた。その上に暗褐色系と橙褐色系の土を旧地形に合わせて斜めに盛っていき、最後に床面を水平に整えている。床面で検出した柱穴は西側に集中しており、建物はこの位置に限定して数回の建て替えを行ったと考えられる。近世加工段の東側では上塙墓を5基検出した。時期を判断できる遺物が出土していないので、建物群との正確な前後関係は不明である。しかし、建物と同時期に造成した平坦地に造られ建物から意識的に距離をとっていることから、建物に先行することはないが建物が存在した時期には造られ始めていると推測される。建物から土壙墓群までは約10mの距離があり、この間では遺構を検出していない。建物の南側にも幅4m前後の遺構空白地がある。建物に伴う空き地として利用された部分であろう。段のほぼ中央の南端には、麓から近世加工段に登るための道がとり付けられている。幅約2mを測るもので、全て盛土によって造られていた。

建物3～5（第169～171図）

近世加工段の床面では50以上の柱穴を確認しているので、何回か建て替えが行われたものと判断した。段の軸に合わせて建物3～5を抽出したが、建物は平面が長方形になることを前提に組んだもので近世建物の複雑な柱穴配置は認識しきれなかった。柱穴は主に地山部分に掘り込まれていた。柱穴掘り方に1m前後の規模のものがあるが、柱白体は掘り方底面の窪みから20cm前後と思われる。第168図で柱穴を検出した位置を確認すると、建物を想定した部分の西側は東側に比べて柱穴の希薄な部分がある。建物の範囲では貼り床を確認したが、西側には灰褐色の非常に硬い上が貼られていた。このような状況から、建物は東側に床が設けられ、西側は上間になっていたと考えられる。建物の北西角では径1m以上の土壙を検出した。土壙は地山とよく似た土で一気に埋められており、桶などを据えた可能性も考えられたが痕跡は確認できなかった。土壙の西側でも柱穴を検出しているので、上屋の下に入っていたと考えられる。

建物3（第169図）

近世加工段で検出した建物の中では、最大の規模である。2間×3間の柱穴配置を想定したが、東側の梁行きの中間柱は検出できなかった。柱穴掘り方は平面円形または不整梢円形を呈し、規模は検出面で1mを越えるものもある。P1・3・4は二段掘りにして土屋の高さを調整している。柱間距離は梁行きが5.5尺と8.5尺を指向したと思われるが、桁行きは不揃いである。また、P8の上面では炭と焼土の面を検出した。柱穴の抜き取り等に関連する祭祀を行った痕跡と推測される。

建物4（第170図）

建物3を南東にずらした位置に、2間×4間の柱穴配置の建物を想定した。桁行き南側のP2・3間では柱穴を検出できなかった。柱穴掘り方は、平面円形または不整梢円形を呈している。柱間距

離は、梁行きの東側が6.5尺と9.5尺、西側が6尺と9尺を指向していると思われる。桁行きは不揃いであるが、概ね6・7・7.5・11.5・13・14尺を指向したと思われる。建物3同様、P6検出時に柱穴祭祀跡を確認した。また、建物の北側と東側ではこの建物に関連すると思われる浅い溝も検出した。

建物5(第171図)

建物5は、近世加工段の建物の中では一番西側で検出した。北西と南西の角の柱穴は、巨木が存在したために掘削できず、確認することができなかつた。2間×4間の柱穴配置を持つと想定したが、西側梁行きは3間であった可能性が高い。柱穴掘り方は、平面椭円形を呈し、全ての柱穴で柱間距離や上屋の高さを整えるための工夫が見られた。柱間距離は、東側の梁行が6.5尺、12尺を、桁行きは概ね11尺または10尺を指向したものと思われる。P5では検出面で祭祀跡を確認した。また、P7西側には38×33cmの範囲に炭が堆積していた。炭の面は床面に堆積した茶褐色上の上から約20cm掘り込まれており、検出面には土師質土器の皿(第172図12)が置かれ、小石が散乱していた。炭の面の下で焼土面や柱穴は検出していないが、何らかの祭祀を行った跡と推測される。

建物3計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(5.61m)				3間(11.35m)			
主 軸	N-68°-W							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	116×72	68×(68)	80×70	76×46	95×67	73×50	64×54 (152)×127
	底面標高(m)	41.68	41.75	41.61	42.02	41.72	41.84	42.00 41.88
柱 穴 分 (cm)	番 号	P9	P10	P11				
	上 面 深 (cm)	82×58	48×37	48×44				
柱間距離(m)	底面標高(m)	41.74	41.79	41.68				
		P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8 P8-9
柱間距離(m)		4.15	2.86	4.34	4.60	3.38	4.12	3.77 2.58
	P9-10							1.63

建物4計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(4.88m)				4間(10.06m)			
主 軸	N-67°-W							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	62×60	(87)×(77)	(68)×46	34×26	42×30	89×59	66×44 100×46
	底面標高(m)	41.64	41.68	41.88	41.74	42.14	41.92	41.87 41.89
柱 穴 分 (cm)	番 号	P9	P10					
	上 面 深 (cm)	27×26	50×45					
柱間距離(m)	底面標高(m)	41.74	41.74					
		P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8 P8-9
柱間距離(m)		4.24	3.50	2.08	2.88	2.00	2.30	1.88 1.88
	P9-10	P10-11	P11-2					4.00 1.78 2.76

建物5計測表

規 模	梁 行 き				桁 行 き			
	2間(5.61m)				3間(9.92m以上)			
主 軸	N-67°-W							
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8 P9
柱穴 (cm)	上 面 深 (cm)	50×48	(81)×(81)	71×52	88×66	78×57	67×52	72×56 52×30 50×38
	底面標高(m)	41.23	41.32	41.50	41.78	41.52	41.53	41.70 42.00 41.80
柱間距離(m)		P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	P7-8 P8-9
		3.05	3.38	3.65	1.96	3.21	3.35	1.16 /

近世加工段出土遺物(第172図、写真図版168・169)

加工段の床面では陶磁器類と金銀製品が僅かに出土している。出土した陶磁器類は小片が多く、時期は17~18世紀代と考えられる。

横路古墓 近世加工段出土遺物 (第172図)

測定項目	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形状・文様の特徴	調査	整備	色調	備考
1	168 銀器鏡	直径17.8	10	5.6	高台鏡 赤付(青)	高台内面に砂	白	肥前系	
2	168 湯船染付碗	~	12.5	~	口縁に染付(青)				
3	168 陶器鉢?	~	18.8	最大径 19.4			明青灰色		
4	168 陶器碗	~		4.5	高台径 高台に染付(黒)		灰白色	肥前系	
5	168 陶器皿	~		4.0		胎土口	淡緑灰色	唐津系	
6	168 ~	~			折線形 鉄軸の染付		緑灰色		
7	168 陶器小瓶	~		6.4	最大径 染付(青、文字か?)		灰白色		
8	168 陶器瓶	~	32.2	7.5 以上	口縁を折り返して玉縁状 にする 14条1単位の描目		暗茶褐色	鷺釉 地元産か?	
9	168 士師質皿	~	6.5	1.8	3.5		明青褐色		
10	168 士師質 灯皿皿	~		1.1 以上	4.6		淡緑褐色		
11	168 ~	~	8.4	2.0	4.8				
12	168 ~	~	8.4	1.6	5		黄褐色		
13	169 上部質碗	~	~	7.5	4.6	5.8	淡茶褐色		
14	169 鉄器刀子	~	残存長 10.7	平均幅 5mm					
15	169 透型	~							
16	169 鉄器刀子	~						折り曲げて 施錆したもの	
17	169 燭管	~							
18	169 ~	~							
19	169 ~	~							
20	169 ~	~							
21	169 古鏡	~			寛永通鑑(新喜水)				

土壙墓群 (第173・174図、写真図版160・161)

近世加工段の東端で検出した。調査区の周辺には墓標と思われる集石が点在しており、近世加工段にも上塙墓が存在すると予想された。しかし、加工段の床面には周辺で見られる様な集石は見当たらず、土壙墓を検出した位置には拳大の河原石が無数に積み上げられていた。トレチアで土層を確認したところ、地山ブロックを含んだ層が幾重にも積み重なって堆積し、その下から標石と墓壙断面が検出された。この平坦地の造られた地点は斜面が急で何處かにわたって崩落し、土壙墓の上に堆積したようである。標石の上に積み上げられた石は、崖が崩落し土砂が堆積した後に墓の位置を示す為に置いたものではないかとも考えられる。川原石と堆積した土砂を取り除くと、標石を4ヶ所確認できた。標石は一部土砂崩れのためか、現位置を留めていないものもあったが、すべて方形に置かれていたようである。その後墓壙の確認を行ったが、プランを検出する事が困難であったため、標石を残して地山面まで掘り下げて確認した。3基は標石のぼば真下に墓壙を確認できたが、2基は標石のないところで検出した。土砂崩れの際に標石も流された可能性も考えられる。また、標石と思われた1ヶ所の集石の下からは墓壙を確認する事ができなかった。最終的に5基の上塙墓を確認した。検出した土壙墓の中から時期の判断できる遺物は出土していないが、西側で検出した建物と同一の床面に造られていることから、18世紀後半以降の土壙墓と考えられる。

土壙墓1 (第174図、写真図版163)

5基の土壙墓の中で一番西側で検出した。墓壙上面で標石を確認できなかった。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦で平面形は長方形を呈している。主軸は東西にとられており、検出した上塙の中でも一番整った形の墓壙である。遺物は出土していない。

土壙墓2 (第175図)

土壙墓1の東で、上塙墓3・4と隣接して検出した。墓壙上面には30~60cmの石が4個置かれて

いた。墓壙の検出が特に難しく、基底部のみ検できた。標石の位置から考えて本来の深さは50cm以上はあったと思われる。墓壙断面は逆台形を呈し、床面は中央が少し窪み不整長方形を呈している。遺物は出土していない。

土壙墓3（第175図、写真図版163）

土壙墓2・4の中間で検出した。土壙墓2とは約20cm、土壙墓4とは約10cmしか離れていない。墓壙上面に標石は無かった。墓壙断面は逆台形を呈し、南側壁面はほぼ垂直に掘られている。床面は平面梢円形を呈し、壁際が約20cmにわたって一段下がっている。遺物は出土していない。

土壙墓4（第175図、写真図版162・163）

土壙墓群のほぼ中央、河原石の集石の真下にあたる位置で検出した。墓壙上面には、10~45cmの石が19個墓壙に沿うように方形に組まれていた。墓壙断面は逆台形を呈し、北側壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦で平面は長方形を呈している。土壙墓1同様主軸を東西にとっている。遺物は出土していない。

土壙墓5（第176図、写真図版162）

土壙墓群の西端で検出した。墓壙上面には、少し北側にずれたところに9個の石が置かれていた。また、北西に20cm程ずれたところには11個の石がほぼ方形に置かれていたが、土壙墓5に伴うかははっきりしない。墓壙は西側断面は逆台形をしているがその他はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は北西角に向かって高くなり、平面は台形を呈している。

床面より土師質土器の碗と刀子（第172図13・14）が出土した。

焼土壙（第174図）

土壙墓1の北側で検出した。平面形は円形を呈し、規模は検出面で64×60cmを測る。土壙内には炭や焼土塊を多く含む茶褐色土が堆積し、その周りには厚さ4~6cmの焼土面が検出された。焼土面の下には炭を含む暗茶褐色土が薄く堆積していた。土壙の形態は小炭窯に似ているが、土壙墓と同じ面で検出したので性格については不明と言わざるを得ない。

横路古墓土壙墓一覧

報告 番号	上 面 形	平 面 形	長 軸(cm)	短 軸(cm)	深 さ(cm)	主 軸	出 土 遺 物	性 質	人骨 残存
1	長 方 形	長 方 形	138.0	68.5	42.0	N-90°-W			
	長 方 形	長 方 形	129.0	55.0					
2	長 方 形	長 方 形	90.5	67.0	27.0	N-81°-E			
	長 方 形	長 方 形	74.0	26.0					
3	円 形	円 形	74.0	73.0	56.0	(N-83°-W)			
	椭 円 形	椭 円 形	55.0	51.0					
4	長 方 形	長 方 形	132.0	100.0	56.0	(N-76°-E)			
	合 形	合 形	115.0	77.0					
5	長 方 形	長 方 形	117.0	78.0	40.0	N-88°-W	刀子(1)、土師器、碗		
	長 方 形	長 方 形	85.0	70.0					

近世加工段造成土内出土遺物（第177~181図、写真図版169~172）

建物を検出した加工段西側の造成土下層からは、17世紀から18世紀までの陶磁器類と金属器が出土した。建物を建てる際に不燃物を一括して廻棄し、造成土内に埋め込んだものと推測される。遺物の中では第177図の唐津系陶器が最も時期が古く、胎土目の皿も2点出土している。最も多く出土したのは18世紀代の碗・皿類である。特に肥前系の碗の出土数が多く、調査区内で出土した陶磁

器の50%近くを占めている。また、碗・皿類は最大5個体まで同じものが出土するので、セットで購入したものと思われる。ただ、碗類は染め付けのパターンがやや不揃いで、中には焼成不良の為に釉が透明に成っていない磁器も含まれていた。このほか片口や鉢類も出土しているが、形態や釉の特徴から地元産の可能性がある。大型の甕は唐津系の甕が2個体出土した。

造成土内では19世紀に入る陶磁器類は出土しなかった。このため出土した遺物にはやや時期幅があるが、加工段を造って埴物を建てた時期はおよそ18世紀後半頃と考えられる。

横路古墓 陶磁器分類表

器種		個体数	計	比率 (%)
碗	唐津系	2	114	50%
	肥前系磁器	34		
	肥前系陶胎染付	41		
	肥前系陶器(染付なし)	23		
	肥前系陶器(透明釉のもの)	14		
皿	唐津系	19	47	21%
	肥前系磁器	11		
	肥前系陶器(染付あり)	5		
	肥前系陶器(染付なし)	10		
	地元産	2		
鉢	擂鉢	4	14	6%
	こね鉢	1		
	地元産	5		
	その他	4		
片口	地元産?	3	3	1%
甕	唐津系	2	3	1%
	瓦質	1		
その他の他	灯明眼	8	22	10%
	灯明受皿	1		
	燈塔	5		
	仏花瓶	1		
	壺(磁器)	1		
	壺(陶器)	1		
	瓶	1		
	猪口	1		
	火鉢(瓦質)	1		
	香炉	1		
不 合	小瓶(磁器)	1	26	11%
	不明	26		
	計	229	229	

横路古墓 近世加工段造成土出土遺物①(第177図)

番号	名前	器種	出土地点	H(cm)	W(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
1 169	陶器皿	南窓皿	近世加工段造成工	11.8			最大径 口縁端部を内面に折り曲げる		淡緑灰色	唐津系
2 169	陶器皿	南窓皿	〃	11.8	3.3	5.5	高台盤		暗緑色	〃
3 169	陶器皿	南窓皿	〃	12.6	4.1	5.5	4.1 高台盤 口縁端部を内面に折り曲げる	船土日	黄灰色	〃
4 169	陶器皿	南窓皿	〃	〃	3.8	3.8	3.8 高台盤 4.2 付ける 休部には段がつく	砂日	暗緑色	〃
5 169	陶器皿	南窓皿	〃	4.6				〃	黄灰褐色(見込み)	〃
6 169	陶器皿	南窓皿	〃	5.2				〃	淡黄緑色	〃
7 169	陶器皿	南窓皿	〃	5.2				船土日	黄灰色	〃
8 169	陶器皿	南窓皿	〃	29.6					暗青灰色	〃
9 169	陶器皿	擂鉢	〃	10.7					茶褐色	〃

横路古墓 近世加工段造成土出土遺物② (第178図)

編號	高さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
1	170 磁器輪	近世加工段 造成土	8.9 5.0 4.0 高台径 スタンプ(青)			褐色	焼成不良の 為光沢無し 肥前系
2	170	"	8.9 5.2 高台径 染付(青)			灰白色	
3	170	"	9.8 5.0 4.2 染付(青)	高台内面に砂粒	灰白色		
4	170	"	7.6 4.5 3.5 染付(青)		白色		
5	170	"	8.4 5.2 3.3 —"重ね口				
6	170	"	10.3 9.9 4.0 染付(青) 底部に記号		灰白色		
7	170	"	11.0 5.3 4.9 染付(青)	高台接地面に砂粒	白色		同様 の碗が別に 2個体ある 肥前系
8	170	"	10.0 5.8 4.0 染付(緑青) 底面に記号		灰色		
9	170	"	5.4 染付(緑青) 底面に記号(文字)				
10	170	"	10.0 5.8 4.0 染付(緑青) 底面に記号		淡灰褐色		同様 の碗が別に 1個体ある 肥前系
11	170	"	5.4 染付(青) 見込みに記号(文字?)		灰白色		
12	170	"	10.4 染付(青) 外面は二重 綻口 内面は一重綻口				
13	170	"	10.9 7.2 4.8 染付(青)	高台接地面に砂粒が 多く付着	淡青白色		
14	170 磁器皿	"	4.6 染付(青)	見込み、高台に砂粒 が多く付着	白		
15	170 磁器輪	"	11.2 6.7 4.2 染付(青) 見込みにスタンプ		青磁釉		
16	170 磁器皿	"	13.0 3.6 4.6 染付(青)	内面に斜交線の染付	白		肥前 酒井 見 同様の 皿が別に4 個体ある
17	白磁 端反酒杯	7.7			白		
18	170	"	7.7		白		
19	170 陶胎染付 碗	9.6	6.2 4.3 高台径 染付(青)		明青灰色		肥前系
20	170	"	10.7 6.65 5.2 高台径 染付(緑)	見込みに砂粒が付着	綠灰色		
21	170	"	10.8 7.55 4.4 高台径 染付(青)		灰色		
22	170	"	10.0 6.3 4.2 高台径 染付(緑)	高台接部分には砂粒 が多く付着	暗青灰色		
23	170	"	5.2 染付(緑)		綠灰色		
24	170	"	10.7 7.5 4.7 高台径 染付(青) 人物か?		明綠灰色		
25	170	"	4.4 高台径 染付(青)	高台接地面に砂粒が 多く付着	白		
26	170	"	(10.6) 7.1 4.7 高台径 染付(黒茶)		灰色		焼成不良

横路古墓 近世加工段造成土出土遺物③ (第179図)

番号	器種	出土地点	口径(cm)	腰幅(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 裏	備考
1 171	陶壺	近世加工段 造土	9.8	6.2	4.8	外面の4ヶ所に白色の斑点 前面には白色の帯を塗す		茶色	肥前 現川
2 171	"	"	10.8	7.25	5			明黄灰色	
3 171	"	"	11.3	7.1	4.8			タ	
4 171	"	"	9.9	7.3	4.8			タ	
5 171	"	"	3.9	3.8		底部近くに6条の平行浅縦		タ	
6 171	陶壺裏	"	2.6	高台	染付(茶色)			タ	
		"	以上	4.1					
7 171	"	"	(12)	(3.3)				淡褐色	
8 171	"	"	高台	2.6				外面 淡灰色 内面 暗緑色	
9 171	"	"	11.7	3.4	高台	染付(茶色)		白	
10 171	"	"	12.0	3.5	高台	4.5		外 面 明経灰褐色 内 面 淡緑褐色	
11 171	土師質圓口	"	9.8	2.3	4.8		回転系切り	淡褐色	
12 171	土師質灯明面	"	8.3	1.9	4			淡紫色	
13 171	"	"	6.9	1.7	4.1			暗黄褐色	
14 171	"	"	7	1.6	4.1			明褐色	
15 171	陶壺片口	"	23.4	12.8	高台	8.5 かぎりをつける	船土目	淡緑灰色	
16 171	"	"	22.7	12.4	高台	10.4		白色	焼成不の 為釉の発 色が無い
17 171	"	"	22	13.5	高台	9.6 14.0		灰褐色	焼成不の 為釉の発 色が無い
18 171	壺唇底	"						淡素灰色	

横路古墓 近世加工段造成土出土遺物④ (第180図)

番号	器種	出土地点	口径(cm)	腰幅(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 裏	備考
1 172	陶壺	花瓶近世加工段 造土	8.4			左右に「耳」がつく		明黄褐色	
2 172	陶壺	"	15.4					淡褐色	
3 172	壺底	"	32.4			口縁上面に深さ2cmのナデ 穴あり		明素褐色	
4 172	壺底	"	32.4					黄灰褐色	
5 172	陶壺構体	"		高台	11.2		船土目	茶色	鉛釉 地元産?
6 172	"	"	27.6					タ	"
7 172	"	"	32.4					タ	"
8 172	陶壺	"	30.2			口縁を折り返して肥厚させる 12条1単位の縦目		淡褐色	
						口縁を折り返して肥厚させる 12条1単位の縦目		タ	
						口縁を上方に拡張し2 条の凹線を残させる		タ	

横路古墓 近世加工段造成土出土遺物⑤ (第181図)

番号	器種	出土地点	口径(cm)	腰幅(cm)	底径(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 裏	備考
1 172	陶壺	近世加工段 造土	36.4			口縁は断面V字状 肩に2条の指頭+旗文帶	回転ナデ タタキ	暗素褐色	岸洋系 接点の無い 底部有り
2 172	"				20.8	平底	ナデ	淡褐色	岸洋系 接点の無い 底部有り
3 172	瓦質壺?			最大径	53.5		ハケメ ナデ	外 面 黒白色 内 面 黑灰色	焼成不良

第3節 小 結

横路古墓の発掘調査は近世墓を対象として開始したが、それ以外に古墳時代後期の遺構・遺物や近世の建物も検出された。以下、横路古墓で検出した2つの時期の資料について、調査区周辺の状況も踏まえてまとめてみたい。

古墳時代後期の資料

検出した遺構は比較的残りが悪く、建物と考えられるのは2棟だけだった。建物1は床面や周辺から土師器甕や瓶、土製文脚などが出土しているので、物置等のスペースでは無く建物跡と判断した。残存する遺構の形態から小型の竪穴住居の可能性が考えられる。敬川河口において住居の中心が2×3間以上の掘立柱建物に切り替わるのはこれより後の時代と考えられる。建物2は7世紀初め頃の倉庫と考えられるが、検出した柱痕が倉庫にしてはやや細く、周辺で土師器高杯やミニチュア上器が出土するなど性格にはやや不明な点がある。

古墳時代後期の出土遺物はほとんどが土師器の煮炊き具で、須恵器はごく僅かしか出土しなかった。これが敬川地域の一般集落の特徴であるとすると、古八幡付近遺跡で古墳時代後期の須恵器の出土量が少ない点も説明がつく。また、宝崎商店裏遺跡をトレント調査のかなり早い段階で後期古墳と判断できたのは、このような横路古墓の須恵器の出土比率に対し、細片とはいえ須恵器しか出土しなかったためである。このほか土師器高杯がややまとまって出土した点も注目される。古八幡付近遺跡3区と平成8年度調査区では古墳時代中期の土師器高杯が大量に出土しており、敬川河口の古墳時代集落ではこの頃まで多数の土師器高杯が使われていたようである。

横路古墓で検出した古墳時代後期の遺構は、非常に見通しの悪い谷の急斜面で検出した（写真図版151上）。このような立地に造られた遺構群を一般的な集落と理解して良いものか、古墳時代後期の集落調査例が少ないため判断に迷うところである。調査中から、谷の中という立地や湧水点に近いこと、手探ねの高杯が出土し調査区内外に岩が多数露出している点等を基に、祭祀に関連する遺構群の可能性も考えられた。しかし、周囲の見通しは非常に悪いものの南向き斜面なので日当たりに問題は無く、湧水は古八幡付近遺跡で見たように通常の集落にあっても重要な要素である。このため横路古墓の様な立地の集落が、平野の少ない石見地方にあっては普遍的に見られるものなのか、それとも祭祀などに関連した特殊な性格のものなのかは今後の調査例の増加を待って判断したい。

近世の資料

I区では掘立柱建物と土壙墓を調査したが、同じ様な平坦地は調査区に隣接して2ヶ所存在するほか、山の南側斜面の広い範囲で確認することができる。II区は調査前に棚田になっており、それより下の谷底は水田にされていた。谷部を耕地として利用する為に建物・墓・道等の施設は山の斜面に造られたと推測される。調査区外の平坦地もほぼ同様の性格のものであろう。また、出土した陶磁器類に中世のものや高仙なものが含まれていないので、I区で検出した近世の遺構は18世紀後半頃にこの斜面に移ってきた農家の建物とその住人達の墓と考えられる。

近世加工段の造成上内を中心に多数の陶磁器類が出土し、特に以下の点が注目される。まず、出土した磁器碗には表面に気泡が多数あるものや、焼成不良の為ツヤの無い白色を呈しているものも含まれている点である。これらは肥前系の磁器で、地元で生産されたものではない。このような不良製品が产地を遠く離れた石見の農家で使用されていた事実は、当時の焼き物の販売状況や農家の

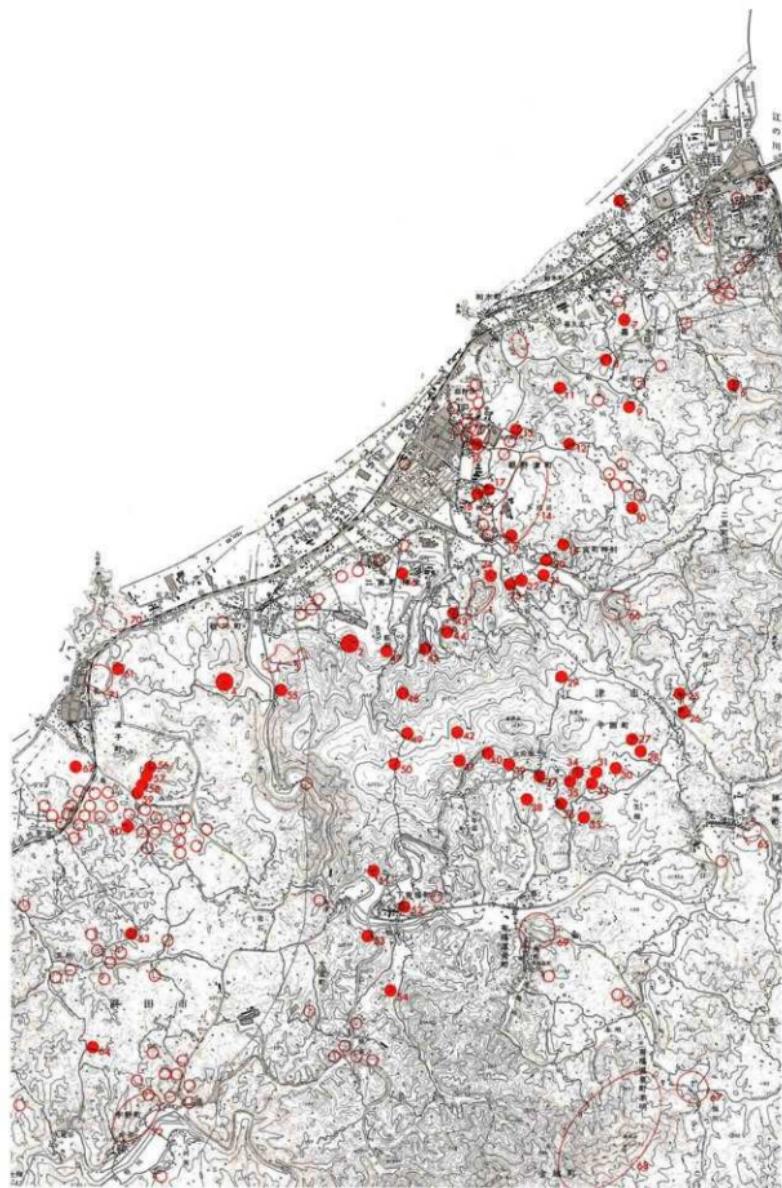
経済力を考える上で好資料になると思われる。

最も注目されるのは、調査区内で出土した擂鉢が地元産かもしれない点である。江津市西部の集落遺跡から出土する擂鉢は、中世後半になると備前焼の擂鉢が大半を占め、古八幡付近遺跡でも備前焼Ⅵ期の資料が多数出土している。ところが近世になると備前焼の資料が見られなくなり、変わって横路古墓で出土したような擂鉢が大勢を占めるようになる。このタイプの擂鉢は口縁の形態は唐津系のものに似ているが、径が小さく高さのある削り出し高台が作られている。高台と内面底部には胎十目の跡が残る。胎土は荒く黄褐色を呈し、焼成はやや悪い。外外面とともに茶褐色の錆軸をかけているが、薄くムラが目立つ。時期は造成土の下から出土したので、18世紀後半以前に生産されたものであることは間違いない。遺物整理中にこの擂鉢の産地を探すことはできなかったが、江戸時代の終わり頃から石見地方の広範囲で大規模に生産される「石見焼」の擂鉢の中に、これとよく似た擂鉢が存在することに気が付いた。窯跡出土資料では、益田市の北ヶ廻遺跡の出土品に見られるタイプの擂鉢である。表面の釉が来待釉であることを除けば、口縁端部や高台の形態はよく似ている。北ヶ廻遺跡は幕末から明治初め頃に操業していた窯跡で、生産品は横路古墓の遺物より新しい時期のものである。石見焼がいつ頃からつくられ始めたかについては様々な見解があり、18世紀には既に錆軸を使用した石見焼が焼かれていたという意見もある。これまでの発掘調査で出土した石見焼を見る限り、来待釉を使用した典型的な石見焼は19世紀以降に製作されたようである。しかし、横路古墓で出土した擂鉢が、北ヶ廻遺跡で出土したタイプの擂鉢と同じ系譜の時期の古いものであれば地元産の可能性があり、石見焼の祖形は18世紀に既に焼かれていたことになる。なお、巻頭写真図版3には横路古墓で出土した擂鉢と、北ヶ廻遺跡、室崎商店裏遺跡、長東坊師窯跡で出土した擂鉢を並べてみた。石見焼の擂鉢は時期が新しくなるにつれ、口縁が玉縁状に変化し、高台は径が大きく高さが低くなり、釉は鮮やかな赤茶褐色を呈するようになると考えている。今後他の資料と比較しながらさらに検討したい。

調査区内では石見焼の代表的な器種である「ハンド」と呼ばれる大甕は出土しておらず、陶器甕は唐津系のものだった。このように他の器種も含めて考えると、石見焼が大規模に生産され始めた時期についてはなお不明な点が多い。石見焼成立の過程を解明するためには、今後は窯跡の調査を行ってから、横路古墓のような時期を判断できる近世集落資料の検討も必要と思われる。

以上、横路古墓の調査によって得た資料について簡単にまとめてみた。古墳時代後期は古八幡付近遺跡で集落の状況を掴めなかった時代であり、近世は古八幡付近遺跡では調査期間の関係で、調査や遺物の掲載を省略した時代である。このため、敬川下流域の歴史を考える上で、横路古墓の資料は古八幡付近遺跡の成果を補うものといえる。

図版



第1図 神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓の位置と周辺の遺跡 (S=1/50000)

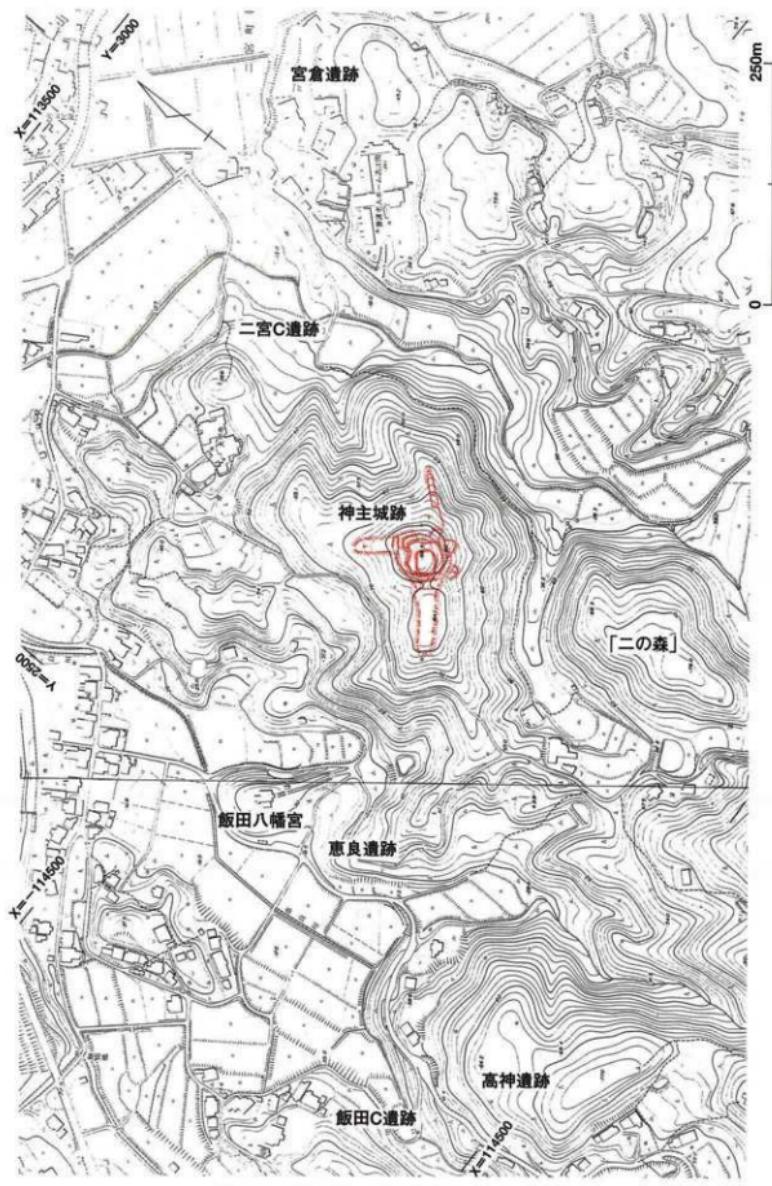
周辺の遺跡一覧

番号	通 路 名	種 別	所 在 地	類 型	備 考
1	神 宗 道	城 路	江津市二宮町神生	窓、腰郭、土堤、掘切 七重塁第16、小松室1、溝3、内道	
2	宝 岛 道	裏 道	江津市敷川町	横穴式石室、焼上塙1	
3	古 八 種 付 近 道	通	江津市敷川町	横穴式居4、水田跡、弥生塚地、古墳2基、横穴式石室 分廻郭、埴輪40、溝10、土壠10、石器、鐵文土器、弥生土器 理塗、埴輪、上塙器、ミニチュア上塙、上耕堀、軒用鐵 統、削上塙器、木製容器、木製農耕具、陶手盆、白磁碗 同安宗系青盤、他瓦器系青盤	
4	横 路 古 墓	古 墓	江津市敷川町 近 由 世 落 路	掘立柱建物5 上塙器5	
5	久 保 川 渔 舟	散 布 地	江津市久志町久保川	須恵器	
6	浜 田 薩 古 墓	古 墓	江津市浜田町		
7	羅 久 志 道	通	江津市羅久志町	上塙1	
8	久 木 英 審	露 路	江津市羅久志町	地下式竪井、掘立柱建物1、須恵器、土師器、鏡、略尾、 瓦、(下府塙寺と同文)	
9	新 屋 道	散 布 地	江津市新屋町		
10	岡 田 尾 道	散 布 地	江津市岡田町羽代	須恵器	
11	龜 伏 山 道	散 布 地	江津市新屋町	土器1、縄文土器	
12	櫛 棘 伊 达 道	散 布 地	江津市都野津町山ノ内	須恵器、土師器、土師罐	
13	二 又 手 古 墓	古 墓	江津市都野津町六反山	埴形不明	
14	半 田 洋 道	散 布 地	江津市都野津町半田洋	石斧、弥生上塙、須恵器、上耕堀他	
15	大 ナ 神 古 墓	古 墓	江津市二宮町神村	円墳2基、横穴式石室、上塙、骨丘	消滅
16	行 者 山 古 墓	古 墓	江津市都野津町行者山	箱式石棺、劍刀	
17	清 水 道	散 布 地	江津市都野津町清水	須恵器、鐵骨器	
18	稻 莖 山 泉	散 布 地	江津市都野津町稻苅山	弥生上器、寶相	
19	半 田 沢 西 道	散 布 地	江津市二宮町神生	掘立柱建物2、溝10、上塙1、石種み、弥生土器、十脚器、 須恵器、奈良三彩、石製有孔瓦盤、土製罐、石器、 越州窑青盤	
20	板 部 道	散 布 地	江津市二宮町神村	須恵器	
21	鶴 岩 造	散 布 地	江津市二宮町神生	弥生土器、須恵器、十脚器他	
22	春 木 用 道	散 布 地	江津市二宮町神村	須恵器	
23	官 金 道	集 落	江津市二宮町神生	横穴式切2、掘立柱建物3、頭1段3、階段状構3、柱穴群3 溝5、角柱1基、土師器、須恵器、瓦、(同文寺と同文)	
24	二 宮 C 渔 道	集 落	江津市二宮町神上	掘立柱建物1、掘立柱建物2、溝1、弥生土器、十脚器 瓦質土器、古墳罐	
25	上 塚 西 扇 古 墓	古 墓	江津市千田町後谷	円墳2基、横穴式石室(うち1基は消滅)	
26	春 口 古 墓	古 墓	江津市千田町中千田	円墳2基、横穴式石室	
27	空 山 古 墓	古 墓	江津市千田町中千田 空山	円墳2基、地形不明2基、横穴式石室、須恵器、上耕堀、铁 刀残片	
28	大 元 神 社 古 墓	古 墓	江津市千田町中千田 空山	円墳、横穴式石室	
29	伝 仙 古 墓	古 墓	江津市二宮町神村	古墳2基	
30	石 田 の セ ド 古 墓	古 墓	江津市千田町大野谷	横穴式石室	
31	ツ フ ラ キ プ 古 墓	古 墓	江津市千田町大野谷	円墳5基、横穴式石室、須恵器	
32	岩 田 氏 宅 古 墓	古 墓	江津市千田町大野谷	円墳2基、横穴式石室	市指定
33	白 石 古 墓	古 墓	江津市千田町天野谷 白石	円墳、横穴式石室	
34	金 ク フ 古 墓	古 墓	江津市平野町大佐瀬 金クフ	円墳、横穴式石室	
35	峠 田 野 地 古 墓	古 墓	江津市千田町大佐瀬	古墳4基、横穴式石室、須恵器、勾玉、鐵環、鐵刀	現在確認できる のは、1基
36	ダ イ 古 墓	古 墓	江津市千田町大佐瀬 ダイ	円墳4基、横穴式石室	

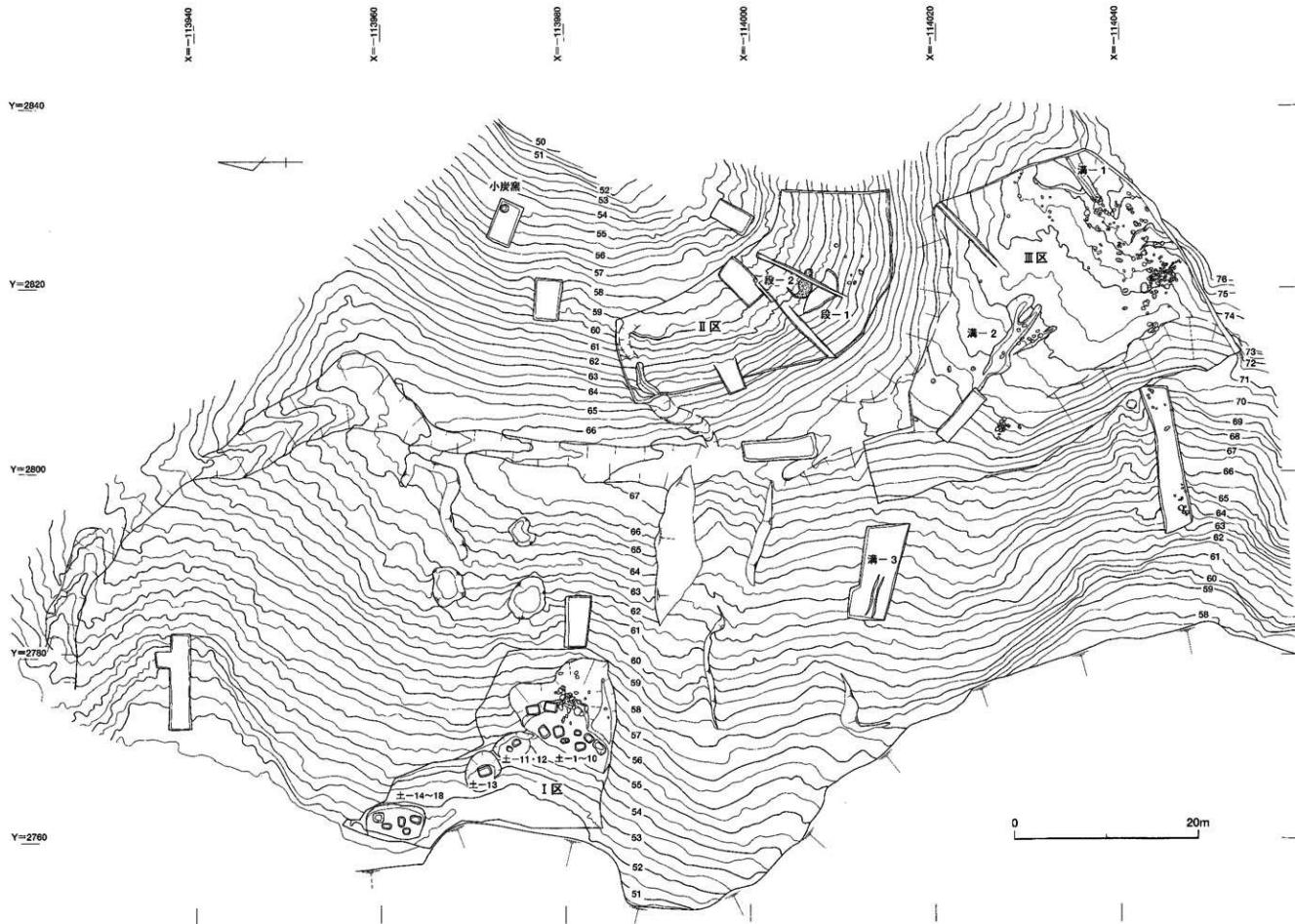
番号	遺跡名	種別	所在地	風 呂	考
37	志後古墳	古 墓	江津市千田町大佐張 志後	横穴式石室	
38	大沼古墳	古 墓	江津市千田町大佐張 大沼	横穴式石室	
39	岩本古墳群	古 墓	江津市千田町大佐張 岩本	3基、横穴式石室	現在確認できる のは、1基
40	馬の背古墳	古 墓	江津市千田町大佐張 馬の背	横穴式石室	
41	石堀古墳	古 墓	江津市千田町大佐張 石堀	円墳、横穴式石室	
42	二本松古墳群	古 墓	江津市二宮町神主	1号墳(円墳、横穴式石室)、2号墳(横穴式石室)	2号埴丘なし
43	志貴道跡	古代木一 世紀遷移跡	江津市二宮町神主	縄文柱達物6、溝6、須恵器、土師質土器、白磁瓶	
44	高神道跡	古代集落跡	江津市二宮町神主	溝、上層器	
45	坂山C造跡	散 布 地	江津市二宮町神主 坂山	弥生土器、須恵器、土師器、上製織、陶鏡	
46	青山造跡	散 布 地	江津市二宮町神主 青山	弥生土器、須恵器、土師器	
47	坂田A造跡	散 布 地	江津市二宮町神主 坂田	石見燒塗跡、植物3	
48	二室古墳群	古 墓	江津市二宮町神主	古墳3基?、横穴式石室	
49	高野山火塚	古 墓	江津市二宮町神主	円墳、横穴式石室、須恵器	
50	イノキ瀬古墳群	古 墓	江津市二宮町神主	円墳3基、横穴式石室	
51	金寧寺跡	寺 院 跡	浜田市下有知町	鍵板、地蔵尊像、宝鏡塔残欠	
52	山根古墳	古 墓	浜田市下有知町	五輪塔、宝鏡印塔	
53	池ノ下古墓	古 墓	浜田市下有知町	宝鏡印塔	
54	火の谷古墳	古 墓	浜田市下有知町火の谷	円墳、横穴式石室	
55	古八幡造跡	散 布 地	江津市船山町	須恵器、上層器	坂田八幡古故地
56	先打井畠道跡 I		江津市波子町		
57	先打井畠道跡 II		江津市波子町		
58	先打井畠道跡 III		江津市波子町		
59	堂々露跡	窓 跡	江津市波子町	灰窓	
60	大田屋宮跡	宮 院 跡	江津市波子町	近世式社堂(4見焼)、陶器、瓦、小刀、針金、釘、古錢	
61	光明寺跡	寺 院 跡	江津市波子町高平山		
62	波子道跡	散 布 地	江津市波子町太平山	鐵文土器、石簇、石斧、古式土師器他	太平山遺跡群
63	長東坊御廻跡	窓 跡	浜田市上府町	石見燒窯、陶器、瓦、古錢	
64	大尾谷道跡		浜田市上府町		
65	河刀城跡	城 跡	江北市鷺市町鷺市	郭	一部踏査不可能
66	神村城跡	城 跡	江津市二宮町神村	郭、上臺、石垣	
67	福田城跡	城 跡	江津市有福溫泉町木明	郭、土臺、裏切	
68	本明城跡	城 跡	江津市有福溫泉町木明	山城、石壁、井戸跡	金城町・乙兩城跡 福川城跡と同一
69	加古岐城跡	城 跡	江津市有福溫泉町木明	郭、上臺、窑、壁、空堀	
70	殿跡城跡	城 跡	江津市波子町		明確な追査なし
71	尾上城跡	城 跡	江津市波子町	郭、石垣	一部踏査不可能
72	熊ヶ城跡	城 跡	浜田市宇野町林原	郭、带濠、土臺、裏切、虎口	

*番号のないものは、発見跡

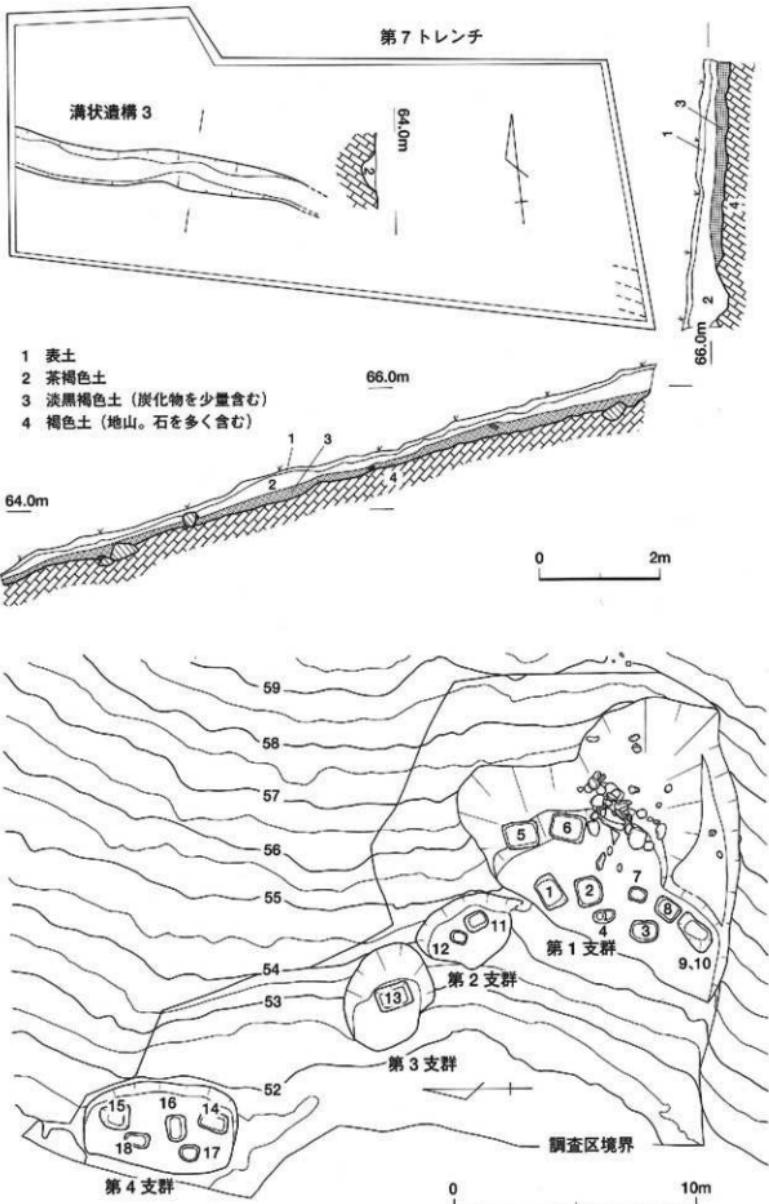
神主城跡



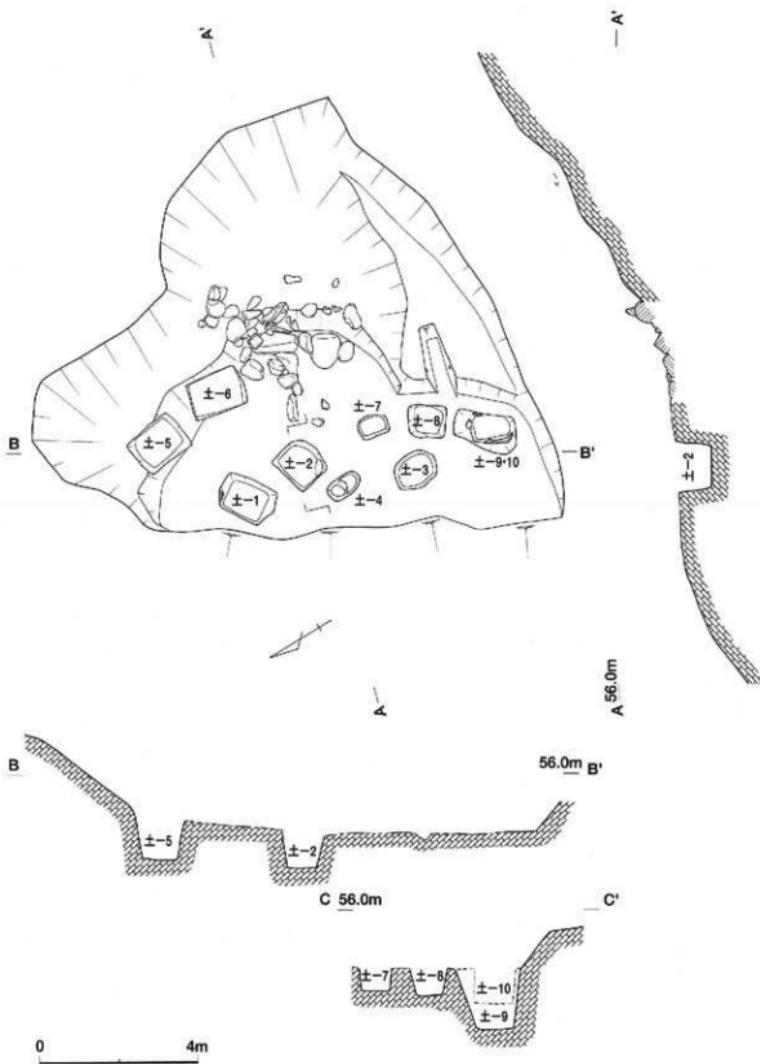
第2図 神主城跡周辺地形図 ($S=1/5000$)
島根県教育委員会中近城館分布調査カード(寺井毅氏作図)を一部変更、江津都市計画図に合成



第3図 神主城跡 調査区配置図 (S=1/400)



第4図 神主城跡 第7トレンチ実測図 ($S=1/80$)、I区土壤基群全体図 ($S=1/200$)



第5図 神主城跡 土壇墓1~10実測図（完掘後）(S=1/120)